柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告　第１集

しも　ひゃく　ちょう

下百町遺跡群Ⅰ

－福岡県柳川市蒲船津所在遺跡の調査－

柳川市文化財調査報告書　第11集

序

柳川市教育委員会では、平成18年度から平成25年度にわたって、柳川駅東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は、平成18年度から平成20年度に発掘調査を行った、柳川市三橋町蒲船津地区に所在する9つの調査区の発掘調査記録です。

蒲船津地区は矢部川支流の沖端川左岸の微高地に位置しています。今回の調査では、中・近世の集落跡や墓地を確認しました。何条もの溝の存在は、当時の人々が日々の生活をよりよく営むために、用排水や土地区画を意図して開削したことがうかがえます。生活域で検出された溝で仕切られた敷地内からは、多数の土坑や井戸も検出されました。こうした溝や土坑、井戸からは、供膳用の食器や日常雑器はもとより、中国から海を越えて渡ってきた輸入陶磁器も多数出土し、当時の人々の多様な暮らしぶりの豊かさを示してくれます。また、近世・近代の墓地からは、棺に使用された大甕や木桶も見つかっており、葬送の様子を知ることができました。このような発掘調査の成果は、地域の歴史を知る上で欠かすことのできない貴重な歴史資料であり、今後は多くの人々にとって大切な歴史的財産となることでしょう。

発掘調査から整理・報告書作成にいたるまで、関係諸機関や地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力・御助言をいただきました。厚く感謝いたします。

平成28年3月31日

柳川市教育委員会
教育長　日高　　良

例　言

1　本書は、柳川駅東部土地区画整理事業に伴い土地区画整理事業組合の委託を受けて柳川市が実施した、柳川市三橋町蒲船津所在遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は柳川市教育委員会が主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課文化係　堤伴治・上田龍児、柳川市区画整理推進室臨時職員　原田智也が担当した。本書に掲載した遺跡及び調査年度は以下のとおりである。

蒲船津西ノ内遺跡第1次調査（平成18年度）
蒲船津西ノ内遺跡第2次調査（平成19年度）
蒲船津西ノ内遺跡第3次調査（平成20年度）
蒲船津西ノ内遺跡第4次調査（平成20年度）
蒲船津西ノ内遺跡第5次調査（平成20年度）
蒲船津西ノ内遺跡第6次調査（平成20年度）
蒲船津西ノ内遺跡第7次調査（平成20年度）
蒲船津西ノ内遺跡第8次調査（平成20年度）
蒲船津西古賀遺跡第1次調査（平成19年度）

3　本書に掲載した遺構実測図の作成は調査担当者・武田征子が行った。

4　本書に掲載した遺物の整理復元・実測図作成は橋本清美・西美智代・野口宏美・松本正子・湯川琴美・北山美穂・中村泰代が行った。

5　本書に掲載した空中写真撮影は空中写真企画が、遺構写真撮影は各担当者が、遺物写真撮影は橋本が行った。

6　遺構・遺物の製図は西・野口・松本・湯川が行った。

7　出土遺物・写真・実測図は全て柳川市教育委員会において保管している。

8　本書遺構実測図の方位はすべて世界測地系に依っている。

9　本書の執筆・編集は堤・橋本が行った。

本書遺構の略表記は次のとおりである。
SK…土坑、SD…溝、ST…墓、SX…不明遺構、SP…ピット

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　組織 …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 5
Ⅲ　調査の内容 …… 9
　1　蒲船津西ノ内遺跡第1次調査 …… 9
　2　蒲船津西ノ内遺跡第2次調査 …… 43
　3　蒲船津西ノ内遺跡第3次調査 …… 51
　4　蒲船津西ノ内遺跡第4次調査 …… 81
　5　蒲船津西ノ内遺跡第5次調査 …… 93
　6　蒲船津西ノ内遺跡第6次調査 …… 111
　7　蒲船津西ノ内遺跡第7次調査 …… 149
　8　蒲船津西ノ内遺跡第8次調査 …… 175
　9　蒲船津西古賀遺跡第1次調査 …… 181
Ⅳ　おわりに …… 191

図 版 目 次

本文対照頁

図版1　1．蒲船津西ノ内遺跡第1次調査区SK－8（西から） …… 9
　2．SK－11（西から） …… 9
　3．SK－17土層断面（東から） …… 11
図版2　1．SK－17（西から） …… 11
　2．SK－24（南から） …… 15
　3．SK－32土層断面（北から） …… 16
図版3　1．SK－32遺物出土状況（北から） …… 16
　2．SK－32（北から） …… 16
　3．SK－36（南から） …… 19
図版4　1．SK－37（東から） …… 19
　2．SK－39（南から） …… 19
　3．SK－41（南から） …… 19
図版5　1．SK－42（北から） …… 20
　2．SK－44（南から） …… 21
　3．SK－46（北から） …… 21
図版6　1．SD－3・4、SX－6（北から） …… 25
　2．SD－3北土層断面（南から） …… 25
　3．SD－16（西から） …… 29
図版7　1．SD－26東壁土層断面（西から） …… 32
　2．SD－26西側土層断面（東から） …… 32
　3．SD－38北側土層断面（南から） …… 36
図版8　1．蒲船津西ノ内遺跡第2次調査区（航空写真・北から） …… 43

	2．蒲船津西ノ内遺跡第２次調査区（航空写真・西から）	43
図版 9	1．SD－1（航空写真・西から）	43
	2．SD－2（航空写真・西から）	45
図版 10	1．SD－2 北側土層断面（南から）	45
	2．SD－2 石塔上部出土状況（北から）	45
	3．SD－2 遺物出土状況（北から）	45
図版 11	1．SD－3 東側土層断面（西から）	46
	2．SD－3（東から）	46
	3．SD－4 北側土層断面（南から）	49
図版 12	1．蒲船津西ノ内遺跡第３次調査区（航空写真・西から）	51
	2．蒲船津西ノ内遺跡第３次調査区（航空写真・西から）	51
図版 13	1．SK－6（北東から）	51
	2．SK－26（北から）	55
	3．SK－79 土層断面（西から）	55
図版 14	1．SK－92 土層断面（東から）	60
	2．SK－95 土層断面（北から）	60
	3．SK－97（南から）	63
図版 15	1．ST－77 人骨検出状況（東から）	75
	2．ST－78 人骨検出状況（西から）	77
	3．近世墓群（東から）	77
図版 16	1．1 号近世墓（北から）	77
	2．2 号近世墓（北から）	77
	3．4 号近世墓（西から）	77
図版 17	1．蒲船津西ノ内遺跡第４次調査区（航空写真・東から）	81
	2．SD－4・6（航空写真・東から）	81
図版 18	1．第４次調査区全景（北から）	81
	2．調査区北端トレンチ（南から）	81
	3．SK－2（南から）	81
図版 19	1．SK－10（北から）	83
	2．SK－14（南から）	86
	3．SD－1 土層断面（南から）	86
図版 20	1．SD－6（東から）	88
	2．SD－11（北から）	89
	3．蒲船津西ノ内遺跡第５次調査区全景（東から）	93
図版 21	1．蒲船津西ノ内遺跡第５次調査区（航空写真・南から）	93
	2．第５次調査区（航空写真・南から）	93
図版 22	1．SK－122（西から）	94
	2．SD－15 東側土層断面（北から）	97
	3．SD－15 北壁土層断面（南から）	97
図版 23	1．蒲船津西ノ内遺跡第６次調査区（航空写真・南から）	111
	2．第６次調査区（航空写真・真上から）	111
図版 24	1．蒲船津西ノ内遺跡第６次調査区全景（北から）	111
	2．第６次調査区全景（東北から）	111

3．第６次調査区全景（西から）…… 111
図版 25　1．SK－２土層断面（西から）…… 111
2．SK－４土層断面（北から）…… 111
3．SK－５（北から）…… 113
図版 26　1．SK－６土層断面（東から）…… 113
2．SK－６（東から）…… 113
3．SK－９（北から）…… 113
図版 27　1．SK－11（北西から）…… 116
2．SK－12（北から）…… 116
3．SK－13土層断面（北から）…… 116
図版 28　1．SK－14（南から）…… 116
2．SK－19（西から）…… 118
3．SK－21（東から）…… 118
図版 29　1．SK－23土層断面（南から）…… 118
2．SK－25土層断面（東から）…… 121
3．SK－28（東から）…… 121
図版 30　1．SK－33（西から）…… 122
2．SK－35土層断面（西から）…… 122
3．SK－36（北西から）…… 122
図版 31　1．SK－49（北東から）…… 122
2．SK－52土層断面遺物出土状況（西から）…… 124
3．SK－52（西から）…… 124
図版 32　1．SK－53土層断面（西から）…… 127
2．SK－61土層断面（西から）…… 127
3．SK－62土層断面（東から）…… 127
図版 33　1．SK－63（南から）…… 129
2．SK－91（北西から）…… 129
3．SD－３土層断面（北から）…… 129
図版 34　1．SD－７（南から）…… 132
2．SD－10土層断面（西から）…… 132
3．SD－34土層断面（東から）…… 139
図版 35　1．SD－34土層断面（東から）…… 139
2．SD－34土層断面（南から）…… 139
3．SD－34土層断面（南から）…… 139
図版 36　1．蒲船津西ノ内遺跡第７次調査区全景（航空写真・西から）…… 149
2．第７次調査区全景（航空写真・真上から）…… 149
図版 37　1．蒲船津西ノ内遺跡第７次調査区全景（東から）…… 149
2．蒲船津西ノ内遺跡第７次調査区全景（北西から）…… 149
3．蒲船津西ノ内遺跡第７次調査区近世墓出土状況（北から）…… 149
図版 38　1．SK－２土層断面（東から）…… 149
2．SK－３（北西から）…… 149
3．SK－７土層断面（南西から）…… 149
図版 39　1．SK－８土層断面（北から）…… 152

2．SK－11（北西から）…… 152
3．SK－13 土層断面（東から）…… 152
図版 40　1．SK－14（北西から）…… 152
2．SK－16（北西から）…… 152
3．SK－18（西から）…… 154
図版 41　1．SD－5、SK－31（東から）…… 160
2．SD－1-東 トレンチ土層断面（南東から）…… 154
3．SD－1-A トレンチ土層断面（南東から）…… 154
図版 42　1．SD－1-A 西壁土層断面（南東から）…… 154
2．SD－1-B 火輪出土状況（北東から）…… 160
3．SD－5-A 土層断面（南から）…… 160
図版 43　1．SD－6 土層断面（東から）…… 160
2．SD－10-B 土層断面（北西から）…… 160
3．SD－10-C 土層断面（西から）…… 161
図版 44　1．SD－12-B 土層断面（北西から）…… 162
2．SD－15 土層断面（西から）…… 164
3．蒲船津西ノ内遺跡第 8 次調査区全景（航空写真・北から）…… 175
図版 45　1．蒲船津西ノ内遺跡第 8 次調査区全景（西から）…… 175
2．SK－3 土層断面（北から）…… 175
3．SD－1-B トレンチ土層断面（南東から）…… 177
図版 46　1．蒲船津西古賀遺跡（航空写真・北から）…… 181
2．SK－8・SK－10・SK－11（航空写真・真上から）…… 185
図版 47　1．SK－4（南から）…… 181
2．SK－6（南から）…… 181
3．SK－7（東から）…… 184
図版 48　1．SK－8（東から）…… 185
2．SK－9（東から）…… 185
3．SK－11（北から）…… 186
図版 49　蒲船津西ノ内遺跡第 1 次調査区出土遺物 …… 9
図版 50　蒲船津西ノ内遺跡第 1 次・第 2 次調査区出土遺物 …… 43
図版 51　蒲船津西ノ内遺跡第 2 次調査区出土遺物 …… 43
図版 52　蒲船津西ノ内遺跡第 2 次・第 3 次調査区出土遺物 …… 43
図版 53　蒲船津西ノ内遺跡第 3 次調査区出土遺物① …… 51
図版 54　蒲船津西ノ内遺跡第 3 次調査区出土遺物② …… 51
図版 55　蒲船津西ノ内遺跡第 3 次調査区出土遺物③ …… 51
図版 56　蒲船津西ノ内遺跡第 3 次調査区出土遺物④ …… 51
図版 57　蒲船津西ノ内遺跡第 4 次調査区出土遺物 …… 81
図版 58　蒲船津西ノ内遺跡第 5 次調査区出土遺物① …… 94
図版 59　蒲船津西ノ内遺跡第 5 次調査区出土遺物② …… 94
図版 60　蒲船津西ノ内遺跡第 5 次調査区出土遺物③ …… 94
図版 61　蒲船津西ノ内遺跡第 5 次調査区出土遺物④ …… 94
図版 62　蒲船津西ノ内遺跡第 6 次調査区出土遺物① …… 111
図版 63　蒲船津西ノ内遺跡第 6 次調査区出土遺物② …… 111
図版 64　蒲船津西ノ内遺跡第 6 次調査区出土遺物③ …… 111

図版 65　蒲船津西ノ内遺跡第 6 次・第 7 次調査区出土遺物 …… 111
図版 66　蒲船津西ノ内遺跡第 7 次調査区出土遺物① …… 149
図版 67　蒲船津西ノ内遺跡第 7 次調査区出土遺物② …… 149
図版 68　蒲船津西ノ内遺跡第 7 次調査区出土遺物③ …… 149
図版 69　蒲船津西ノ内遺跡第 8 次、蒲船津西古賀遺跡第 1 次調査区出土遺物 …… 175

挿　図　目　次

第 1 図　柳川市位置図 …… 1
第 2 図　柳川駅東部土地区画整理事業計画図・調査区位置図（1/2,000）…… 4
第 3 図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 6
第 4 図　蒲船津西ノ内遺跡第 1 次調査区遺構配置図（1/250）…… 10
第 5 図　SK－8・11・12・17・19 実測図（1/40）…… 11
第 6 図　SK－8・11・12・17・19 出土遺物実測図（1/3）…… 12
第 7 図　SK－23・24・30・31 実測図（1/40）…… 13
第 8 図　SK－23・24 出土遺物実測図（1/3）…… 14
第 9 図　SK－30 出土遺物実測図（1/3）…… 16
第 10 図　SK－32・36・37・39・41 実測図（1/40）…… 17
第 11 図　SK－32・36・39・41～44・46 出土遺物実測図（1/3）…… 18
第 12 図　SK－42～44・46 実測図（1/40）…… 20
第 13 図　SD－1・3～5 土層断面実測図（1/40）…… 22
第 14 図　SD－1 出土遺物実測図（1/3）…… 23
第 15 図　SD－1・3～5 出土遺物実測図（119 は 1/6，他は 1/3）…… 24
第 16 図　SD－14・15・21 土層断面実測図（1/30・1/40・1/60）…… 27
第 17 図　SD－16・18 土層断面実測図（1/40）…… 28
第 18 図　SD－14・16・38 出土遺物実測図（1/3）…… 29
第 19 図　SD－15 出土遺物実測図（1/3）…… 30
第 20 図　SD－18 出土遺物実測図（1/3）…… 31
第 21 図　SD－21 出土遺物実測図（1/3）…… 32
第 22 図　SD－26～28・38 土層断面実測図（1/40）…… 33
第 23 図　SD－25・26 出土遺物実測図（1/3）…… 34
第 24 図　SD－27・28 出土遺物実測図（1/3）…… 36
第 25 図　SP－29・34・35，SX－2・6・22・45 実測図（1/40）…… 37
第 26 図　SD－29・34・35，SX－2・6・45 出土遺物実測図（1/3）…… 38
第 27 図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 40
第 28 図　木製品実測図（1/3）…… 41
第 29 図　蒲船津西ノ内遺跡第 2 次調査区遺構配置図（1/250）…… 43
第 30 図　SD－1・2 土層断面実測図（1/60）…… 44
第 31 図　SD－1 出土遺物実測図（1/3）…… 45
第 32 図　SD－2 出土遺物実測図①（1/3）…… 46
第 33 図　SD－2 出土遺物実測図②（1/3）…… 47
第 34 図　SD－2・3・4 土層断面実測図（1/30）…… 48

第35図　SD－3出土遺物実測図（1/3）…… 48
第36図　SD－4出土遺物実測図（1/3）…… 49
第37図　石製品、その他の出土遺物実測図（1/3・1/6）…… 50
第38図　蒲船津西ノ内遺跡第3次調査区遺構配置図（1/200）…… 折込
第39図　SK－5・6・7実測図（1/60）…… 52
第40図　SK－5・6出土遺物実測図（1/3）…… 53
第41図　SK－7出土遺物実測図（1/3）…… 54
第42図　SK－26・27・79・82～84実測図（1/60）…… 56
第43図　SK－26・27・79・87・89出土遺物実測図（1/3）…… 57
第44図　SK－87・89・92実測図（1/60）…… 59
第45図　SK－92・94・95出土遺物実測図（1/3）…… 61
第46図　SK－94・95・97・136・162・166実測図（1/60）…… 62
第47図　SK－97・136・162・166出土遺物実測図（1/3）…… 64
第48図　SD－13・49・76・81・98土層断面実測図（1/20）…… 66
第49図　SD－48・80・90・96土層断面実測図（1/40）…… 67
第50図　SD－13・48・49・76・80出土遺物実測図（1/3）…… 68
第51図　SD－81・90出土遺物実測図（1/3）…… 70
第52図　SD－96出土遺物実測図（1/3）…… 72
第53図　SD－98出土遺物実測図（1/3）…… 74
第54図　ST－77・78実測図（1/15）…… 76
第55図　ST－77・78出土遺物実測図（1/3）…… 77
第56図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 78
第57図　銅銭実測図（1/2）…… 79
第58図　蒲船津西ノ内遺跡第4次調査区遺構配置図（1/200）…… 82
第59図　蒲船津西ノ内遺跡第4次調査区北側土層断面実測図（1/60）…… 83
第60図　SK－2・7・10・14実測図（1/40）…… 84
第61図　SK－2・7・10・14出土遺物実測図（1/3）…… 85
第62図　SD－1・5・6・11土層断面実測図（1/20）…… 87
第63図　SD－1・5・6出土遺物実測図（1/3）…… 88
第64図　SD－11出土遺物実測図（1/3）…… 89
第65図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 91
第66図　蒲船津西ノ内遺跡第5次調査区遺構配置図（1/200）…… 92
第67図　蒲船津西ノ内遺跡第5次調査区基本土層実測図（1/40）…… 93
第68図　SK－16・122・127実測図（1/40）…… 95
第69図　SK－16・122・127出土遺物実測図（1/3）…… 96
第70図　SD－15・130土層断面実測図（1/40）…… 98
第71図　SD－15・130出土遺物実測図①（1/3）…… 99
第72図　SD－15・130出土遺物実測図②（1/3）…… 100
第73図　SD－15・130出土遺物実測図③（1/3）…… 101
第74図　SD－130出土遺物実測図①（1/3）…… 103
第75図　SD－130出土遺物実測図②（1/3）…… 104
第76図　SD－130出土遺物実測図③（1/3）…… 105
第77図　その他の出土遺物実測図①（1/3）…… 107

第78図　その他の出土遺物実測図②（1/3）…… 108
第79図　蒲船津西ノ内遺跡第6次調査区遺構配置図（1/200）…… 110
第80図　SK－2・4・5・6・9・11実測図（1/60）…… 112
第81図　SK－2・4・5・6出土遺物実測図（1/3）…… 114
第82図　SK－9・11・12・13・19・21～23出土遺物実測図（1/3）…… 115
第83図　SK－12～14・19・21・22実測図（1/60）…… 117
第84図　SK－23・25・26・28・29・33・35・36実測図（1/60）…… 119
第85図　SK－25・26・28・33・35・36出土遺物実測図（1/3）…… 120
第86図　SK－49・51・52・53・61・62実測図（1/60）…… 123
第87図　SK－49・51出土遺物実測図（1/3）…… 124
第88図　SK－52出土遺物実測図①（1/3）…… 125
第89図　SK－52出土遺物実測図②（1/3）…… 126
第90図　SK－54・63・91実測図（1/60）…… 128
第91図　SK－53・54・61・62出土遺物実測図（1/3）…… 129
第92図　SD－3・7・10・18・24・34・37土層断面実測図（3・18・37は1/40、他は1/20）・130
第93図　SD－3・7出土遺物実測図（1/3）…… 131
第94図　SD－10出土遺物実測図（1/3）…… 133
第95図　SD－18出土遺物実測図①（1/3）…… 135
第96図　SD－18出土遺物実測図②（1/3）…… 136
第97図　SD－18出土遺物実測図③（1/3）…… 137
第98図　SD－24出土遺物実測図（1/3）…… 138
第99図　SD－34出土遺物実測図①（1/3）…… 140
第100図　SD－34出土遺物実測図②（1/3）…… 141
第101図　SD－37出土遺物実測図（1/3）…… 142
第102図　その他の出土遺物実測図①（1/3）…… 144
第103図　その他の出土遺物実測図②（1/3）…… 146
第104図　蒲船津西ノ内遺跡第7次調査区遺構配置図（1/200）…… 148
第105図　SK－2・3・7・8・11・13実測図（1/40）…… 150
第106図　SK－14・16・18・31実測図（1/40）…… 151
第107図　SK－2・3・8・13・16・18出土遺物実測図（1/3）…… 153
第108図　SD－1・5・6・9・10・12・15土層断面実測図（1/20・1/40）…… 155
第109図　SD－1出土遺物実測図①（1/3）…… 156
第110図　SD－1出土遺物実測図②（1/3）…… 158
第111図　SD－1出土遺物実測図③（1/3）…… 159
第112図　SD－9・10出土遺物実測図（1/3）…… 161
第113図　SD－12・15出土遺物実測図（1/3）…… 163
第114図　ST－4・20・21・22近世墓等出土遺物実測図①（1/3）…… 165
第115図　ST－22・23・24近世墓等出土遺物実測図②（1/3）…… 166
第116図　ST－26近世墓等出土遺物実測図③（1/3）…… 167
第117図　ST－28・29近世墓等出土遺物実測図④（1/3）…… 168
第118図　ST－30・33近世墓等出土遺物実測図⑤（1/3）…… 170
第119図　その他の出土遺物実測図①（1/3）…… 172
第120図　その他の出土遺物実測図②（1/3）…… 173

第121図　蒲船津西ノ内遺跡第8次調査区遺構配置図（1/200）…… 175
第122図　SK－2～4実測図（1/40）…… 176
第123図　SK－2～4出土遺物実測図（1/3）…… 177
第124図　調査区西壁，SD－1土層断面実測図（1/40）…… 178
第125図　SD－1出土遺物実測図（1/3）…… 178
第126図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 179
第127図　蒲船津西古賀遺跡遺構配置図（1/250）…… 182
第128図　SK－1・4・6～9実測図（1/40）…… 183
第129図　SK－4・6・7出土遺物実測図（1/3）…… 184
第130図　SK－9・10出土遺物実測図（1/3）…… 186
第131図　SK－10・11・13実測図（1/40）…… 187
第132図　SK－11・13出土遺物実測図（1/3）…… 188
第133図　SD－2実測図（1/40）…… 189
第134図　SD－2・3その他の出土遺物実測図（1/3）…… 189

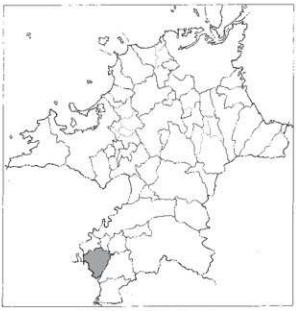
表　目　次

第1表　柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 2

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

柳川市は、福岡県の南部、有明海に面した筑後平野に位置する人口約6万9,000人、総面積約77km^{2}の、県南部の中心都市の一つである。



第1図　柳川市位置図

西日本鉄道大牟田線柳川駅周辺は、柳川市の商業が集積する中心地であり、東部に隣接する柳川駅東部地区は、北側を国道443号、西側を西鉄大牟田線、南側を1級河川矢部川水系塩塚川、東側をクリークに囲まれ、面積は約26.4haである。従来、当該地区の幹線道路は地区北部を東西に走る国道443号だけであり、その他の道路は従来からの農道を整備したもので、宅地へのアクセスに不便をきたしていた。また水路としては、地区を縦横に通るクリークが数条存在し、農業用水路として使用される一方、家庭用雑排水が無秩序に流入している状況であった。

柳川市ではこの地区を都市計画マスタープランの中心市街地ゾーン及び開発促進ゾーンに位置付け、柳川の中心市街地にふさわしい場所として公共施設の整備および住・商各ゾーンの分離による良好な居住環境の確保及び商店街の活性化を図るため、土地区画整理事業を平成14年から実施している。三橋京町通り線沿線と柳川駅東口駅前広場は周辺を商業ゾーンとして、その他のゾーンについては一般住宅地として整備する計画である。

当事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、その事業計画に基づき当初から柳川市教育委員会生涯学習課と柳川市区画整理推進室との間で協議を進めてきた。旧三橋町時代の平成16年度から福岡県教育庁南筑後教育事務所の支援を受けて、三橋町教育委員会生涯学習課が試掘調査を実施し、業務を引継いだ柳川市教育委員生涯学習課の試掘調査により平成18年6月には事業地内の試掘調査を実施し、中世の遺構が確認されたことを受け、同年7月24日に埋蔵文化財の取扱いに関する協議を両者で行い、教育委員会では本調査の必要性を説明し、今後のスケジュールの確認及びを調整結果、三橋筑紫橋線にあたる地点については平成18年10月から発掘調査を実施することとなった（蒲船津西ノ内遺跡第1次発掘調査）。また、それ以外の地点については、区画整理事業の進捗にあわせて平成19年度以降に発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成18年10月から平成25年5月まで実施した。調査地点は20地点に及ぶ。遺跡名及び場所は第1表、第3図のとおりである。

第１表　柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査一覧

調査年度	遺跡名	遺跡略号	調査期間	報告年度
18	蒲船津西ノ内遺跡第１次	KNU1	H18.10.02～H18.12.21	27
19	蒲船津西ノ内遺跡第２次	KNU2	H19.05.14～H19.06.29	
	蒲船津西古賀遺跡第１次	KNK1	H19.07.18～H19.09.22	
	下百町鬼童遺跡第１次	SOD1	H19.08.25～H20.01.24	28
	下百町鬼童遺跡第２次	SOD2	H20.11.09～H20.11.26	
20	蒲船津西ノ内遺跡第３次	KNU3	H20.05.02～H20.07.29	27
	蒲船津西ノ内遺跡第４次	KNU4	H20.07.24～H20.08.20	
	蒲船津西ノ内遺跡第５次	KNU5	H20.10.14～H20.11.05	
	蒲船津西ノ内遺跡第６次	KNU6	H20.11.06～H21.02.17	
	蒲船津西ノ内遺跡第７次	KNU7	H20.11.17～H20.12.10	
	蒲船津西ノ内遺跡第８次	KNU8	H21.01.26～H21.02.06	
	下百町屋敷ノ内遺跡第１次	SYU1	H20.08.25～H20.10.10	28
21	下百町鬼童遺跡第３次	SOD3	H21.05.28～H21.06.25	
	下百町屋敷ノ内遺跡第２次	SYU 2	H21.07.09～H22.01.04	
	下百町屋敷ノ内遺跡第３次	SYU 3	H21.10.01～H21.03.01	
22	下百町神の前遺跡２次（1 区）	SKA2-1	H22.07.01～H22.11.30	
	下百町神の前遺跡２次（2 区）	SKA2-2	H22.11.18～H22.12.03	
	下百町神の前遺跡２次（3 区）	SKA2-3	H22.12.01～H23.02.04	
23	下百町神の前遺跡第３次	SKA3	H23.08.05～H23.12.01	
24	下百町神の前遺跡第４次	SKA4	H25.3.6～H25.5.30	

２　組織

発掘調査の関係者は次のとおりである。

平成 18 年度

柳川市教育委員会	教育長	上村　好生
	教育部長	佐藤　健二
	生涯学習課長	中村　典幸
	生涯学習課長補佐	野田　　彰
	文化係長	袖崎　朋洋
	文化係	堤　　伴治（発掘調査担当）
	嘱託職員	上田　龍児（発掘調査担当）
柳川市区画整理推進室	室長	稲又　義輝
	室長補佐	安藤　和彦
	補償換地係長	中川　万喜雄
	工務係長	田島　正志
	臨時職員	原田　智也（発掘調査担当）

平成 19 年度

柳川市教育委員会	教育長	上村　好生
	教育部長	佐藤　健二

	生涯学習課長	中村　典幸
	生涯学習課長補佐	大石　涼子
	文化係長	袖崎　朋洋
	文化係	堤　　伴治（発掘調査担当）
柳川市区画整理推進室	室長	稲又　義輝
	室長補佐	野田　栄作
	補償換地係長	中川　万喜雄
	工務係長	田島　正志
	臨時職員	原田　智也（発掘調査担当）

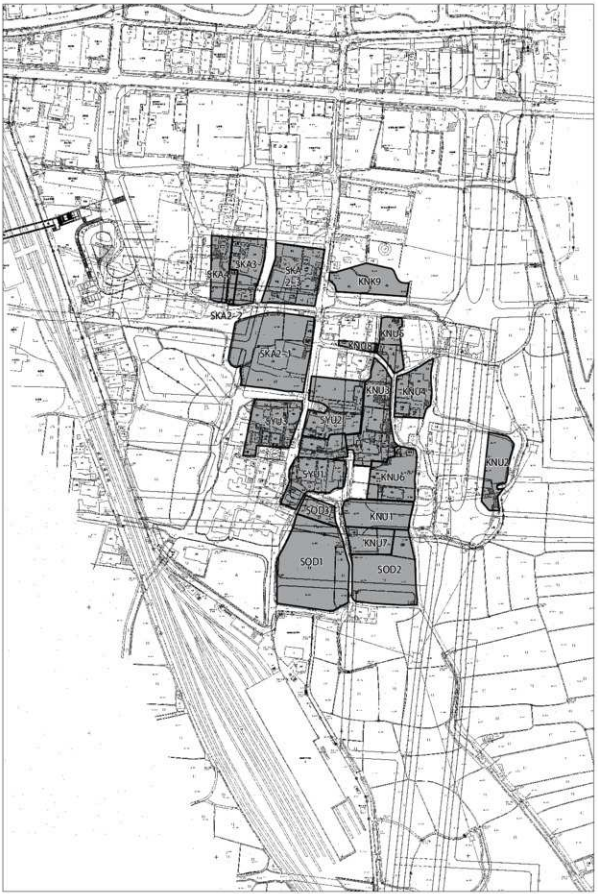
平成 20 年度

柳川市教育委員会	教育長	上村　好生
	教育部長	佐藤　健二
	生涯学習課長	龍　　英樹
	生涯学習課長補佐	大石　涼子
	文化係長	袖崎　朋洋
	文化係	堤　　伴治（発掘調査担当）
柳川市区画整理推進室	室長	目野　稔男
	室長補佐	野田　栄作
	補償換地係長	政次　寛
	工務係長	田島　正志
	臨時職員	原田　智也（発掘調査担当）

平成 27 年度

柳川市教育委員会	教育長	日髙　良
	教育部長	樽見　孝則
	生涯学習課長	袖崎　朋洋
	文化係長	堤　　伴治（整理・報告書作成担当）
	文化係	橋本　清美（整理・報告書作成担当）
		権丈　和徳
柳川市区画整理推進室	室長	由衛　和博
	室長補佐	渡辺　洋児
		新開　文隆
	補償換地係長	新開　文隆（兼）
	工務係長	渡辺　洋児（兼）
	嘱託職員	池邊　元明（文化財担当）

なお、発掘調査及び報告書の作成期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。感謝の意を表します。



第 2 図　柳川駅東部土地区画整理事業計画図・調査区位置図（1/2,000）

Ⅱ　位置と環境

柳川市は福岡県南西部の筑後平野に位置する。平成17年2月5日に旧柳川市・三橋町・大和町が合併し、現柳川市となった。総面積76.88km^2、人口約6万8,529（2016年2月現在）人、県南部を代表する市の一つである。北は矢部川水系花宗川、太田川およびクリーク等を境に大川市・三潴郡大木町・筑後市に接する。東は矢部川を境にみやま市、西は筑後川を境として佐賀県と接し、南は有明海に面する。

筑紫平野は筑後川・矢部川その他の諸河川が運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってできた福岡・佐賀両県にまたがる九州最大の平野であり、福岡県側を一般に筑後平野と称し、また矢部川流域の南部平野部分を南筑後平野とも称する。有明海沿岸部については、大小の干拓地が鱗状に展開していて、日本の代表的海面干拓地帯である。また、それぞれの河口部には干潟が発達する。

柳川市域についても、矢部川およびその支流である沖端川・塩塚川による大量の土砂の堆積に有明海の潮汐による大きな干満差が加わって形成された沖積地と、非常に広大な範囲が近世初頭以降干拓によって造成された土地からなる。完新続の沖積低地を構成するのは、非海成層の蓮池層と海成層の有明粘土層である。有明粘土層は極めて軟弱な地層で、海棲貝類の貝殻片を混入するのが特徴である。その形成時期は完新世、高海面期である縄文海進のピーク時期の前後と考えられ、有明海干潟や海底部分では現在もその形成が続いている。蓮池層は、筑紫平野の汽水域から淡水域で形成された非海成の沖積層の総称で、低地の表層に広く分布し、層序関係は有明粘土層と同時異相関係にある。市域の標高は1から6m程度と低地な平地で、水田地帯が広がっており、水田の用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにはりめぐらされて部分もあり、当地方の景観を特徴づけている。

柳川市を最も印象付けるのは、城下町を縦横に流れる堀割と、その堀割を小舟で巡る川下りである。柳川出身の詩人・北原白秋が詩情を育んだこの風景は、平成27年に「水郷柳河（すいきょうやながわ）」として国の名勝に指定された。また、初節句を祝って雛壇のまわりに飾られる「さげもん」は柳川の雰囲気と相俟って落ち着いた華やかさがあり、2月から4月にかけて行われる「柳川雛祭りさげもんめぐり」は多くの観光客で賑わう。市の花は藤で、中山地区の大藤は福岡県の天然記念物に指定されている。市の木は柳で、堀割沿いのしなやかになびく姿は城下町としての風情を醸出している。

本遺跡の所在する柳川市蒲船津は、柳川市の中心部近く、標高3m前後の低平な集落および水田地帯に位置している。福岡市中心部の天神と県南端の大牟田市とを結ぶ、西鉄大牟田線の柳川駅が西隣にあり、柳川駅西部は早くから市の商業地として開けていた一方で、この東部地区は駅裏としてそれほど開発が及んでおらず、古くからの農村景観を保っていた地域である。

現在のところ、柳川市及び近隣地域で最も古い時期に遡る遺跡は、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する大川市下林西田遺跡である。ここでは弥生時代前期前半から中期中頃の土坑が確認されており、刻目突帯文土器や彩文土器の他、朝鮮系無文土器と思われる土器片や猪牙製装飾付腕輪といった注目すべき遺物も出土している。なお、この遺跡からは古代・中世の土坑や近世墓も多数見つかっている。またこの時期頃から大川市一帯では貝塚の形成が進んだようで、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。柳川市内では、徳益八枝遺跡から弥生

1. 蒲船津西ノ内遺跡　2. 蒲船津西古賀遺跡　3. 下百町鬼童遺跡　4. 下百町屋敷ノ内遺跡
5. 柳河（城下町）　6. 城内（御家中）　7. 沖端（港町）　8. 柳川城址　9. 瀬池遺跡
10. 西門前遺跡　11. 園田遺跡　12. 西蒲池古塚遺跡　13. 西蒲池将監坊遺跡
14. 西蒲池古溝遺跡　15. 扇ノ内遺跡　16. 西蒲池下里遺跡　17. 東蒲池大内曲り遺跡
18. 東蒲池榎町遺跡　19. 矢ヶ部町屋敷遺跡　20. 矢ヶ部五反田遺跡
21. 矢ヶ部遺跡南屋敷遺跡　22. 玉垂命神社遺跡　23. 阿弥陀屋舗遺跡　24. 蒲船津江頭遺跡
25. 蒲船津水町遺跡　26. 徳益八ッ枝遺跡　27. 今古賀城　28. 蒲船津城跡
29. 浮島天神遺跡　30. 逆井出遺跡　31. 慶長本土居

第3図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

時代前期から中期初頭にかけての遺構が見つかっている。柱が軟弱な地盤に沈み込まないように礎盤を敷いた掘立柱建物の他、同時期の井戸が検出された。

弥生時代中期になると、遺跡数は大幅に増加する。柳川市域でも北部に位置する蒲池地区には多くの遺跡が確認されており、広い範囲にわたって散布地や貝塚が確認されている。西蒲池地区の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石と甕棺墓の存在が確認されており、また三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩も、支石墓に使用された上石と言われている。

市西部では、平成16・17年度に発掘調査を実施した、柳川市三橋町磯鳥の磯鳥フケ遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代中期後半にほぼ限定される時期の土坑、井戸、礎盤を据えた掘立柱建物が確認され、この遺跡の発掘調査が端緒となって当地域の当該期の集落様相がかなり明確となった。近年の調査では、平成21・22年度に発掘調査が行われた柳川市西蒲池の西蒲池池淵遺跡で、中期の土坑や溝がまとまって確認された。この遺跡では他に弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の礎盤敷き掘立柱建物、土坑、古墳時代～古代の土坑、中世の土坑、溝があわせて検出された。平成20年に発掘調査が行われた東蒲池蓮池遺跡でもやはり弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の溝が確認されている。また、平成25・26年度に柳川市が発掘調査を実施した柳川市東蒲池の蓮池遺跡でも、弥生時代中期初頭から中期後半の土坑や溝が確認された。ここでも弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の土坑、古墳時代後期の土坑、9世紀の土坑、中世の土坑、溝が検出されており、やはり遺存状態の良い遺物が多数出土している。蒲池地区一帯は弥生時代中期から集落形成が開始され、以降断続的に集落が営まれたものとみて良いようである。

古墳時代、柳川地域は古代豪族水沼氏の勢力下にあったものと思われる。この水沼氏は海上交易を生業の基盤とし、宗像神を祭り、本拠を現在の久留米市三潴地区に構えていたとされ、久留米市大善寺にある5世紀代の首長墳、御塚・極現塚古墳がその奥津城に比定されている。従来、柳川市域には古墳はもとより古墳時代の遺跡自体、ほとんど知られていなかったが、近年の発掘調査の進展により当時の様相が急速に明らかになりつつある。先述の遺跡の他にも、平成17～19年度に発掘調査が行われた、蒲船津江頭遺跡がある。ここでは弥生時代後期終末から古墳時時代前期初頭を中心に、古墳時代終末期までの時期の礎盤敷き掘立柱建物、土坑、溝が数多く確認された。掘立柱建物は確認された数だけで140棟を数え、出土遺物も遺存状態が良く数も非常に多い。ここでもやはり古代から中世の遺構が確認されている。

律令制下では柳川市北部が三潴郡に、南・東部が山門郡に属していた。平安時代末期には三潴郡域を中心に三潴庄、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する。「和名抄」の郷としては、筑後国下妻郡の中に鹿待郷があり、これが旧三潴郡の蒲池に通ずるとされる。この時期、市内では先述の遺跡の他、平成15年度に発掘調査が行われた東蒲池榎町遺跡で8・9世紀の土坑、溝が確認されている。他に若干の弥生時代中期や13世紀の遺構、遺物も見つかっている。

中世、鎌倉後期の永仁4年（1296）注進の「玉垂宮並大善寺仏神事次第写」（御船文書）の中に見える三潴荘関係の村の中に蒲池村、簗川村などが見える。この簗川村が「やながわ」の史料上の初見である。また、柳川市蒲池を本拠とする在地領主蒲池氏が、戦国期にはいわゆる筑後の国人15人衆の旗頭として南筑後地方に勢力を振るった。蒲池氏の系譜については諸説あり はっきりしたことは分かっていない。戦国期の後半、蒲池氏は2家に分かれ、蒲池鑑盛が簗川に築城して下蒲池を称した。この簗川城が近世柳川城の先駆をなすものである。

天正8年（1580）、肥前の竜造寺隆信は蒲池鑑盛の子、鎮並を簗川城に攻めたが、要害堅固のために落城せず和平に及んだ。しかし鎮並は島津氏との内通が露顕して翌9年佐賀で誘殺され、そのあと柳川城は竜造寺氏の手に属することとなった。

今回発掘調査を行った蒲船津地区は、文明16年（1484）大友氏により田尻恒種が蒲船津100町を宛行われたことが史料上の初出である（田尻家譜「田原親宗預ヶ状写」）。戦国期には蒲池氏によって蒲船津城が築かれ、天正12年（1584）9月、柳川城を包囲した戸次道雪は、まず百武志摩守後家の守るこの城を攻めたが落とすことができなかったという（「鍋島直茂公譜考補」など）。城跡は字次郎田にある。

中世前期の遺跡は、先述の下林西田遺跡、西蒲池池淵遺跡、蓮池遺跡で比較的まとまって確認されている他、平成17年度に発掘調査が行われた、柳川市東蒲池の東蒲池大内曲り遺跡がある。この遺跡では11世紀後半から13世紀の土坑が確認され、他に古墳時代前期や後期の遺物も若干出土している。中世後期の遺跡は、やはり蒲池氏の隆盛に伴ってか遺跡数が多く、平成18・21・22年度に発掘調査が行われた柳川市東蒲池、西蒲池の東蒲池門前遺跡をはじめ、西蒲池池田遺跡、矢加部南屋敷遺跡、矢加部五反田遺跡などがある。どの遺跡も土坑と溝が検出遺構の中心で、比較的まとまった遺物の出土がみられる。

豊臣政権下の天正15年から慶長5年（1600）まで、柳川は立花宗茂の城下だったが、関ヶ原の合戦で立花氏は改易となり、代わって慶長6年から徳川氏により田中吉政の居城となった。田中氏が2代で断絶後、元和7年（1621）からは奥州棚倉に在った立花宗茂が再び旧領柳川に復封せられ、以後、明治維新まで柳川藩立花氏の城下として発展した。柳川城は田中吉政により本格的な近世城郭として修築され、城の外周30町50間、5層の本丸天守閣のほか、8つの曲輪と7つの矢倉を備え、城内には約300戸の侍屋敷が配置された。元禄10年（1697）3代藩主鑑虎は城内の南西隅に茶屋（別邸）を営み、元文元年（1736）以降、藩主一家はここに住むようになった。これを通称花畠といい、これが今日「お花」として知られる旧立花伯爵邸である。また柳川城下は柳川城を中心に武家が居住する「城内」と、町人の居住区である「沖端町」「柳河町」の三地区に大別される。

文禄4年（1595）の知行方目録には蒲舟津村の名前が見られ、高は865石余とある。安永7年（1778）の御領中村々神社覚（伝習館文庫）には東蒲船津村と西蒲船津村がみえ、遅くともこの頃には東西に分村していたと考えられる。明治9年（1876）には東西二村が合併して蒲船津村となった。この年の戸数は173戸、人数は854人とある。

近年、柳川市では開発事業に伴って柳川城郭跡内各地区の発掘調査が進んでいる。平成20年に発掘調査を実施した柳川市京町の京町遺跡では、地割りを示す溝や石列、杭列、丸太基礎が検出された。遺物は18世紀代を中心に、一部17世紀台にまで遡るものもみられた。平成22年度に発掘調査を実施した上町遺跡では、地割りに沿った溝や石組遺構、竹製導水管や土坑が検出され、17世紀から幕末までの遺物の出土をみた。城外地区では有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴い平成16・18・19年度に発掘調査が実施された、柳川市蒲船津の矢加部町屋敷遺跡がある。ここでは17世紀中葉以降、特に18世紀中葉以降の遺構、遺物が数多く見つかり、当時の街道沿いの町屋跡の様相が明確になった。特に鋳造関連遺物の出土は注目される。近年の発掘調査成果の整理、報告書刊行が進めば、近世柳川城郭の様相も徐々に明らかになってくるであろう。

Ⅲ　調査の内容

1　蒲船津西ノ内遺跡　第１次調査

蒲船津西ノ内遺跡の発掘調査は、平成18年10月２日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、12月21日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西に長い形状であり、東西50ｍ、南北20ｍを測る。遺構面の標高は2.2ｍ～2.3ｍ。遺構は調査区全面に広がっているが、特に北半部の密度が濃い。

検出した主な遺構は、土坑18基、溝14条、不明遺構４基、ピット３基である。出土遺物は中・近世の土師器、瓦器、陶磁器、雑器類、土製品、石製品、木製品である。

１）土坑

SK-8（図版１、第５図）

調査区西側に位置する土坑である。直径90cmの円形プランを呈し、深さは120cmを測る。壁は垂直に近い立ち上がりとなる。覆土は上層に灰褐色土、中層から下層に灰色土が堆積する。

出土遺物（第６図）

1・2は土師器小皿である。1は底部の器壁がやや厚く、底端部の稜は比較的明瞭である。底部糸切り。2は底部が平坦で端部が明瞭な稜を有し、体部はあまり開かずに立ち上がるようである。3は須恵質焼成の鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚する。4は白磁合子である。立ち上がりは短く、端部は尖る。受け部から口縁端部にかけて無釉となる。

SK-11（図版１、第５図）

調査区西側に位置する土坑である。SD－15と重複しており、これを切って営まれる。平面プランはL字状に近い不整形で、東側の一部をピットによって切られている。長軸は150cm、短軸は140cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは30cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に淡灰褐色土が堆積する。

出土遺物（第６図）

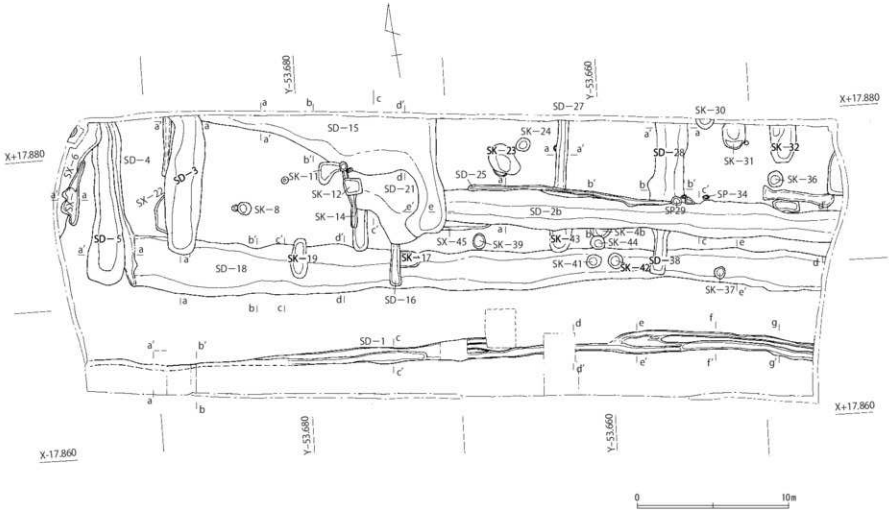
5は土師器坏である。底部は平坦で端部は比較的明瞭な稜を有す。内外面風化が著しく調整は観察できない。

SK-12（第５図）

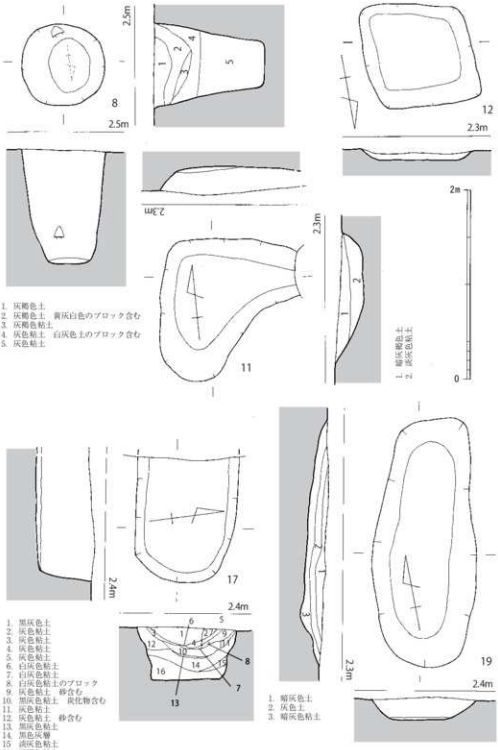
調査区の西側、SK－11から1mほど南側に位置する土坑である。SD－21と重複しており、これを切って営まれる。平面プランは一辺約1mの不整方形で、床面までの深さは10cmに満たない。

出土遺物（第６図）

6は土師器坏である。底端部は明瞭な稜をなさず、体部はあまり開かずに立ち上がるようである。底部糸切り。7は須恵質焼成の擂鉢である。内面には現状で５本の擂目が見える。外面には指圧痕が残る。



第４図　蒲船津西ノ内遺跡第１次調査区遺構配置図（1/250）



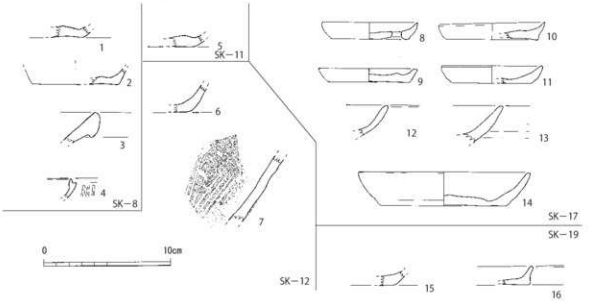
第５図　SK－8・11・12・17・19 実測図（1/40）

SK-17（図版２、第５図）

調査区中央付近に位置する土坑である。SD－16 と重複しており、これに切られる。平面プランは比較的形状の整った楕円形で、長軸 130cm、短軸 110cm を測る。床面はほぼ平坦で、深さは 60cm を測る。壁は急角度に立ち上がる。覆土は概ね上層と中層に黒灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 49、第６図）

８～11 は土師器小皿である。８は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖っている。底部には穿孔が見られる。口径 7.6cm、器高 1.4cm、底径 6.2cm。９は体部の立ち上がりが短く、



第6図 SK−8・11・12・17・19出土遺物実測図（1/3）

口縁端部は丸くおさめる。口径8.0cm、器高1.1cm、底径6.4cm。10は底部が若干上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部は短く立ち上がり、口縁端部は尖る。口径8.4cm、器高1.4cm、底径7.4cm。11は底部が平坦で口縁部は丸くおさめる。口径8.2cm、器高1.4cm、底径6.4cm。

12～14は土師器坏である。12は器壁が比較的薄く、体部中位で不明瞭に屈曲するようである。13は器壁が厚く、口縁部付近は若干薄くなる。14は底部が平坦で、端部は明瞭な稜を有し、体部はわずかに内湾しながら開く。口径13.4cm、器高2.7cm、底径9.8cm。

SK-19（第5図）

調査区西側に位置する土坑である。SD−18と重複しており、これを切って営まれる。平面プランは楕円形に近く、長軸260cm、短軸110cmを測る。床面は南側がやや深くなっており、深さは25cm、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層及び下層が暗灰色土、中層に灰色土が堆積する。

出土遺物（第6図）

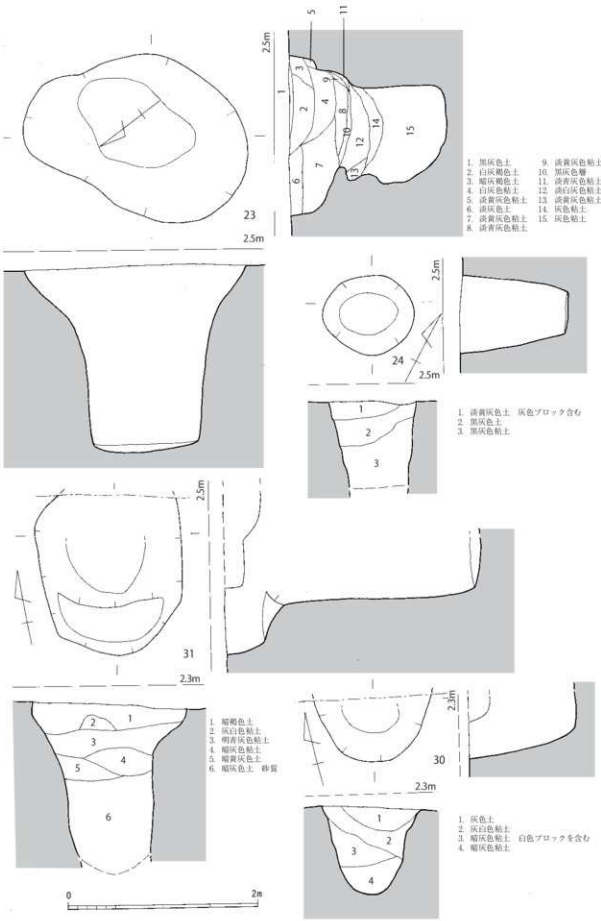
15・16は土師器小皿である。15は底端部が不明瞭な稜をなす。16は底部が平坦で、体部はあまり開かず外反気味に立ち上がる。

SK-23（第7図）

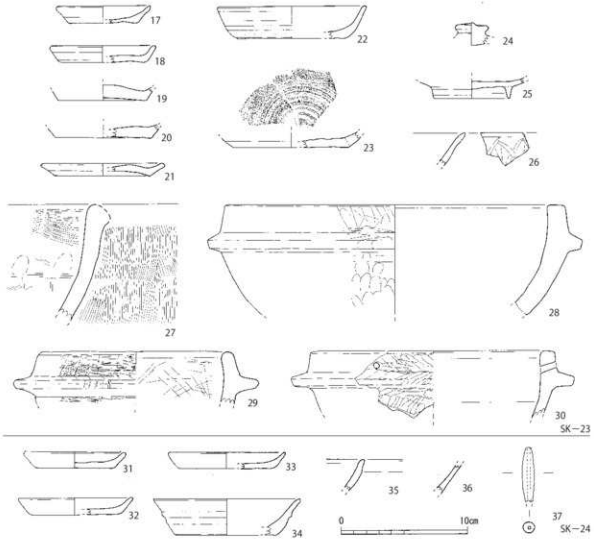
調査区中央付近に位置する土坑である。平面プランは不整楕円形で、長軸240cm、短軸160cmを測る。床面はほぼ水平で、深さは200cmを測る。壁の立ち上がりは上半が比較的緩やかな傾斜、下半が垂直に近い傾斜となる。覆土は上層に黒褐色土、中層に黄灰色土及び灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版49、第8図）

17～21は土師器小皿である。17は底部の器壁が薄く、端部は明瞭な稜を有す。体部は外反気味に開く。口縁部の器壁は若干肥厚している。口径7.6cm、器高1.4cm、底径5.4cm。18は底端部の稜が不明瞭で、体部はあまり開かず短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.8cm。19は底部が若干上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部



第７図　SK－23・24・30・31 実測図（1/40）



第8図 SK−23・24出土遺物実測図（1/3）

はあまり開かずに立ち上がるようである。底径7.0cm。20は底端部の稜があまり明瞭ではない。底径7.6cm。21は底部が上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部は直線的で短く大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。口径9.8cm、器高1.0cm、底径7.6cm。

22・23は土師器坏である。22は底部が平坦で端部は丸味を帯び、体部はあまり開かず直線的に伸びる。外面には轆轤目が明瞭に観察される。口径11.8cm、器高2.6cm、底径8.2cm。23は底部が平坦で端部は明瞭な稜を有す。器壁は比較的薄い。内面には轆轤整形時の目跡が明瞭に残る。底径9.0cm。

24は土師質焼成の蓋の摘み部である。低平な形状で、中央付近が尖る。径2.4cm。25は瓦器埦である。高台は比較的高く、全体的に器壁が薄い。高台径6.0cm。

26は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗の口縁部片である。口縁端部はわずかに外傾する。27は瓦質焼成の鍋である。口縁部は欠損するが、外側に短く伸びるようである。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。

28～30は滑石製石鍋である。28は断面台形の短い鍔が付く。口縁部は平坦面をなす。内面は平滑だが外面には整形時の工具痕が明瞭に残る。口径26.8cm。29は鍔部や口縁部の端部が丸味を帯びる。内面には線状の擦痕が多数残り、外面には整形時の工具痕が明瞭に残る。口径15.4cm。30は断面台形で若干垂下した鍔を有し、口縁部はわずかに外傾する面をなす。内端部は丸く、外端部は稜をなす。口縁部下に一ヶ所穿孔がある。内面は平滑で外面には工具痕が明瞭に残る。口径19.4cm。

SK-24（図版2、第7図）

調査区中央付近、SK－23の北東側に位置する土坑である。平面プランは直径80cm程度の円形で、床面までの深さは115cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜である。覆土は上層に淡黄灰色土、中層に黒灰褐色土、下層に黒灰色土が堆積する。

出土遺物（第8図）

31～33は土師器小皿である。31は底部が平坦で端部は稜を有し、体部は直線的に開く。口径8.2cm、器高1.3cm、底径6.2cm。32は底部が平坦で端部は丸味を帯び、体部はわずかに外反気味に開く。口径9.0cm、器高1.4cm、底径7.0cm。33は底部が平坦で端部は稜をなさず、体部は直線的に短く開く。口縁部付近は器壁が薄くなる。口径9.2cm、器高1.3cm、底径7.0cm。34は土師器坏である。底部は平坦で端部は稜をなし、体部はわずかに外反気味に伸びる。外面には轆轤目が明瞭に見られる。口径11.6cm、器高2.9cm、底径8.0cm。35・36は瓦器埦である。35は外面の口縁部下に不明瞭な稜を有し、口縁端部はわずかに外反する。36は体部片で器壁が比較的薄い。

37は土師質焼成の土錘である。比較的細身の形状となる。長さ4.3cm、径0.9cm、孔径0.2cm。

SK-30（第7図）

調査区東側に位置する土坑である。北側が調査区外へと続いており、調査した範囲では直径120cmの円形プランを呈す。床面までの深さは115cmを測り、壁の立ち上がりは急傾斜である。覆土は上層に灰色土、中層に灰白色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版49、第9図）

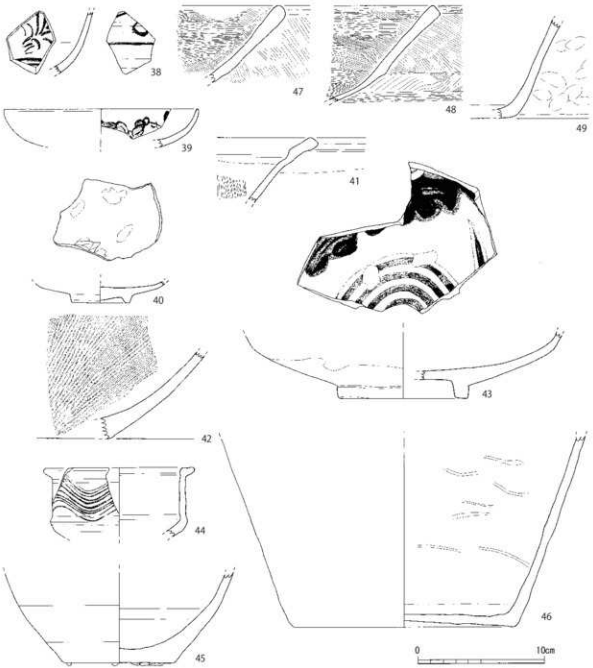
38は染付碗である。内外面に圏線と草花文を描く。39・40は陶器碗である。39は低平な器形である。釉色は暗灰色に発色し、呉須による花文を描く。口径15.4cm。40の釉は高台内側にまで施釉され、白灰色に発色する。内面見込みと高台に砂目跡が4ヶ所に残る。高台径4.6cm。

41・42は陶器擂鉢である。41は口縁部がわずかに肥厚し、内面口縁部下を凹線状に窪ませる。釉は内面及び外面口縁部まで施釉され、体部外面は無釉となる。42は41と同一個体であろう。43は刷毛目装飾を行う陶器鉢である。高台は断面方形を呈し、内面には砂目跡が残る。高台径10.2cm。44は陶器火入れである。体部は下方で屈曲し、上半は直立する。口縁部は外側に短く伸びる。内面は露胎、外面には刷毛目による装飾を描く。口径12.0cm。45は陶器瓶である。底部は平坦で体部下半は丸味を帯びて開く。内外面露胎。底径8.8cm。46は陶器甕である。底部は若干上げ底となり、体部は直線的に伸びる。内面には当て具痕が残る。底径8.7cm。

47は瓦質焼成の鍋である。口縁部は素口縁で端部は丸味を帯びる。内面横ハケ目、外面斜ハケ目調整を行う。48は土師質焼成の鍋である。体部下半は器壁が薄く、上半は器壁がやや厚くなる。上半と下半の境目は突帯状の段を有す。口縁部は素口縁で端部は明瞭な稜を有す。内外面ハケ目調整を行う。49は瓦質焼成の火鉢である。外面には成形時の指圧痕が多く残り、内面には炭化物が付着する。

SK-31（第7図）

調査区東側、SK－30の東隣に位置する土坑である。北側が調査区外へと続いており、調査し

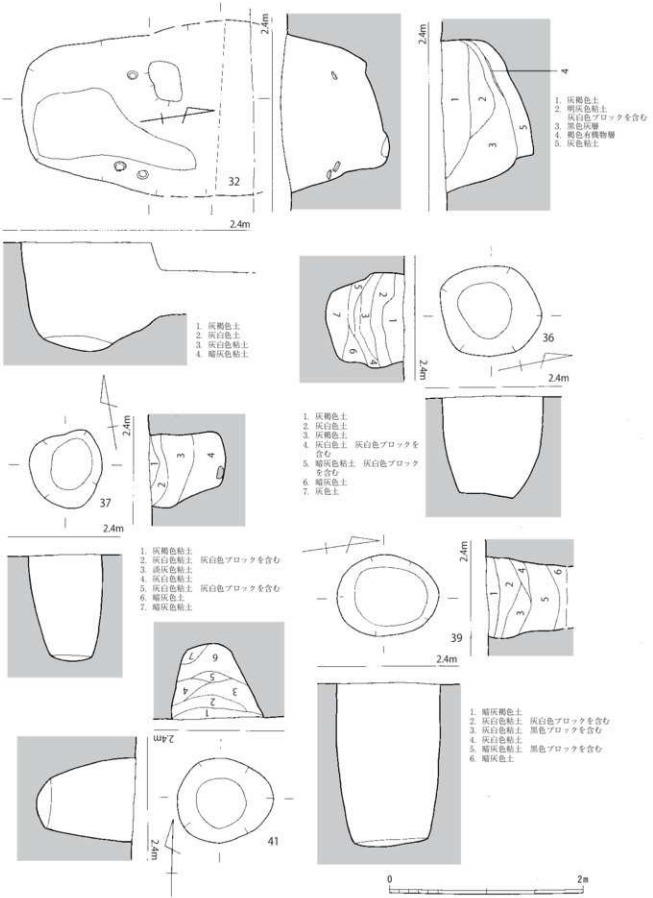


第 9 図　SK－30 出土遺物実測図（1/3）

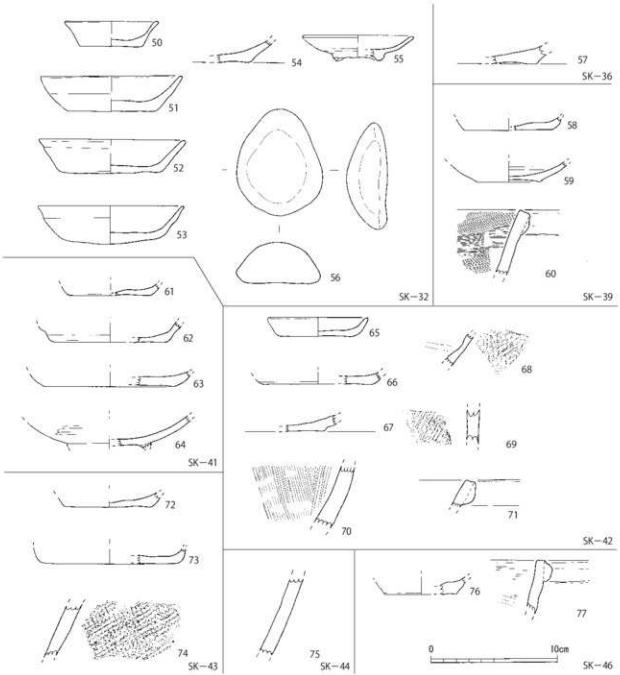
た範囲では長軸 170cm、短軸 150cm の楕円形プランを呈す。土坑内部は南側にテラスを有しており、ここまでの深さは 40cm、底面までの深さは 270cm を測る。壁の立ち上がりは上半が緩やかで、下半が垂直に近い立ち上がりとなる。覆土は上層に暗褐色土、中層に明青灰色土および暗黄灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

SK-32（図版 2・3、第 10 図）

調査区東側、SK－31 の東隣約 2m の位置にある土坑である。北側が調査区外へと続いており、調査した範囲では長軸 230cm、短軸 170cm の楕円形プランを呈す。土坑底部は南半部が深



第10図　SK－32・36・37・39・41実測図（1/40）



第 11 図　SK－32・36・39・41～44・46 出土遺物実測図（1/3）

く、また西側に小さなテラスを有している。南半部の深さは 110cm、テラス部までの深さは 85cm を測る。壁は比較的急な立ち上がりとなる。覆土は上層に灰褐色土、中層に黒灰色土及び明灰色土、下層に灰色土が堆積しており、中層の黒灰色土は東側から大きく流れ込んだような状況である。

出土遺物（図版 49、第 11 図）

50 は土師器小皿である。底部は平坦で端部は明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。体部中位は器壁がやや薄くなる。口径 7.4cm、器高 2.0cm、底径 5.0cm。51～54 は土師器坏である。51 は体部が若干内湾しながら伸びる。口径 11.2cm、器高 2.7cm、底径 7.0cm。52 は体部が外反気味に伸びる。口径 11.4cm、器高 2.7cm、底径 8.0cm。53 は底部が丸味を帯び、体部も歪つである。口径 11.6cm、器高 3.1cm、底径 7.0cm。54 は低端部が稜をなし、体部は大きく開く器形となる。

55は白磁小皿である。体部は若干内湾しながら大きく開く。体部下半から内側にかけて露胎となる。内面見込みに重ね焼きの目跡が残る。口径8.8cm、器高2.0cm、高台径4.0cm。

56は底面が平滑な円礫である。長さ8.3cm、幅6.8cm、厚さ3.3cm。

SK-36（図版3、第10図）

調査区東側、SK－32の南隣に位置する土坑である。平面プランは直径100cmの円形を呈す。床面までの深さは100cmを測り、壁の立ち上がりは上半が垂直に近く、下半は若干緩やかな傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に白灰色土及び灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第11図）

57は土師器坏である。底部はわずかに上げ底となり、端部は稜をなす。

SK-37（図版4、第10図）

調査区東側に位置する土坑である。SD－18と重複しており、これを切って営まれる。平面プランは直径80cm前後の不整円形を呈し、床面までの深さは110cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜である。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰白色土、下層に暗灰色土が堆積する。

SK-39（図版4、第10図）

調査区中央付近に位置する土坑である。平面プランは楕円形を呈しており、長軸105cm、短軸85cmを測る。床面までの深さは170cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜となる。覆土は上層に濃灰褐色土及び灰白色土、中層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第11図）

58・59は土師器小皿である。58は底部が平坦で端部は稜を有し、体部はあまり開かずに立ち上がる。底径7.0cm。59は底部が上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部はわずかに内湾しながら大きく開く。内面には轆轤目が残る。底径5.0cm。

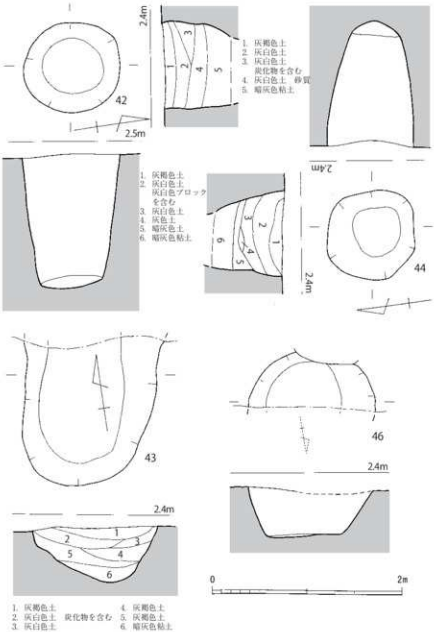
60は土師質焼成の鍋である。口縁部はわずかに肥厚し、内端部は明瞭な稜をなす。内面横ハケ目、外面はナデ調整を行い、外面には炭化物が付着する。

SK-41（図版4、第10図）

調査区中央付近に位置する土坑である。平面プランは直径100cm前後の円形を呈しており、床面は平坦ではなく中央に向かって擂り鉢状に深くなっている。床面までの深さは100cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に白灰色土、下層に暗灰色土が堆積し、中層と下層の間には薄い黒色土層が面をなして堆積する。

出土遺物（第11図）

61は土師器小皿である。器壁は薄く、低端部は稜をなす。底径6.6cm。62・63は土師器坏である。62は器壁が薄く、端部の稜は不明瞭である。底径9.4cm。63は体部が大きく開き、口縁部は薄くなるようである。底径10.4cm。64は瓦器埦である。高台部は欠損し、体部は大きく開く。外面には横方向のヘラ磨きが認められる。



第 12 図　SK－42～44・46 実測図（1/40）

SK-42（図版 5、第 12 図）

調査区中央付近、SK－41 の東隣に位置する土坑である。平面プランは直径 105cm の円形を呈しており、床面までの深さは 140cm を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に白灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第 11 図）

65 は土師器小皿である。底部は平坦で端部は丸く、体部は直線的に開く。口径 8.0cm、器高 1.5cm、底径 5.6cm。66・67 は土師器坏である。66 は底部が平坦で端部は丸味を帯びる。底径 8.4cm。67 は低端部が稜をなす。68 は須恵質焼成の甕または壺であろう。器壁は薄く、外面にはタタキ目が見られる。69 は須恵質の甕または壺である。内面は細い平行当て具痕、外面タタキを行う。70 は陶器甕の体部片である。内面ハケ目、外面ナデ調整を行う。71 は土師質焼成の鍋である。口縁端部は玉縁状に薄く肥厚し、端部を強く横ナデして内端部が明瞭な稜を有す。

SK-43（第12図）

調査区中央付近にあり、SK－41の北西約3mに位置する土坑である。SD－2bと重複しており、これに切られる。遺存する範囲では長軸150cm、短軸140cmの楕円形を呈す。床面までの深さは55cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に灰褐色土及び白灰色土、中層に灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第12図）

72は土師器小皿である。底部は平坦で端部は稜をなす。底径6.8cm。73は底部が平坦で体部はあまり開かずに立ち上がる。底径11.0cm。74は須恵質焼成の甕であろう。内面ナデ、外面格子タタキを行う。

SK-44（図版5、第12図）

調査区中央付近、SK－41の北隣に位置する土坑である。SK－46と重複しており、これを切って営まれる。平面プランは直径100cmの円形を呈し、床面は中央に向かって擂り鉢状に窪んでいる。深さは130cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に白灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第11図）

75は陶器甕の体部片である。内面は露胎、外面の釉は暗褐色に発色する。

SK-46（図版5、第12図）

調査区中央付近に位置する土坑である。SK－44、SD－2bと重複しており、これらに切られる。遺存する範囲では、直径130cm程度の円形プランに復元できる。床面までの深さは50cmを測り、壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。

出土遺物（第11図）

76は土師器小皿である。底部は平坦で端部は明瞭な稜を有し、体部はあまり開かずに立ち上がる。体部の器壁は薄くなるようである。底径5.6cm。77は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に若干肥厚し、上端部は面をなす。外面口縁部下には炭化物が付着する。

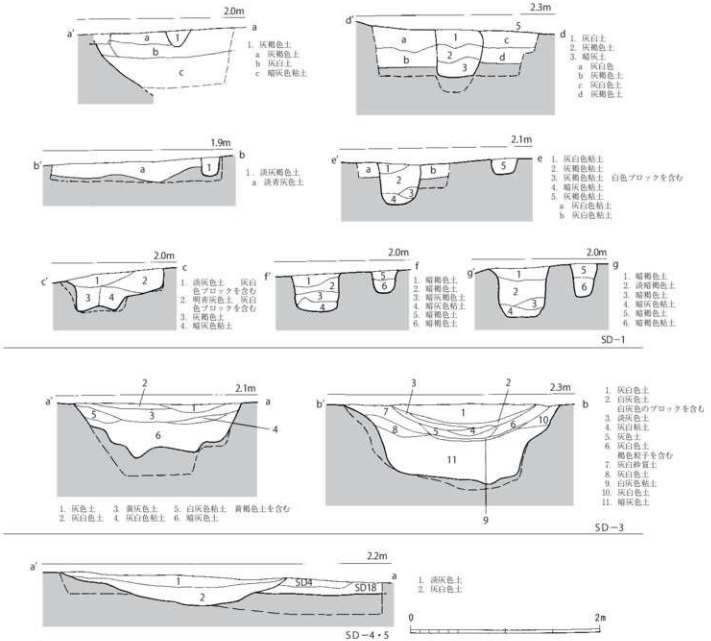
2）溝

SD-1（第13図）

調査区南側に位置し、48mの長さで東西方向に直線的に伸びる溝である。中央付近で幅100cm、深さ40cmを測る。上層には淡灰色土、下層には灰褐色土、暗灰色土が堆積する。東半部では部分的に2条に分かれており、それぞれ幅60cm、深さ50cmと幅30cm、深さ35cmを測る。幅が広い北側の溝は上層に暗褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。幅が狭い南側の溝は暗褐色土層で、北側溝の上層と同一の覆土となる。

出土遺物（図版49、第14・15図）

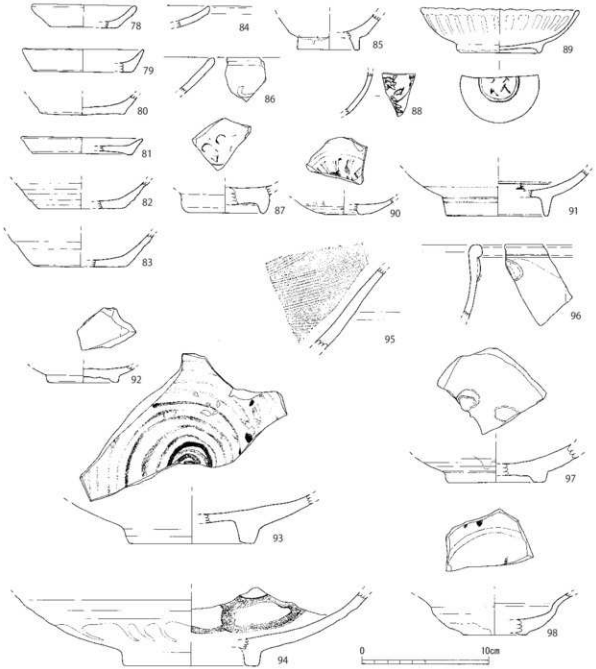
78～81は土師器小皿である。78は口縁端部が若干肥厚する。口径8.2cm、器高1.8cm、底径5.2cm。79は口縁部の器壁が薄くなる。口径9.6cm、器高1.8cm、底径7.8cm。80は底端部が



第 13 図　SD－1・3～5 土層断面実測図（1/40）

明瞭な稜をなす。底径 6.8cm。81 は底部がわずかに上げ底となり、体部は短く立ち上がる。口縁端部は器壁が薄くなる。口径 9.6cm、器高 1.3cm、底径 7.6cm。82・83 は土師器坏である。82 は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。体部外面には轆轤目が明瞭に残る。底径 7.0cm。83 は底端部が稜を有し、体部は直線的に開く。外面には轆轤目が明瞭に残る。底径 7.2cm。

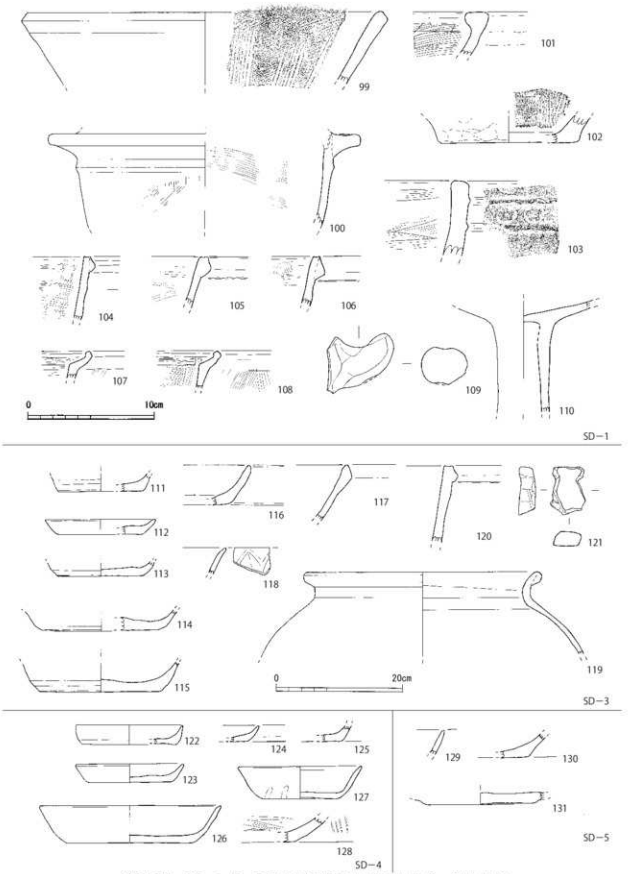
84・85 は白磁である。84 は体部が大きく開き、口縁部は丸味を帯びる小皿である。85 は碗の底部である。高台はやや高く、接地面が広い。釉は高台部と体部の境にまで施釉される。高台径 5.0cm。86・87 は青磁である。86 は青磁碗の口縁部である。直線的に伸びており、端部は丸くおさめる。外面には草文を施文する。釉色は緑灰色に発色する。87 は器壁が厚く、高台端部が丸味を帯びる。内面見込みには草花文を施文する。高台径 6.8cm。88 は染付碗である。外面には草花文が描かれる。89 は型押しで菊花状に成形する白磁皿である。外面見込みには文字を



第 14 図　SD－1 出土遺物実測図（1/3）

除刻するが判読できない。口径 12.4cm、器高 3.5cm、底径 6.8cm。90 は明染付皿である。高台は碁笥底となる。底径 2.8cm。91 は染付碗である。内外面に圏線が見られる。高台径 8.2cm。

92～98 は陶器である。92 は碗の底部であろう。釉色は緑灰色に発色する。高台径 5.6cm。93 は内面に刷毛目文様を施文する皿である。底径 9.6cm。94 は白色地に緑青色の釉で文様を描く皿である。高台径 10.8cm。95 は擂鉢の体部片である。内面の擂目は密ではない。96 は甕の口縁部である。体部は直立し、口縁部は外側に丸く肥厚する。97 は鉄釉を施釉する皿である。内面には目跡が残る。高台径 7.8cm。98 は浅い器形の碗である。体部下半は大きく開き、一旦上方へと立ち上がった後、口縁部は大きく外反する。釉色は緑灰色を呈す。高台径 5.0cm。



第15図 SD−1・3〜5出土遺物実測図（119は1/6、他は1/3）

99は瓦質焼成の擂鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部は面をなす。内面の擂目は6条を一単位とする。口径29.0cm。100は土師質焼成の羽釜である。鍔部は短く水平に伸びる。調整は内外面ハケ目調整を行う。鍔部径28.8cm。101は瓦質焼成の鍋である。口縁部は内側に短く肥厚し、上端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。102は瓦質焼成の擂鉢である。底部は平坦で、底端部は丸味を帯びる。底径11.2cm。

103は瓦質焼成の火鉢である。外面口縁部下には2条の突帯が巡り、その間に梅花文の印刻を連続して行う。内面は横ハケ目調整を行う。104～108は土師質焼成の鍋である。104は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部が小さく肥厚する。上端部は面をなす。105・106も104と同様口縁部が肥厚する。107・108は口縁部が屈曲して外側に開き、さらに端部は上方に立ち上がる。端部は面をなす。内外面ハケ目調整を行う。

109・110は古墳時代の土師器である。109は甑の把手である。指ナデ成形を行う。110は長く伸びた高坏の脚柱部である。

SD-3（図版6、第13図）

調査区西側に位置し、9mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。幅170cm、深さ50～80cmを測る。上層・中層には灰白色土、下層には暗灰色土が厚く堆積する。

出土遺物（図版49、第15図）

111～113は土師器小皿である。111は体部があまり開かない器形となる。底径6.8cm。112は体部が短く、口縁部の器壁が薄くなる。口径8.8cm、器高1.2cm、底径6.6cm。113は底径6.8cm。114～116は土師器坏である。114は体部の器壁が薄くなる。底径9.4cm。115は底端部の稜が明瞭で、口縁部は器壁が薄くなる。底径9.6cm。116は体部が直線的に伸びる。117は須恵質の鉢である。体部は器壁が薄く、口縁部は断面三角形状に肥厚する。

118は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。119は備前焼陶器甕である。肩部が丸く、口縁部は短く外反する。口縁端部は折り返して丸く肥厚する。口径36.4cm。

120は土師質焼成の鍋である。体部は立ち上がり、口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁上端部は強い横ナデを加えて面をなす。121は滑石製石鍋転用品である。一部欠損しており、現存で長さ3.8cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm。

SD-4（図版6、第13図）

調査区西側に位置し、9mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。SD－5と重複しており、これに切られる。またSD－18とは直角に接続する。幅は約100cm、深さは10cm、覆土は灰色土の単一層である。

出土遺物（第15図）

122～124は土師器小皿である。122は体部があまり開かず短く立ち上がり、端部は薄く尖る。口径8.4cm、器高1.6cm、底径7.4cm。123は口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.6cm。124は体部が短く器高の低い器形となる。125・126は土師器坏である。125は底端部の稜が比較的明瞭である。126は底部に比べて体部の器壁が薄い。口径14.4cm、器高3.0cm、底径9.8cm。

127は白磁皿である。底部はわずかに上げ底となり、体部は外反気味に伸びる。釉は全面に

施釉される。口径9.8cm、器高2.6cm、底径6.0cm。128は土師質焼成の鍋であろう。底端部は稜をなし、体部は大きく開く。内面には横ハケ目調整を行う。

SD-5（第13図）

調査区西側に位置し、9mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。SD－4と重複しており、これを切って営まれる。またSD－18とは直交する方位にあり、断面図を見るとこれを切って営まれているようである。幅は240cm、深さは30cm、覆土は上層に淡灰色土、下層に灰白色土が堆積する。

出土遺物（第15図）

129は土師器坏の口縁部であろう。130・131も土師器坏である。130は底端部が稜を有し、体部は大きく開く。131は底端部の上方が凹む。底径9.0cm。

SD-14（第16図）

調査区中央付近に位置し、南北方向に4mの長さで伸びる溝である。SK－12、SD－21と重複しており、SK－12には切られ、SD－21を切って営まれる。幅は15cm前後、深さは15cmを測る。

出土遺物（第18図）

132は土師器小皿である。体部は短く立ち上がる。133は陶器碗である。釉は淡い黄白色に発色し、口縁部付近は器壁が薄くなる。

SD-15（第16図）

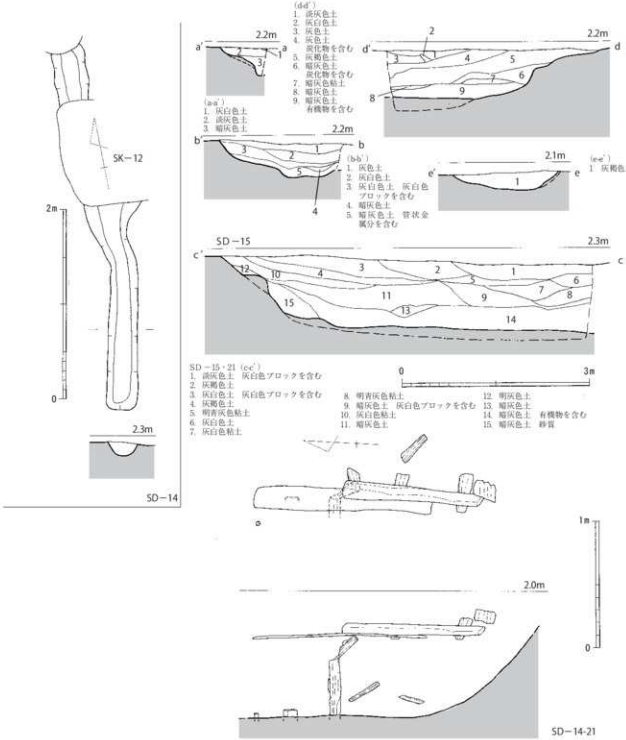
調査区北半の西側から中央付近に位置する溝である。西側は不明瞭に窪んでおり、東端は直線的な溝状を呈している。東西で15m、南北で8mを測る。深さは70cm。覆土上層に灰白色土や灰褐色土、中層から下層にかけて暗灰色土が堆積する。溝の中央付近では、杭と板材を組み合わせた木製構築物を確認した。遺存状態があまり良くないので用途は不明だが、南北方向に板を水平に伸ばし、それを杭で固定しているようである。

出土遺物（第19図）

148～157は土師器小皿である。148は体部があまり開かず直線的に伸びる。器壁は比較的厚い。口径6.4cm、器高1.4cm、底径4.8cm。149は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に長く伸びる。口径7.2cm、器高2.1cm、底径5.0cm。150は器壁が薄い。底径4.8cm。151は底径6.2cm。152は口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.4cm。153は底端部が丸く稜をなさない。底径6.2cm。154は口縁端部が薄く尖る。口径8.6cm、器高1.3cm、底径7.0cm。155は体部がわずかに内湾しながら立ち上がる。口径10.0cm、器高1.8cm、底径7.6cm。156は体部が外反気味に立ち上がるようである。底径8.4cm。157は底部が上げ底状になり、口縁部はわずかに肥厚する。体部外面には轆轤目が明瞭に見られる。口径10.6cm、器高2.1cm、底径5.8cm。

158・159は土師器坏である。158は器壁が薄く、体部は直線的に開く。口径14.0cm。159は底径が小さく、端部は明瞭な稜をなす。体部は直線的に長く伸びるようである。底径5.0cm。160は土師器埦である。高台は直線的に長く伸びる。高台径8.8cm。

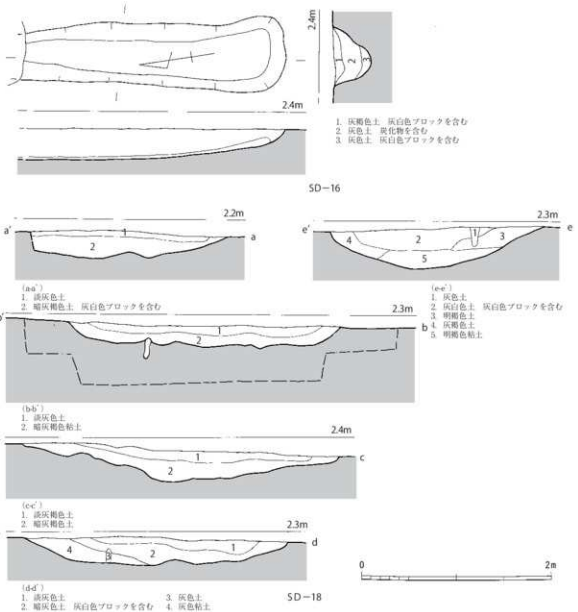
161・162は白磁である。161は小坏。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。高台径2.4cm。



第 16 図　SD−14・15・21 土層断面実測図（1/30・1/40・1/60）

162 は白磁皿である。底端部は明瞭な稜を有す。底径 5.4cm。163 は青磁碗である。内面見込みには草花文を施文する。164～167 は染付磁器である。164 は内外面に圏線と列点状の文様を描く。165 は内面に幅の広い圏線、外面には葉の文様を描く碗。166 は内外に圏線と線描きの文様を描く碗。口径 12.0cm。167 は口縁端部に管状の把手が付く。瓶であろう。

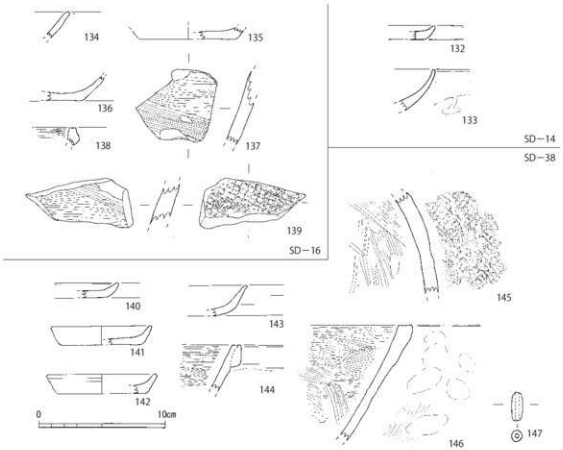
168～170 は須恵質焼成の鉢である。168 の体部下半は内湾気味に、上半は外反気味に開き、口縁端部は断面三角形状に肥厚する。口径 17.6cm、器高 5.5cm、底径 6.6cm。169 は内外面ハ



第 17 図　SD−16・18 土層断面実測図（1/40）

ケ目調整を行う。170 は口縁部が立ち気味に開き、端部は若干肥厚する。

171 は瓦質焼成の羽釜である。鍔部はやや上方を向き、端部は丸味を帯びる。肩は丸く張る。鍔部径 31.4cm。172・173 は瓦器塊である。172 は断面台形状の低平な高台となる。高台径 7.4cm。173 は口縁端部が若干外反する。器表の風化が進み調整は確認できない。174・175 は瓦質焼成の鉢である。174 は口縁内端部が上方に尖る。調整は内外面横ナデ調整を行う。175 は口縁部付近がわずかに肥厚し、内端部はやはり上方に尖る。内外面ハケ目調整が見られる。176～178 は瓦質焼成の擂鉢である。176 は口縁端部が丸味を帯びる。内面は横ハケ目後に擂目を施す。177 は端部を凹線状に浅く窪ませる。178 は底部付近の破片で、内面は横ハケ目後に太い擂目を施す。179・180 は瓦質焼成の鍋である。179 は底部付近の破片で、内外面にハケ目が見られる。180 は口縁部が強く外反し、上面が水平面をなす。181 は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内面には横ハケ目を行う。



第18図　SD－14・16・38出土遺物実測図（1/3）

SD-16（図版6、第17図）

調査区中央付近に位置し、南北方向に3mの長さで直線的に伸びる溝である。北端はSD－21に接続しており、またSK－17、SD－18を切って営まれる。幅は70cm、深さは40cmを測る。覆土は上層に灰褐色土、中層及び下層に灰色土が堆積する。

出土遺物（第18図）

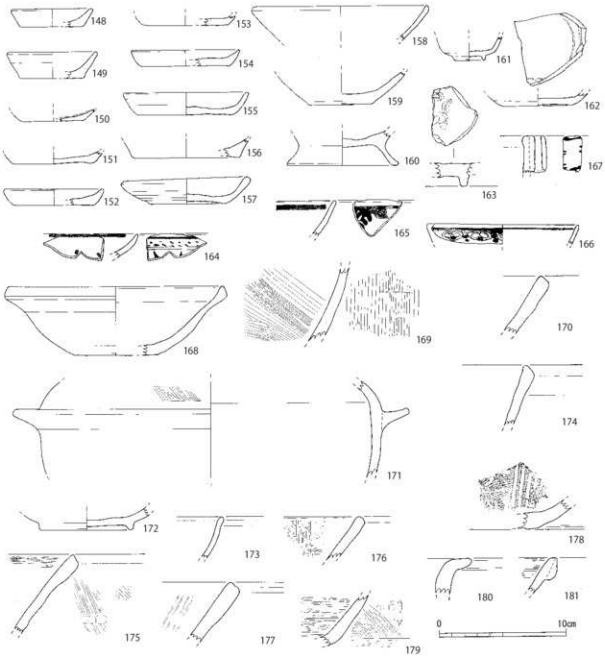
134～136は土師器坏である。134は口縁部付近がわずかに外反気味になる。135は底端部の稜が明瞭である。底径7.8cm。136は底端部の稜が比較的明瞭で、体部はわずかに内湾しながら開く。137・138は土師質焼成の鍋である。137は内面に横方向のハケ目調整を行う。138は口縁部が小さな玉縁状に肥厚する。上端部には強い横ナデを加えており、端部が明瞭な稜を有す。内面横ハケ目。139は須恵質焼成で、甕か。内面はハケ目、外面は格子タタキを行う。

SD-18（第17図）

調査区のほぼ中央を東西に直線的に長く伸びる溝である。西端はSD－4に接続し、東端は調査区外へと続く。長さ45m、幅は3.5m、深さは30cmを測る。覆土は上層に淡い灰褐色土、下層に暗灰褐色土が堆積する。

出土遺物（第18図）

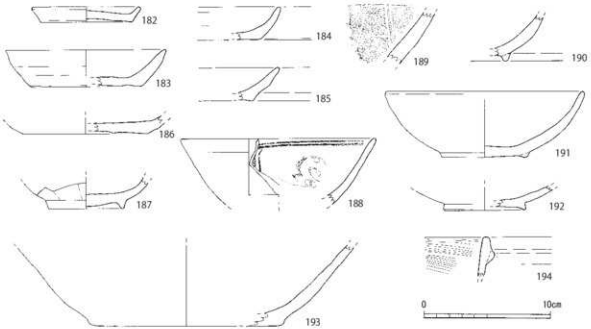
182は土師器小皿である。底部は上げ底となり、端部は明瞭な稜をなす。体部は外反気味に



第19図　SD－15出土遺物実測図（1/3）

短く立ち上がる。口径8.6cm、器高1.2cm、底径7.2cm。183～186は土師器坏である。183は底端部の稜が明瞭で、体部は底部と比べて器壁が厚くなり、口縁部は尖る。口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.8cm。184は底端部の稜が不明瞭である。185は底端部の稜が明瞭である。186は底部がわずかに上げ底となり、端部の稜が明瞭である。底径10.0cm。

187・188は青磁碗である。187は外面の高台部内側まで施釉される。高台径6.0cm。188は内面に二条の沈線と飛雲文を半肉彫りする碗である。口径15.6cm。189は瓦質焼成の擂鉢である。内面は横ハケ目後二条一単位の擂目を施す。190～192は瓦器埦である。190は器壁がやや厚い。高台部は低く、断面台形を呈す。191は低く丸味を帯びた高台となる。口径15.8cm、器高5.3cm、高台径6.8cm。192は断面三角形の低い高台となる。高台径6.4cm。193は須恵質



第20図　SD－18出土遺物実測図（1/3）

焼成の鉢である。底部上方が内側に一旦屈曲しており、体部と明瞭に区分される。底径15.2cm。194は土師質焼成の鍋である。口縁端部は丸味を帯び、外面の口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

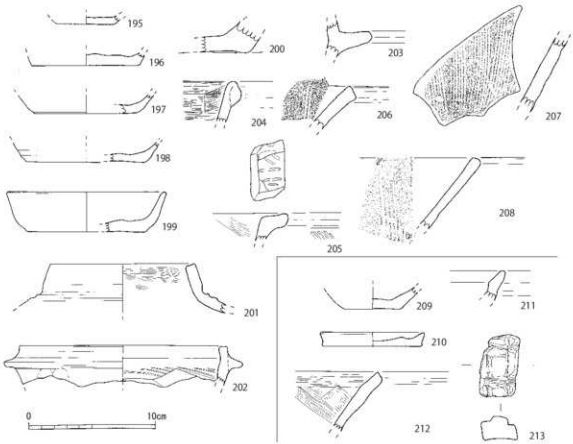
SD-21（第16図）

調査区中央付近に位置する溝である。SK－12、SD－14・15と重複しており、これらに切られる。平面形は溝というよりも落ち込みに近い形状で、検出した範囲では東西4.4m、南北5.0mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、深さは1mを測る。覆土は上層に灰白色土及び灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第21図）

195・196は土師器小皿である。195は底径2.3cm。196は底端部の稜が明瞭で、体部はあまり開かずに立ち上がるようである。底径8.6cm。197～199は土師器坏である。197は底径8.2cm、198は底径9.2cm、199は底端部が明瞭な稜を有し、体部はあまり開かずに立ち上がる。口径12.6cm、器高3.2cm、底径9.4cm。

200は陶器甕の底部片である。色調は赤褐色を呈す。201は瓦質焼成の羽釜である。肩部と口縁部の境は不明瞭に屈曲し、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は面をなす。口径11.4cm。202は瓦質焼成で足釜か。鍔部は短く伸びており、口縁部は面をなす。口径16.4cm。203は瓦質焼成の羽釜である。鍔部は上辺が水平面をなす。鍔部下半には炭化物が付着する。204は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状を呈す。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。205は口縁部が水平に伸び、上端に縄目押圧による文様を施文する土師質焼成の鍋である。206・207は瓦質焼成の擂鉢である。206は口縁端部が面をなし、上端部が上方を向く。207は内面に7条または8条の擂目を施す。208は土師質焼成の擂鉢である。口縁部は素口縁で端部



第21図 SD－21出土遺物実測図（1/3）

は丸味を帯びる。内面には5条で一単位の擂目を施す。

209～213はSD－15・21のトレンチから出土した遺物である。209・210は土師器小皿である。209は底部が小さい。底径4.4cm。210は体部が短く、あまり開かず上方に伸びる。口径8.2cm、器高1.1cm、底径7.8cm。211は口縁端部が外側に屈曲し、内面に明瞭な稜を有す陶器鉢である。212は瓦質焼成の鍋である。口縁部はわずかに肥厚し、内端部は上方に尖る。内面ハケ目、外面横ナデ調整を行う。213は滑石製石鍋転用品である。表面に格子状の切り込みがあり、未製品かもしれない。長さ5.0cm、幅3.2cm、厚さ1.9cm。

SD-25

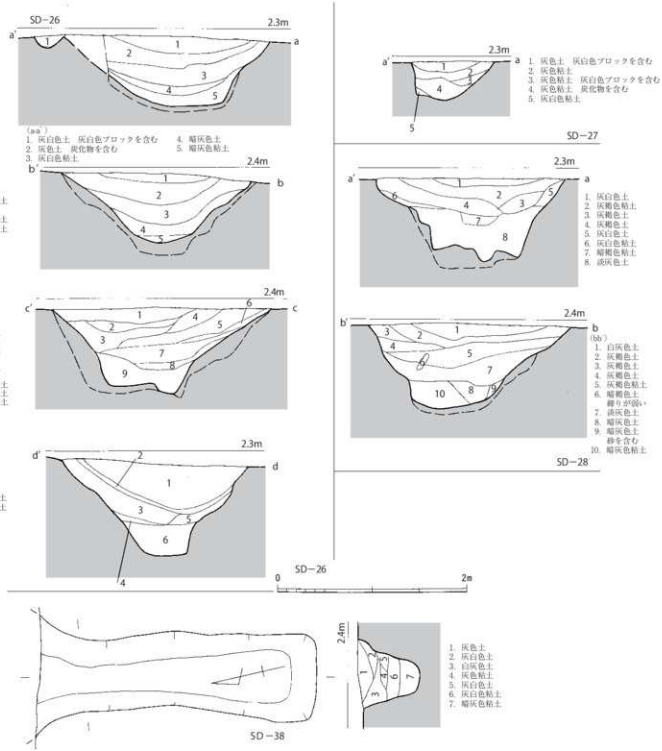
調査区中央付近に位置し、13mの長さで東西に直線的に伸びる溝である。SD－26、28を切って営まれる。深さは15cm、覆土は灰色土の単一層である。

出土遺物（第23図）

214は口縁部が玉縁となる白磁碗である。215は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ。216も鍋か。口縁部は小さな玉縁状を呈し、上端部はわずかに窪んだ面をなす。内外面ナデ調整。

SD-26（図版7、第22図）

調査区中央から東側にかけて、25mの長さで東西方向に直線的に伸びる溝である。SD－15、

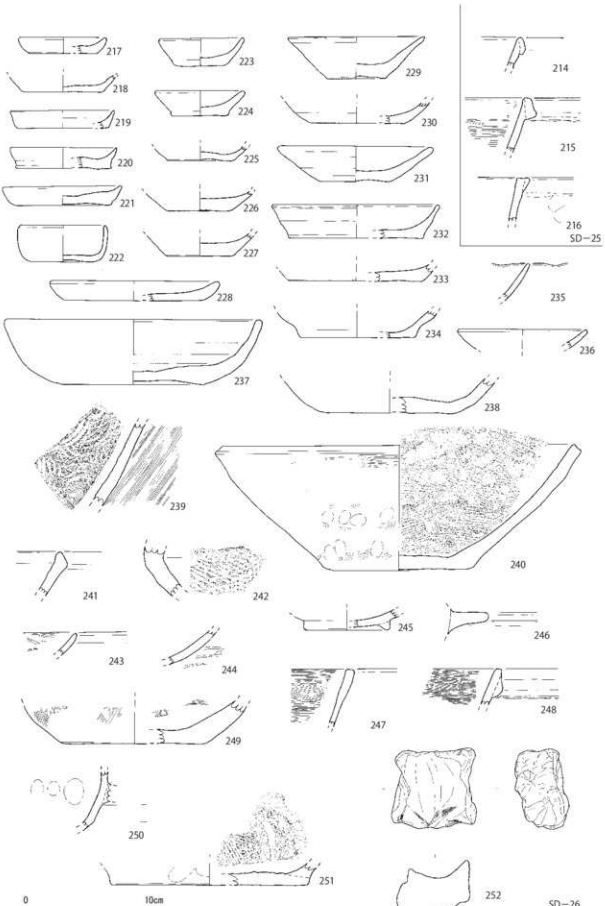


第 22 図　SD−26～28・38 土層断面実測図（1/40）

25 号溝に切られており、SK−43、46、SD−28、38 を切って営まれる。幅は 2.5m、深さは 50cm を測る。覆土は上層に白灰色土、中層に白灰色土及び灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 49、第 23 図）

217～227 は土師器小皿である。217 は口径 7.0cm、器高 1.3cm、底径 5.2cm。218 は体部が外反気味に開く。底径 6.2cm。219 は体部が直線的に短く伸び、あまり開かない器形となる。口径 8.2cm、器高 1.4cm、底径 7.0cm。220 は口縁部の器壁が薄く、尖り気味に仕上げる。口径 8.4cm、



第23図　SD－25・26出土遺物実測図（1/3）

器高1.7cm、底径7.6cm。221は口径9.4cm、器高1.5cm、底径7.2cm。222は体部が長く上方に立ち上がる器形となる。口径6.8cm、器高3.0cm、底径5.0cm。223・224は径が小さく、体部がやや長く伸びる。223は口径6.8cm、器高2.3cm、底径4.2cm。224は口径7.2cm、器高2.0cm、底径4.4cm。225は器壁が薄い。底径5.2cm。226は底径5.2cm。227は底径5.0cm。

228～234は土師器坏である。228は体部の立ち上がりが短く皿状を呈す。口径13.4cm、器高1.6cm、底径11.0cm。229は底部が小さく、体部が直線的に長く伸びる。口径10.8cm、器高3.4cm、底径4.6cm。230は底径7.4cm。231は229とよく似た器形だが器壁がやや厚い。口径12.2cm、器高2.8cm、底径5.2cm。232は底端部の稜が明瞭で、体部はあまり開かずに伸びる。口径13.2cm、器高2.7cm、底径10.6cm。233は底径10.6cm。234は底部と体部の境目が窪んでおり、体部との境目を明瞭に作り出している。底径9.0cm。

235は口縁部が輪花となる青磁碗である。236は白磁小皿である。口径10.2cm。

237は土師質焼成の鉢である。底部は若干上げ底となり、体部は内湾しながら開く。口縁端部は丸くおさめる。口径20.4cm、器高5.1cm、底径11.4cm。238は須恵質焼成の鉢底部である。底端部は丸味を帯びる。底径10.2cm。239は須恵質焼成の甕である。内面は同心円当て具痕、外面はハケ目調整を行う。

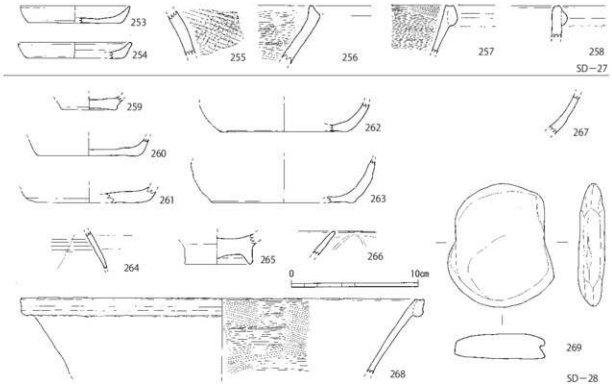
240は瓦質焼成の鉢である。底部は平坦で体部は直線的に開き、口縁端部は面をなす。調整は内外面ハケ目調整を行い、外面はその後ナデ消す。口径28.8cm、器高9.8cm、底径11.0cm。241は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形状を呈し、端部は上方を向く。242は須恵質の甕である。内面はナデ、外面は平行タタキを行う。243～245は瓦器埦である。243は内面にかすかにヘラ磨きが残る。244は外面にヘラ磨きが認められる。245は断面三角形で丸味を帯びた高台が貼付される。高台径6.6cm。246は瓦質羽釜である。鍔部はやや上方を向いて長く伸びる。247・248は土師質焼成の鍋である。247は器壁が薄く、口縁部付近は器壁が若干厚くなる。口縁端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。248は口縁部外面に低い玉縁状の突帯を巡らせる。249は瓦質焼成の鉢である。底部は平坦で体部は内湾しながら開く。底径11.0cm。250は土師質焼成の羽釜である。鍔部は欠損しており形状不明。251は底部が平坦で端部は明瞭な稜を有す。底径15.6cm。252は強い熱を受けて赤化した粘土塊。胎土にはスサを含む。長さ6.4cm。

SD-27（第22図）

調査区中央付近に位置し、4.5mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。SD－25と重複しており、これに切られる。幅は90cm、深さは40cmを測る。覆土は灰色土が堆積する。

出土遺物（第24図）

253・254は土師器小皿である。253は口縁部付近の器壁が薄くなり、端部が尖る。口径8.6cm、器高1.4cm、底径7.4cm。254は口径9.0cm、器高1.3cm、底径7.6cm。255は須恵質焼成で、甕であろうか。内面はナデ、外面は格子タタキを行う。256は須恵質焼成の鉢である。口縁部は上方につまみ上げたような形状となる。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。257・258は土師質焼成の鍋である。257は口縁端部が外側に丸く肥厚し、上端部は強い横ナデによって凹面を形成する。内面は細かな横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。258もやはり口縁部外面が肥厚するが、上端部は丸くおさめる。調整は内外面横ナデ調整を行う。



第24図　SD－27・28出土遺物実測図（1/3）

SD-28（第22図）

調査区西側に位置し、5mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。SD－25、26、SP－29、35と重複しており、これに切られる。幅は2m、深さは90cmを測る。覆土は上層に白灰色土、中層に灰褐色土、下層に淡灰色土が堆積する。

出土遺物（第24図）

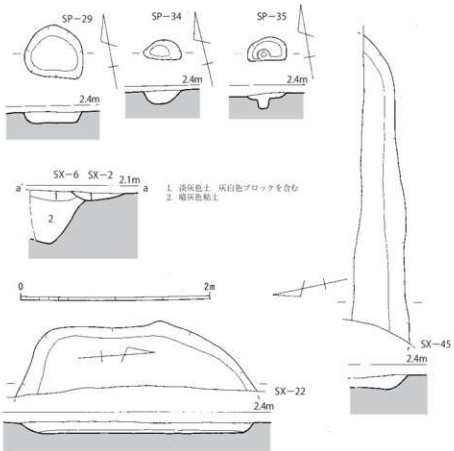
259は土師器小皿である。底部はわずかに上げ底となり、端部は明瞭な稜をなす。体部は外反気味に開くようである。底径4.0cm。260～263は土師器坏である。260・261はどちらも底端部は丸味を帯びた器形となる。260・261どちらも底径8.0cmを測る。262・263は底端部が明瞭な稜を有し、体部は内湾しながら開く。262は底径10.0cm。263は底径11.0cm。

264・265は白磁である。264は瓶であろうか。器壁は薄く、内面には釉垂れが見られる。265は底部の器壁が厚く、高台は長く伸びる。高台径5.2cm。266は青磁碗の口縁部片である。外面には蓮弁が見られる。267は瓦器埦の体部片である。器表が風化しており調整不明。

268は土師質焼成の鍋である。体部は外反気味に開き、口縁部は外側に大きく肥厚する。口縁外端部に強い横ナデを加えて上端部は凹面を形成し、また外端部は尖らせる。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。口径31.6cm。269は玄武岩の扁平礫である。両側縁が抉れており、石錘として使用したか。

SD-38（図版7、第22図）

調査区西側に位置し、3mの長さで南北方向に直線的に伸びる溝である。SD－26と重複して



第 25 図 SP－29・34・35，SX－2・6・22・45 実測図（1/40）

おり、これに切られる。またSD－28の延長線上に位置しており、これと同一の溝であった可能性もある。幅は90cm、深さは60cmを測る。覆土は上層に灰色土、中層に灰白色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第18図）

140～142は土師器小皿である。140は体部が短く伸びる。141は体部があまり開かずに立ち上がる。口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.2cm。142は体部が外反気味に開く。143は土師器坏である。体部は中位で不明瞭に屈曲し、上半は外反気味に開く。口縁端部は薄くなる。

144は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。145は須恵質焼成の甕であろう。内面縦ハケ目、外面格子タタキを行う。146は瓦質焼成の擂鉢である。内面は横ハケ目後に擂目を施文する。外面には指圧痕が多数残る。147は土師質焼成の管状土錘である。小型品で、長さ2.3cm、径0.9cm、孔径0.3cm。

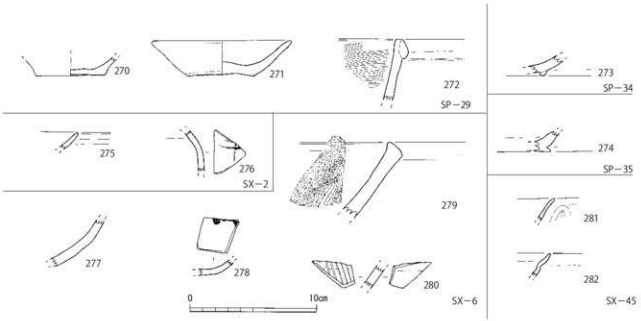
3）ピット

SP−29（第25図）

調査区東側に位置するピットである。SD－26、28と重複しており、これらを切って営まれる。長軸60cm、短軸55cmの不整楕円形を呈す。深さは10cmを測り、底面は平坦面をなす。

出土遺物（第26図）

270は土師器小皿である。底部はわずかに上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部は外



第 26 図　SD－29・34・35，SX－2・6・45 出土遺物実測図（1/3）

反気味に開く。底径 5.4cm。271 は土師器坏である。底部は若干上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部は直線的に大きく開く。口径 11.0cm、器高 2.8cm、底径 5.2cm。272 は土師質焼成の鍋である。体部はあまり開かず上方に立ち上がり、口縁部は玉縁状に肥厚する。上端部は平坦面をなすが、端部は丸味を帯びる。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SP-34（第 25 図）

調査区の東側、SP－29 に東隣するピットである。SD－28 を切って営まれる。長軸 40cm、短軸 20cm の不整楕円形を呈す。深さは 15cm を測り、底面は擂り鉢状に窪んでいる。

出土遺物（第 26 図）

273 は瓦器埦の底部片である。高台は低く小さなもので、断面を見ると内端部が内側に伸びたような形状となる。

SP-35（第 25 図）

調査区の東側、SP－34 の東約 1.5m に位置するピットである。長軸 40cm、短軸 25cm の不整楕円形を呈す。底面には径 10cm の小ピットがあり、この小ピットまでの深さは 15cm を測る。

出土遺物（第 26 図）

274 は土師器坏である。底端部は外側に張り出したような形状となる。調整は内外面横ナデで、底部は糸切り。

4）不明遺構

SX-2

調査区西端に位置する遺構である。SX－6 と重複しており、これに切られる。南北方向に伸びる不整形の溝状を呈しており、長さ 4.5m、幅 1m 前後、深さは 15cm を測る。覆土は灰色土が単一層で堆積する。

出土遺物（第26図）

275は陶器小碗である。体部は直線的に大きく開く。釉色は明黄灰色に発色する。276は染付で、瓶の肩部であろうか。釉は内外面に施釉され、外面には呉須による施文が見られる。

SX-6（図版6、第26図）

調査区西端に位置する遺構である。SX-2と重複しており、これを切って営まれる。大半が調査区外へと続くため全体の形状は明確ではなく、調査した範囲内では長軸8m、短軸2mの南北に長い溝状を呈している。深さは50cmを測る。覆土は上層に淡灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第26図）

277は瓦器埦の体部片である。風化が進んでおり調整不明。278は染付碗の体部片である。内面に呉須による施文が見られる。

279は須恵質焼成の擂鉢である。器壁は比較的厚く、体部は直線的に伸びる。口縁部は内端部をつまみ出す。280は陶器擂鉢の体部片である。胎土は赤褐色を呈す。

SX-22（第25図）

調査区西側に位置する遺構である。SD-3と重複しており、これに大きく切られるために全体の形状が不明確だが、現状では長軸2.6m、短軸70cmの土坑状を呈している。深さは10cmを測る。

SX-45（第25図）

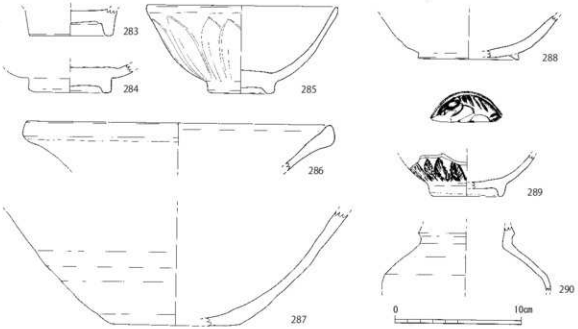
調査区中央付近に位置する遺構である。SD-15、26に大きく切られるために全体の形状が不明確だが、現状では長軸3m、短軸60cmの溝状を呈している。深さは15cmを測る。

出土遺物（第26図）

281は青磁碗の口縁部片である。器壁は薄く、口縁部はわずかに外反する。外面には鎬蓮弁が見える。282は土師器坏の口縁部片である。口縁部下で一度内側に屈曲し、口縁部はさらに外反するような形状となる。器壁は薄い。

5）その他の出土遺物（図版50、第27図）

283～290は全て包含層出土品である。283は白磁碗の底部である。高台は器壁が厚く、高い形状となる。高台径6.6cm。284・285は青磁碗である。284は全体的に器壁が厚く、釉は高台内側にまで施釉される。高台径6.6cm。286は鎬蓮弁の青磁碗である。底部の器壁は厚く、体部はあまり丸味を持たずに立ち上がる。高台内面にまで施釉されており、高台部は丸味を帯びる。口径15.0cm、器高7.0cm、高台径5.2cm。286・287は須恵質焼成の鉢である。286は体部の器壁が薄く、口縁部は肥厚して断面三角形を呈す。調整は内外面横ナデ調整を行う。口径24.6cm。287は径の小さな底部から、わずかに内湾する体部へと続く。底径10.2cm。288は瓦器埦である。高台は低く小さい。高台径7.9cm。289は外面に芭蕉文、内面見込みにも文様を描く明染付碗である。高台径5.4cm。290は白磁壺か。肩部は直線的に傾斜し、頸部は短く、外面に鋭い稜を巡らせて二重口縁状になる。



第 27 図　その他の出土遺物実測図（1/3）

6）木製品（第 28 図）

第 28 図はSK－39 から出土した木製桶である。材には杉を使用し、底部は二枚の板を繋いで構成される。径 15.6cm、厚さ 0.9cm。側板は短冊状の細い板を 21 枚つなぎ合わせて構成される。側板の中には底板の接合痕が残るものもある。長さ 15.3cm 前後、厚さ 0.7cm、幅は 1.2～2.5cm。

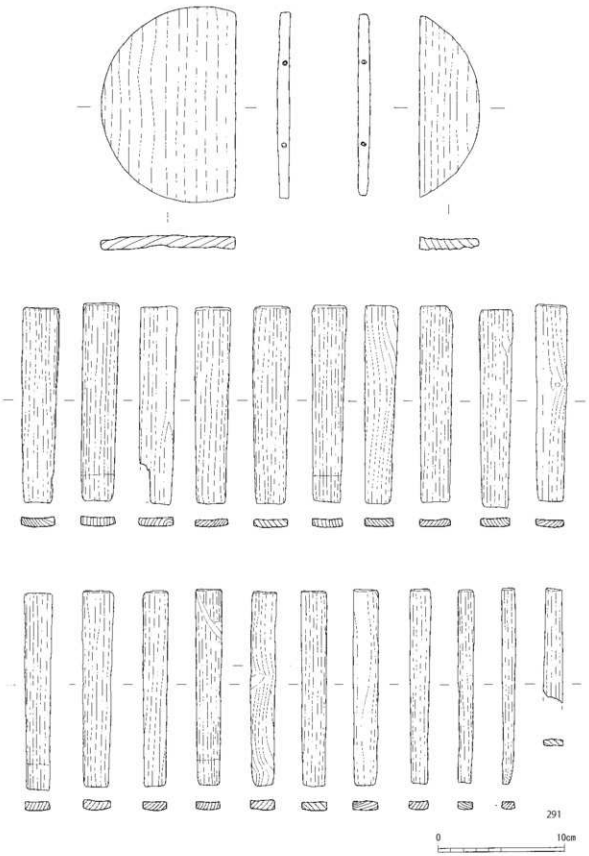
7）小結

蒲船津西ノ内遺跡第 1 次調査では主な遺構として土坑 18 基、溝 14 条、不明遺構 4 基を検出した。

溝のうち、大型の溝であるSD－5とSD－18 は直交する位置関係にあり、両者で方形区画溝を形成しているとみて良い。土坑はすべてこの区画内に位置することも、このことを傍証するものである。これに関連して、SD－5 と並行して近い位置にあるSD－3 や、SD－18 と並行して近い位置にあるSD－1、SD－26 などもやはり区画溝としての性格を持つものであり、恐らくは掘り直しが行われたものであろう。また、区画内にあるSD－16、SD－27、SD－28、SD－38 などの小規模な溝は、小区画のための溝として良いように思われる。これらは大半が断面逆台形を呈し、壁は直線的ではなくかなりの凸凹を有している。底面は概して平坦である。SD－15 やSD－21 は、溝というよりむしろ、自然の要因によってできた地形の凹部を埋め立てて平坦面とした、整地の痕跡と見なした方が妥当であろう。

土坑はすべてSD－5、SD－18 の方形区画内に位置する。一部溝と重複したものもあるが、これらは時期差に起因するものであり、おおよその区画範囲は意識され踏襲されていたようである。土坑のうち、比較的形状の整った円形を呈し、深さは 1m を超え、壁がほぼ垂直に立ち上がるものについては井戸とみて良いだろう。SK－23 なども多少いびつな形だが、底面までの深さや壁の立ち上がりを見ると、やはり井戸として機能したのではないかと思われる。一方、SK－32 やSK－43 は、楕円形を呈し、深さもあまり深くなく、廃棄土坑等の性格を想定した方が良いように思われる。

出土遺物から見ると、SK－30、SD－1 には近世の遺物を含み、それ以外は中世の遺物である。



第28図　木製品実測図（1/3）

比較的まとまって遺物が出土した遺構を挙げると、SK－23からは底部糸切りの土師器小皿と坏、瓦器埦、鎬蓮弁の青磁碗、口縁部が直立する石鍋が出土しており、概ね13世紀前半に位置付けられるものである。SK－17やSK－24も土師器から見る限りほぼ同時期であろう。SK－30は16、17世紀の遺物で占められる。SK－32は土師器小皿や坏の形状、内面に目跡のある白磁小皿の存在から、15世紀代に位置付けられるものである。SD－1は中世前期から17世紀頃まで出土遺物に時期幅がみられる。SD－15は内面に印花文のある青磁碗、中国青花磁器、羽釜や浅い器形の鍋が出土しており、概ね16世紀代のものとして良いだろう。SD－18は土師器小皿、坏、青磁碗、瓦器埦の出土から13世紀代に位置付けられる。SD－21は口縁部上面に縄目押圧施文を行う鍋や、足釜と思われる遺物が出土しており若干古い様相を示す。SD－26は概ね13世紀代の遺物で占められる。

出土遺物の時期から遺跡の形成過程をみた場合、最も古い時期に位置付けられるのはSD－21である。当調査区からは他にこの時期の遺構は見つかっておらず、調査区外に同時期の遺跡が広がっているのか、あるいは削平を受けて消滅し、SD－21は整地層であるため残ったとすべきであろうか。その次の13世紀代に位置付けられるのは、SD－18やSD－26、SK－23などである。SD－18とSD－26は遺物の面から時期差を判断するのは難しく、あるいは両者が併存していたことも想定される。SD－18と一連の遺構と思われるSD－5もほぼ同時期と見なしてよいだろう。遺物の面から先後関係を判別するのは難しいが、SD－3はSD－18を切って営まれており、切り合い関係の上ではSD－18よりも新しく位置付けられる。またSD－27はSD－26に切られており、SD－27の方が古く位置付けられるが、遺物の面では顕著な時期差はないようである。

遺物の面で次の時期に位置付けられるのは、出土遺物の面から15世紀代のものとしたSK－32であろう。次の16世紀代に位置付けられるのは、SD－15である。一部古い遺物も含むが多くは16世紀代の遺物によって占められる。遺構の重複関係を見ても、SD－21やSD－26を切って営まれており、このことと矛盾しない。

近世の遺物を含むSD－1やSX－6は、当調査区ではもっとも時期が下る遺構である。中世の区画を踏襲し、その後掘り直されて近世まで使用されたとみてよいだろう。また、土坑ではSK－30から同時期の遺物が出土している。

なお、木桶が出土したSK－39は供伴する土器に恵まれなかったが、概ね中世後期のものである。

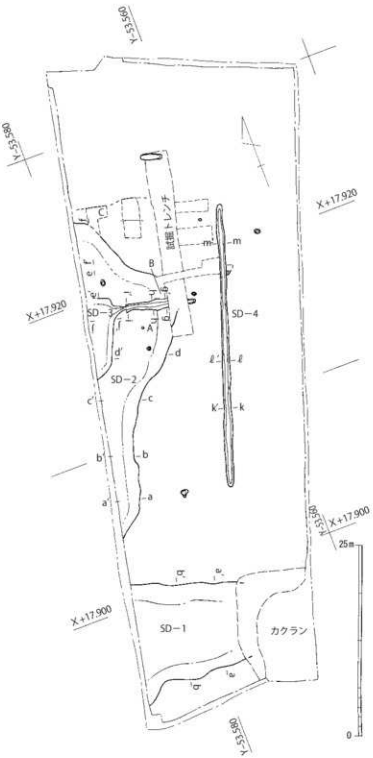
今回の調査の結果、当調査区では13世紀から17世紀までの遺構と遺物を確認した。ここでは遅くとも13世紀までには遺跡の形成が始まり、数度にわたって溝の掘り直しが行われながら、17世紀まで当初の区画を踏襲して居住区域として使用された場所であることが判った。

2　蒲船津西ノ内遺跡　第２次調査

蒲船津西ノ内遺跡第２次調査の発掘調査は、平成19年５月14日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、６月29日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は南北に長い形状であり、東西10ｍ、南北43ｍを測る。遺構面の標高は1.9ｍ～2.0ｍ。遺構は全体に及ぶが密度は低い。

検出した主な遺構は溝４条である。出土遺物は古墳時代の土師器、中世後期・近世の土師器、陶磁器、土師質・瓦質焼成の雑器類、土製品、石製品、石塔である。



第29図　蒲船津西ノ内遺跡第２次調査区遺構配置図（1/250）

１）溝

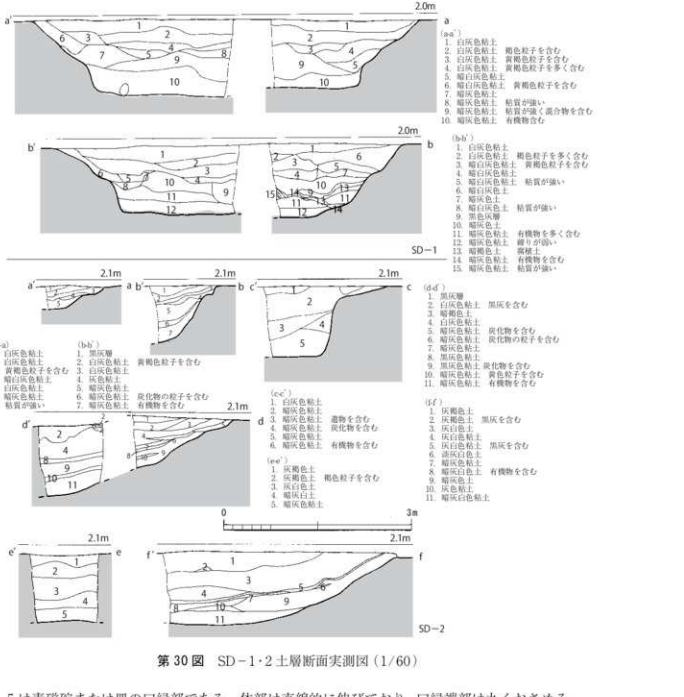
SD-1（図版９、第30図）

調査区南端に位置する溝である。東側は攪乱によって削平され、また西側は調査区外へと続いており、調査した範囲では長さは9ｍ、幅8ｍを測る。底面までの深さは110cmを測り、壁面は不明瞭な階段状に傾斜している。覆土は上層に白灰色土、中層及び下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版50、第31図）

１は土師器小皿である。底部は平坦で端部は稜をなす。底径5.2cm。

２～４は白磁である。２は無高台の皿である。底部がわずかに上げ底となり、端部は稜をなす。３は碗である。外面が高台から体部へとなだらかに続く器形となる。高台径5.6cm。４は低い高台の皿である。畳付は無釉となる。高台径6.8cm。

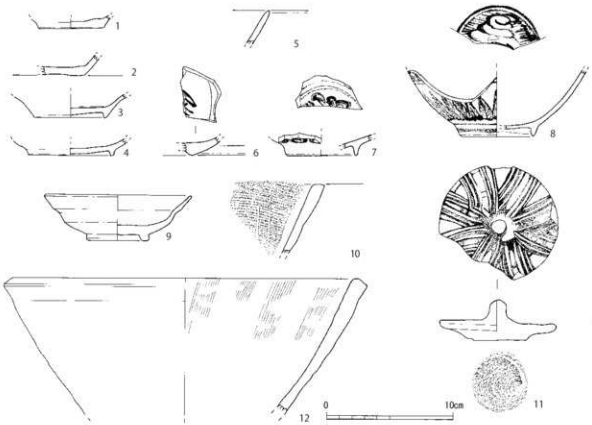


第 30 図　SD－1・2 土層断面実測図（1/60）

5 は青磁碗または皿の口縁部である。体部は直線的に伸びており、口縁端部は丸くおさめる。

6～8 は明染付磁器である。6 は内面見込に花文と圏線を描く皿である。高台部外面は体部へと直線的に続き、碁笥底となる。7 は内面見込みに草花文と圏線、外面に渦文らしき文様を描く。高台は薄く、やや高く伸びる。高台径 4.8cm。8 は内面見込に圏線と雲文、外面に圏線と芭蕉文を描く碗である。高台は端部が尖る。高台径 5.6cm。

9～11 は陶器である。9 は体部中位で屈曲する皿である。底部や高台部と比べて体部の器壁は薄い。釉色は黄褐色を呈す。口径 11.6cm、器高 3.7cm、高台径 5.0cm。10 は口縁部上端が面をなし、外端部が稜を有す擂鉢である。内面には 4 条の櫛目が見られる。11 は外面に黒褐色の釉で放射状のハケ目文様を描いた蓋である。12 は口縁端部がわずかに肥厚し、外端部が明瞭な稜を有した土師質擂鉢である。内面の擂目は器表の剥離が著しく、不明瞭である。口径 28.6cm。



第 31 図　SD－1 出土遺物実測図（1/3）

SD-2（図版 9・10、第 30 図）

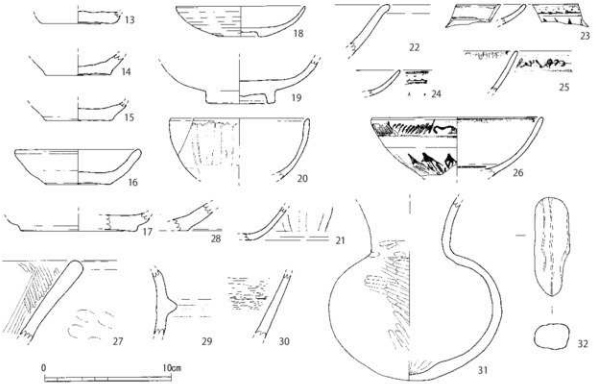
調査区中央付近に位置する溝である。SD－3 と重複しており、これに切られる。西側の肩部は調査区外にあるが、東側の肩部に限ると、南西－北東方向に 16m 伸びる溝と南東－北西方向に 8m 伸びる溝とが直角に接続し、L 字状を呈している。調査した範囲では、溝の幅は 6m、深さは 80cm を測り、壁面は C－C′ では急角度で傾斜し、他の部分では緩やかな傾斜となる。覆土は最上層に炭を含んだ黒灰色土、その下層に白灰色土、最下層には暗灰色土が堆積する。溝の底部付近からは図示したような完形に近い丸底壺や土師器坏、宝篋印塔片が出土した。

出土遺物（図版 51、第 32・33 図）

13～16 は土師器小皿である。13 は底部がわずかに上げ底となり、端部は丸味を帯びる。底径 4.6cm。14 は底端部が明瞭な稜をなす。底径 5.0cm。15 は底径 5.4cm。16 は小型の坏と称した方が良いかもしれない。器壁はやや厚い。口径 10.0cm、器高 2.7cm、底径 5.0cm。17 は土師器坏である。端部は明瞭な稜を有す。底径 9.0cm。

18～21 は青磁である。18 は外面の高台と体部との境がなく碁笥底となる。体部は内湾しながら大きく開く。口径 10.2cm、器高 2.5cm、高台径 3.2cm。19～21 は碗である。19 は内外面無文の碗である。畳付から内側が露胎となる。高台径 5.4cm。20 は幅の狭い線描の蓮弁を外面に配した碗である。口縁部は上方に立ち上がり、深い器形となる。口径 10.8cm。21 も外面に蓮弁を配した碗である。

22 は白磁皿である。体部は直線的に伸び、口縁端部は短く緩やかに外反する。端部は丸くお



第 32 図　SD－2 出土遺物実測図①（1/3）

さめる。23～26 は染付磁器である。23・24 は皿であろう。内面には圏線、外面には芭蕉文を描く。25・26 は碗である。外面には芭蕉文、波濤文を描く。26 は口径 13.4cm。

27 は瓦質焼成の擂鉢である。口縁部はわずかに肥厚し、端部は丸くおさめる。内面はハケ目後に擂目を施す。28 は須恵質焼成の鉢底部片である。端部は明瞭な稜を有す。29 は瓦質焼成の羽釜である。鍔部は短く、断面三角形を呈す。30 は土師質焼成の鍋である。内面には横ハケ目が見られる。

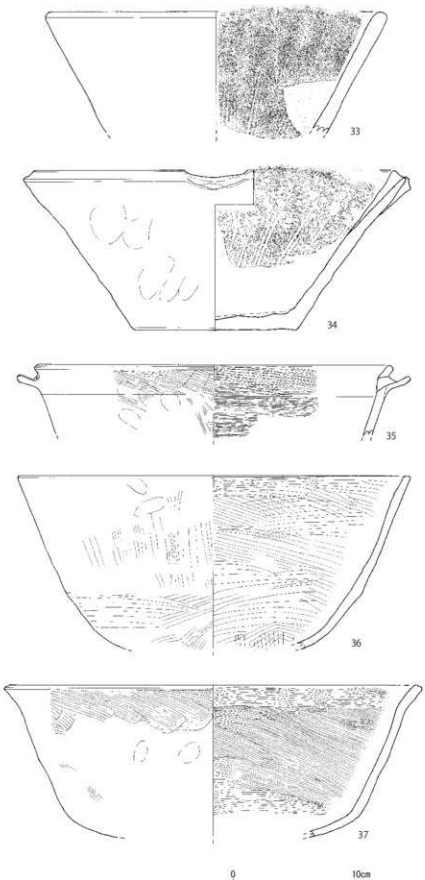
31 は古墳時代後期の土師器長頸壺である。胴部は球形で底部は尖底状をなす。頸部はよく締まり、内外面には稜をなさない。頸部は緩やかに開く。外面はヘラ磨き調整を行う。胴部径 12.6cm。32 は縦方向に凹線を入れた円礫である。長さ 7.8cm、幅 2.7cm、厚さ 2.0cm。

33・34 は瓦質焼成の擂鉢である。33 は体部が直線的に伸び、口縁端部は丸味を帯びる。擂目は 6 条。口径 27.0cm。34 は底部が平坦で端部は明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。口縁部は片口で、内外両端部には明瞭な稜を有す。内面の擂目は 7 条か。口径 30.0cm、器高 12.7cm、底径 12.8cm。35～37 は土師質焼成の鍋である。35 は耳部を口縁部下に二箇所貼付し、耳部上方には二つの穿孔を行う。調整は内外面ハケ目。口径 28.4cm。36 は体部が直線的に伸び、口縁部は素口縁で上端部が水平面をなす。内面は横ハケ目、外面は上方が縦ハケ目、下方が横ハケ目。口径 30.8cm。口縁端部は面をなす。内面横ハケ目、外面は口縁部付近のみ斜ハケ目が見られる。口径 33.0cm。

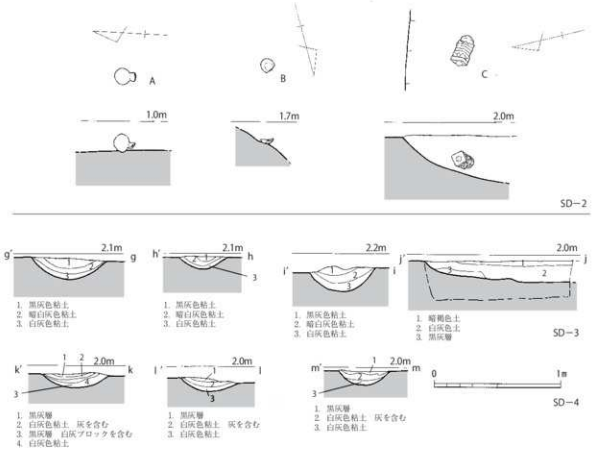
55 は凝灰岩製の宝篋印塔相輪である。長さ 27.1cm、幅 12.0cm、厚さ 11.9cm。

SD-3（図版 11、第 34 図）

調査区中央付近に位置する溝である。SD－2 と重複しており、これを切って営まれる。東西



第33図 SD－2出土遺物実測図②（1/3）



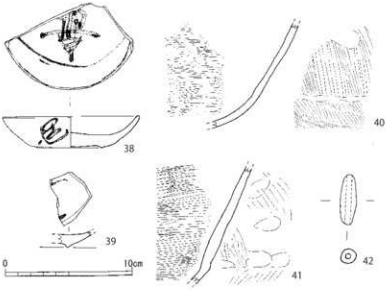
第 34 図　SD−2・3・4 土層断面実測図（1/30）

方向に直線的に5m伸びる溝があり、その西側は6mほどの広さで大きく広がって調査区外へと続いている。東側の直線的な部分で幅60cm、深さ20cm、壁の立ち上がりは緩やかで、断面は弧状を呈する。覆土は上層に黒灰色土、下層に白灰色土が堆積する。

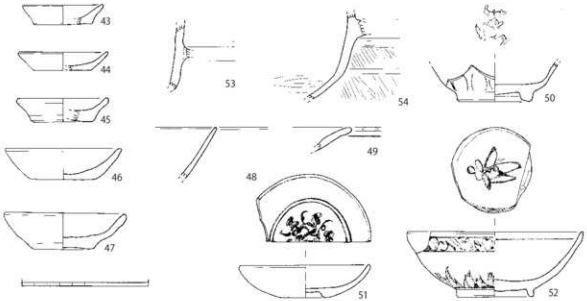
出土遺物（第35図）

38・39は明染付磁器皿である。38は内面に「寿」の文字と圏線を描く。底部は碁笥底となる。口径10.8cm、器高2.5cm、底径5.0cm。39も内面見込みに吉祥文字を描くようである。底部は碁笥底となる。

40・41は土師質焼成の鍋である。40は底部と体部の境が不明瞭に屈曲する。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目調整を行う。41は底部と体部の境に稜を有す。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後にナデ調整を行う。42は管状土錘である。長さ3.9cm、径1.2cm、孔径0.4cm。



第 35 図　SD−3 出土遺物実測図（1/3）



第 36 図　SD－4 出土遺物実測図（1/3）

SD-4（図版 11、第 34 図）

調査区中央付近に位置する溝で、南北方向に 17mほど直線的に伸びる。幅は 40cm、深さは 10cm を測り、壁の立ち上がりは緩やかで断面は弧状を呈する。覆土は上層に黒灰色土、下層に白灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 51・52、第 36 図）

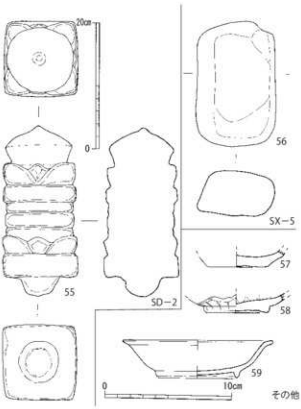
43～45 は土師器小皿である。いずれも底端部に明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。43 は口縁部の器壁が薄くなる。口径 6.4cm、器高 1.6cm、底径 4.4cm。44 は器壁が薄い。口径 7.2cm、器高 1.4cm、底径 4.6cm。45 は底部が上げ底状となり、体部中位の器壁がやや薄くなる。口径 7.2cm、器高 1.9cm、底径 4.6cm。46・47 は土師器坏である。46 は体部が直線的に開く。口径 9.0cm、器高 2.6cm、底径 4.8cm。47 は底部がわずかに上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。体部はわずかに内湾する。口径 9.2cm、器高 2.8cm、底径 4.6cm。

48～50 は青磁である。48 は無文の青磁碗である。体部は直線的に伸びる。49 は口縁端部が外反する皿である。口縁端部は押圧により花弁状を呈す。50 は内面見込みに花文、外面に蓮弁を施文する碗である。底部と体部の境は不明瞭に屈曲する。釉は高台部内面にまで施釉する。高台径 6.0cm。51・52 は明染付磁器である。51 は内面見込みに圏線と花文を描く皿である。底部は碁笥底となる。口径 10.4cm、器高 2.5cm、底径 3.4cm。52 は内面見込みに圏線と花文、外面に芭蕉文と波濤文を描く碗である。口径 13.8cm、器高 5.1cm、高台径 6.0cm。53・54 は土師質焼成の羽釜である。53 は内外面横ナデ調整を行う。54 は底部と体部の境目が不明瞭に屈曲する。内面は横ナデ調整で底部付近には先行する横ハケ目が見られる。外面は斜ハケ目調整を行う。

2）その他の出土遺物（図版 52、第 37 図）

56 は砂岩の円礫で、研磨痕は顕著ではないが、恐らく砥石として使用したものであろう。長さ 9.9cm、幅 6.3cm、厚さ 3.5cm。57 は土師器小皿である。底端部は稜を有す。底径 4.6cm。

遺構検出時出土。58は外面に蓮弁を配した青磁碗である。高台は低く不明瞭である。高台外面から内側にかけて露胎となる。高台径5.2cm。遺構検出時出土。59は白磁皿である。器壁は薄く、高台は尖った稜をなす。体部は直線的に開き、口縁部が外反する。口径12.0cm、器高3.0cm、高台径6.4cm。



第37図 石製品、その他の出土遺物実測図
(1/3・1/6)

3）小結

蒲船津西ノ内遺跡第2次調査では、主な遺構として溝4条を確認した。遺構の一部を検出しただけなので全容は判らないが、これらの溝のうちSD−1、SD−2は規模が大きく形状も整っておらず、人為的に掘削されたというよりむしろ自然流路等を想定した方が良いようにも思われる。あるいは居住区の外側を区画する区画溝の壁が崩壊して、このような形状になったのであろうか。SD−3についてはSD−2埋没後に形成されたものであろう。SD−4は現代の区割りとも方向が一致しており、区画を意図して掘削された溝として良いだろう。

出土遺物には一部に古墳時代の土器や近世陶器も含むが、大半は中世後期のものである。染付磁器は外面に芭蕉葉文を配し、高台が小さくて低く、口縁部には反りが見られない、いわゆる蓮子碗と呼ばれる碗と、碁笥底で内面に花や文字を描いた皿によって占められる。白磁皿は無高台と高台付きの両方があり、どちらも器壁が非常に薄い。高台付きの皿は高台径が広くて低平であり、体部は大きく開き、口縁部はさらに外反する器形となる。青磁には碁笥底の皿と無文の椀、幅の細い蓮弁を配した椀がある。日常雑器には素口縁の土師質、瓦質焼成擂鉢と、同じく素口縁で深みのある器形の鍋など、16世紀前半の比較的器形の揃った資料である。

出土遺物から遺跡の形成過程をみた場合、古墳時代の土器は混入品とみるのが妥当であろう。それ以外の遺物は、SD−1〜SD−4の各遺構から出土したものはほぼ16世紀前半に位置付けられ、この時期に遺跡の形成が始まったとみられる。近世の遺物はSD−1から少量しか出土していないことから、近世にいたるまで居住は継続されたものの、主な遺跡の時代としては概ね16世紀前半に限定して良いようである。

3　蒲船津西ノ内遺跡　第3次調査

蒲船津西ノ内遺跡第3次調査は、平成20年5月2日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、平成20年7月29日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西24m、南北84mを測り、南北に長い形状である。遺構面の標高は2.1m～2.3m。遺構は南端部を除いて調査区全体に及ぶ。南端部の東側には近世・近代墓が分布する。

検出した遺構は、土坑18基、溝9条、土壙墓2基である。出土遺物は中・近世の土師器、瓦器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、土製品、石製品、金属製品、銅銭の他、人骨も出土した。

1）土坑

SK-5（第39図）

調査区北東隅に位置する土坑である。東側が調査区外へと続いており、調査した範囲では長軸1.9m、短軸1.6mを測る。壁の立ち上がりは急傾斜であり、底面までの深さは1.3mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は上層に灰褐色土が厚く堆積し、中層には褐色土や灰色土が薄く堆積する。下層には暗灰色土が厚く堆積する。

出土遺物（第40図）

1は土師器小皿である。底端部は明瞭な稜をなし、体部は短く立ち上がる。2は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有し、体部下半は直線的に伸びる。口縁部付近はわずかに内湾し、口縁端部は薄く尖る。3は土師質焼成の鍋である。口縁端部が小さな玉縁状に肥厚し、外端部を強く横ナデし明瞭な稜を有す。

4は瓦器埦である。丸味の少ない器形で、内面には螺旋状、外面には疎らな横方向のヘラ磨きを行う。口径17.0cm。5・6は青磁碗である。5は口縁部が若干外反する器形で、内外面無文である。口径18.4cm。6は比較的器壁の薄い高台となる。高台径6.8cm。

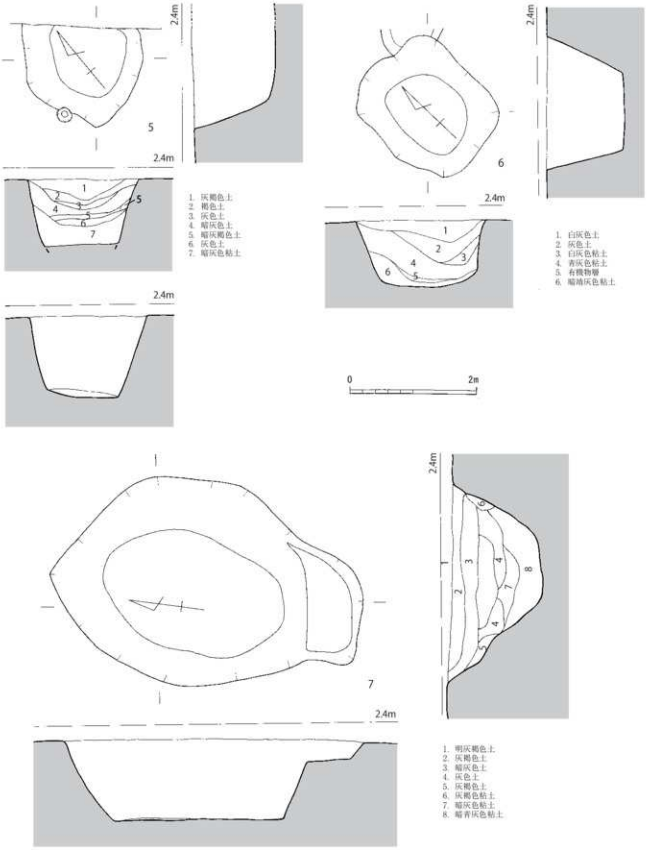
7は備前焼の擂鉢である。口縁部は断面三角形状に肥厚しており上方に尖る。8は土師質焼成の管状土錘である。長さ4.2cm、径1.0cm、孔径0.4cm。

SK-6（図版13、第39図）

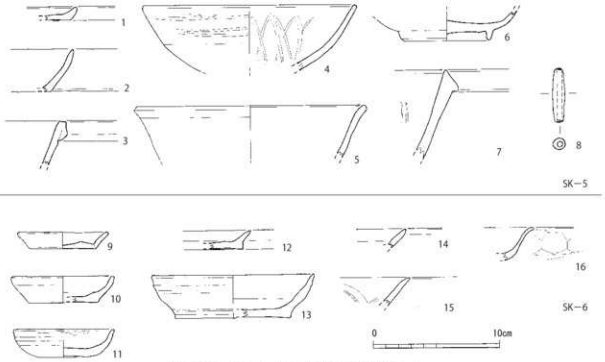
調査区北側にあり、SK－5から4mほど南側に位置する土坑である。比較的整った形状であり、長軸2.1m、短軸1.7mの隅丸長方形を呈す。底面は平坦で、深さは1.2mを測る。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は上層に白灰色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積しており、下層に近い第5層には木屑などの有機物が堆積する。

出土遺物（図版52、第40図）

9～12は土師器小皿である。9は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に立ち上がる。口径7.2cm、器高1.3cm、底径5.2cm。10は口縁部付近が内湾する。口径8.4cm、器高2.1cm、底径5.4cm。11は底部と体部の境目が丸く稜をなさず、丸味のある器形となる。口縁部内面に油煙が付着する。口径8.0cm、器高2.2cm、底径3.8cm。12は底端部の境が明瞭な稜を有し、体部



第39図　SK－5・6・7実測図（1/60）



第 40 図　SK－5・6 出土遺物実測図（1/3）

は外反しながら短く立ち上がる。口縁端部は薄く尖る。13 は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は上半がわずかに内湾する。口径 13.0cm、器高 3.4cm、底径 9.2cm。14・15 は青磁である。14 は小片であり確かなことは判らないが、小碗か。15 は内面に櫛描文様を施文する碗である。16 は型押し整形の陶器小鉢であろう。

SK−7（第 39 図）

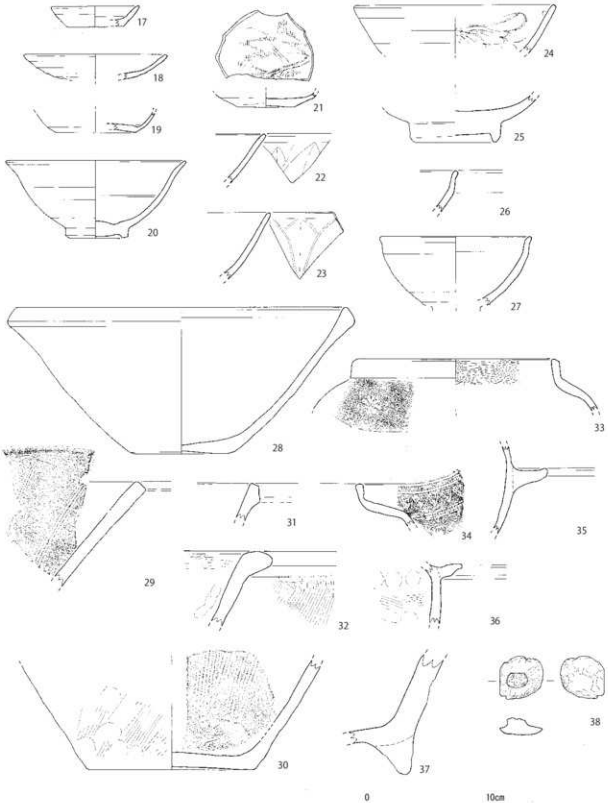
調査区北側にあり、SK－6 から 4m ほど西側に位置する土坑である。SD－13 と重複しており、これを切って営まれる。長軸 4.9m、短軸 3.9m を測り、南北に長い楕円形を呈す。土坑内は南側にテラス状の段を有しており、このテラスまでの深さは 30cm を測る。土坑底面ははほぼ水平であり、最深部の深さは 1.3m を測る。壁の立ち上がりは比較的急な角度である。覆土は上層に灰褐色土、中層に暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 52、第 41 図）

17 は土師器小皿である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口径 7.0cm、器高 1.7cm、底径 4.4cm。18～20 は白磁である。18 は底部を欠失するが、皿になるようである。外面には轆轤目が明瞭に見られる。口径 11.4cm。19 も皿であろう。底部は若干上げ底となり、体部はあまり開かずに立ち上がるようである。底径 6.4cm。20 は碗である。深みのある器形で、体部上半は緩やかに外反する。内面中位には一条の沈線を巡らせる。口径 14.2cm、器高 6.2cm、高台径 4.8cm。

21～25 は青磁である。21 は内面に櫛描文様を施文する皿である。底径 4.4cm。22・23 は外面に鎬蓮弁を配した碗である。24 は内面に草花文を片彫りする碗である。口径 16.0cm。25 は底部の器壁が非常に厚い碗である。高台径 6.4cm。26・27 は天目碗である。27 は口径 12.0cm。

28 は須恵質焼成の鉢である。底部と体部の境目は丸味を帯びて不明瞭となり、体部は直線的に伸びる。口縁部は断面三角形状に肥厚し、端部は丸くおさめられる。口径 27.4cm、器高



第41図 SK－7出土遺物実測図（1/3）

11.4cm、底径8.0cm。29・30は瓦質焼成の擂鉢である。29は素口縁となり、端部は面をなす。内面の擂目は5条確認できる。30は体部があまり開かない器形となる。外面はハケ目調整を行う。底径13.2cm。31・32は土師質焼成の鍋である。31は口縁外端部が三角形状に小さく肥厚する。32は口縁部が若干肥厚し、外側に短く折れたような形状となる。端部は丸味を帯びており、稜をなさない。

33から36は瓦質焼成の釜である。33は若干内傾する短い口縁部を有す。肩部に沈線と連続する印刻による文様を施文する。口径16.4cm。34は肩部に花文を印刻する。小片のため文様が連続するかどうかは判断できなかった。35は短く若干上向きとなる鍔部を有す。36は更に短い鍔部となる。37は瓦質焼成の火鉢脚部である。断面は三角形に近く、端部は丸味を有す。38は滑石製石鍋転用品で、当て具のような形状をしている。長さ3.5cm、幅3.4cm、厚さ1.4cm。

SK-26（図版13、第42図）

調査区北側にあり、SK－7から1m東側に位置する土坑である。長軸2.4m、短軸1.5mを測り、東西に長い隅丸長方形を呈す。底面はほぼ平坦だが、東側よりも西側がやや浅い。深さは最深部で1mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物（第43図）

39は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は大きく開く。40・41は土師質焼成の鍋である。40は体部の器壁が薄く、口縁部付近は若干厚くなる。口縁部は素口縁で端部は面をなす。内外面ハケ目調整を行う。41は口縁部が外側に短く伸びており、上端部には縄の押圧による縄目文を施文する。内外面ハケ目調整を行う。

SK-27（第42図）

調査区北側にあり、SK－26から1m南東に位置する土坑である。長軸4.4m、短軸1.6mを測り、東西に長い溝のような形状を呈す。底面は東側よりも西側の方が深くなっており、最深部で深さ30cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に黒灰色土、下層に黒灰色土と白灰色土が堆積する。

出土遺物（第43図）

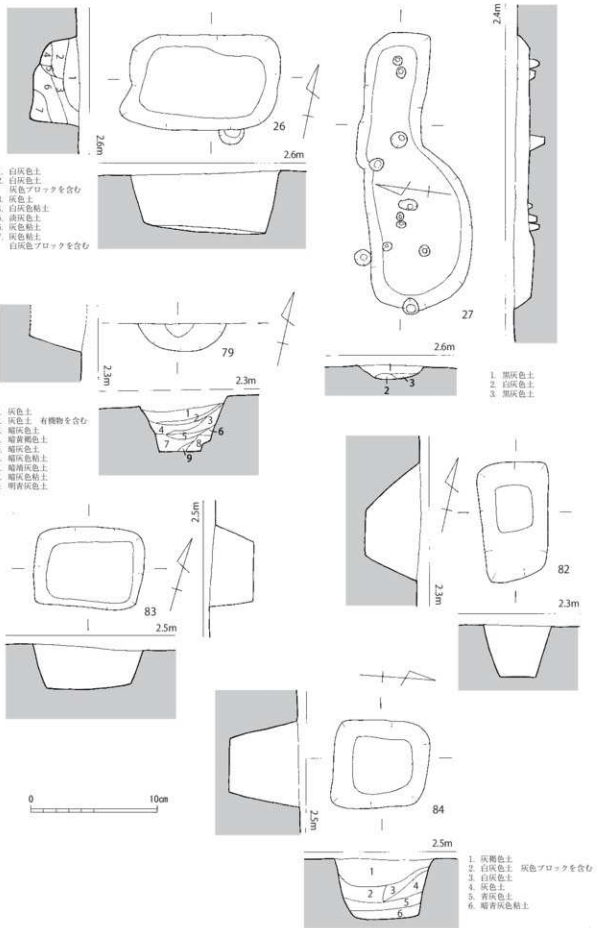
42は瓦器埦である。高台は小さく、断面三角形状を呈す。43は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。44は受け皿を有した陶器灯明皿である。口径5.8cm、受け部径8.6cm、底径4.0cm、器高3.6cm。

SK-79（図版13、第42図）

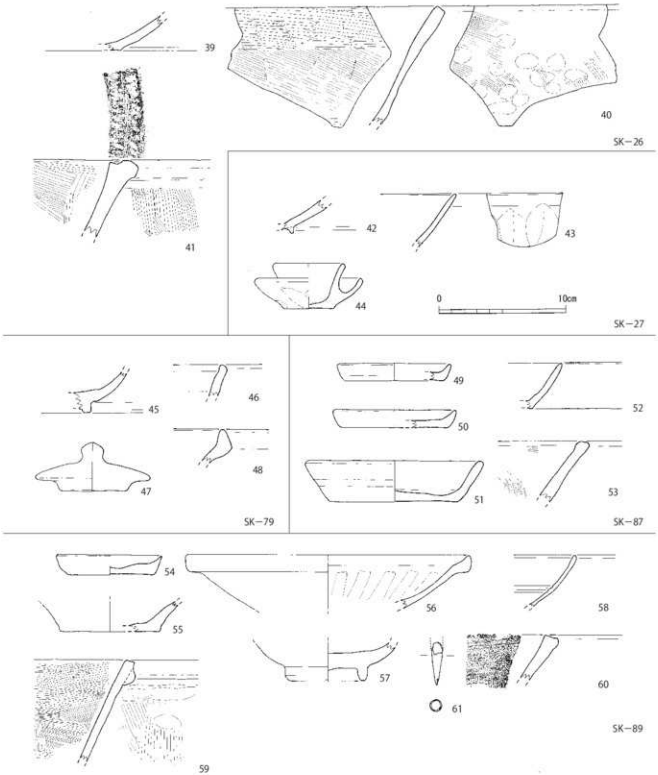
調査区中央付近に位置する土坑である。SD－80と重複しており、これを切って営まれる。また、東側が調査区外へと続いている。調査を行った範囲で、長軸1.3m、短軸0.4mを測る。深さは0.9mを測り、壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は上層に灰色土、中層に暗黄褐色土や暗灰色土、下層に暗灰色土や暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版53、第43図）

45は青磁碗の底部片である。高台畳付部分にも施有が行われる。46・47は陶器である。46



第 42 図　SK－26・27・79・82～84 実測図（1/60）



第43図 SK−26・27・79・87・89出土遺物実測図（1/3）

は鉢の口縁部片か。鉄釉を施釉する。47は土瓶の蓋である。受け部径9.0cm、器高3.8cm。48は須恵質焼成の鉢口縁部片である。口縁端部は断面三角形状に肥厚し、端部を上方につまみ出したような形状となる。

SK−82（第42図）

調査区中央付近にある土坑である。SK−79から2m南西側に位置する。SD−81と重複しており、これを切って営まれる。長軸1.9m、短軸1.1mを測り、南北に長い不整長方形を呈す。底面はほぼ水平面をなす。深さは0.8mを測り、壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。

SK-83（第42図）

調査区中央付近にあり、SK－82から2m西側に位置する土坑である。SK－84、SD－81と重複しており、これらを切って営まれる。長軸1.8m、短軸1.3mを測り、東西にやや長い長方形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは70cmを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

SK-84（第42図）

調査区中央付近にある土坑である。SK－83、SD－81と重複しており、SK－81よりも新しく、SK－83よりも古く位置付けられる。長軸1.5m、短軸1.3mの多少歪つな方形プランを呈している。底面はほぼ水平で、深さは1.1mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に白灰色土や灰色土、下層に青灰色土が堆積する。

SK-87（第44図）

調査区中央付近にあり、SK－84から4m南東に位置する土坑である。長軸2.0m、短軸1.3mを測り、南北に長い不整楕円形となる。底面は中央付近がわずかに深くなっており、深さは0.4mを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に灰色土、中層に黄灰色土、下層に黒灰色土が堆積する。

出土遺物（第43図）

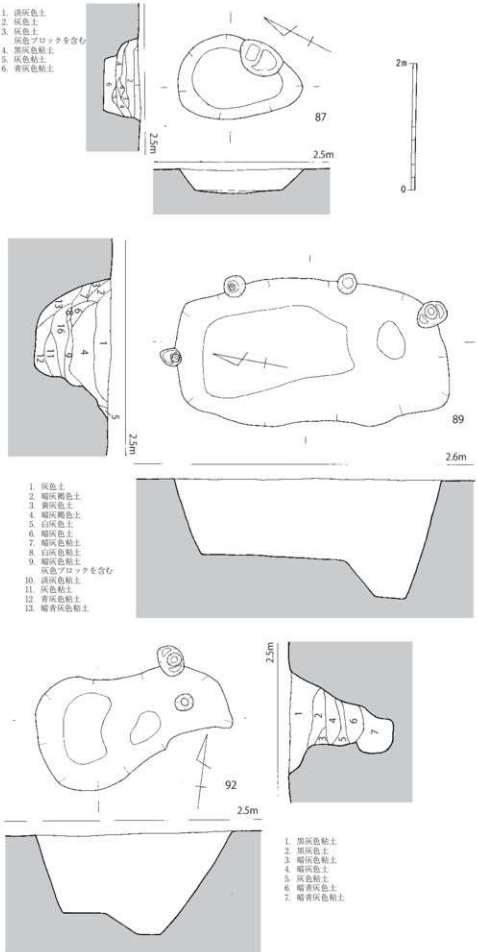
49・50は土師器小皿である。どちらも体部は短い。49は口径9.0cm、器高1.4cm、底径7.8cm。50は口径9.8cm、器高1.5cm、底径8.4cm。51・52は土師器坏である。51は口径14.0cm、器高3.3cm、底径10.2cm。52は底端部の稜が明瞭で、体部がわずかに内湾する。53は須恵質焼成の擂鉢である。口縁端部は内側に丸く肥厚し、端部は稜をなさない。

SK-89（第44図）

調査区中央付近にあり、SK－87から4m西側に位置する土坑である。SK－92と重複しており、これを切って営まれる。長軸4.3m、短軸2.3mを測り、南北に長い隅丸長方形を呈す。底面は南側がピット状に深くなっており、中央から北側にかけてはほぼ水平に伸びている。深さは北側で1.2m、南側で1.9mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版53、第43図）

54は土師器小皿である。体部は短く、口縁部は鋭く尖る。口径8.6cm、器高1.7cm、底径6.6cm。55は土師器坏である。底端部は稜を有し、体部は外反しながら伸びる。底径8.0cm。56は青磁盤である。体部は浅く、口縁部付近が大きく開く。口縁部は断面三角形状に肥厚し、端部は上方を向く。内面にはヘラによる放射状の施文が施される。口径22.6cm。57は青磁碗である。内底部の器壁は厚く、高台は畳付まで施釉される。高台径6.8cm。58は陶器碗である。器壁は非常に薄く、内面には二条の沈線が巡る。59は土師質焼成の鍋である。体部は直線的に伸び、口縁部は玉縁状に肥厚する。外端部を強く横ナデし、明瞭な稜を有す。60は須恵質焼成の擂鉢である。素口縁で内端部が明瞭な稜を有す。61は青銅製品である。先の尖った円錐状を呈す。



第 44 図　SK－87・89・92 実測図（1/60）

SK-92（図版14、第44図）

調査区中央付近にある土坑である。SK－89と重複しており、これに切られる。長軸3.1m、短軸1.8mを測り、東西に長い不整形を呈す。底面は中央付近が最も深く、西側にはテラス状の段を有している。深さは西側で1.2m、中央付近で1.6mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜であり、土層図を見る限り、かなり起伏に富んだ壁面形状となる。覆土は上層に黒灰色粘土、中層に暗灰色粘土、下層に暗青灰色粘土が堆積する。

出土遺物（図版53、第45図）

62は土師器小皿である。口径7.4cm、器高1.7cm、底径6.0cm。63～65は土師器坏である。63は底径6.4cm。64は底端部が外側に短く張り出したような形状である。体部は上半がわずかに内湾し、口縁端部は尖る。口径13.0cm、器高3.8cm、底径7.4cm。65は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に開く。口径13.4cm、器高3.8cm、底径8.0cm。66は土師質焼成の擂鉢である。体部はあまり開かずに伸びる。全体的に器壁は薄い。底径13.2cm。67～71は土師質焼成の鍋である。67は体部が直線的に伸び、口縁部は外側に肥厚する。口縁外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜を有している。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。68～70は口縁外端部が小さく肥厚する。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。71は内外面横ナデ調整を行う。72は瓦質焼成の釜である。鍔部は体部中位に巡らされ、水平に短く伸びる。口縁部は直立し、上端部は水平面をなす。肩部には穿孔が見られ、また印刻による装飾も施される。口径16.0cm、鍔部径31.8cm。

SK-94（第46図）

調査区中央付近にあり、SK－92の1m南側に位置する土坑である。SK－95と重複しており、これに切られる。長軸3m、短軸1.8mを測り、南北に長い不整長方形を呈す。底面ははぼ水平で、深さは0.8mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

出土遺物（第45図）

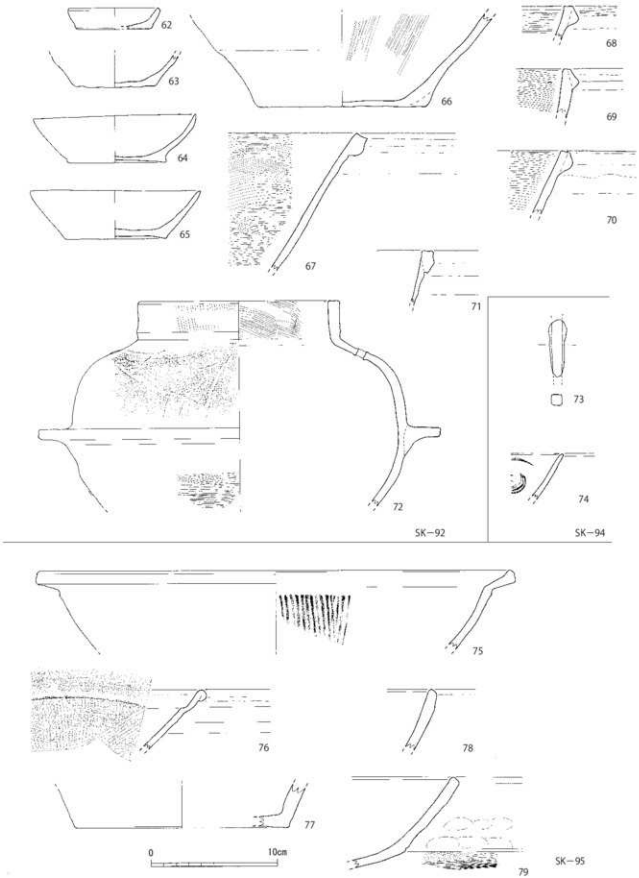
73は須恵質焼成の鉢である。74は内面に櫛描きの花文を描く青磁碗である。

SK-95（図版14、第46図）

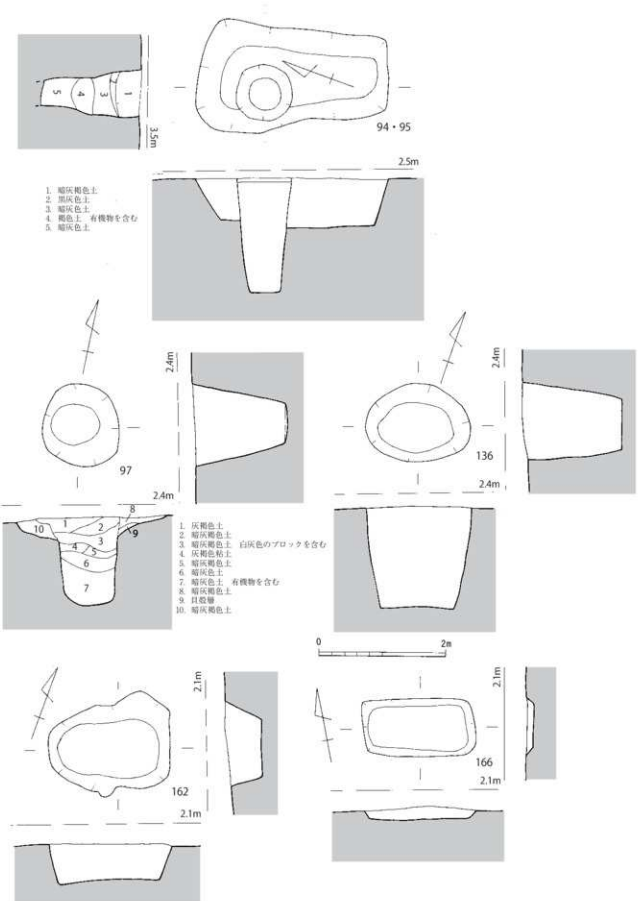
調査区中央付近にある土坑である。SK－94と重複しており、これを切って営まれる。直径90cm程の円形を呈す。壁の立ち上がりは垂直に近く、底面までの深さは1.8mを測る。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に暗灰色土や褐色有機物を含んだ土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版53、第45図）

75は鉄釉陶器盤である。口縁部は外折し、端部は不明瞭に上方に立ち上がる。内面には縦方向のハケ目が見られる。口径38.0cm。76は鉄釉陶器擂鉢である。器壁が薄く、口縁部は外側に折り曲げて丸く肥厚する。内面口縁部下には段を有している。77は陶器鉢の底部であろう。底径17.0cm。78・79は瓦質焼成の鍋である。78は口縁部が立ち上がり気味となり、端部は素口縁でおさめる。79は大きく開いた器形で、体部中位の外面には明瞭な段を有し、口縁部は素口縁となる。



第 45 図　SK－92・94・95 出土遺物実測図（1/3）



第 46 図　SK－94・95・97・136・162・166 実測図（1/60）

SK-97（図版14、第46図）

調査区西側にあり、SK－97から5m南側に位置する土坑である。SD－96と重複しており、これを切って営まれる。直径1.3mの円形プランを呈しており、底面までの深さは1.5mを測る。壁の立ち上がりは急な角度で傾斜する。覆土は上層に灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第47図）

80・81は土師器坏である。80は底径が小さく、体部は直線的に長く伸びる。口径12.8cm、器高4.0cm、底径7.4cm。81は口径14.0cm、器高3.5cm、底径10.8cm。82は白磁皿であろう。体部は内湾しながら大きく開く。外面には轆轤目が明瞭に見られる。器壁は薄い。83は外面に蓮弁を配した青磁碗である。84は土師質焼成の鍋である。口縁端部を外側に折り曲げて玉縁状に肥厚させる。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。85は瓦質焼成の釜である。鍔部は中位よりやや下がった位置に巡らされ、口縁部は短く若干開いて立ち上がる。端部は面をなす。肩部には印刻を行っている。口径24.0cm、鍔部径35.8cm。

SK-136（第46図）

調査区西側にあり、SK－97から7m東側に位置する土坑である。長軸1.6m、短軸1.2mを測り、東西に長い楕円形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは1.6mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

出土遺物（図版53、第47図）

86～88は土師器小皿である。86は底端部が明瞭な稜を有す。底径5.6cm。87は体部が短く立ち上がり、口縁部は器壁が薄くなる。口径10.8cm、器高1.6cm、底径8.8cm。88は底端部が明瞭な稜を有し、体部は大きく開くようである。底径6.4cm。89は土師器で、器高の高い小型の坏状を呈す。口径9.6cm、器高4.1cm、底径6.6cm。90は内面見込みに草花文を施文する青磁碗である。口径17.8cm、器高6.6cm、高台径6.4cm。91から94は土師質焼成の鍋である。91～93は口縁部外面が垂下した玉縁状に肥厚する。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。94は小片で傾き不明。素口縁で内端部が稜をなす。内面斜ハケ目、外面ナデ調整を行う。95は瓦質火鉢である。脚部は高く、端部は丸味を有している。底径32.6cm。

SK-162（第46図）

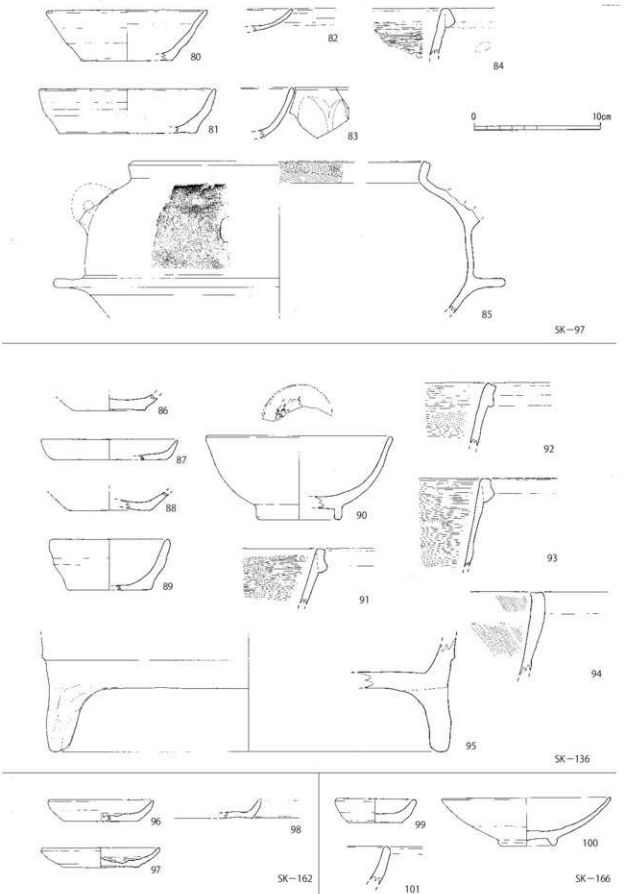
調査区西側にあり、SK－136から4m北側に位置する土坑である。長軸1.9m、短軸1.5mを測り、東西に長い不整楕円形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは0.5mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

出土遺物（第47図）

96～98は土師器小皿である。96は底端部の稜が不明瞭で、体部は若干内湾しながら開く。口径8.4cm、器高2.1cm、底径6.0cm。97は体部が大きく開く。口径9.4cm、器高1.6cm、底径6.0cm。98は底端部の稜が明瞭で、体部はあまり開かずに立ち上がる。

SK-166（第46図）

調査区西側にあり、SK－94から1m北東に位置する土坑である。SD－90と重複しており、



第47図 SK−97・136・162・166出土遺物実測図（1/3）

これを切って営まれる。長軸1.8m、短軸0.9mを測り、東西に長い長方形プランとなる。底面はほぼ水平で、深さは20cmに満たない。

出土遺物（図版54、第47図）

99は土師器小皿である。全体的に器壁が厚く、体部は若干内湾しながら開く。口径6.4cm、器高2.1cm、底径4.4cm。100は陶器碗である。体部は大きく開いて浅い器形となる。内面にのみ緑色の釉を施釉する。口径13.4cm、器高4.0cm、高台径4.4cm。101は須恵質焼成の鉢であろう。口縁部は素口縁で端部は丸味を有す。

2）溝

SD-13（第48図）

調査区北側に位置する溝である。SK－7と重複しており、これに切られる。SK－7の北側に4mほど北東－南西方向に伸び、南側には2m程南北方向伸びており、全体の形状としてはゆるやかに屈曲しているように見える。幅は1m、深さは50cmを測り、底面は稜をなさずに断面半円形をなす。覆土は灰色土の単一層である。

出土遺物（第50図）

102は滑石製の小型鉢である。底部は平坦で、体部は若干丸味を有しながら上方に立ち上がる。口径6.0cm、器高2.0cm、底径5.0cm。

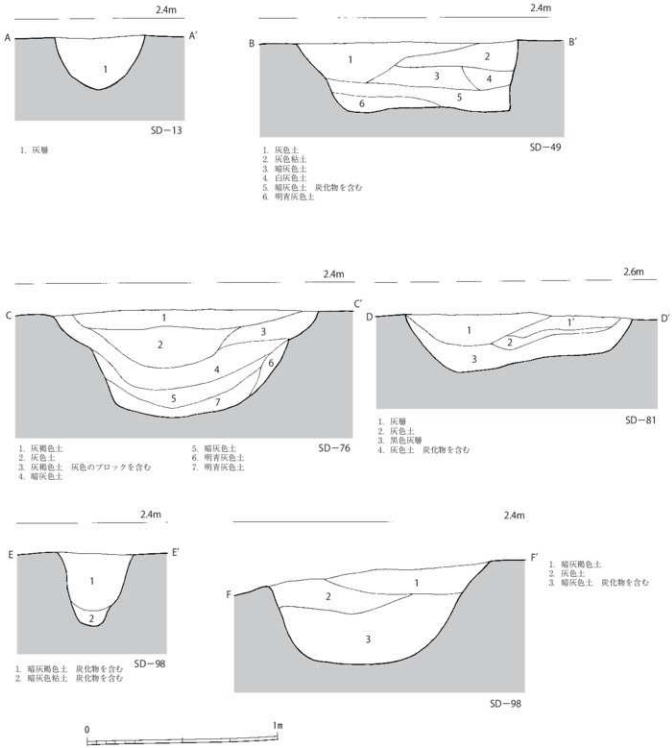
SD-48（第49図）

調査区中央付近に位置する溝である。SD－49と重複しており、これに切られる。東側が調査区外へと伸びているが、調査した範囲内では長さ7.8m、幅3.3m、深さ0.85mを測る。底面は水平な面を形成し、壁との境は稜をなさず緩やかに湾曲している。壁の立ち上がりは緩やかで、不明瞭な階段状に傾斜している。覆土は上層に灰褐色土と白灰色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

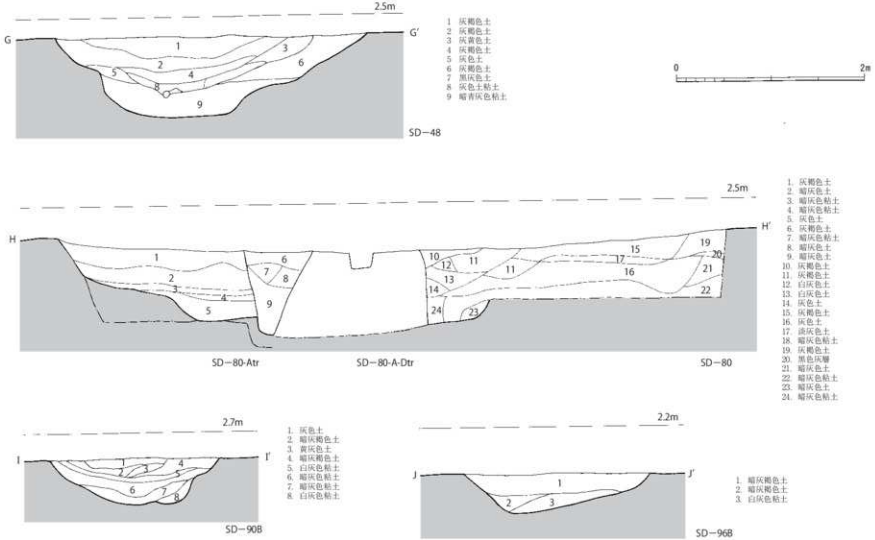
出土遺物（第50図）

103～111は土師器小皿である。103は底端部の稜が明瞭で、口縁部付近が内湾する。口径7.6cm、器高1.8cm、底径5.2cm。104･105は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に伸びる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。104は口径7.6cm、器高1.5cm、底径6.6cm。105は口径7.8cm、器高1.8cm、底径6.6cm。106は体部が丸味を有して開く。口径9.0cm、器高2.0cm、底径6.0cm。107は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に伸びており、口縁部は尖り気味に仕上げる。口径8.6cm、器高1.8cm、底径7.0cm。108は底端部が明瞭な稜をなさず、体部は丸味を帯びながら開く。口径9.0cm、器高1.7cm、底径6.0cm。109･110は体部が外反気味に開く。109は口径10.4cm、器高1.4cm、底径8.0cm。110は口径10.6cm、器高1.5cm、底径8.8cm。111は底径7.8cm。

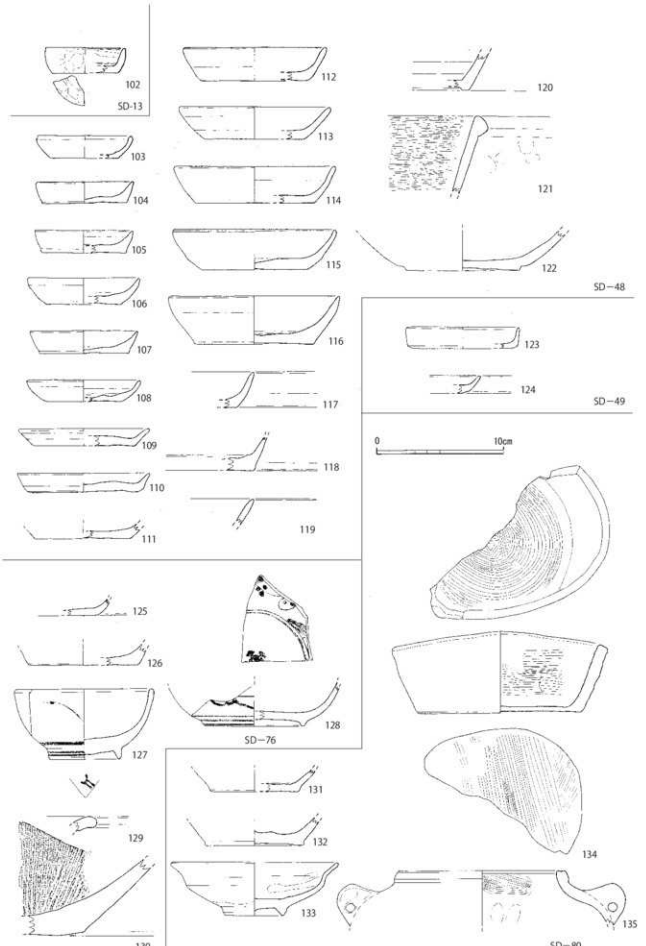
112～118は土師器坏である。112は底端部の稜が不明瞭で体部は直線的に伸びる。口径11.2cm、器高2.5cm、底径8.4cm。113は体部が直線的に開く。口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.0cm。114は体部が若干内湾気味に開く。口径12.8cm、器高3.0cm、底径9.4cm。115は口径13.0cm、器高3.0cm、底径8.4cm。116は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近は若干内湾する。口縁端部は尖り気味に仕上げる。口径13.6cm、器高3.9cm、



第 48 図　SD－13・49・76・81・98 土層断面実測図（1/20）



第 49 図　SD－48・80・90・96 土層断面実測図（1/40）



第 50 図　SD－13・48・49・76・80 出土遺物実測図（1/3）

底径 9.4cm。117 は底端部の稜が明瞭で、体部はあまり開かずに立ち上がる。118 は体部の器壁が薄く、あまり開かずに立ち上がる。

119 は青磁碗の口縁部片である。120 は陶器壺の底部か。121 は土師質焼成の鍋である。口縁部外面は玉縁状に肥厚し、内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。122 は鍋の底部か。底部は平坦で、体部は若干内湾しながら大きく開く。底径 9.0cm。

SD-49（第 48 図）

調査区北側に位置する溝である。SD－76 と重複しており、これに切られる。南北方向に長く伸びており、長さ 1.3m、幅 0.8m、深さ 35cm を測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰色土及び白灰色土、最下層には明青灰色土が堆積する。

出土遺物（第 50 図）

123・124 は土師器小皿である。123 は体部が垂直に短く伸びる。口径 9.0cm、器高 1.7cm、底径 8.0cm。124 は底端部の稜が不明瞭で、体部は大きく開き短く伸びる。

SD-76（第 48 図）

調査区北側に位置する溝である。SD－49 と重複しており、これを切って営まれる。東西方向に長く伸びており、長さ 5.4m、幅 1.4m、深さ 55cm を測る。底面は稜をなさず緩やかに湾曲しており、中央付近が最も深くなる。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積し、最下層には明青灰色土が薄く堆積する。

出土遺物（図版 54、第 50 図）

125 は土師器小皿である。底端部の稜は不明瞭で、体部はあまり開かずに立ち上がるようである。126 は土師器坏である。やはりあまり開かない器形となる。底径 8.4cm。127・128 は染付磁器である。127 は外面に圏線と草文を描く小碗である。外面見込みにも文様が見られる。口径 11.0cm、器高 5.4cm、高台径 5.6cm。128 は深みのある器形の皿である。内外面に草花文と圏線を描き、内面見込みには五弁花文を描く。高台径 7.6cm。

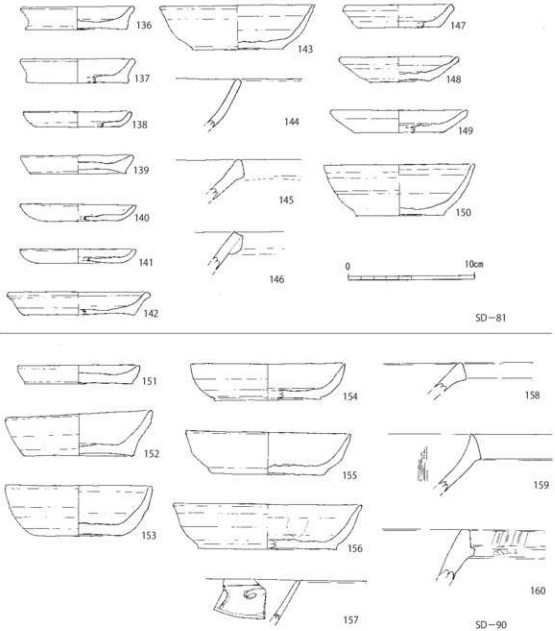
SD-80（第 49 図）

調査区中央付近に位置する溝である。SK－79、ST－78 と重複しており、これらに切られる。また図示してはいないが、溝の中央を近代頃の溝が主軸を揃えて掘削されている。東西両端が調査区外へと伸びており、調査した範囲内では長さ 9m、幅 4.5m、深さ 70cm を測る。底面は水平面を形成しており、壁との境は不明瞭である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は上層に灰褐色土、中層に暗灰色土、下層に灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 54、第 50 図）

131・132 は土師器坏である。どちらも底端部の稜が明瞭である。131 は底径 7.0cm。132 は底径 7.6cm。133 は陶器皿である。口縁部は反転して外側に外反する。口径 13.2cm、器高 4.3cm、高台径 4.8cm。

134 は瓦質焼成の鉢で、上から見ると円ではなく楕円形を呈す。内外面ハケ目調整を行う。口径 15.0～17.0cm、器高 6.5cm。135 は瓦質焼成の釜である。口縁部と肩部の境は不明瞭で、



第51図　SD－81・90出土遺物実測図（1/3）

口縁部は短く内傾して伸びる。端部は面をなす。肩部には半環状の把手が付く。口径13.2cm。

SD-81（第48図）

調査区中央付近に位置する溝である。SK－82～84と重複しており、これらすべてに切られる。また東側は調査区外へと伸びている。東西方向に長く伸びており、調査した範囲内では長さ6.6m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。底面は稜をなさず緩やかに湾曲しており、土層図を作成した箇所では南側がやや深くなっている。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に灰色土、中層に黒灰色土、下層に炭を含んだ灰色土が堆積する。

出土遺物（図版54、第51図）

136～146はBトレンチ出土である。136～142は土師器小皿である。136・137・139・142は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に短く開く。口縁端部は丸味を有す。138～141は底端部

が丸く稜をもたず、体部は短く立ち上がる。総じて器壁は薄い。136は口径9.0cm、器高1.8cm、底径8.2cm。137は口径9.2cm、器高2.0cm、底径8.2cm。138は口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.6cm。139は口径9.2cm、器高1.5cm、底径7.6cm。140は口径9.2cm、器高1.3cm、底径6.0cm。141は口径9.2cm、器高1.1cm、底径6.6cm。142は口径11.2cm、器高1.8cm、底径8.8cm。143は土師器坏である。底端部の稜は明瞭で、体部は若干内湾しながら開く。口径12.2cm、器高3.5cm、底径7.2cm。144は瓦器埦である。風化が進み調整不明。145は須恵質焼成の鉢である。口縁部は玉縁状に仕上げる。146は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状に外側が肥厚し、上端部は内外面とも明瞭な稜を有す。

147～150はCトレンチ出土である。147～149は土師器小皿である。147は体部が短く開き、端部は面をなす。口径8.8cm、器高1.7cm、底径6.4cm。148・149は体部が大きく開く。148は口径9.4cm、器高2.1cm、底径4.8cm。149は口径11.0cm、器高1.7cm、底径7.0cm。150は土師器坏である。体部はあまり開かず長めに伸びる。口径12.0cm、器高4.0cm、底径7.0cm。

SD-90（第49図）

調査区中央付近に位置する溝である。SK－166と重複しており、これに切られる。東側が調査区外へと伸びており、調査した範囲内では長さ7.4m、幅1.8m、深さ0.5mを測る。溝の底面は面をなさず、緩やかな弧を描いており、壁の立ち上がりも緩やかである。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土や白灰色土がそれぞれ薄く堆積する。

出土遺物（図版54、第51図）

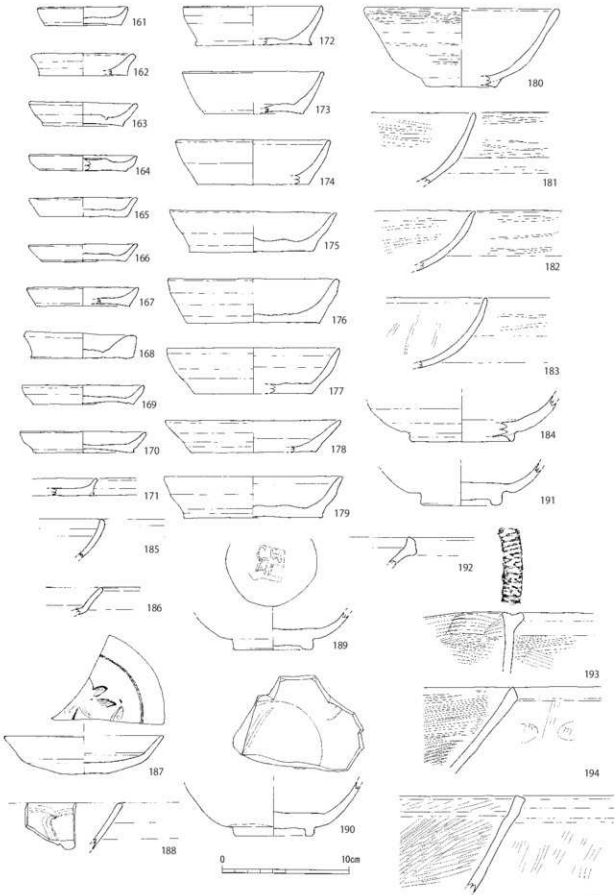
151は土師器小皿である。体部は短く、口縁端部は丸くおさめる。口径9.6cm、器高1.5cm、底径8.6cm。152～156は土師器坏である。152は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に伸びる。口径11.6cm、器高3.5cm、底径8.6cm。153は底端部の稜が不明瞭で、体部はあまり開かず長めに伸びる。口径11.6cm、器高4.0cm、底径7.0cm。154は口縁端部が尖り気味に仕上げられる。口径12.2cm、器高2.8cm、底径8.6cm。155は口径13.2cm、器高3.3cm、底径8.8cm。156は底端部が明瞭な稜を有す。口径14.8cm、器高3.5cm、底径11.2cm。157は内面に半肉彫りの文様を施文する青磁碗の口縁部である。158は須恵質焼成の鉢である。口縁部は若干肥厚し、端部は明瞭な稜を有す。159は備前焼の擂鉢である。口縁部上端および外端部は明瞭な稜をなす。160は滑石製石鍋の口縁部片である。上端は水平面をなし、外面口縁部下に小さな鍔部を有す。

SD-96（第49図）

調査区西側に位置する溝である。SK－97、SD－98と重複しており、これらに切られる。南北に長く伸びており、長さ9.6m、幅2.0m、深さ0.4mを測る。底面は緩やかに湾曲しており、壁との境目は不明瞭である。壁の立ち上がりは緩やかで、西側に比べて東側の方が急な傾斜となる。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に白灰色土が堆積する。

出土遺物（図版54・55、第52図）

161～171は土師器小皿である。161は底端部の稜が明瞭で、体部は若干内湾気味に立ち上がる。口径7.2cm、器高1.6cm、底径6.2cm。162は体部が外反気味に立ち上がる。口径8.4cm、器高1.8cm、底径7.0cm。163は内底部に貫通しない穿孔がある。口径8.4cm、器高2.0cm、底



第 52 図　SD－96 出土遺物実測図（1/3）

径6.6cm。164は体部の立ち上がりが短い。口径4.3cm、器高1.2cm、底径6.8cm。165～167は体部が直線的に立ち上がる。165は口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.8cm。166は口径8.6cm、器高1.4cm、底径6.4cm。167は口径9.0cm、器高1.5cm、底径7.4cm。168は体部の器壁が非常に厚く、体部は外反気味に立ち上がる。口径9.4cm、器高2.1cm、底径8.2cm。169・170は底部の器壁が薄い。169は口径9.6cm、器高1.5cm、底径8.0cm。170は口径10.0cm、器高1.7cm、底径8.0cm。171は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に短く立ち上がる。

172～179は土師器坏である。172は底端部が外側に張り出しており、体部は上半のみ内湾する。口径11.0cm、器高3.1cm、底径9.2cm。173・174は体部がわずかに内湾する。173は口径11.2cm、器高3.3cm、底径7.8cm。174は口径12.2cm、器高3.5cm、底径8.8cm。175は体部が外反気味に立ち上がる。口径13.2cm、器高3.4cm、底径10.2cm。176・177は体部上半のみ内湾する。176は口径13.6cm、器高3.5cm、底径10.6cm。177は口径13.8cm、器高3.6cm、底径9.2cm。178は体部が外反気味に大きく開く。口径14.0cm、器高2.5cm、底径9.8cm。179は体部中位に不明瞭な稜を有す。口径14.2cm、器高3.1cm、底径11.0cm。

180～184は瓦器埦である。180は体部の丸味が少ない器形となる。断面三角形で低平な高台を有し、全体的に器壁が厚い。外面には横方向のヘラ磨きが確認できる。口径15.4cm、器高6.2cm、高台径5.6cm。181・182は内外面に横方向のヘラ磨きが確認できる。183は内面に斜方向、外面に横方向のヘラ磨きが見える。体部は他と比べて若干丸味を有している。184は低くて小さな高台を有し、体部の器壁は厚い。高台径8.0cm。

185は白磁碗の口縁部である。素口縁で端部は丸く、全体的に器壁が薄い。186～191は青磁である。186・187は体部中位から反転して口縁部が外反気味に開く皿である。187は内面に圏線と花文を細く片彫りする。口径12.6cm、器高3.0cm、底径3.4cm。188～191は碗である。188は内面にヘラによる区画線を描く。189は内面見込みに印刻を行う。高台径6.4cm。190は内面に片彫りによる文様を描く。高台径6.0cm。191は無文となるようである。高台径8.0cm。

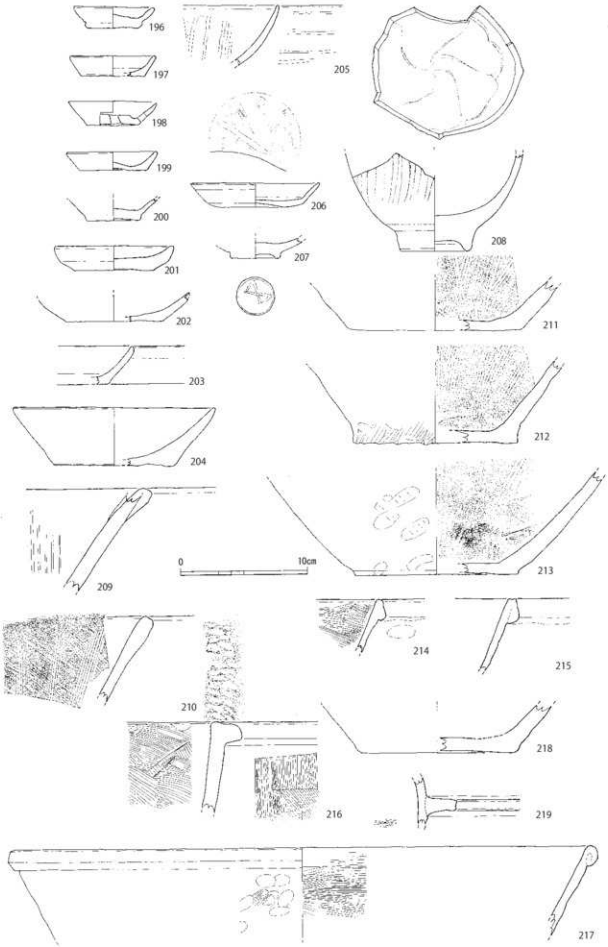
192は須恵質焼成の鉢である。口縁部は外反し、端部は上方に立ち上がる。器壁は体部に比べて口縁部が肥厚する。193は土師質焼成の鍋である。体部は直立し、口縁部は外側に短く伸びる。上端には縄の押圧による施文が行われる。内外面横ハケ目調整を行う。194・195は瓦質焼成の鍋である。体部は直線的に開き、口縁部は素口縁で端部は面をなす。内外面ハケ目調整で、外面はハケ目後にナデを行う。

SD-98（第48図）

調査区南側に位置する溝である。SD－96と重複しており、これを切って営まれる。2条の溝が東西に伸びており、両者をSD－98として調査を実施した。便宜上、報告ではSD－98北側溝、SD－98南側溝と呼称する。

SD－98北側溝は長さ4.8m、幅0.4m、深さ0.4mを測り、底面は稜をなさずに湾曲している。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

SD－98南側溝は長さ6.7m、幅は最大で1.2m、深さ0.5mを測る。底面の角は丸味を帯びるが、底面自体は水平な面を形成する。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。



第 53 図　SD－98 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版 55・56、第 53 図）

196～201 は土師器小皿である。196 は底部の器壁が厚く、体部は薄くなる。口径 6.2cm、器高 1.8cm、底径 4.4cm。197 は全体的に器壁が薄い。口径 6.8cm、器高 1.6cm、底径 5.0cm。198 は体部と底部にそれぞれ一箇所ずつ穿孔を行う。口径 7.0cm、器高 2.1cm、底径 4.0cm。199 は底部中央がヘソ状に内側に窪んでいる。口径 7.2cm、器高 1.6cm、底径 5.2cm。200 は底部に対して体部の器壁が薄くなる。底径 4.0cm。201 は器壁が非常に厚い。口径 5.4cm、器高 2.0cm、底径 6.4cm。202～204 は土師器坏である。202 は底端部の稜が明瞭で体部は大きく開く。底径 7.6cm。203 は体部が直線的に開く。204 は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に開き、底部に対して体部の器壁が厚くなる。口径 16.0cm、器高 4.7cm、底径 5.4cm。205 は瓦器埦である。体部はあまり開かずに立ち上がっており、深い器形となるようである。内面には縦方向、外面には横方向のヘラ磨きが見える。

206～208 は青磁である。206 は内面見込みに櫛とヘラによる施文を行う皿である。口径 10.0cm、器高 2.0cm、底径 5.6cm。207 は小碗の底部である。高台内に墨書による文様を描く。高台径 4.0cm。208 は内外面に細い片彫り施文を行う碗である。あまり開かず深みのある器形となる。体部に比べて高台の器壁が厚い。高台径 5.4cm。

209～213 は擂鉢である。209 は土師質焼成。口縁部は片口となるようである。口縁端部は素口縁で、不明瞭な面をなす。調整は内外面ナデによる。210～213 は瓦質焼成である。210 は体部と比べて口縁部の器壁がわずかに厚くなり、端部は不明瞭な面をなす。内面は斜ハケ目後に擂目を入れる。外面はナデ調整を行う。211～213 は底部片である。211 は底径 13.6cm。212 は底端部に明瞭な稜を有す。底径 13.2cm。213 は上記よりも擂目の幅が広い。底径 12.8cm。

214～217 は土師質焼成の鍋である。214・215 は口縁部が断面三角形状に肥厚する。214 は内面横ハケ目、215 は横ナデ調整を行う。216 は体部が直立気味に立ち上がり、口縁端部が外側に短く伸びる。上端には縄の押圧による施文を行っている。内外面ともにハケ目調整を行っている。217 は口縁部が丸く玉縁状に肥厚する。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。口径 32.0cm。218 は瓦質焼成の鍋の底部である。底径 12.0cm。219 は瓦質焼成の釜の鍔部である。鍔は短く水平方向に伸びる。端部は強い横ナデにより中央部分が若干凹む。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

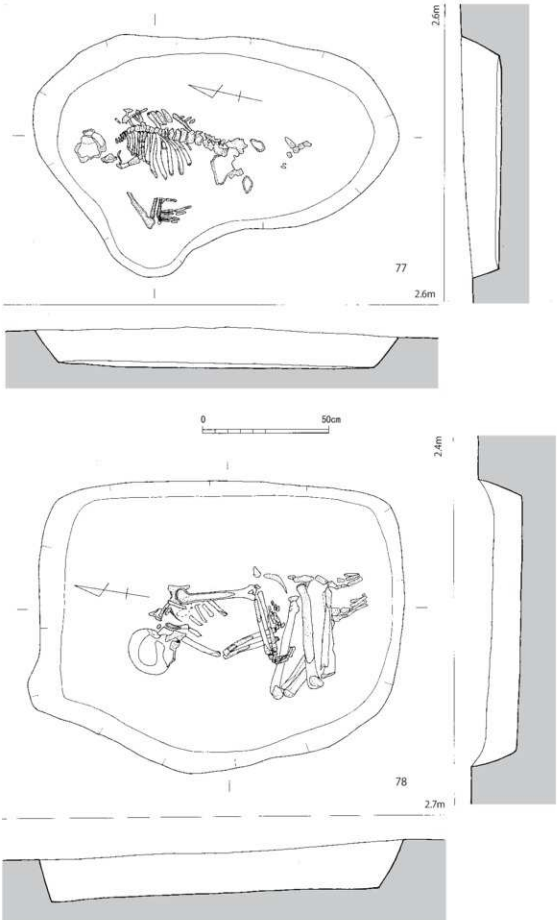
3）土壙墓

ST-77（図版 15、第 54 図）

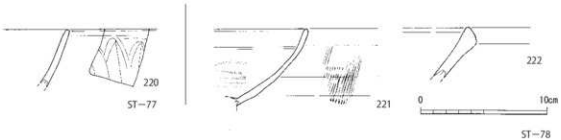
調査区北側に位置する。長軸 145cm、短軸 95cm を測り、南北に長い楕円形状を呈す。床面は水平に近く、深さは 10～15cm を測る。内部には頭位を北にして顔面を西に向けた人骨を 1 体検出した。遺存状態はあまり良くないが、手足を折り曲げた側臥屈葬の状態であったことが判る。手部は強く内側には折り曲げられていなかったらしく、墓壙の形状にあわせて体からやや離れた位置で検出された。

出土遺物（第 55 図）

220 は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。覆土中出土。



第 54 図　ST－77・78 実測図（1/15）



第 55 図　ST－77・78 出土遺物実測図（1/3）

ST−78（図版 15、第 54 図）

調査区中央付近にあり、ST−77 から 6m南側に位置する。SD−80 と重複しており、これを切って営まれる。長軸 145cm、短軸 115cmを測り、南北にやや長い不整方形プランとなる。深さは 10～20cmを測る。内部には頭位を北にして顔面を西に向けた人骨を 1 体検出した。手足を折り曲げた側臥屈葬の状態で、腕は腹部で抱えるように交差しており、脚部は強く折れ曲がっている。

出土遺物（第 55 図）

221 は内外面に櫛描文様を施文する青磁碗である。222 は須恵質の鉢で、口縁部が若干肥厚し端部は上方を向く。どちらも覆土中出土。

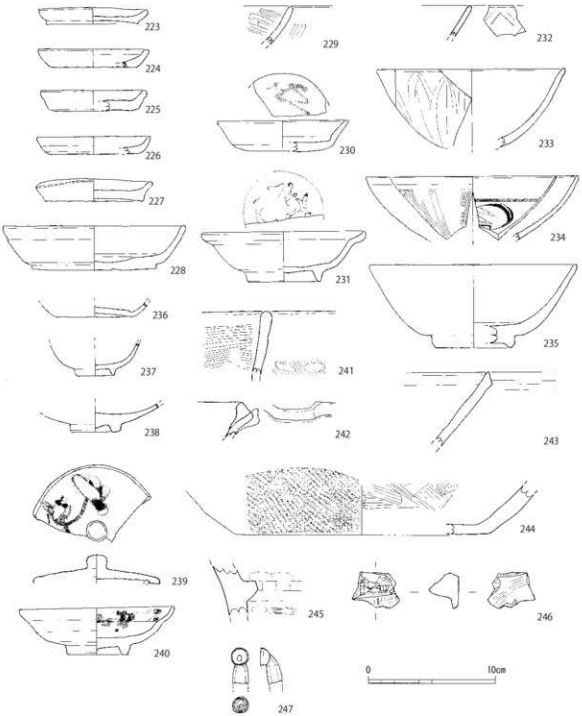
4）その他の出土遺物（図版 56、第 56 図）

ここで取り上げる遺物については、図示できる物について説明をする。遺構については、性格等が不明である。

223～227 は土師器小皿である。223 は底端部が外側に短く張り出しており、明瞭な稜をなす。体部の立ち上がりは短い。口径 8.6cm、器高 1.3cm、底径 7.4cm。224 は口径 8.8cm、器高 1.4cm、底径 6.8cm。225 は口径 8.4cm、器高 1.6cm、底径 6.2cm。北側溝付近出土。226 は底端部が丸味を帯びる。口径 9.0cm、器高 1.5cm、底径 7.0cm。227 は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に短く伸び、器形に歪みが著しい。口径 9.2cm、器高 1.8cm、底径 7.6cm。228 は土師器坏である。底端部は外側に小さく張り出して稜をなし、体部はわずかに内湾する。口径 14.4cm、器高 3.5cm、底径 10.0cm。

229 は内外面にヘラ磨きが残る瓦器埦である。230～235 は青磁である。230 は内面見込みに櫛描き文様を施文する皿である。口径 10.4cm、器高 2.4cm、底径 5.4cm。遺構検出時に出土。231 は内面見込みに双魚を印刻する皿である。口縁部は緩やかに屈曲して外側に開き、端部は上方に短く伸びる。口径 13.0cm、器高 4.0cm、高台径 5.6cm。遺構検出時に出土。232・233 は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。232・233 は口径 15.0cm。遺構検出時に出土。234 は櫛とヘラで内外面に文様を描く碗である。口径 16.8cm。北側溝付近出土。235 は無文の碗である。口径 16.4cm、器高 6.5cm、高台径 6.6cm。北側溝付近出土。

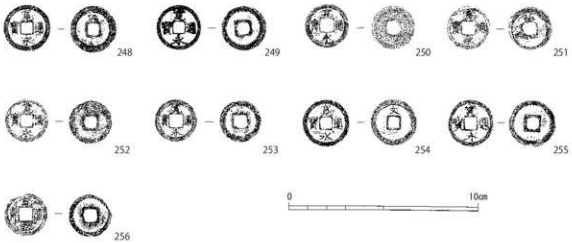
236～238 は白磁である。236 は底部が上げ底となる白磁皿である。器壁は薄い。底径 6.0cm。調査区北側から出土。237 は無文の小坏である。体部は丸味を帯びた深い器形で、高台は断面三角形となる。高台径 3.0cm。238 は皿であろうか。高台部の器壁は厚く、体部は薄くなる。釉は高台外面まで施釉される。高台径 4.0cm。調査区北側出土。239・240 は陶器である。239 は外面に鉄釉で文様を描く蓋である。240 は内面に文様を描く浅い器形の碗である。口径



第 56 図　その他の出土遺物実測図（1/3）

12.2cm、器高 3.8cm、高台径 4.6cm。遺構検出時に出土。

241 は土師質焼成の鉢であろう。直立気味に立ち上がる口縁部付近の破片である。口縁端部は丸くおさめられる。内外面ハケ目調整を行う。調査区北側溝付近出土。242 は須恵質焼成の片口鉢である。口縁部は断面三角形状に肥厚する。遺構検出時に出土。243 は須恵質焼成の鉢である。口縁部は肥厚せず、端部は上方に尖っている。244 は須恵質焼成で、甕か。内面はハケ目、外面には目の細かい格子タタキを行う。底径 20.0cm。245・246 は滑石製石鍋である。245 は断面台形



第 57 図　銅銭実測図（1/2）

の短い鍔となる。246 も鍔部片だが再加工を施したようにも見える。247 はキセルの灰吹部である。筒内部には竹らしき有機物が遺存する。中央付近で出土。

5）銅銭（図版 56、第 57 図）

248～256 は銅銭である。全て寛永通寶で、248・251・253・254 には裏面に「文」の文字が見える。248～253 は 4 号近世墓出土。254・255 は東側排水溝掘削時に褐色粘土層から出土。

6）小結

蒲船津西ノ内遺跡第 3 次調査では、主な遺構として土坑 18 基、溝 9 条、土壙墓 2 基を検出した。これらは調査区の南端を除いてほぼ全域に展開する。土坑は方形や長方形、楕円形のものが多く、深さもあまり深くない。土坑が掘削された目的を明確にするのは難しいが、、遺物の出土状態から推察すると、少なくとも廃絶時には廃棄土坑として使用されたようである。

溝は現代の区画に沿って東西に配置されたものが多く、やはり区画を意図して掘削されたものと思われる。大型の溝である SD－48 や SD－80 は、居住区の外側を区画する溝であったであろうし、SD－76・81・90 などは区画内部に設けられた小区画溝であろう。また、弧状を描く SD－13 に囲まれた東南側には多くの小ピットがあり、SD－13 はこれらを区画する意図で掘削された溝であるようにも思われる。

ST－77 と ST－78 は中世の土坑墓で、集団墓域を形成せず単独で営まれたものである。恐らく集落域の縁辺部に配置された、いわゆる屋敷墓の類であろう。なお、調査区の南東端には近世、近代の墓地が造営されており、近世以降この範囲は墓地としての土地利用が定着したもののようである。

土坑出土遺物を見ると、SK－5 は瓦器埦や無文の青磁碗が出土しており、13 世紀前半頃に位置付けられる。SK－7 は白磁や青磁では 13 世紀後半頃のものが見られるが、日常雑器には 15 世紀以降のものがあり、遺物が若干混入するようである。SK－92 は口縁部を折り返して肥厚さ

せる鍋と羽釜とが出土しており14･15世紀のものであろう。SK－95は中世末から近世の遺物が見られる。SK－97は鎬の無い蓮弁の青磁碗と、口縁部を折り返した鍋、羽釜が出土しており、15世紀前半頃に位置付けられるであろう。SK－136は内面見込みに印花文を描く青磁碗と、口縁部を折り返した土師質鍋、瓦質火鉢が出土しており、14世紀前半頃だろうか。

溝出土遺物では、SD－48から出土した土師器小皿は口径が7.6cm～10.6cmまでの幅があり、坏は11.2cm～13.6cmまでの幅がある。底部は全て糸切りによる。鍋は口縁部を玉縁状に仕上げる肥前地方を中心に広く普及した器形である。時期の絞り込みが難しく、ここでは14、15世紀と幅を持たせておきたい。SD－76は17世紀後半の染付碗や皿が出土している。SD－80から出土した陶器皿は16世紀のものか。SD－81は瓦器埦や東播系鉢とともに口縁部を玉縁状にする土師質鍋も出土しており、13、14世紀の遺物が混ざるようである。SD－90は東播系鉢と備前系擂鉢と滑石製石鍋とが供伴しており、13、14世紀に位置付けられるものである。SD－96から出土した土師器小皿は口径8.5cm～10cm、坏は12cm～14cmの間に概ね収まる。瓦器埦も一定程度出土している。187の青磁皿や188、189の青磁碗は13世紀前半頃に見られるものであり、口縁部上面に縄目押圧を行う土師質鍋や素口縁の瓦質鍋などもこの時期に見られるものである。SD－98から出土した土師器小皿は体部が直線的で深みがあり、口径が小さなものが複数出土している。坏は小皿と器形が類似するが口径は大きい。青磁には同安窯系の皿と外面に細い蓮弁を配した龍泉窯系碗がある。鍋は口縁部上面に縄目押圧を行うものと玉縁状に肥厚させるものとがあり、他に瓦質焼成の羽釜も見られる。13世紀を中心とする時期のものである。

ST－77から出土した鎬蓮弁の青磁碗、ST－78から出土した同安窯系青磁碗は、どちらも13世紀前半頃前後の遺物であり、土坑墓の時期もこれを遡るものではない。

出土遺物の面から遺跡の形成過程をみてみると、当調査区で最も時期が遡る13世紀前半の遺構は、SK－5、SD－96･98である。遺構の切り合いからみるとSD－98はSD－96を切って営まれるが、出土遺物の面からは時期差はないようである。SD－81とSD－90は遺物に若干時期幅があるが、遺構の形成時期はこの頃とみて良いだろう。また、ST－77とST－78の二つの土壙墓は、この時期に営まれたものである。

続く時期のものとして13世紀後半頃の遺物を含むSK－7があるが、15世紀頃の遺物も多く、遺構形成の時期をこの頃として良いのか判断に悩む。14世紀前半とした遺構にSK－136があり、SD－48にもこの頃の遺物が見られる。SK－48は大型の区画溝であり、この頃に掘削されたとみて良いだろう。なお、SD－48からは15世紀代の遺物も出土しており、14世紀から15世紀にかけて機能したものと思われる。15世紀代の遺構としてSK－92やSK－97がある。16世紀代の遺構にはSD－80があるが、遺物量が少なく時期比定に不安が残る。少なくともこの時期にも遺跡の形成が継続していたことは間違いないだろう。近世の遺構には、SK－95とSD－76がある。どちらも遺物量が少ないため遺構の形成時期には不安が残る。

今回の調査の結果、当調査区では13世紀前半から居住区域としての土地利用が始まり、その後17世紀に至るまで継続して居住が行われたことが判った。また、13世紀前半の2基の土壙墓は、当時の居住空間の利用法を知る上で貴重な成果となった。

4　蒲船津西ノ内遺跡　第4次調査

蒲船津西ノ内遺跡の第4次発掘調査は、平成20年7月24日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、8月20日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西17.5m、南北38.0mを測り、南北に長い形状である。遺構の標高は2.0～2.1m。遺構は調査区の西半部に片寄るが、全体的に密度は稀薄である。

検出した遺構は、土坑4基、溝4条である。出土遺物は、中世の土師器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、土製品、石製品である。

1）基本土層

第59図は調査区北壁の土層図である。最上層には褐色土からなる客土があり、その下には第2層褐色土が部分的に見られる。第3層は白灰色土、第4層は青灰色土である。遺構は第3層上面から切り込まれており、ここを遺構検出面とした。また、第3･4層は無遺物層である。

2）土坑

SK-2（図版18、第60図）

調査区南側に位置する土坑である。長軸1.8m、短軸1.6mを測り、東西にやや長い方形プランを呈す。土坑内の北側には長さ90cm、幅20cmのテラス状の段があり、ここまでの深さは15cmを測る。土坑底面はわずかに中央部が深くなっており、ここまでの深さは80cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に黒灰色土が厚く堆積し、中層には灰色土、下層には暗灰褐色土が堆積する。

出土遺物（第61図）

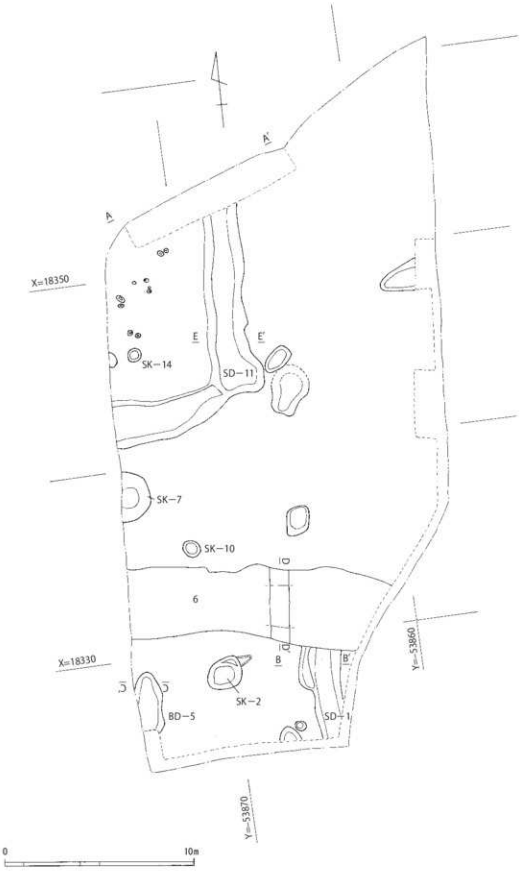
1は土師器小皿である。体部は直線的に伸びる。口径10.0cm、器高1.4cm、底径7.2cm。2･3は土師器坏である。2は体部があまり開かずに伸びており、深みのある器形となる。口径11.6cm、器高3.5cm、底径8.0cm。3は口縁部が薄く尖る。口径14.0cm、器高3.0cm、底径10.2cm。4は天目茶碗である。体部は直線的に開き、口縁部付近は内湾し、端部のみ短く外反する。口径12.0cm。5は土師質焼成の擂鉢である。あまり開かず直線的に伸びており、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。

SK-7（第60図）

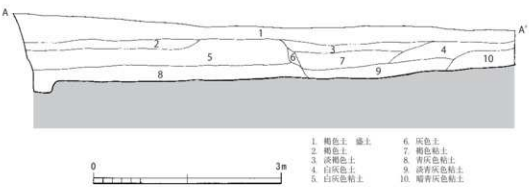
調査区西端に位置する土坑である。西側が調査区外へと続いており全容は不明だが、調査した範囲内では長軸2.7m、短軸1.2mを測り、恐らく直径2.8m程度の円形プランの土坑であろうと思われる。底面は中央に向かって擂り鉢状に深くなっており、調査した範囲での深さは1.4mを測る。壁の立ち上がりは、上方は緩やかな傾斜であり、下方は急な傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰色土、中層から下層にかけて暗青灰色土が厚く堆積する。

出土遺物（図版57、第61図）

6～10は土師器小皿である。どれも体部の立ち上がりが短く浅い器形となる。6は口縁端部の器壁が薄く、尖り気味に仕上げる。口径8.4cm、器高1.0cm、底径7.0cm。7は口径9.0cm、



第 58 図　蒲船津西ノ内遺跡第 4 次調査区遺構配置図（1/200）



第 59 図　蒲船津西ノ内遺跡第 4 次調査区北側土層断面実測図（1/60）

器高 1.6cm、底径 6.6cm。8 は口径 8.4cm、器高 1.5cm、底径 6.8cm。9 は口径 8.6cm、器高 1.6cm、底径 6.6cm。10 は口径 9.0cm、器高 1.2cm、底径 6.8cm。11・12 は土師器坏である。11 はあまり開かずに立ち上がり、深みのある器形となる。底端部は外側に短く張り出している。口径 11.0cm、器高 3.5cm、底径 6.4cm。12 は底端部が稜をなさない器形となる。底径 9.0cm。

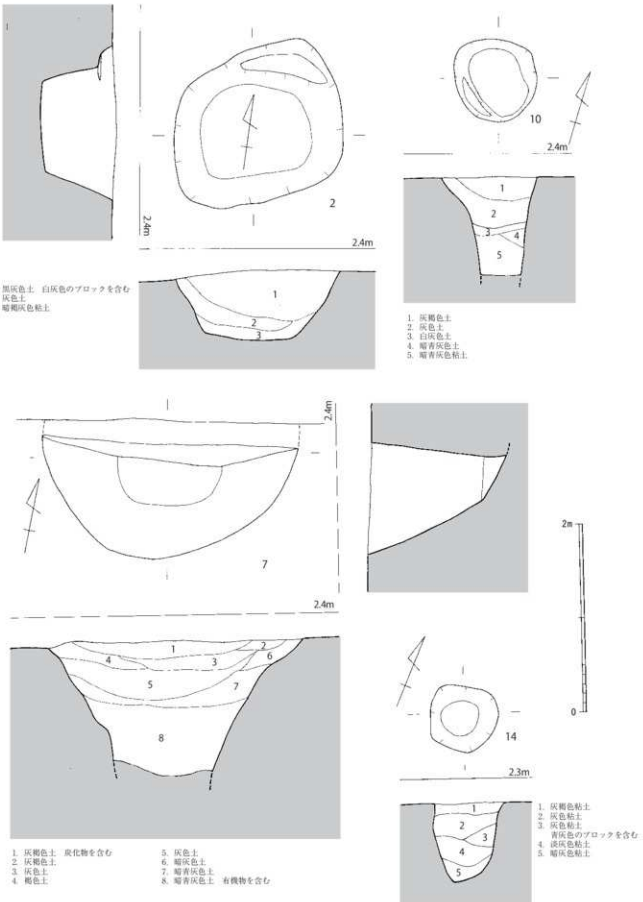
13・14 は青磁である。13 は天井部外面に花文かと思われる文様を施文する合子の蓋である。器高は低く、屈曲部外面には明瞭な稜を有す。口径 8.0cm。14 は内面見込みに半肉彫りの文様を描く碗である。底部の器壁は厚く、高台は短く立ち上がる。高台径 5.6cm。

15～17 は土師質焼成の鍋である。15 は口縁端部を外側に折り曲げて玉縁状とし、外端部に強い横ナデを加えて明瞭な稜をなす。内外面ハケ目調整を行う。16 は素口縁だが体部と比べて口縁部の器壁が若干厚くなる。上端部は面をなす。内面横ハケ目、外見横ナデ調整。17 は口縁部を垂下した玉縁状にする。内外面ハケ目調整を行う。18 は瓦質焼成の鍋である。大きく開いた器形で、口縁部は素口縁だが上端が面をなす。内面ハケ目、外面ナデ調整。19 は瓦質焼成で器壁が厚く、火鉢の類であろうか。内面ハケ目、外面ナデ調整を行う。20 は土師質の釜である。肩は丸く張り、頸部はあまり締まらず口縁部は短くわずかに内傾して立ち上がる。上端部は水平面をなす。内外面ハケ目調整を行う。口径 19.2cm。

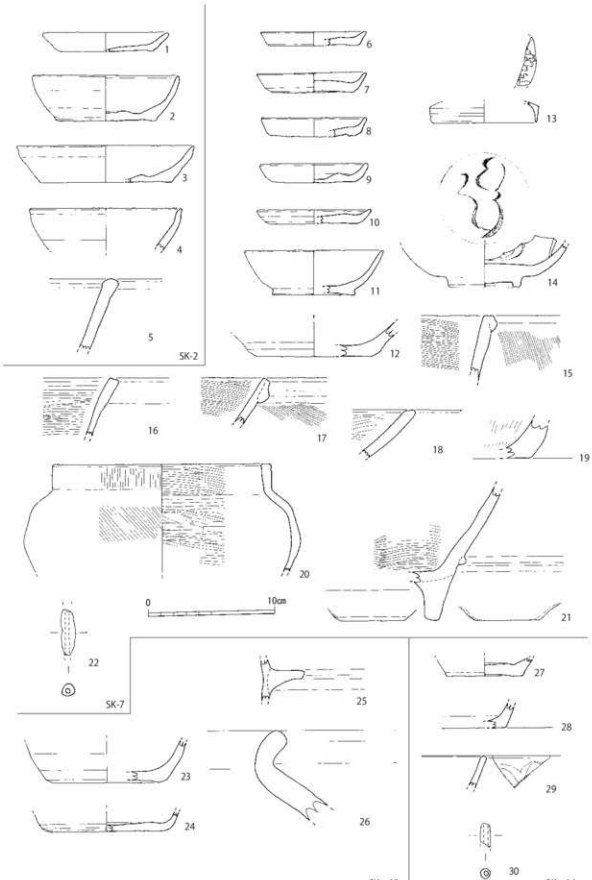
21 は瓦質焼成の火鉢である。底部には脚を有し、底部と体部の境目の少し上に低い三角突帯を巡らせる。体部は直線的に伸びるようである。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。22 は土師質焼成の管状土錘である。両端がすぼまり中位が膨らんだ形状となる。長さ 3.6cm、径 1.0cm、孔径 0.4cm。

SK-10（図版 19、第 60 図）

調査区南側にあり、SK－7 から 3m 南東に位置する土坑である。平面形は直径 85cm の円形を呈す。土坑内では南西側に小さなテラスを有しており、ここまでの深さは 40cm を測る。底面はかなり深くなるようで、深さ 110cm まで掘削を行ったが、これより下層は掘削を断念した。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。



第 60 図　SK－2・7・10・14 実測図（1/40）



第 61 図　SK－2・7・10・14 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第61図）

23・24は土師器坏である。どちらも底端部は稜をなさない。23は深い器形となるようである。底径8.4cm。24は底径9.0cm。25は瓦質焼成の釜である。鍔部は水平方向に伸びており、端部は面をなす。26は土師質の甕である。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。

SK-14（図版19、第60図）

調査区西側にあり、SK－7から6m北側に位置する土坑である。平面形は直径75cmの円形を呈す。底面は中央付近が擂り鉢状に深くなっており、壁面との境は不明瞭である。壁の立ち上がりは急角度に傾斜する。覆土は上層に灰褐色粘土、中層から下層にかけて灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第61図）

27は土師器小皿である。底端部は稜を有し、体部は直線的に開くようである。底径6.0cm。28は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有す。29は外面に蓮弁を配した青磁碗である。30は管状土錘である。端部の径は中位と比べてあまり小さくならないようである。現存で長さ1.9cm、径0.9cm、孔径0.4cm。

3）溝

SD-1（図版19、第62図）

調査区南端に位置する溝である。北側がSD－6と重複しており、これに切られる。また南側は調査区外へと伸びている。検出した範囲で長さ5m、幅1.2m、深さ20cmを測る。底面は水平面を形成するが壁との境は不明瞭である。壁の立ち上がりは非常に緩やかな傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、下層に白灰色土が堆積する。

出土遺物（第62図）

31は土師器小皿である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。口縁端部は器壁が薄くなる。口径8.4cm、器高2.2cm、底径6.8cm。32は土師器坏である。底径8.6cm。33は管状土錘である。中位と比べて端部の径が小さくなる。現状で長さ2.4cm、径0.9cm、孔径0.3cm。

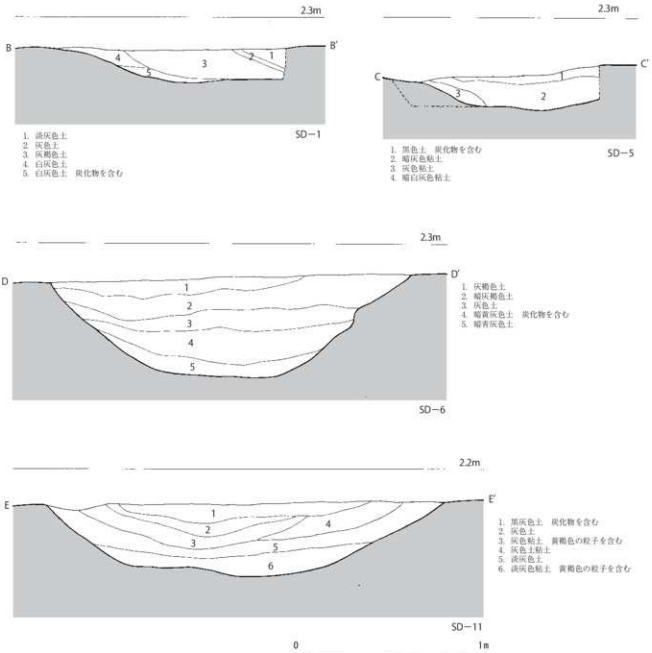
SD-5（第62図）

調査区南端に位置する溝である。南側及び西側が調査区外へと続いており、検出した範囲内では長さ3m、幅0.9m、深さ15cmを測る。底面はほぼ水平で、壁との境は稜をなさず不明瞭である。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に黒色土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物（図版57、第63図）

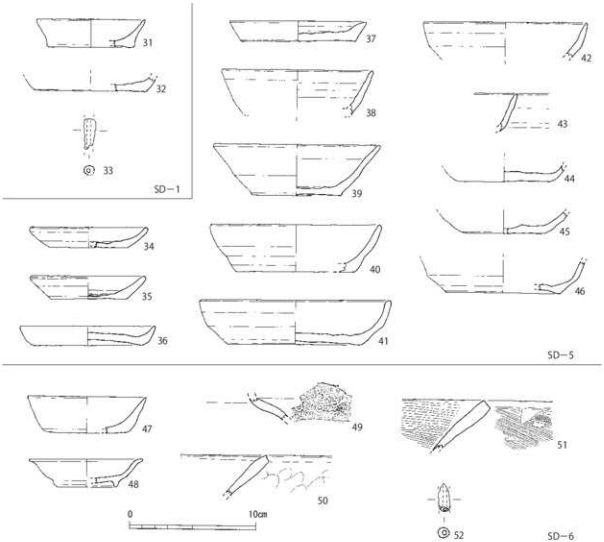
34～37は土師器小皿である。34は底端部に稜を有し、体部はわずかに内湾しながら大きく開く。口径9.2cm、器高1.6cm、底径6.0cm。35は体部が直線的に開き、底部に対して体部の器壁が厚くなる。口径9.0cm、器高1.8cm、底径5.8cm。36は底部が上げ底となり、端部は丸く稜をなさない。口径10.6cm、器高1.5cm、底径8.6cm。37は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に短く開く。口縁部は尖り気味に仕上げるが、全体的に器壁が厚い。口径10.8cm、器高1.6cm、底径9.0cm。

38～46は土師器坏である。38は体部があまり開かず深い器形となる。口径12.0cm。39は底端



第 62 図　SD－1・5・6・11 土層断面実測図（1/20）

部の稜が明瞭で、体部は直線的に長く伸びる。口径 12.2cm、器高 4.1cm、底径 7.0cm。40 は底端部に不明瞭な稜を有し、体部はわずかに内湾しながら伸びる。口径 13.6cm、器高 3.8cm、底径 9.4cm。41 は底部がわずかに上げ底となり、底端部は丸く稜をなさない。体部は内湾しながら立ち上がる。口径 15.2cm、器高 3.6cm、底径 10.6cm。42 は体部中位が不明瞭な稜を有す。口径 13.0cm。43 は比較的器壁が薄い。44・45 は底端部の稜が不明瞭である。44 は底径 7.0cm。45 は底径 6.4cm。46 は底部が上げ底となり、端部は明瞭な稜を有す。器壁は比較的薄い。底径 9.2cm。



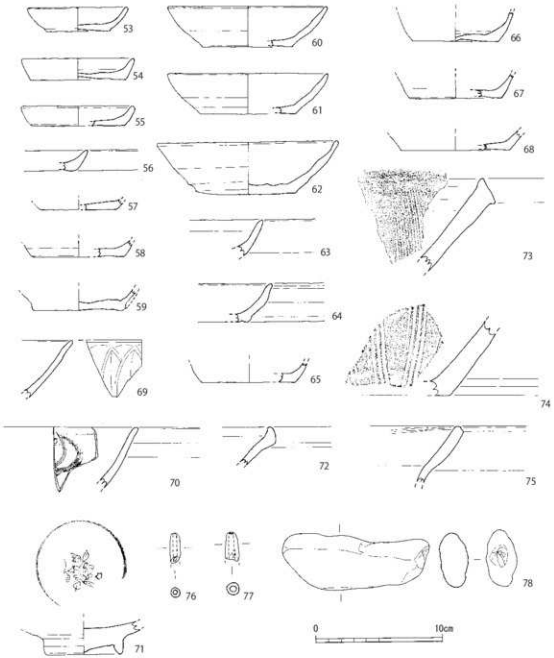
第 63 図　SD－1・5・6 出土遺物実測図（1/3）

SD-6（図版 17・20、第 62 図）

調査区南側に位置する溝である。東西方向へと伸びており、両端部はそれぞれ調査区外へと続いている。検出した範囲で、長さ 14m、幅 4m、深さ 0.5m を測る。底面は水平面を形成するが、壁との境目は不明瞭で稜をなさず、壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土および暗灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（第 63 図）

47 は土師器小皿である。底端部は稜をなさず、体部は直線的に伸びる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。口径 9.2cm、器高 2.9cm、底径 6.0cm。48 は白磁小皿である。高台は断面三角形状で、体部はわずかに内湾しながら開き、口縁部付近は外反する。口径 9.0cm、器高 2.2cm、高台径 5.0cm。49 は瓦質焼成で、釜の肩部か。強く内傾しており、外面には小さな円文を印刻する。50 は瓦質焼成の鍋である。直線的に大きく開いており、端部は凹面をなす。器壁は口縁部付近が若干肥厚するようである。外面には指圧痕が残る。51 は土師質焼成の鍋である。体部と比べて口縁部付近は器壁が若干厚くなり、端部は面をなす。内外面ハケ目調整を行う。52 は管状土錘である。両端部を欠損する。現状で長さ 2.1cm、径 0.9cm、孔径 0.3cm を測る。



第64図　SD－11出土遺物実測図（1/3）

SD-11（図版20、第62図）

調査区北西側に位置する溝である。北側と西側がそれぞれ調査区外へと伸びており、調査した範囲内では、東西方向に伸びる東西溝と、南北方向に伸びる南北溝とが接したL字状を呈している。東西溝は長さ8m、幅2.5m、南北溝は長さ10m、幅2mを測り、両者の接する角度はやや鈍角になる。また接点の外側は若干広がった形状となる。断面土層図によると、底面はほぼ水平な面を形成するが、壁との境目は稜をなさず不明瞭となり、壁の立ち上がりは緩やかに傾斜する。深さは40cmを測る。覆土は上層に黒灰色土、中層から下層にかけて灰色土が堆積する。

出土遺物（図版57、第64図）

53～59は土師器小皿である。53は底端部に稜を有し、体部は内湾気味に開く。口径8.0cm、器高1.9cm、底径5.0cm。54は体部があまり開かず短く立ち上がる。底部中央付近の器壁が薄い。口径9.0cm、器高1.7cm、底径7.4cm。55は体部が内湾気味に短く開く。口径9.0cm、器高1.5cm、底径7.2cm。56は底端部が丸味を帯び、口縁部付近は器壁がやや薄くなる。57は底径6.0cm。58は底径7.0cm、59は底径7.0cm。60～68は土師器坏である。60～62は底径が小さく、体部はわずかに内湾しながら開き、長く伸びる。60は口径12.6cm、器高3.2cm、底径7.0cm。61は口径12.8cm、器高3.2cm、底径7.6cm。62は口径14.4cm、器高4.2cm、底径8.2cm。63・64は体部が若干内湾する。65～68は底端部が明瞭な稜を有す。65は底径7.4cm。66は体部があまり開かず深みのある器形となるようである。底径6.6cm。67は底径7.2cm。68は8.6cm。

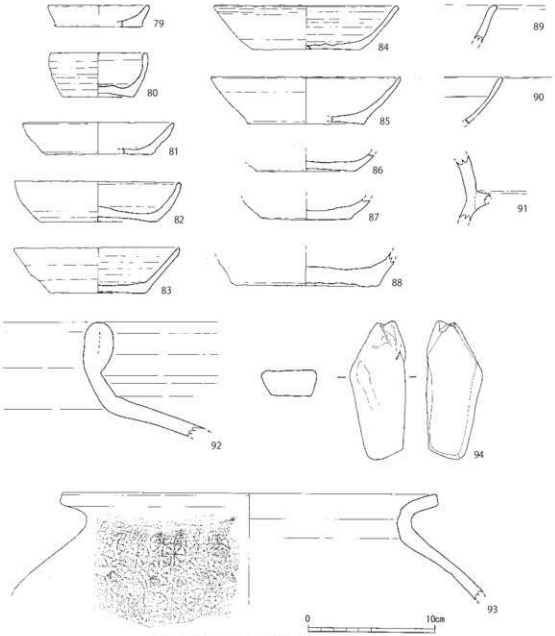
69～71は青磁碗である。69は外面に鎬蓮弁を配す。70は内面に半肉彫りによる草文を描く。71は内面見込みに花文を印刻する。高台径6.0cm。72は須恵質焼成の鉢である。口縁端部は断面三角形状をなし、上端部は上方を向く。73は備前焼の擂鉢である。口縁端部は面をなし、両端部とも若干つまみ出したような形状となる。74は土師質焼成の擂鉢である。75は土師質焼成の鍋。体部から口縁部にかけて不明瞭に屈曲し、口縁端部は強い横ナデを加えて凹線状に仕上げる。76・77は管状土錘である。76は長さ2.3cm、径0.8cm、孔径0.3cm。77は中位に比べて端部の径が小さくなる。長さ2.3cm、径0.9cm、孔径0.4cm。78は棒状の礫で、端部が潰れているため敲打に使用したものと思われる。長さ11.5cm、幅4.3cm、厚さ2.3cm。玄武岩製。

4）その他の出土遺物（図版57、第65図）

79は土師器小皿である。底端部はわずかに外側に伸びており、体部は直線的に短く伸びる。口径8.0cm、器高1.7cm、底径7.0cm。80は体部があまり開かずに長く伸び、小型の鉢状を呈する。口径7.6cm、器高3.4cm、底径5.6cm。81～87は土師器坏である。81は口縁端部を薄く仕上げる。口径12.0cm、器高2.4cm、底径8.2cm。82は体部が内湾しながら開く。口径13.2cm、器高3.3cm、底径9.0cm。83～85は体部が直線的に開く。83は口径13.2cm、器高3.7cm、底径7.6cm。84は口径14.6cm、器高3.5cm、底径8.4cm。85は口径15.0cm、器高3.8cm、底径9.4cm。86・87は底端部に不明瞭な稜を有す。86は底径8.0cm。87は底径7.0cm。88は土師質焼成の鉢である。底部はわずかに上げ底となる。底径11.0cm。89・90は青磁碗である。89は口縁端部がわずかに外反する。90は内面に一条の沈線を巡らせる。91は土師質焼成で、釜であろう。低い鍔が巡るようである。92は備前焼の甕である。肩は大きく張り、内傾する短い頸部へと続く。口縁部は直立し、外側に肥厚する。端部は丸くおさめる。93は瓦質焼成の甕である。頸部はよく締まり、口縁部は強く外反する。口縁端部は面をなす。内面ナデ、外面は格子タタキの上に菊花文の印刻を行う。口径30.0cm。94は扁平柱状の砥石であろう。使用痕はあまり無く、確実に砥石であるのか疑問が残る。長さ10.9cm、幅4.5cm、厚さ2.0cm。

5）小結

蒲船津西ノ内遺跡第4次調査区の遺構密度は低く、遺構は調査区南部および西部に散漫に分布する。SD－6は東西方向に伸びる大型の溝で、排水および居住域外側の区画を意図したもの



第 65 図　その他の出土遺物実測図（1/3）

と思われる。L字状のSD－11は区画溝としての機能を有していると思われ、区画内にはSK－14の他にも幾つかのピットが見られた。土坑のうち、SK－7は正円形で深さもあるようであり、恐らく井戸として使用されたのであろう。SK－10も径は小さいがかなり深くなるようであり、小型の井戸であったのかもしれない。

土坑のうち、SK－7から出土した土師器小皿は口径8.4cm～9.0cmの間におさまる。口縁部が素口縁または玉縁状口縁の鍋は14世紀が中心であり、火鉢や釜は15世紀以降のものか。だとすると出土遺物には時期幅を想定した方が良いようである。SD－6出土遺物のうち、白磁皿は16世紀に見られるものであり、釜や鍋の組合せも同時期とみて良いだろう。SD－11出土の土師器小皿は口径が8.4cm～9.0cm、坏は12.6cm～12.8cmと概ね大きさが揃っているが、供伴する青磁碗は概ね13世紀から15世紀まで幅がある。遺構数も遺物量もそれほど多くはないが、当調査区の時期は13世紀から16世紀まで、という知見を得ることができた。

第66図　蒲船津西ノ内遺跡第5次調査区遺構配置図（1/200）

5　蒲船津西ノ内遺跡　第5次調査

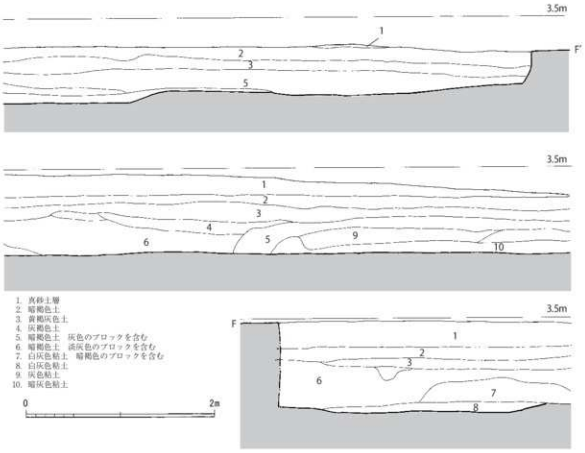
蒲船津西ノ内遺跡の第5次発掘調査は、平成20年10月14日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い11月5日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西16m、南北35mを測り、南北に長い形状である。遺構の標高は1.9～2.2m。遺構は調査区全体に及んでおり、東側と南側は大溝が検出されており、その区画内は特にピットが多数検出された。

検出した遺構は、土坑3基、溝2条である出土遺物は中・近世の土師器、瓦器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、土製品、石製品、木製品である。

1）基本層序（第67図）

第67図は第5次調査区南西壁の土層図である。東側には上層に真砂が厚く堆積し、西側にはこれが少ない。その下層の第2層は暗褐色土層である。第3層は黄褐色土層、第4層は灰褐色土層、第5層は灰色ブロックが混じった暗褐色土、第6層も同じく灰色ブロックが混じった暗褐色土層である。この第5・第6層は特に厚く堆積する。第7層は暗褐色土ブロックを含んだ白灰色土層で、第8層は白灰色土層となる。この第8層が地山である。従って、調査時には第8層上面を遺構検出面とした。



第67図　蒲船津西ノ内遺跡第5次調査区基本土層実測図（1/40）

2）土坑

SK-16（第68図）

調査区北端で検出した土坑である。北側は調査区外へと続いており全体の形状は不明だが、調査した範囲では長軸270cm、短軸130cmを測る。深さは180cmを測り、壁面の立ち上がりは急角度で傾斜する。壁面は平坦ではなくかなり歪つである。底面はほぼ水平である。覆土は上層に黒褐色土及び黒灰色土、中層には灰褐色土、下層には暗青灰色土が厚く堆積する。

出土遺物（図版58、第69図）

1は土師器坏である。底端部の稜は不明瞭である。底径9.4cm。2は外面に鎬連弁を配した青磁碗である。口径14.6cm。3・4は瓦質焼成の甕である。3は口縁部が短く強く外反し、端部は面をなす。肩部外面には格子タタキが見られる。口径26.0cm。4は体部に対して口縁部付近の器壁が厚くなる。口縁部は短く強く外反し、端部は丸くおさめる。肩部の外面には格子タタキ、内面には横ハケ目が見られる。口径26.4cm。

SK-122（図版22、第68図）

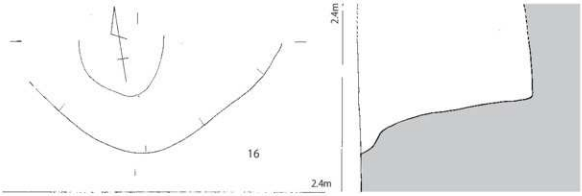
調査区中央付近で検出した土坑である。平面形は直径80cmの円形を呈し、深さは110cmを測る。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、底面は平坦である。覆土は上層に褐色土、中層に灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

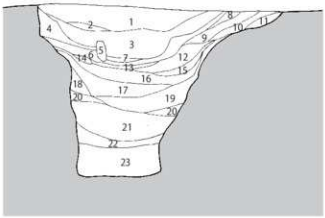
出土遺物（図版58、第69図）

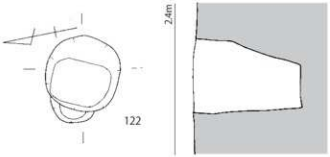
5は白磁皿である。高台は器壁が厚く、断面三角形状をなす。体部は大きく開き、中位でわずかに屈曲する。口径12.8cm、器高3.3cm、高台径5.8cm。6・7は染付磁器である。6は小型の皿で、小さな高台を有す。器壁は薄い。7は中型の皿である。体部は外反しながら大きく開く。内面には圏線と花文を描く。口径19.4cm、器高3.0cm。8・9は瓦質焼成の擂鉢である。8は体部に対して口縁部の器壁が厚くなる。端部は不明瞭な水平面をなす。外面には指圧痕が多く見られる。9もやはり外面に指圧痕が多く残る。10～14は土師器鍋である。10・11は口縁部外側が突帯状に肥厚する。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行い、11は指圧痕が多く残る。12・13は素口縁となる。12は端部が面をなすが、13は端部を丸くおさめる。12は内外面ハケ目、13はナデ仕上げである。14はあまり開かない形状となるようである。口縁部は体部と比べて若干肥厚し、端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目調整を行う。15・16は釜である。15は肩が丸く張り、口縁部は短くわずかに内傾して立ち上がる。上端部は水平面をなす。内面は横ハケ目、外面は幅の広いヘラ磨きを行う。口径13.8cm。16は水平方向に伸びた鍔部を有す。端部は強い横ナデを加えて凹面を形成する。全体的に器壁が薄い。内外面にハケ目調整が見られる。17は瓦質焼成の底部片で、かすかに工具痕が見られることから擂鉢であろうと思われる。端部の稜は明瞭である。

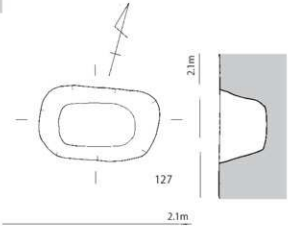
SK-127（第68図）

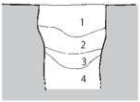
調査区南端で検出した土坑である。平面形は長軸130cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈す。深さは50cmを測り、底面は平坦である。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は上層に灰色土及び暗灰褐色土、下層に暗灰色土が厚く堆積する。

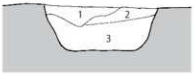




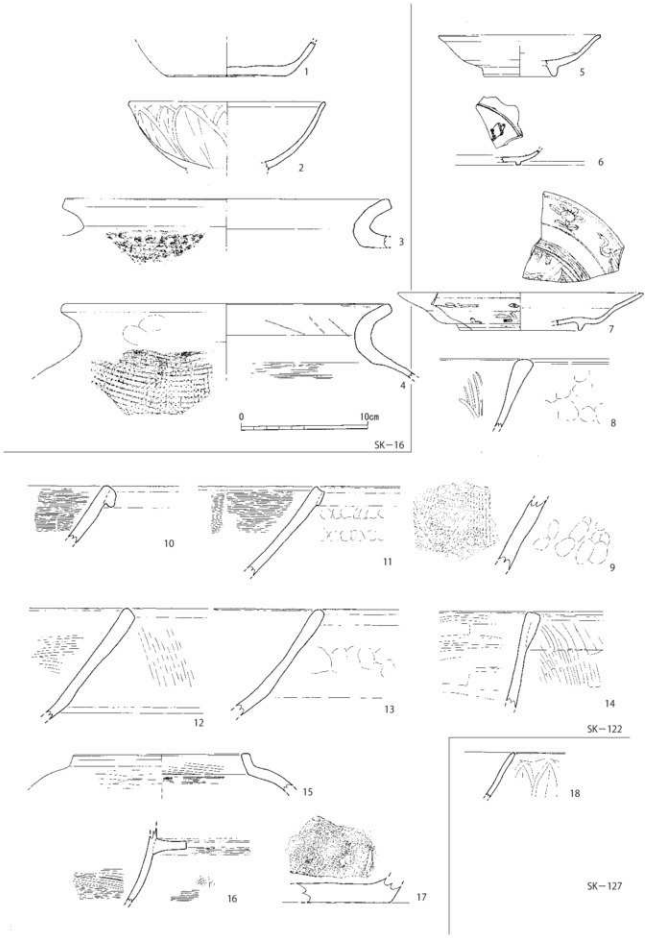








第 68 図　SK－16・122・127 実測図（1/40）



第69図 SK－16・122・127出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第69図）

18は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。

3）溝

SD-15（図版22、第70図）

調査区東端に位置する溝である。主軸を調査区東端と揃えており、壁面に沿って33mの長さを検出した。溝の東端は調査区外へと続いており、溝の幅は確認できていない。

北側土層では、上層に褐色土、下層に暗青灰色土が厚く堆積する。壁の立ち上がりは緩やかである。南側土層では上層に褐色土、その下に遺物を多く含んだ暗灰褐色土層が堆積する。第4・5層は暗青灰色土層である。南側の壁の立ち上がりも緩やかである。

遺物はSD－15・130出土遺物として取り上げを行った。

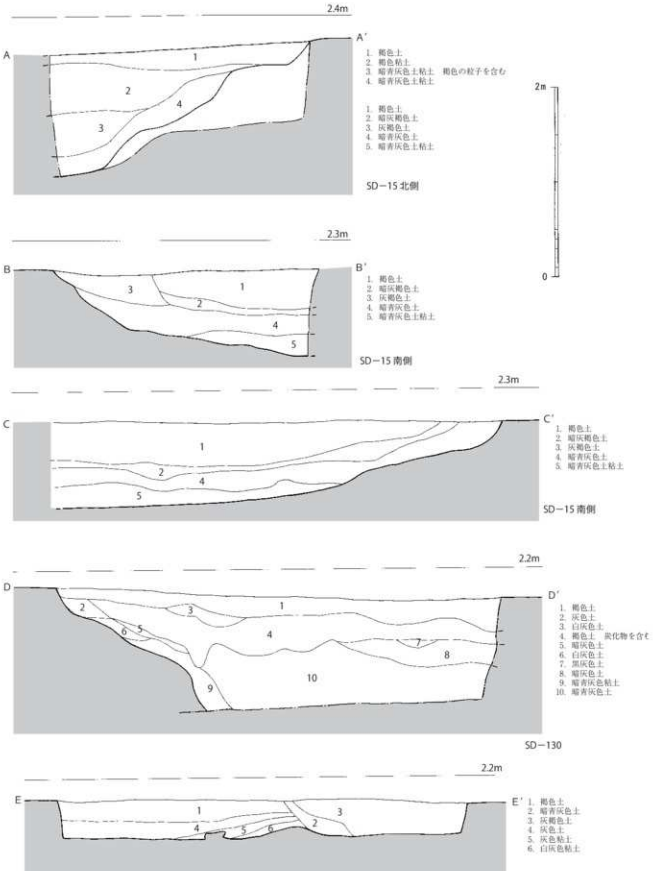
SD-15・130 出土遺物（図版58・59、第71～73図）

19～23は土師器小皿である。19は体部が若干内湾しながら開く器形となる。口径6.6cm、器高2.2cm、底径3.6cm。20は底端部の稜が明瞭で、体部があまり開かず長く伸びる。口径8.4cm、器高2.8cm、底径5.2cm。21は底端部の稜が明瞭で、体部は若干内湾しながら開く。口径8.6cm、器高1.7cm、底径6.0cm。22は底径6.2cm。23は底径6.0cm。24・25は土師器坏である。24は底径8.4cm。25は底径7.2cm。26・27は瓦器埦である。どちらも器壁がやや厚い。27は断面三角形の低い高台となる。高台径6.0cm。

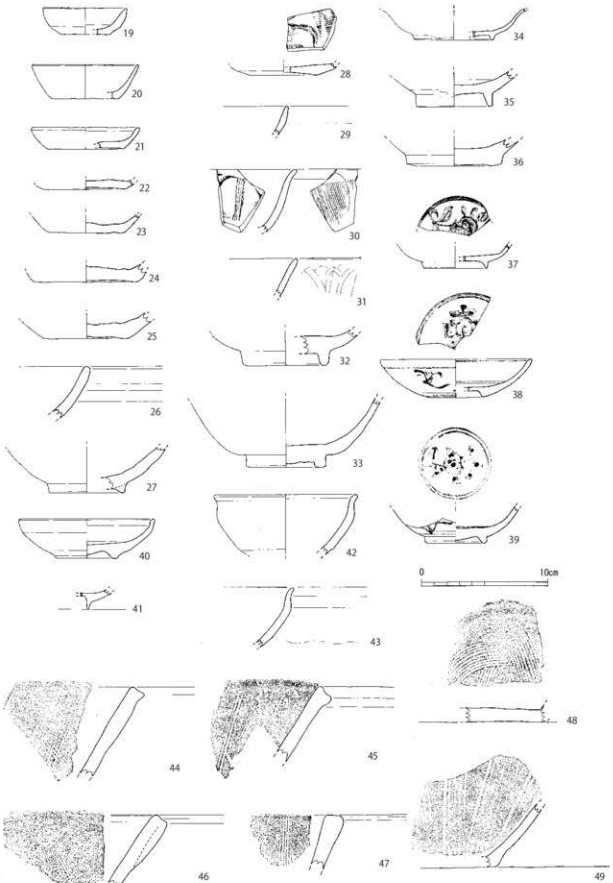
28～33は青磁である。28は内面に櫛とヘラを使用して文様を描く皿である。底径5.0cm。29～33は碗である。29は口縁部片で、若干内湾する。30は内外面に櫛描き文様を描く。口縁端部は外反する。31は外面に鎬蓮弁を配す。32・33は底部片である。32は丸味を帯びた厚い高台を有す。表面には貫入が多くはいる。高台径6.6cm。33は断面四角形の低い高台を有し、高台外面まで施釉される。高台径6.4cm。34～36は白磁である。34は小型の皿で、器壁が薄い。体部下半は内湾しながら大きく開き、口縁部は外反する。口径6.2cm。35は器壁がやや薄く、比較的高い高台となる。施釉は高台にまでは至っていない。高台径6.0cm。36は高台内面の削り出しが非常に浅い。高台径7.2cm。37～39は明染付磁器である。37は器壁が薄くシャープな作りで、皿か。高台径5.0cm。38は内外面に施文する皿である。口径12.0cm、器高3.0cm、底径4.4cm。39は外側にやや開いた厚い高台を有す。文様は内外面に描かれる。高台径5.0cm。40・41は陶器である。40は低い高台を有した小型の皿である。口径10.4cm、器高3.1cm、高台径4.8cm。41は器壁が薄くシャープな高台となる。42・43は天目茶碗である。42は口径11.2cm。

44～52は擂鉢である。44は須恵質焼成の擂鉢。口縁部は直線的に伸びており、外端部に強い横ナデを加えて若干つまみ出す。45は土師質焼成である。やはり外端部をつまみ出すが、稜は不明瞭である。46～52は瓦質焼成の擂鉢である。46は口縁部が若干肥厚し、端部は凹面を形成する。47もやはり口縁部がわずかに肥厚し、上端部は面をなす。49の外面にはナデに先行するタタキが残る。51は底端部が明瞭な稜をなさない。底径14.0cm。52は底端部に明瞭な稜を有す。底径14.6cm。

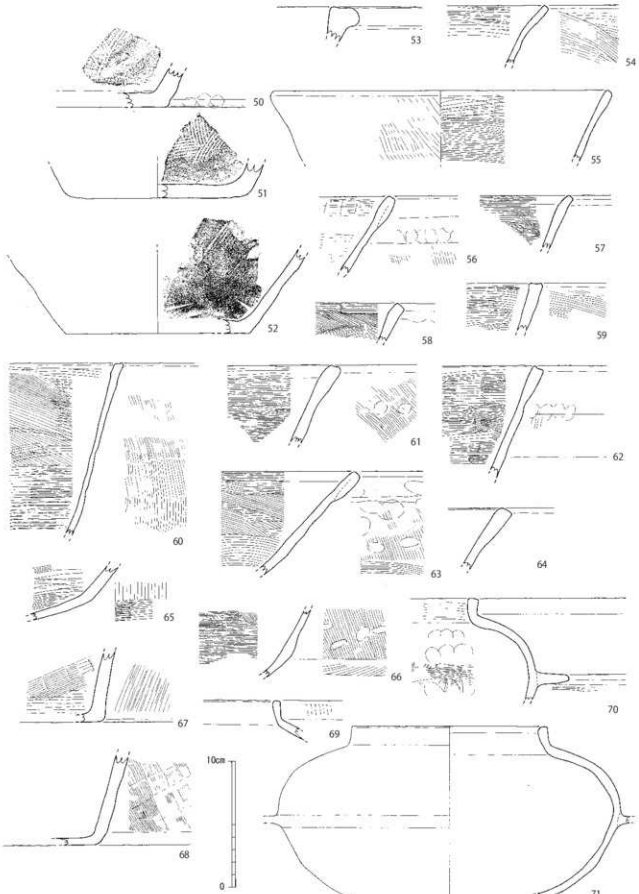
53～66は鍋である。53は口縁部が外側に短く伸び、上端部には縄押圧による文様を施文する。54・55は器壁が薄く、端部は面をなす。瓦質焼成である。56は土師質焼成である。口縁部



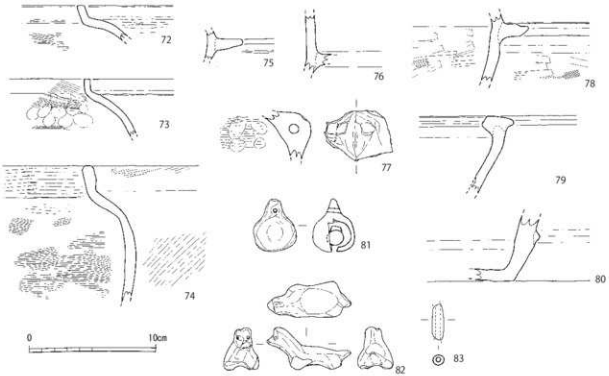
第 70 図　SD－15・130 土層断面実測図（1/40）



第 71 図　SD－15・130 出土遺物実測図①（1/3）



第 72 図　SD－15・130 出土遺物実測図②（1/3）



第 73 図　SD－15・130 出土遺物実測図③（1/3）

が若干肥厚する。57～60 は瓦質焼成である。総じて器壁が薄く、口縁部は素口縁で端部は平坦面または凹面を形成する。61・62 は口縁部が若干肥厚し、端部は押線状に窪む。瓦質焼成である。63 は土師質焼成で、口縁部は若干肥厚し、端部は不明瞭な面をなす。64 は瓦質焼成である。やはり口縁部が肥厚し、端部は不明瞭な面をなす。調整は内外面ナデ調整を行う。65・66 は土師質焼成の鍋の体部片で、外面には不明瞭な稜が見られる。67・68 は火鉢か。67 は土師質焼成である。体部は直立気味に立ち上がる。調整は内外面ハケ目調整を行う。68 は瓦質焼成である。やはり直立気味に立ち上がる。内面ナデ、外面ハケ目調整を行う。

69～78 は釜である。69～77 は瓦質焼成である。69 は口縁部が直線的に短く伸び、若干内傾する。上端部は不明瞭な面をなす。70 は鍔部が水平に伸び、端部は丸くおさめる。肩部は丸く張り、口縁部は短く直立する。上端部は面をなす。71 は扁球形の体部で、口縁部は若干内傾する。端部は丸味を帯びる。鍔は体部最大径の位置に巡らされる。口径 15.6cm。72 は口縁部が若干内傾し、端部は水平面をなす。内外面ハケ目調整を行う。73 は口縁部が直立する。内面にはハケ目と指圧痕が確認できる。74 は口縁部がわずかに肥厚し、上端部は不明瞭な面をなす。内外面ハケ目調整が確認できる。75 は水平方向に伸びる鍔部片で、端部は丸味を帯びる。76 は鍔部付近の破片である。77 は断面半環状の把手部。78 は土師質焼成の釜である。鍔部は水平方向に短く伸びており、端部は尖り気味に仕上げる。内外面横ハケ目調整を行う。79・80 はどちらも土師質焼成で、火鉢であろう。79 は口縁端部に粘土を貼り付け内外に短く伸びたような形状となる。80 は底端部が明瞭な稜を有し、端部からやや上の位置に一条の低い突帯を巡らせる。

81 は土鈴である。全長 4.2cm、鈴部の径 3.3cm、内部の玉の径 1.2cm。82 は土製品で、犬形

であろうか。長さ6.5cm。83は管状土錘である。端部は中位よりも若干径が小さくなる。長さ2.8cm、径0.9cm、孔径0.3cm。

SD-130（第70図）

調査区南側に位置する溝である。主軸がSD－15とほぼ直交する位置にあり、両者で区画機能を果たしていたものと思われる。幅は7m、長さは11mを検出した。

覆土は上層に褐色土、中層に暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。壁の立ち上がりは緩やかな傾斜をなす。

出土遺物（図版59・60、第74～76図）

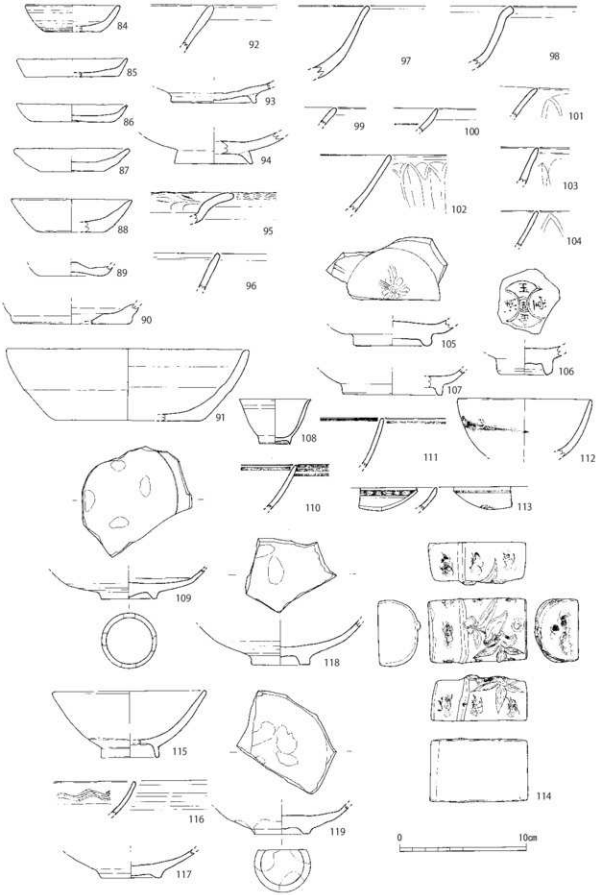
84～89は土師器小皿である。84はやや深い器形となる。口径7.4cm、器高2.1cm、底径4.4cm。85は体部が直線的に短く伸びる。口径9.0cm、器高1.5cm、底径7.6cm。86は底端部の稜が不明瞭である。口径8.8cm、器高1.4cm、底径6.4cm。87は体部がやや長めに伸びて開く。口径9.2cm、器高1.9cm、底径5.0cm。88は体部が長く伸び、深い器形となる。口径9.4cm、器高2.6cm、底径5.2cm。89は底部が上げ底状となり、底端部の稜が不明瞭である。底径5.0cm。90は土師器坏である。底径9.0cm。91は土師器鉢である。体部は若干内湾しながら開く。口径19.2cm、器高5.6cm、底径11.6cm。

92～94は瓦器埦である。92は直線的に伸びており、口縁部はわずかに肥厚する。93は低くて端部が丸味を帯びた高台となる。高台径6.8cm。94はやや長く伸びた高台となる。高台径6.0cm。

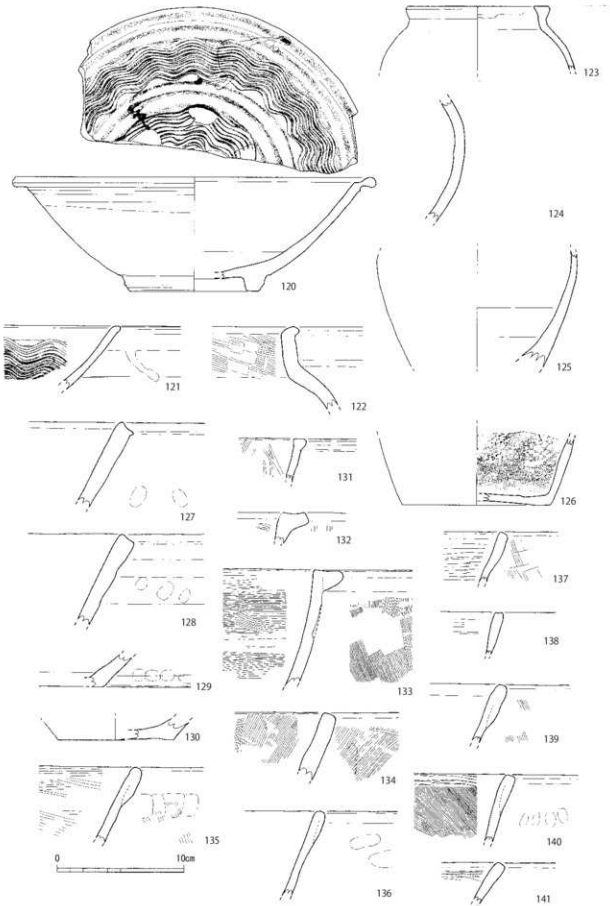
95～107は青磁である。95は口縁部が外反し、屈曲部が不明瞭な稜をなす皿である。口縁端部を花弁状に窪ませ、内面にはヘラ描きの文様を施文する。96～107は碗である。96は内面口縁部下に一条の沈線を巡らせる。97・98は口縁部がわずかに外反する無文の碗である。99・100は碗の口縁部小片。100は内面に一条の沈線を巡らせる。101～104は外面に蓮弁を配す。105は内面見込みに花文を印刻する。高台は低い台形状となる。高台径6.2cm。106は内面見込みに吉祥句を印刻する。高台は径が小さく、内端部で接地する。高台径4.4cm。107は低くて器壁がやや薄い高台となる。高台径8.0cm。

108・109は白磁である。108は小坏。体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。口径5.6cm、器高3.5cm、高台径2.4cm。109は皿であろう。内面見込みと高台部に4箇所の目跡が残る。高台径4.4cm。110～114は染付磁器である。110～112は碗である。110・111は口縁端部の内外面に圏線を巡らせる。112は外面に風景を描く。口径10.4cm。113は皿か。内外面に文様を描く。114は半筒型で竹を模した水滴である。長さ7.7cm、幅4.9cm、高さ3.6cm。115～121は陶器である。115～117は碗である。115は体部が直線的で丸味の少ない器形となる。口径12.2cm、器高5.2cm、高台径4.6cm。116は内面に白色釉で櫛描きの波文を巡らせる。117は高台径4.6cm。118～121は皿である。どちらも内面に重ね焼きの目跡が残る。118は高台径4.6cm。119は高台径4.4cm。120・121は大型の皿。120は口縁端部が丸く肥厚し、そのすぐ下には明瞭な稜を有す。内面にはハケ目文様を巡らせる。口径28.8cm、器高9.1cm、高台径10.0cm。121も内面にハケ目文様を巡らせるが、口縁は素口縁である。

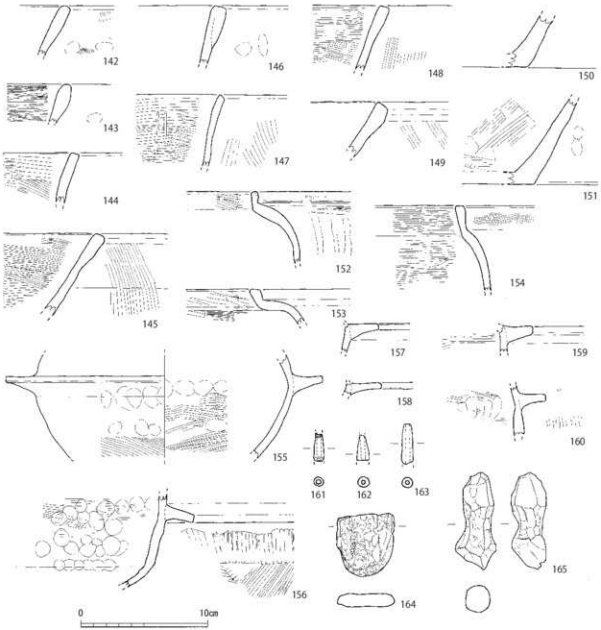
122は土師質焼成の壺である。口縁部はわずかに内傾して短く立ち上がり、口縁端部は外反する。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。123～126は陶器壺である。123は口縁部が肥厚し、上端に



第 74 図　SD－130 出土遺物実測図①（1/3）



第 75 図　SD－130 出土遺物実測図②（1/3）



第 76 図　SD－130 出土遺物実測図③（1/3）

水平面を有す。口径 11.2cm。124 は肩が丸く張った備前焼の壺である。125 は壺の下半部で、内面は無釉となる。126 は備前焼の壺で、器壁が薄い。内外面にタタキを行う。底径 11.6cm。

127～130 は擂鉢である。127 は須恵質焼成で、口縁端部は横ナデにより凹面を形成する。128 は瓦質焼成で、やはり口縁端部は浅い凹面を形成する。129・130 は須恵質焼成である。130 は底径 9.0cm。131 は瓦質焼成で、鉢か。口縁部は外側に丸く肥厚する。132～149 は鍋である。132・133 は土師質焼成で、口縁部が外側に短く伸び、上端部には縄の押圧による文様を施文する。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。134～141 は土師質焼成の鍋の口縁部である。体部と比べて口縁部付近の器壁が若干厚くなり、上端が面をなすものと丸くおさめるものとがある。調整は

ナデとハケ目の両方が見られる。142～149は瓦質焼成の鍋である。やはり口縁部がは素口縁で、若干肥厚するものもある。端部は不明瞭な面をなす。調整はハケ目、ナデの両方が見られる。150・151は土師質焼成で、鍋の底部か。端部は明瞭な稜を有し、体部は直線的に伸びている。

152～160は瓦質焼成の釜である。152は肩が丸く張り、口縁部は短く直立する。端部はわずかに内傾する面をなす。体部外面には縦方向の粗いヘラ磨きが見られる。153は口縁部が短く内傾し、端部は水平面をなす。154は頸部の締まりが弱く、口縁部はわずかに内傾して上端部は水平面をなす。155は水平方向にやや長く伸びる鍔部を有す。端部は明瞭な面をなす。鍔部径25.0cm。156は斜め下方向に伸びる鍔部を有す。端部は明瞭な面をなす。外面鍔部下にはハケ目が見られ、内面はハケ目後にナデを行う。157～160は鍔部片で、どれも水平に伸びる。157は端部が面をなし、158は丸味を帯びる。159は端部に浅い凹線を巡らせる。160は端部が面をなす。

161～163は管状土錘で、どれも欠損する。161は長さ2.2cm、径0.8cm、孔径0.4cm。162は長さ2.0cm、径1.0cm、孔径0.3cm。163は長さ3.2cm、径1.0cm、孔径0.3cm。164は片岩質の石材で、石錘として使用したのか、側縁に抉りがある。長さ5.0cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm。165は滑石製石鍋を転用した石製品で、中央部分を削っていることから石錘として使用したものと思われる。長さ7.7cm、幅3.2cm、中央付近の厚さ2.1cm。

4）その他の出土遺物（図版60・61、第77・78図）

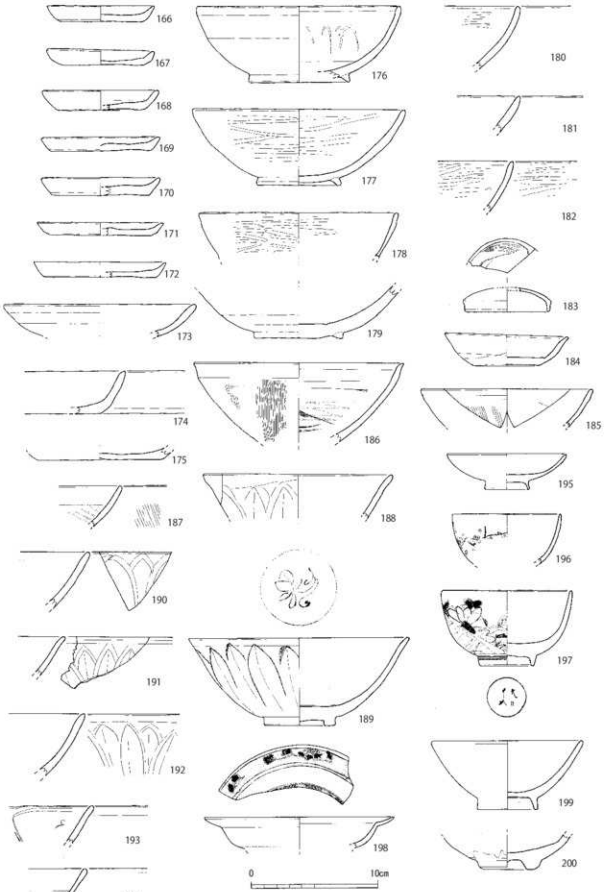
ここで取り上げる遺物については、図示できる物について説明をする。遺構については、性格等が不明である。

166～172は土師器小皿である。166～169は底端部の稜が不明瞭である。166は口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.4cm。167は口径8.6cm、器高1.2cm、底径6.0cm。168は口径9.2cm、器高1.5cm、底径6.8cm。169は口径9.4cm、器高1.1cm、底径7.8cm。170・171は底端部の稜が明瞭である。170は口径9.4cm、器高1.4cm、底径7.6cm。171・172は口縁端部が薄く尖る。171は口径10.0cm、器高1.0cm、底径8.0cm。172は口径10.4cm、器高1.2cm、底径9.0cm。

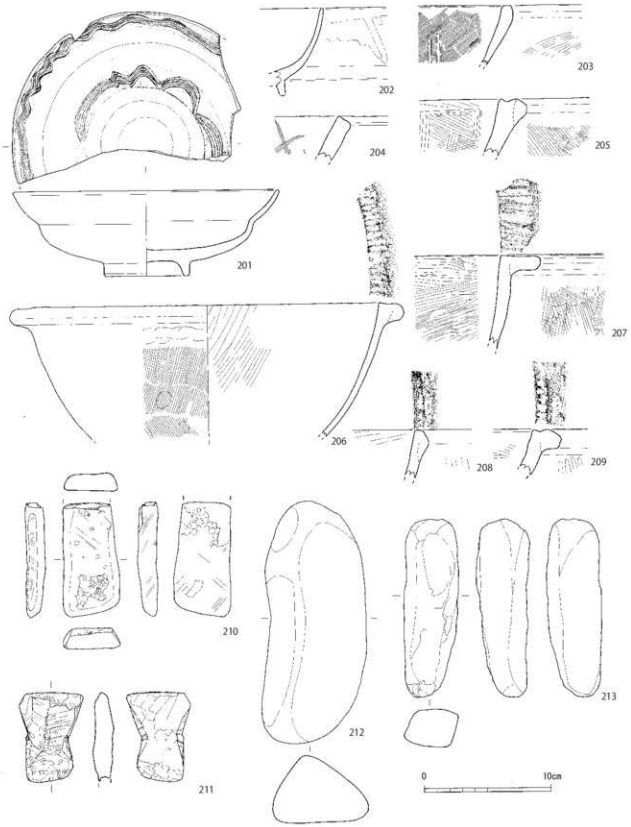
173～175は土師器坏である。173は口径15.2cm。174は体部があまり開かずに立ち上がる。175は底径9.8cm。

176～182は瓦器塊である。176は内面に暗文状のヘラ磨きを施文する。高台は断面三角形を呈す。口径16.2cm、器高6.1cm、高台径8.0cm。177は浅い器形で、高台はやや外側に広がった台形状をなす。内外面横ヘラ磨き調整を行う。口径16.8cm、器高6.0cm、高台径6.6cm。178は内外面に横ヘラ磨き調整を行う。器壁は薄い。口径15.8cm。179は低い断面台形の高台を有す。器壁は厚い。高台径7.0cm。180～182は口縁部片である。内外面横ヘラ磨き調整を基本とする。

183・184は青白磁である。183は合子の蓋。天井端部は稜をなし、天井部外面には櫛描き文様を施文する。口縁部径6.6cm。184は小型の皿である。底部はわずかに上げ底となり、体部は内湾気味に開いて口縁部付近は若干外反する。口径9.8cm、器高2.6cm、底径5.2cm。185～194は青磁碗である。185～187は内面に櫛描き文様と沈線、外面に櫛描き文が見える。体部は丸味が少なく、口縁端部は外反気味になる。185は口径13.6cm。186は口径16.4cm。188～192は外面に蓮弁を配す。188は口径15.0cm。189は内面見込みに花文を施文する。口径17.4cm、器高6.9cm、高台径5.6cm。190は鎬の無い蓮弁となる。192は遺構検出時出土。193は内面に区画線



第 77 図　その他の出土遺物実測図①（1/3）



第 78 図　その他の出土遺物実測図②（1/3）

を施文する。194は器壁が薄く、内面に一条の沈線を巡らせる。

195は白磁小皿である。高台は器壁が薄く、裾がやや開いた形状となる。口径9.4cm、器高2.8cm、高台径3.6cm。南側側溝掘削時出土。196～198は染付磁器である。196は色絵をプリントする小碗である。口径8.6cm。南側側溝掘削時出土。197は外面に花と扇、高台部内面には文字を描く碗である。口径10.4cm、器高5.9cm、高台径4.2cm。198は口縁部が屈曲して大きく開く器形の皿である。内面は帯状に文様を描く。口径15.0cm。南側側溝掘削時出土。

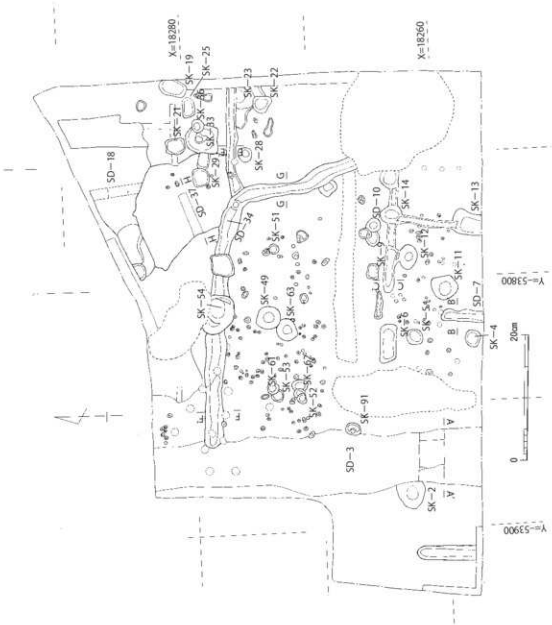
199～202は陶器である。199は無色釉を施釉する碗。体部の丸味が少なく、直線的に開いている。口径12.0cm、器高5.4cm、高台径4.8cm。南側側溝掘削時出土。200は高台径4.4cm。南側側溝掘削時出土。201･202は皿である。201は口縁部下に屈曲部を有す。内面にはハケ目による文様を巡らせる。口径21.2cm、器高6.6cm、高台径3.4cm。南側側溝掘削時出土。202は内面黄褐色、外面薄緑色の釉を施有する。南側側溝掘削時出土。203・204は瓦質焼成の擂鉢である。203は口縁部が若干肥厚し、上端部が水平面をなす。内外面ハケ目調整。204は端部が面をなし、内端部は上方を向く。調整はナデ。遺構検出時出土。205～209は土師質焼成の鍋である。208以外はどれも口縁端部外側を短く伸ばし、上端部に縄の押圧による文様を施文する。調整は内外面ともハケ目調整を行う。206は口径31.2cm。208は口縁部が外側に若干肥厚する程度である。

210～213は石製品である。210は珪質砂岩の砥石である。長さ9.0cm、幅4.5cm、厚さ1.6cm。211は滑石製石鍋の転用品である。中央付近がくぼれているので、石錘として使用したものか。長さ7.1cm、幅5.0cm、厚さ1.7cm。212は玄武岩の円礫である。表面が円滑であるため砥石等に使用したのかもしれない。長さ19.1cm、幅7.6cm、厚さ5.3cm。213は棒状の礫である。端部に剥離痕があるため、敲打に使用したものであろう。長さ14.0cm、幅4.3cm、厚さ3.1cm。

5）小結

蒲船津西ノ内遺跡第5次調査区では、調査区の東端にSD－15、南端にSD－130と、直交する二つの大型の溝があり、大半の遺構はこの区画内に分布する。この区画内では多くの小ピットを検出したが、確実に掘立柱建物と判断できるものはなかった。土坑のうち、SK－16やSK－122は円形に近いプランで深さもあり、井戸かもしれない。

出土遺物では、SK－122からは16世紀頃の染付皿と、口縁部を折り返して肥厚させる鍋および器形の浅い鍋、羽釜が供伴しており、同一時期のものとみて良い。SD－15･130から出土した遺物には、明染付や浅い器形の土師質鍋、羽釜など16世紀頃のものが目立つようだが、他にも鎬蓮弁の青磁碗など13世紀頃の遺物や、刷毛目文様の陶器皿をはじめ幾つかの近世陶磁器といった17世紀代の遺物も少なくない。その他の出土遺物として掲載した中にもやはり13世紀頃の青磁碗や瓦器埦、土師質鍋が多く出土している。遺跡の形成時期は13世紀で、その後17世紀まで継続的に生活が営まれものとみることができる。現時点では、SD－15とSD－130の二つの大型区画溝の掘削時期は13世紀としておきたい。



第79図　蒲船津西ノ内遺跡第6次調査区遺構配置図（1/200）

6　蒲船津西ノ内遺跡　第6次調査

蒲船津西ノ内遺跡第6次調査の発掘調査は、平成20年11月6日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、21年2月17日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西40m、南北34mを測る。遺構面の標高は2.0m～2.2m。遺構は調査区全体に及び、特に中央から北東にかけて密度が高い。

検出した主な遺構は、土坑29基、溝7条である。出土遺物は中・近世の土師器、瓦器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、土製品、石製品である。

1）土坑

SK-2（図版25、第80図）

調査区南西に位置する土坑である。SD－3と重複しており、東側をこれに切られる。遺存する範囲では南北220cm、東西200cmを測る。深さは130cmを測り、壁面の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は暗灰褐色土及び暗灰色土、中層に暗青灰色土、下層に明青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第81図）

1～3は土師器小皿である。1は口径8.4cm、底径7.0cm。器壁が厚く体部は直線的である。2は口径8.6cm、底径3.7cm、3は底径8.0cm。4～7は土師器坏である。4は体部下半が湾曲し、口縁部は外反気味になる。5は器壁が厚く、口縁部付近のみ薄く尖る。6は底径9.4cm。7は体部が外反しながら開くようである。底径9.4cm。8は瓦質焼成の擂鉢である。口縁部は素口縁で端部は面をなす。内面には7条の擂目が見える。

SK-4（図版25、第80図）

調査区南側に位置する円形の土坑である。直径130cm、深さ100cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い傾斜となる。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土及び暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（第81図）

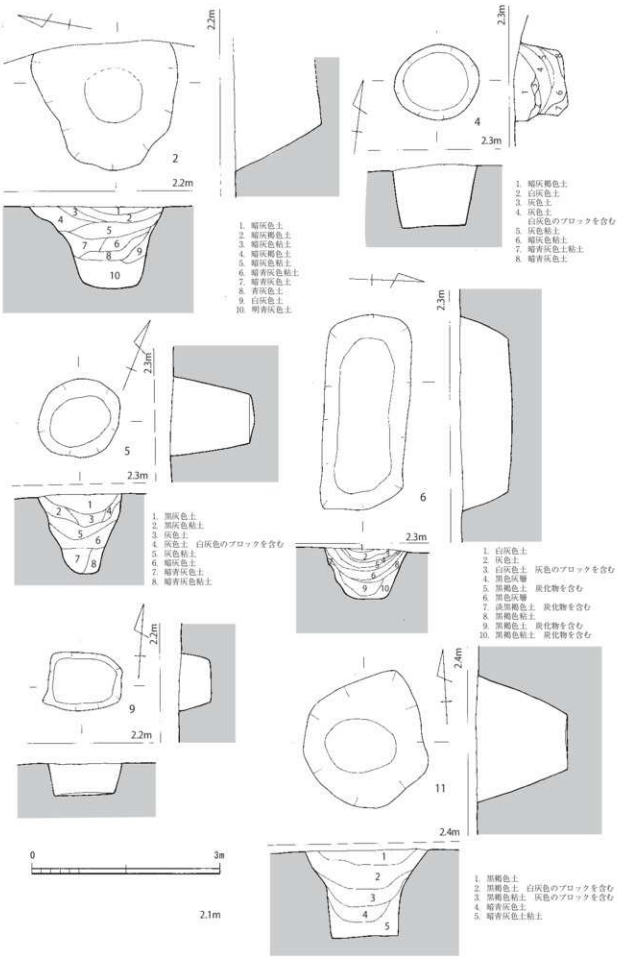
9は土師器小皿である。体部の器壁は厚く、口縁部に向かって薄くなる。口径9.6cm、器高1.7cm、底径8.2cm。10は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁を呈し、上端部は窪んでいる。内面には横方向のハケ目が見られる。

SK-5（図版25、第80図）

調査区の南側にあり、SK－4から4m北側に位置する円形の土坑である。直径120cm、深さ130cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い急傾斜である。覆土は上層に黒灰色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第81図）

11～16は土師器小皿である。11は口径9.6cm、12は体部が丸く内湾する。口径10.0cm。13は口縁部に向けて器壁が薄くなる。口径10.0cm。14はわずかに上げ底の底部となる。口径



第80図　SK－2・4・5・6・9・11実測図（1/60）

10.0cm。15は器壁が薄く、直線的に開く体部となるようである。底径6.6cm。16は底部端が外側にはみ出している。底径7.8cm。17・18は土師器坏である。17は底部端が明瞭な稜を有し、体部はあまり開かずに立ち上がる。口縁部下に一箇所、焼成後穿孔を行う。口径12.4cm、器高3.5cm、底径10.4cm。18もやはり底部端が明瞭な稜を有し、その上がわずかにくびれる。口径13.4cm、器高3.5cm、底径10.4cm。19は土師質焼成の鍋である。体部は直線的に開き、口縁部は玉縁をなす。口縁端部はシャープな面をなす。内外面にハケ目が見られる。口径30.0cm。20は土師質焼成の擂鉢である。口縁部は素口縁でわずかに肥厚する。端部は丸くおさめられる。内面は横ハケ目後に擂目を施す。21は青磁皿である。底径6.8cm。

SK-6（図版26、第80図）

調査区の南側にあり、SK－5から1m北側に位置する隅丸長方形の土坑である。東西に長く、長軸310cm、短軸130cmを測る。底面はほぼ水平で深さは80cmを測り、壁は急な傾斜で立ち上がる。覆土は上層に白灰色土、中層に黒灰色土、下層に炭を多く含んだ黒褐色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第81図）

22～27は土師器小皿である。22は底端部が稜をなさない。口径8.0cm、器高1.2cm、底径6.0cm。23は口径9.2cm。24は器壁が厚く、口縁部に向かって薄くなる。口径9.2cm。25は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開き口縁部は薄く尖る。底部には穿孔が見られる。口径9.6cm。26は体部が丸味を帯びる。口径9.4cm、底径7.0cm。27は底径6.0cm。28～34は土師器坏である。28は体部の器壁が比較的厚く、端部に向かって薄くなる。29は口径13.2cm。30は底端部が明瞭な稜を有し、体部はあまり内湾せずに開く。口径13.0cm。31もやはり底天部が明瞭な稜を有す。口径13.4cm、器高3.4cm、底径10.0cm。32もやはり底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口径13.8cm、器高3.3cm、底径10.0cm。33は底端部の稜が不明瞭で、体部は丸味を帯びて開く。口縁端部は薄く尖っている。口径14.0cm。34は底径9.4cm。35～37は瓦器埦である。35は外面口縁部下に稜を有し、外面にはヘラ磨きがかすかに残る。36は断面方形であまり開かない高台を有す。高台径5.6cm。37は断面台形の小さな高台を有す。体部は丸く開いている。外面高台部内にはヘラ記号状の細い線刻がある。高台径5.8cm。38は須恵質鉢である。口縁部は若干肥厚し、玉縁状を呈す。内外面横ナデ。

SK-9（図版26、第80図）

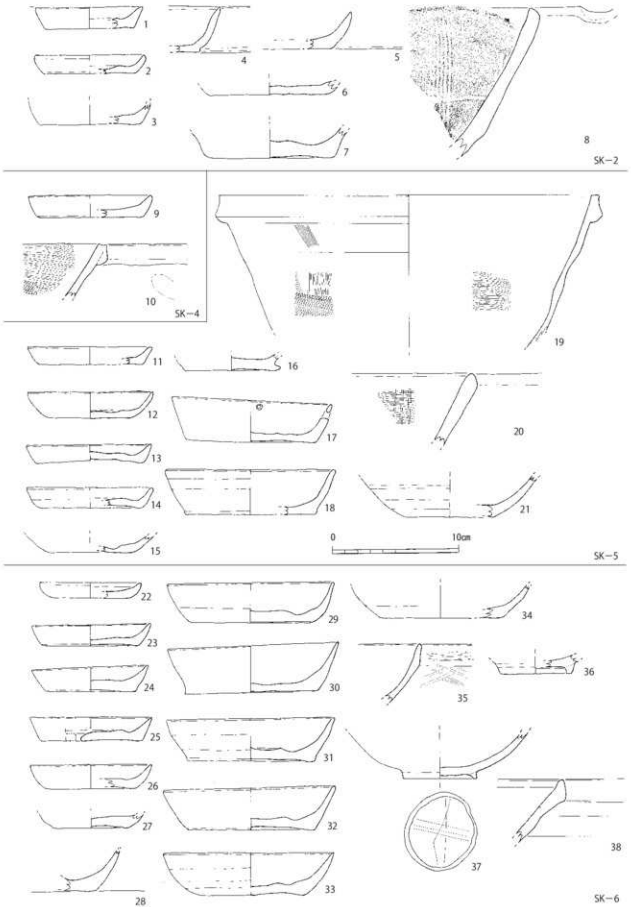
調査区の南側にあり、SK－6から4m東側に位置する方形の土坑である。長軸120cm、短軸90cmを測る。底面はほぼ水平で深さは50cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物（第82図）

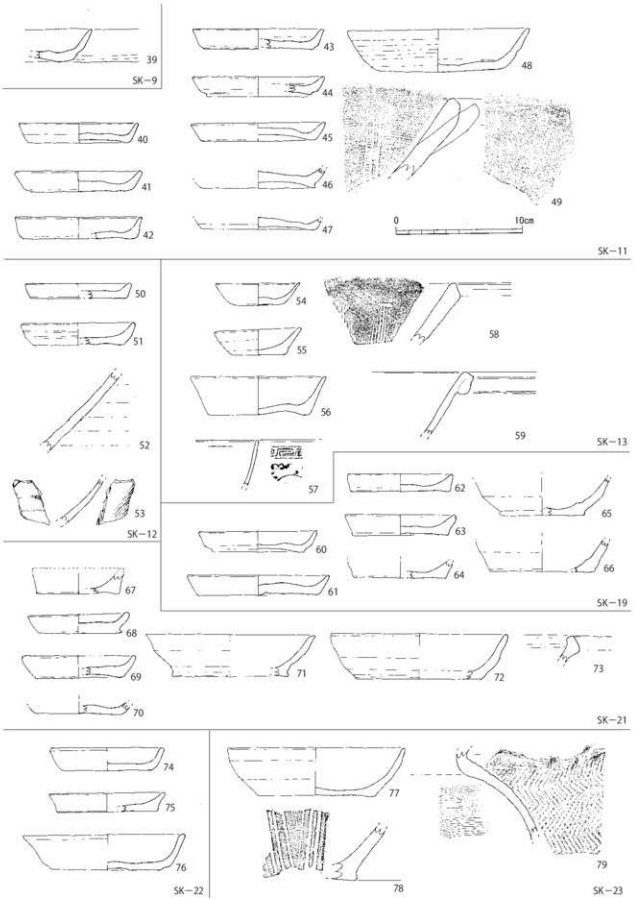
39は土師器坏である。底部はわずかに上げ底となり、口縁部は薄く尖る。

SK-11（図版27、第80図）

調査区の南側にあり、SK－4から3m北東側に位置する土坑である。長軸220cm、短軸200cm、深さは140cmを測る。壁面は急傾斜で立ち上がる。覆土は上層・中層に黒褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。



第 81 図　SK－2・4・5・6 出土遺物実測図（1/3）



第 82 図　SK−9・11・12・13・19・21～23 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版62、第82図）

40～47は土師器小皿である。40は体部が直線的に開く。口径9.4cm、底径7.8cm。41は器壁がやや厚く、口縁部は丸くおさめる。口径10.0cm。42は底端部の稜が不明瞭で、体部があまり開かない器形となる。口径10.0cm、器高1.7cm、底径8.4cm。43は口径10.4cm、底径8.6cm。44は上げ底となるようである。体部の立ち上がりは短い。口径10.4cm、底径8.2cm。45～47は底部が上げ底となる。45は口径10.6cm、底径8.8cm。46は底径9.0cm、47は底径9.0cm。48は土師器坏である。底部端の稜は不明瞭で、体部はあまり丸味を帯びずに開く。器壁は全体的に薄い。外面には整形時の轆轤目が明瞭に残る。口径14.4cm、器高3.3cm、底径9.4cm。49は瓦質焼成の片口擂鉢である。口縁端部は丸くおさめられる。内外面にハケ目調整を行い、内面にはその後擂目を施す。

SK-12（図版27、第83図）

調査区の南側にあり、SK－11から2m北東側に位置する土坑である。東西にやや長い楕円形で、長軸200cm、短軸150cmを測る。深さは170cmを測り、壁は急傾斜で立ち上がる。覆土は上層に黒褐色土、中層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第82図）

50・51は土師器小皿である。50は底端部の稜が明瞭で、体部は短く直線的に立ち上がる。口径8.4cm、底径7.6cm。51は体部が丸味を帯びる。口径9.0cm、底径7.0cm。52は須恵質鉢の体部片である。外面には轆轤目が見られる。53は青磁碗の体部片である。内外面に櫛目による文様が見られる。

SK-13（図版27、第83図）

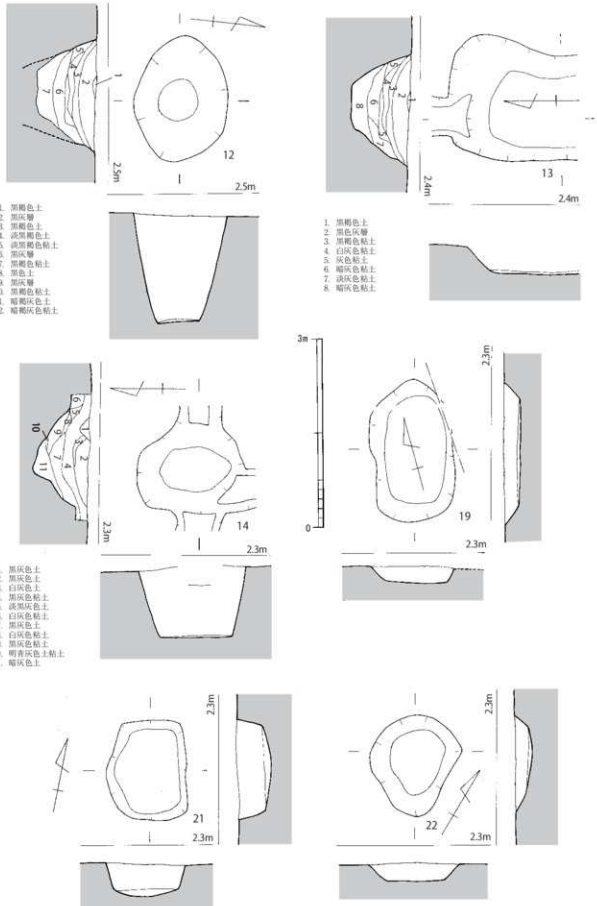
調査区の南側に位置する土坑である。南側が調査区外へと続いており、また北側は溝に接続している。調査した範囲では長軸200cm、短軸180cmの隅丸長方形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは90cmを測り、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に黒褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第82図）

54・55は土師器小皿である。54は底端部の稜が不明瞭で全体的に器壁が薄い。口径6.8cm、器高1.8cm、底径3.6cm。55は器壁がやや厚い。口径7.0cm、器高2.2cm、底径4.2cm。56は体部が直線的に開く。口径10.6cm、器高3.0cm、底径8.0cm。57は染付小碗である。内面には一条の圏線、口縁部外面には雷文を巡らせ、その下には草花文を施文する。58は須恵質擂鉢である。口縁部は端部を窪ませる。59は土師質焼成の鍋である。器壁が薄く、端部は折り返して玉縁状をなす。

SK-14（図版28、第83図）

調査区の南側に位置する土坑である。SD－10と接続しており、重複ではなく一連の遺構と思われる。南北にやや長い楕円形を呈しており、長軸170cm、短軸140cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは110cm、壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は上層・中層に黒灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。



第 83 図　SK－12～14・19・21・22 実測図（1/60）

SK-19（図版28、第83図）

調査区北東隅に位置する土坑である。北東側が調査区外へと続いている。南北に長い楕円形を呈しており、長軸230cm、短軸130cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

出土遺物（第82図）

60～64は土師器小皿である。60は口径9.4cm、底径7.2cm。61は口径11.2cm、底径9.4cm。62は底端部の稜線が明瞭で、体部は器壁が厚く、短く立ち上がる。端部は薄く尖っている。口径8.4cm、底径8.0cm。63は底端部の稜が明瞭で、体部の器壁は厚く、口縁部は丸味を帯びる。口径8.8cm、底径7.6cm。64は底径7.4cm。65・66は土師器坏である。65は底端部が明瞭な稜をもって張り出しており、体部は丸味を帯びて立ち上がる。底径6.6cm。66は底径8.2cm。

SK-21（図版28、第83図）

調査区の北東側、SK－19から4m西に位置する土坑である。南北にやや長い不整長方形を呈しており、長軸160cm、短軸130cm、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。

出土遺物（第82図）

67～70は土師器小皿である。67は体部が直線的であまり開かない器形となる。底径6.6cm。68は口径8.0cm。69は口径9.0cm。70は底径7.0cm。71・72は土師器坏である。71は底端部が明瞭な稜をもって張り出しており、体部は中位で稜を有している。口径13.2cm、底径9.2cm。72は丸味を有した体部となる。口径14.0cm、器高3.6cm、底径10.0cm。73は土師質焼成の鉢である。口縁部は三角形をなしており、端部は丸くおさめられる。

SK-22（第83図）

調査区の東側に位置する土坑である。SK－23と重複しており、これを切って営まれる。長軸160cm、短軸145cmの不整楕円形を呈す。深さは30cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜である。

出土遺物（図版62、第82図）

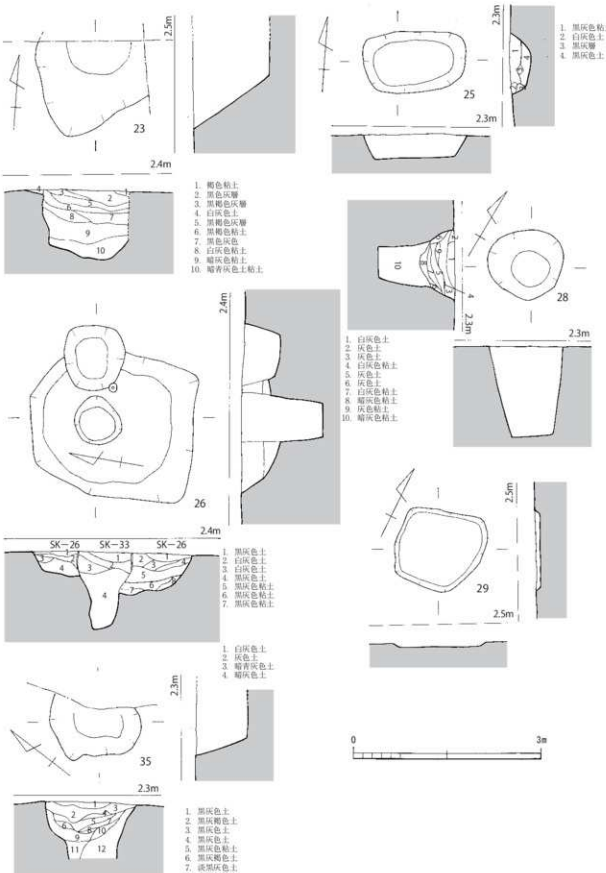
74・75は土師器小皿である。74は口径9.0cm、器高1.8cm、底径7.0cm。75は底端部が明瞭な稜を有し、体部は外反気味に立ち上がる。口径9.0cm、器高1.5cm、底径8.0cm。76は土師器坏である。口径13.6cm、器高2.8cm、底径4.4cm。

SK-23（図版29、第84図）

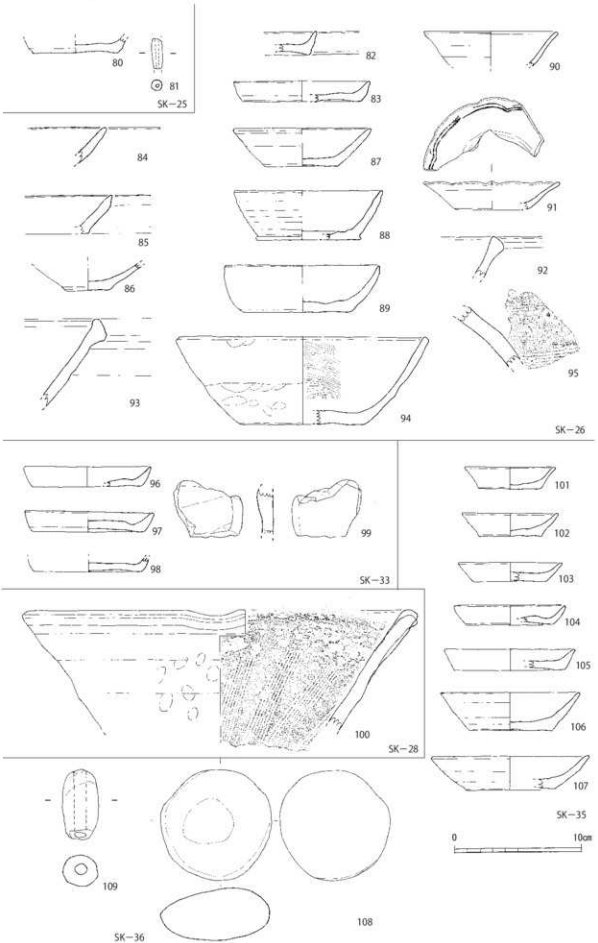
調査区の東側に位置する土坑である。SK－22、SD－24と重複しており、これらに切られる。また東側は調査区外へと続いている。遺存する範囲で、長軸170cm、短軸150cm、深さ120cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜である。覆土は上層に黒灰色土及び黒褐色土、中層に白灰色土及び暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第82図）

77は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有し、体部下半は外反気味に開く。口径14.0cm、底径9.2cm。78は瓦質焼成の擂鉢である。内面の擂目は幅広である。79は瓦質焼成の釜か。



第84図　SK－23・25・26・28・29・33・35・36実測図（1/60）



第85図　SK－25・26・28・33・35・36出土遺物実測図（1/3）

肩部は丸味を有しており、内面には横ハケ目、外面にはタタキが見られる。

SK-25（図版29、第84図）

調査区の東側、SK－19の南西に隣接して位置する土坑である。東西に長い隅丸長方形で、長軸160cm、短軸100cm、深さは40cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。覆土は上層に白灰色土をブロック状に含んだ黒灰色土が堆積し、下層に黒灰色土が堆積する。

出土遺物（第85図）

80は土師器小皿の底部である。底径7.8cm。81は土師質の管状土錘である。長さ24mm、径8mm、孔径2.5mm。

SK-26（第84図）

調査区の東側、SK－21の南側に隣接して位置する土坑である。SK－33、SK－36と重複しており、これらに切られる。長軸260cm、短軸220cmの不整円形を呈しており、底面は中央付近が擂り鉢状に深くなっている。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。深さは60cmを測る。覆土は白灰色土ブロックが混じった黒灰色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第85図）

82･83は土師器小皿である。82は底部が若干上げ底となり、底端部は明瞭な稜を有す。83も同じく底部が若干上げ底で、端部が明瞭な稜を有す。体部の立ち上がりは短く、口縁端部は薄く尖り気味に仕上げる。口径10.6cm、器高1.6cm、底径4.7cm。84～89は土師器坏である。84は口縁部片。85は底端部が明瞭な稜を有し、口縁部は薄く尖り気味に仕上げる。86は底径が3.0cmと小さく、体部は直線的に大きく開く。87は底部がわずかに上げ底となり、底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に大きく開く。口径10.8cm、器高3.0cm、底径6.0cm。88は底端部が外側に少し張り出しており、体部は直線的にあまり開かずに伸びる。体部外面には轆轤目の稜線が明瞭に残る。口径10.6cm、器高4.0cm、底径7.4cm。89は体部が丸味を帯び、あまり開かずに伸びる。口径12.4cm、器高3.7cm、底径9.4cm。90は白磁小皿である。口縁部付近はわずかに外反して大きく開く。口径10.6cm。91は青磁小皿である。体部は外反しながら大きく開き、口縁部は輪花をなす。内面口縁部下には二条の線文が巡る。92～94は鉢である。92は口縁部を断面三角形に肥厚させる瓦質鉢。93も口縁部を断面三角形に肥厚させる須恵質鉢。94は素口縁の瓦質鉢で、端部は面をなす。口径20.0cm、器高6.9cm、底径9.8cm。95は陶器甕であろう。内面は無釉。

SK-28（図版29、第84図）

調査区の東側、SK－26から2m南側に位置する土坑である。直径120cmの円形を呈しており、深さは150cmを測る。壁の立ち上がりは急角度に傾斜する。覆土は上層に白灰色土及び灰色土、中層に白灰色土及び暗灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第85図）

96～98は土師器小皿である。96は口径10.0cm、器高1.6cm、底径8.6cm。97は口径10.0cm、器高1.6cm、底径8.8cm。98は体部があまり開かずに立ち上がるようである。底径8.4cm。99は滑石製石鍋の体部片である。内面にはわずかに整形時の擦痕が残る。また外面には炭化物が付着する。

SK-29（第84図）

調査区の東側にあり、SK－26から2m西に位置する土坑である。長軸140cm、短軸120cmの不整方形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは10cmに満たない。

SK-33（図版30、第84図）

調査区の東側に位置する土坑である。SK－26と重複しており、これを切って営まれる。径70cmの円形を呈しており、深さは130cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に白灰色土、中層・下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版62、第85図）

100は土師質焼成の擂鉢である。体部は直線的に開き、端部は不明瞭な面をなす素口縁である。口縁部には角度の浅い片口を配す。内面の擂目は7条。外面には指圧痕が認められる。口径31.2cm。

SK-35（図版30、第84図）

調査区の東側にある土坑である。SD－34と重複しており、これに切られる。遺存する範囲で、長軸150cm、短軸100cmを測る。深さは80cmを測り、壁の立ち上がりは急角度に傾斜する。覆土は全体的に黒灰色土が堆積する。

出土遺物（第85図）

101～105は土師器小皿である。101は底端部の稜が明瞭で、体部は外反気味に開く。器壁は全体的に薄い。口径7.2cm、器高1.7cm、底径5.0cm。102も101と同様の器形である。口径7.6cm。103は体部が直線的に開く。口径8.2cm。104は体部が内湾気味に開く。口径8.8cm。105は底部から体部下半の器壁が厚く、口縁部付近は薄く尖る。反転復元で図示したため径には不安が残る。口径10.4cm、底径8.8cm。106・107は土師器坏である。106は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に開く。口径11.0cm、器高3.0cm、底径6.4cm。107は体部がわずかに内湾しながら大きく開く。口径12.4cm、器高2.7cm、底径7.0cm。108は玄武岩円礫である。磨石として使用されたものと思われるが、使用痕は明瞭ではない。長さ8.7cm、厚さ4.1cm。

SK-36（図版30、第84図）

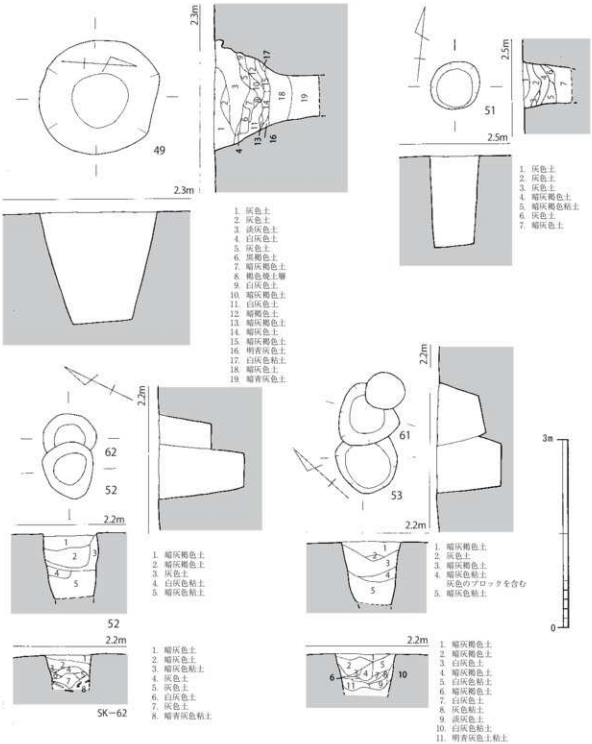
調査区の東側に位置する土坑である。SK－26と重複しており、これを切って営まれる。径100cmの円形を呈しており、深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは急傾斜である。

出土遺物（第85図）

109は土師質焼成の管状土錘である。端部の径が小さく中膨らみの器形となる。長さ5.5cm、径2.8cm、孔径1.0cm。

SK-49（図版31、第86図）

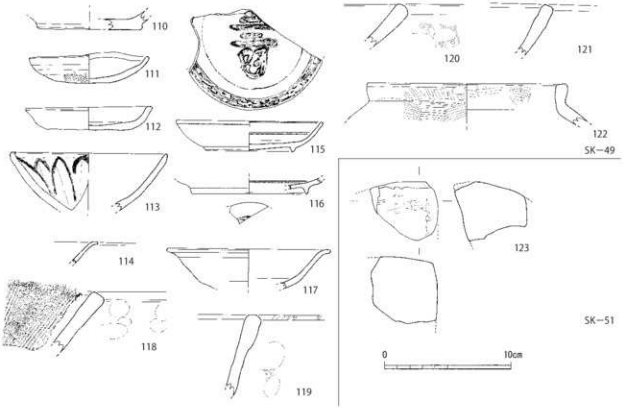
調査区中央付近に位置する土坑である。径200cmの円形を呈し、深さは180cmを測る。壁の立ち上がりは急角度に傾斜する。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰褐色土と白灰色土が細かな層をなして堆積する。下層には暗灰色土、暗青灰色土が堆積する。



第86図　SK－49・51・52・53・61・62実測図（1/60）

出土遺物（図版62、第87図）

110は土師器小皿である。底端部はわずかに外側に張り出している。底径8.4cm。111・112は瓦器小皿である。111は底部が丸く、体部との境目が不明瞭である。外底部にはヘラ磨きが見られる。口径9.6cm、器高2.5cm。112は口径10.0cm、器高1.9cm、底径6.4cm。113は外面に鎬蓮弁を配した青磁碗である。口径12.4cmに復元したが、小片のため不安が残る。114は白磁小皿である。口縁部は外反して大きく開く。器壁は薄い。115・116は染付皿である。115は内面見込みに「寿」の



第87図　SK－49・51出土遺物実測図（1/3）

字を描く。口径11.6cm。116は内外面に圏線を描く。高台径9.2cm。117は灰色釉を施釉した陶器皿である。口縁部は大きく外反する。口径13.0cm。118は須恵質焼成の擂鉢である。端部は明瞭な面をなす。119～121は瓦質焼成の鍋である。119は口縁部がわずかに肥厚する。120は端部が丸味を帯びる。外面には縦ハケ目が見える。121は端部が面をなす。122は瓦質焼成の釜である。口縁部は短く直立し、端部は水平面をなす。内外面にハケ目調整が認められる。口径15.6cm。

SK-51（第86図）

調査区中央付近に位置する土坑である。径80cmの円形を呈し、深さは140cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第87図）

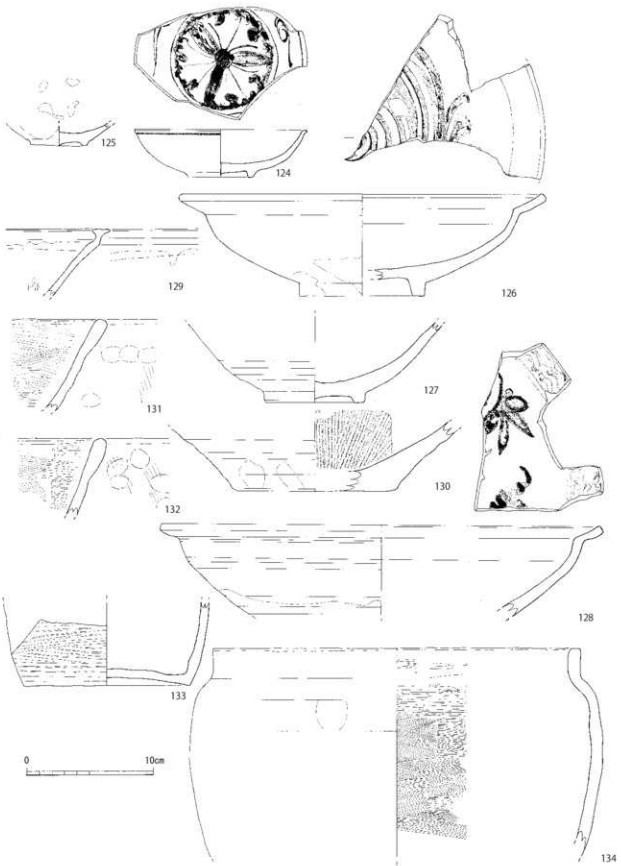
123は砂岩砥石である。小片であるが顕著に使用されており、砥面は平滑である。

SK-52（図版31、第86図）

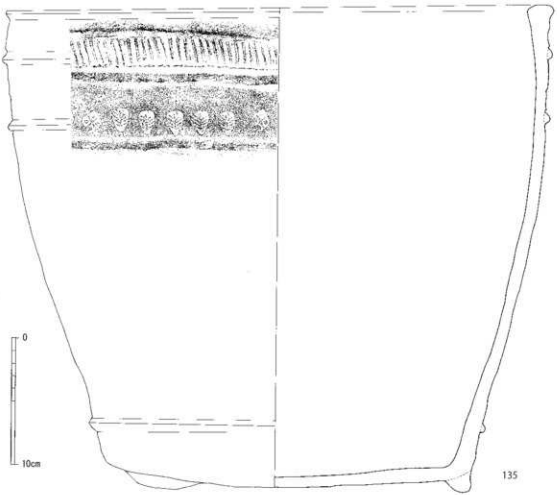
調査区中央付近に位置する土坑である。SK－62と重複しており、これを切って営まれる。長軸90cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さは140cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版63、第88・89図）

124は染付皿である。体部は丸く、口縁端部のみ外側につまみ出す。内面には花文を描く。口径13.6cm、器高3.7cm、底径5.0cm。125は灰色釉を施釉する陶器小皿である。内面には4



第88図 SK－52出土遺物実測図①（1/3）



第 89 図　SK－52 出土遺物実測図②（1/3）

箇所の砂目痕が見られる。高台径 4.6cm。126～128 は陶器皿である。126 の口縁部は屈折して大きく開く。内面には鉄釉と緑色釉で文様を施文する。口径 29.0cm、器高 8.0cm、高台径 10.0cm。127 は褐色釉を施釉する。内面には目痕が残る。高台径 8.0cm。128 は 126 と同様、口縁部が大きく屈折して開く皿である。内面の口縁部には黒褐色の鉄釉で波状のハケ目文を施文し、その内側には白色地に鉄釉、青緑色釉で花文を施文する。口径 35.0cm。129 は鉄釉を施釉する陶器擂鉢である。口縁部下は屈曲し、端部は内外に拡張して水平面を形成する。器壁は薄い。130 も陶器擂鉢である。底径 13.0cm。

131・132 は鍋である。131 は土師質焼成の鍋である。端部は丸味を帯びた素口縁となる。内面には横ハケ目、外面には縦ハケ目が見られる。132 は瓦質焼成で口縁部が若干肥厚する。内面には横ハケ目、外面には縦ハケ目が見られる。133・134 は甕である。133 は底部がわずかに上げ底となり、体部はあまり開かずに立ち上がる陶器甕。外面には粗い横ハケ目が見られる。内面は横ナデ調整を行い、内定部は露胎となる。底径 13.0cm。134 は瓦質焼成の甕である。肩の締まりがあまりなく、口縁部は短く直立し、端部は水平面をなす。体部内面には細かな横ハケ目が見られ、口縁部内面にはヘラ磨き状の横方向の擦痕が見られる。口径 29.0cm。135 は完形

の瓦質火鉢である。底部には三方向に短く丸味を帯びた低い脚が付き、体部は下半がやや締まった器形となる。口縁部付近はわずかに内湾しており、端部は水平面をなす。口縁端部とそのやや下および体部上半と、三条の突帯を巡らせる。口縁部下には縦方向の凹線を帯状に巡らせ、その下には複数の種類のスタンプを横方向に一列施文する。

SK-53（図版32、第86図）

調査区中央付近に位置する土坑である。SK－61と重複しており、これに切られる。径100cmの円形を呈しており、深さは100cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第91図）

136は土師器小皿である。底端部が外側に張り出した形状となる。底径7.0cm。137は土師器坏である。底径8.0cm。138は瓦質焼成の火鉢である。外面の突帯上に複数の印刻が見える。内面ハケ目調整。

SK-54（第90図）

調査区中央付近に位置する土坑である。SD－34と重複しており、これを切って営まれる。また北側は撹乱を受ける。長軸320cm、短軸は遺存する範囲で200cmを測り、東西に長い楕円形を呈す。土坑内部は西側にテラス状の段を有し、このテラスまでの深さは70cm、東側の最深部で170cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第91図）

139は土師器坏である。口径11.8cm、器高2.7cm、底径7.8cm。140・141は青磁碗である。140は内面見込みに半肉彫りの草文が見られる。高台径6.6cm。141は高台部片。高台部外面にまで施釉する。142は白磁皿の口縁部片である。口縁部は大きく外反しており、端部は丸くおさめる。

143・144は口縁部が玉縁状を呈す土師質鍋の口縁部片である。どちらも内面は横ハケ目、外面は横ナデを行う。145は瓦質焼成の擂鉢である。口縁部付近は器壁が若干肥厚し、上端部を丸くつまみ出している。

SK-61（図版32、第86図）

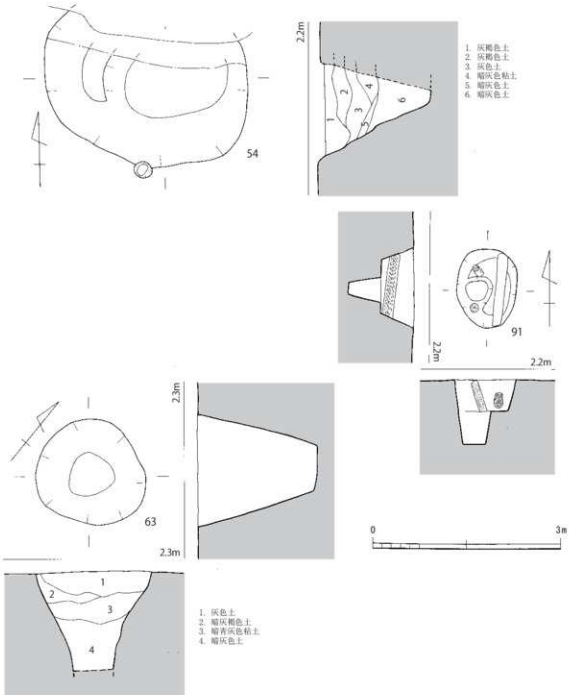
調査区中央付近に位置する土坑である。SK－53と重複しており、これを切って営まれる。また東側は撹乱を受ける。径100cm前後の不整円形を呈しており、深さは75cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に白灰色土、下層に灰色土及び明青灰色土が堆積する。

出土遺物（第91図）

146は土師器坏である。底径9.0cm。147は砥石であろう。長さ2.3cm、幅1.9cm。

SK-62（図版32、第86図）

調査区中央付近に位置する土坑である。SK－52と重複しており、これに切られる。径90cm

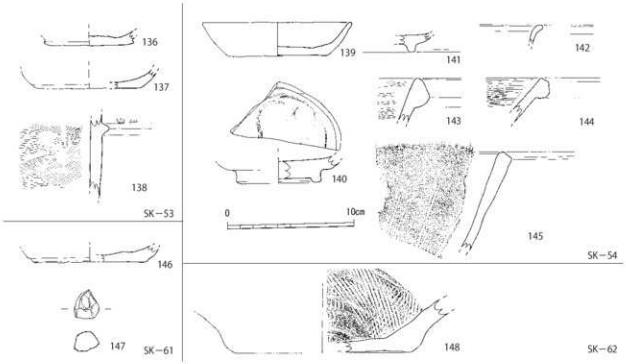


第 90 図　SK－54・63・91 実測図（1/60）

の円形を呈しており、深さは 85cm を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（第 91 図）

148 は陶器擂鉢である。底端部は丸くおさめており、体部は大きく開くようである。内面には太い擂目が密に施される。高台径 14.0cm。



第91図　SK－53・54・61・62出土遺物実測図（1/3）

SK-63（図版33、第90図）

調査区中央付近にあり、SK－49の南側に隣接して位置する土坑である。直径170cmの円形を呈し、深さは190cmを呈す。壁の立ち上がりは急角度で傾斜する。覆土は上層に灰色土、中層に暗灰褐色土及び暗青灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

SK-91（図版33、第90図）

調査区中央付近にある土坑である。SD－3と重複しており、これを切って営まれる。南北に長い楕円形を呈しており、長軸120cm、短軸90cmを測る。底面は西側がピット状に深くなっており、この部分の深さで100cm、東側で50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急角度で傾斜する。土坑内では横に据えた丸太材を1点、縦方向に打ち込んだ丸太材を2点検出した。

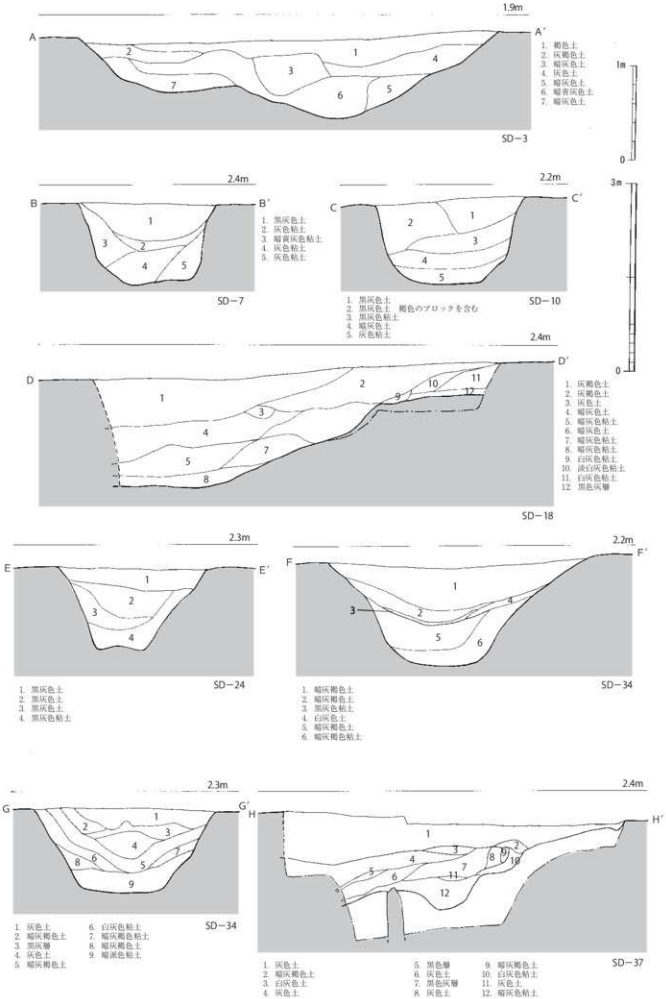
2）溝

SD-3（図版33、第92図）

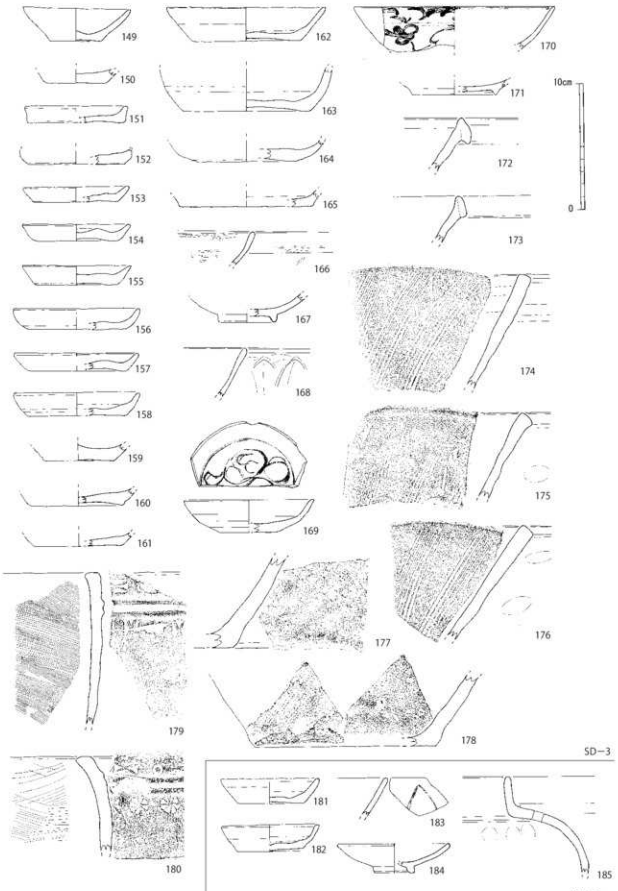
調査区西側に位置し、南北方向に直線的に流れる溝である。検出した範囲で長さ27m、幅は5mを測る。溝の壁面は緩やかに傾斜しており、深さは80cmを測る。覆土は上層に褐色土、中層に暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（図版63、第93図）

149～161は土師器小皿である。149は底部が小さく体部は直線的に開き、長く伸びる器形となる。口径8.2cm、器高2.7cm、底径4.2cm。150は底径4.8cm。151は体部があまり開かず上方に短く伸びる器形となる。口径8.4cm、器高1.3cm、底径7.8cm。152は器壁が厚く、体部が内湾気味に短く立ち上がる。底径7.6cm。153は口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.4cm。154は口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.4cm。155は体部が直線的に開き、口縁端部は薄く尖る。口径8.6cm、器高1.5cm、



第 92 図　SD−3・7・10・18・24・34・37 土層断面実測図（3・18・37 は 1/40，他は 1/20）



第93図 SD−3・7出土遺物実測図（1/3）

底径6.4cm。156は口径10.0cm、器高1.6cm、底径7.8cm。157は口径9.9cm、器高1.4cm、底径7.8cm。158は底端部の稜が明瞭である。口径10.0cm、器高1.8cm、底径7.8cm。159は底径5.4cm、160は底径7.2cm、161は底径7.0cm。162～165は土師器坏である。162は体部が直線的に開く器形となる。口径12.6cm、器高2.7cm、底径8.6cm。163は体部が内湾しあまり開かずに立ち上がる。底径10.0cm。164は底径8.0cm。165は底端部の稜が明瞭である。底径10.6cm。

166・167は瓦器埦である。166は器壁が薄く、口縁部下に不明瞭な稜を有す。内外面ヘラ磨き調整が残る。167は小さく断面三角形の高台を有す。高台径4.4cm。

168は外面に鎬連弁を配した青磁碗である。169は内面見込みに草花文を施文する青白磁皿。口径10.2cm、器高2.6cm、底径4.4cm。170は染付皿である。外面に草花文を描く。口径16.0cm。171は染付皿の底部である。高台径6.6cm。

172・173は鉢である。172は須恵質の鉢。口縁部を折り返してやや垂下した玉縁状に仕上げ、上端部を上方に尖らせる。173は土師質の鉢である。口縁部は薄い玉縁状に仕上げる。174～178は擂鉢である。174～176は瓦質焼成である。174は口縁部付近が若干肥厚し、端部は断面四角形に整形する。内面には6本を一単位とする擂目が施される。175は口縁部のみ若干肥厚し、端部を断面四角形に仕上げる。内面の擂目は6本を一単位とする。176もやはり口縁部を断面四角形に整形する。内面の擂目は6本を一単位とする。177は須恵質焼成である。178は瓦質焼成である。底径14.2cm。

179・180は瓦質焼成の火鉢である。179は口縁部が直立する器形となる。口縁部付近は器壁が若干肥厚し、端部は内側にわずかにつまみ出される。外面の口縁部下には二条の突帯があり、その上下に印刻を列状に配置する。内面は細かい横ハケ目調整を行う。180は口縁部が内湾する。外面口縁部下にはやはり二条の突帯を巡らせ、その上下に印刻を列状に配置する。内面は横ハケ目調整を行う。

SD-7（図版34、第92図）

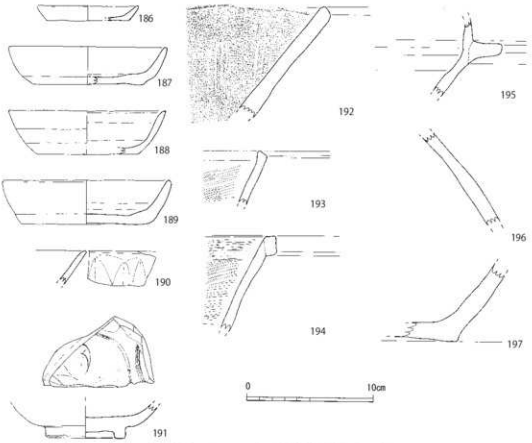
調査区南端に位置し、南北方向に直線的に流れる溝である。南側が調査区外へと伸びており、検出した範囲で長さ3.5m、幅1mを測る。溝の壁面は垂直に近い傾斜で立ち上がっており、深さは40cmを測る。覆土は上層に黒灰色土、中・下層に灰色土が堆積する。

出土遺物（第93図）

181・182は土師器小皿である。どちらも底端部は明瞭な稜を有し、体部はわずかに内湾しながら長く伸びる。181は口径7.8cm、器高2.0cm、底径5.0cm。182は口径7.8cm、器高2.1cm、底径5.4cm。183は外面に蓮弁を配した青磁碗口縁部である。184は高台付小皿である。口径9.0cm、器高2.3cm、高台径3.2cm。185は瓦質焼成の釜である。肩部は丸く張り、口縁部は垂直に立ち上がる。端部は丸くおさめる。肩部に穿孔を有し、菊花文の印刻を行う。

SD-10（図版34、第92図）

調査区南側に位置し、東西方向に直線的に流れる溝である。SK-14と接続し、また東側は大きく攪乱を受ける。検出した範囲で長さ9m、幅80cmを測る。溝の壁面は垂直に近い傾斜で立ち上がっており、深さは40cmを測る。覆土は上層に黒灰色土、下層に暗灰色土及び灰色土が堆積する。



第 94 図　SD－10 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第 94 図）

186 は土師器小皿である。口径 8.0cm、器高 1.2cm、底径 6.4cm。187～189 は土師器坏である。187 は器壁がやや厚く、体部は内湾しながら開く。口径 12.6cm、器高 3.0cm、底径 8.6cm。188 は器壁がやや薄い。口径 12.4cm、器高 3.4cm、底径 8.0cm。189 は器壁が厚い。口径 13.2cm、器高 3.5cm、底径 10.4cm。190・191 は青磁碗である。190 は外面に鎬連弁を配す。191 は内面見込みに草花文を施文する。高台径 6.3cm。

192 は瓦質焼成の擂鉢である。口縁部は丸味を帯びた素口縁となる。内面は横ハケ目後擂目を疎らに施す。193 は須恵質焼成の鉢である。器壁が薄く、口縁部は上端部をわずかにつまみ出す。内面には横ハケ目が見られる。194 は土師質焼成の鉢である。体部は外反しながら開き、断面方形に近い玉縁を有す。内面は横ハケ目調整を行う。195 は土師質焼成の羽釜である。鍔部は短く水平に伸びており、端部は面をなす。外面の鍔部下には炭化物が付着する。196 は陶器甕の肩部片である。197 は須恵質焼成で、甕の底部であろう。内面横ナデ、外面には格子タタキが見られる。

SD-18（第 92 図）

調査区北端に位置する不整形の溝である。SD－37 と重複しており、これを切って営まれる。東西方向で 27m、南北方向で 6m を測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に灰褐色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版 63、第 95～97 図）

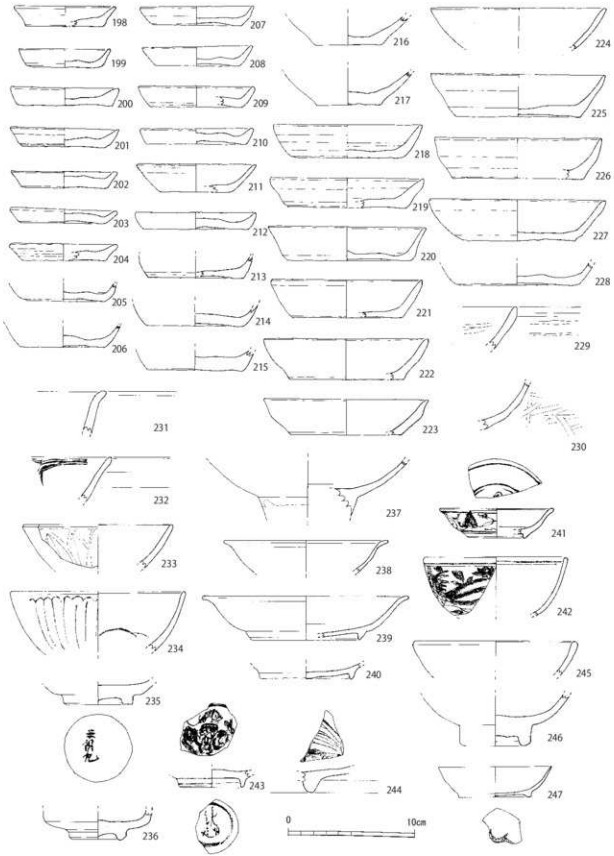
198～215 は土師器小皿である。198 は体部が外反気味に開く。口径 8.0cm、器高 1.6cm、底径

6.4cm。199は口径7.2cm、器高1.5cm、底径6.0cm。200は体部の器壁が厚い。口径8.6cm、器高1.4cm、底径7.4cm。201は口径8.6cm、器高1.5cm、底径6.6cm。202は底部の器壁が厚く体部の立ち上がりが短い。口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.6cm。203は底部が上げ底気味で体部の立ち上がりが短い。口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.8cm。204は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に伸び、外面は轆轤目が明瞭に残る。口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.6cm。205は丸味を帯びた体部となる。底径5.8cm。206は底径6.6cm。207は口径9.0cm、器高1.6cm、底径7.0cm。208は体部が直線的に伸びる。口径8.8cm、器高1.6cm、底径6.4cm。209は口径9.2cm、器高1.6cm、底径7.2cm。210は体部が短く、底部に比べて体部の器壁が厚い。口径9.0cm、器高1.2cm、底径8.0cm。211は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に長く伸びる。口径9.4cm、器高2.2cm、底径5.6cm。212は体部の立ち上がりが短い。口径9.6cm、器高1.3cm、底径8.2cm。213は体部が丸く、あまり開かない器形となる。底径7.4cm。214は底径7.6cm。215は底径7.4cm。

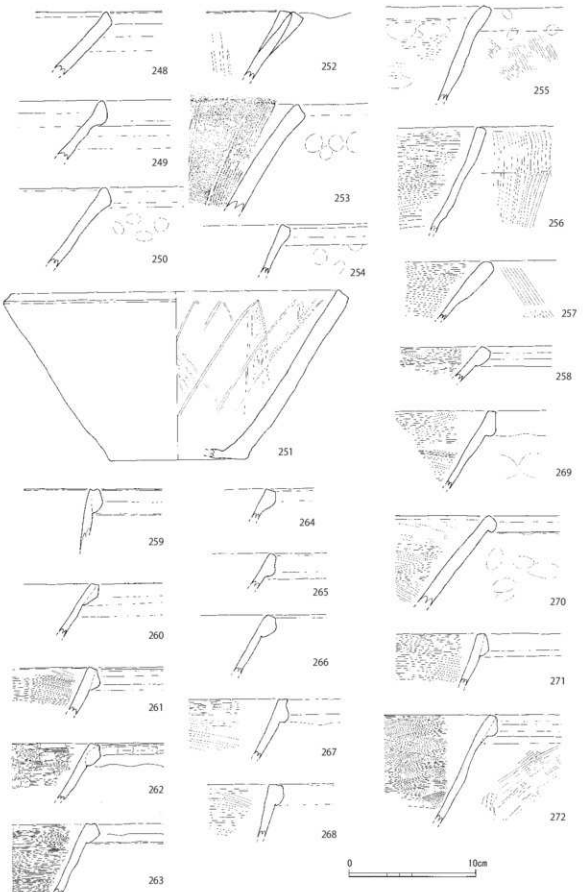
216～228は土師器坏である。216･217は底部が小さく体部が大きく開いた器形となる。216は底径5.2cm、217は5.0cm。218は底端部の稜が不明瞭である。口径11.8cm、器高2.6cm、底径8.0cm。219は体部が外反気味に開き、底部と比べて体部の器壁が厚い。口径12.2cm、器高2.3cm、底径9.4cm。220は体部が外反気味に開き、全体的に器壁が薄い。口径12.4cm、器高2.6cm、底径9.2cm。221は口径12.0cm、器高3.0cm、底径8.8cm。222は口径13.0cm、器高3.2cm、底径9.2cm。223は口径13.0cm、器高2.8cm、底径8.6cm。224は器壁が薄く、わずかに内湾しながら開いており、あるいは埦かもしれない。口径13.8cm。225は口径13.8cm、器高3.4cm、底径9.8cm。226は口縁部付近の器壁が薄く、口縁端部は尖る。口径13.2cm、器高3.2cm、底径10.4cm。227は口径14.0cm、器高3.2cm、底径8.0cm。228は底径8.8cm。229･230は瓦器埦である。229は内外面に横方向のヘラ磨きが見られる口縁部片。230は体部片で、外面にヘラ磨きが見られる。

231～235は青磁碗である。231は端部が外反する口縁部片。232は内面に細い半肉彫りの花文を描く口縁部片。233は鎬蓮弁の碗で、口径12.0cm。234は外面に細い蓮弁を配した碗で、口径14.0cm。235は分厚い底部の碗である。底部外面に「三朗丸」の墨書がある。高台径5.4cm。236は体部下半で屈曲し、体部が上方に立ち上がる器形で、内面は露胎となるため碗ではないようである。高台径4.4cm。237～240は白磁である。237は高い高台となる。高台径6.4cm程度であろう。238は口縁部が大きく外反する小皿である。口径13.0cm。239もやはり口縁部が大きく外反する。口径16.4cm、器高3.5cm、高台径8.4cm。240は高台部の器壁が薄く、小型の皿であろうか。高台径7.2cm。241～244は染付磁器である。241は外面および内面見込みに文様を描く小皿である。口径9.0cm。242は外面に花文を描く碗で、口径11.4cm。243は小型の皿であろうか。内面見込みに花文を描く。高台径10.2cm。244は皿の高台部片であろう。内面には花文らしき文様を描く。245･246は陶器である。245は灰白色釉を施釉する碗。口径13.0cm。246は245と同一個体であろう。高台径5.4cm。247は漆器小椀である。内面には赤漆、外面には黒漆を塗布し、高台内面は破片資料であるため何を描いているのか判明できなかった。口径9.0cm、器高2.4cm、高台径5.8cm。

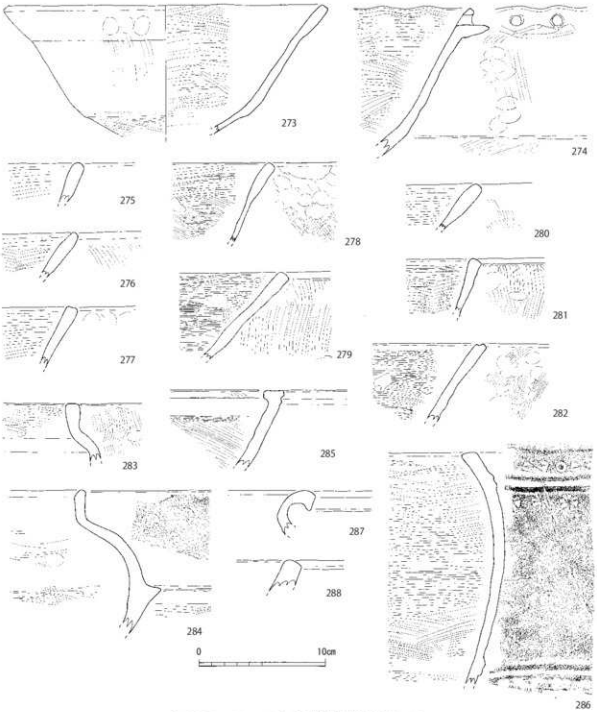
248～250は東播系の須恵質鉢である。248は口縁端部を上方にわずかに尖らせる。249・250は口縁部が若干肥厚し、端部が上方を向く。251～253は瓦質焼成の擂鉢である。251は内面に5条の擂目が確認でき、各擂目を施文する際の工具の移動痕も明瞭に残る。口縁端部は素口縁で明瞭な面をなす。口径27.2cm、器高13.2cm、底径11.0cm。252は片口部片である。端部は明



第 95 図　SD－18 出土遺物実測図①（1/3）



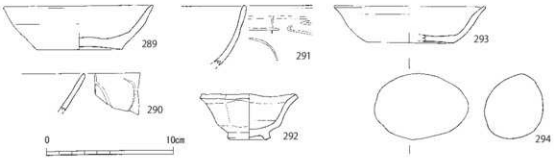
第 96 図　SD－18 出土遺物実測図②（1/3）



第 97 図　SD－18 出土遺物実測図③（1/3）

瞭な面をなす。253 は少なくとも 8 条以上の擂目を施す。口縁端部の稜はあまり明瞭ではない。外面には炭化物が付着する。254～282 は鍋である。

254～272 は土師質焼成の鍋である。254 は口縁端部がわずかに肥厚する。器壁が薄く、外面には炭化物が付着する。255 は口縁部が丸く端部には一条の不明瞭な沈線が巡る。256 は器壁が薄く、端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目を行う。257 は口縁部が長く肥厚する。端部は丸味を帯びる。258～272 は口縁部を折り返して玉縁状に肥厚させる。259 は小片であり傾きに不安が残る。口縁端部は断面三角形状を呈し、端部には強い横ナデを加えて凹線状



第98図　SD－24出土遺物実測図（1/3）

に窪ませる。261～263は内面に細かな横ハケ目調整を行う。264～266は内外面横ナデ調整を行う。267は口縁部の肥厚が端部よりも若干下がった位置にある。270は口縁部の肥厚が短い。273～282は瓦質焼成の鍋である。273は体部が直線的に開き、体部下半および口縁部下に不明瞭な段を有す。口縁部は体部に比べて若干肥厚しており、端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面はハケ目調整後ナデを行う。口径25.6cm。274は口縁部下に長さ6cm、幅1cm程度の横長の耳部を持ち、その上に二つの穿孔を行っている。体部下半には不明瞭な屈曲部を有す。内面横ハケ目、外面縦ハケ目後ナデ。275や276は口縁部付近が若干肥厚し、端部は丸くおさめる。277はあまり肥厚せず、端部は稜が目立たないが面をなす。279は端部が明瞭な面をなす。282は口縁端部に強い横ナデを加えて凹線状を呈す。

283・284は瓦質焼成の釜である。283は口縁部が短く直立し、若干肥厚する。端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。284は肩が強く張り、口縁部は短く直立する。端部は丸味を帯びる。鍔部は短く、断面三角形を呈す。内面は横ハケ目後ナデ、外面は横ナデを行い、肩部には三つで一単位の菊花文の印刻を行う。285・286は瓦質焼成の火鉢である。285は口縁端部が内側に短く水平に伸び、浅い器形となるもので、内面は斜ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。286は体部が若干丸味を帯び、口縁部が内傾する。口縁端部は明瞭な面をなす。外面の口縁部下と体部下方に各2条の突帯を巡らせており、口縁部下の突帯の上下それぞれに印刻を一列施文する。内面は横ハケ目調整を行う。287は瓦質焼成の瓶であろう。口縁部付近は丸く外反しており、口縁部は明瞭な面をなす。288は滑石製石鍋の口縁部片である。

SD-24（第92図）

調査区東側に位置する溝である。東西方向に直線的に伸びており、西側はSD－34に切られ、また東側は調査区外へと伸びている。検出した範囲で長さ8.5m、幅80cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は黒灰色土が堆積する。

出土遺物（図版64、第98図）

289は土師器坏である。底部はわずかに上げ底となり、底端部の稜は明瞭である。口径11.8cm、器高3.5cm、底径6.6cm。290・291は青磁碗である。どちらも外面に細い半肉彫りの文様を施文している。292は型押し整形の白磁小坏である。口径7.8cm、器高3.7cm、高台径3.4cm。293は白磁皿である。口径12.0cm、器高3.0cm、底径6.8cm。294は磨石に使用した思われる円礫であるが、使用痕は顕著ではない。玄武岩製。

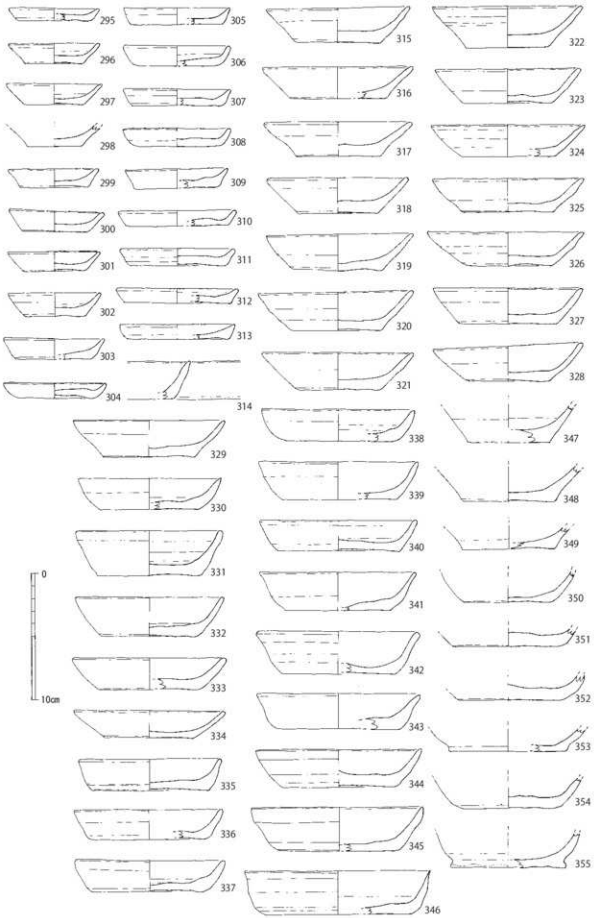
SD-34（図版34・35、第92図）

調査区中央付近に位置する溝である。SK－54と重複しており、これに切られる。東西方向に20mほど直線的に伸び、東側は鈍角に屈折して南北方向に10mほど直線的に伸びる。幅は130cm、深さは50cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は暗灰褐色土が堆積する。

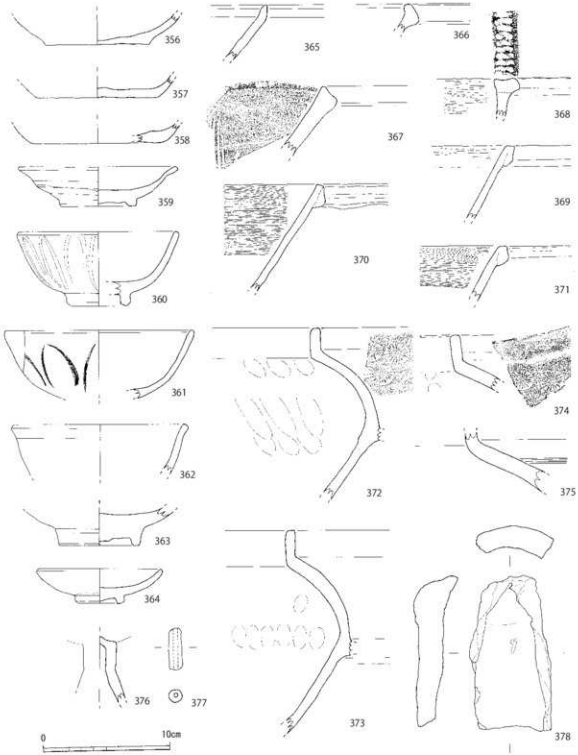
出土遺物（図版64、第99・100図）

295～313は土師器小皿である。295は口径7.2cm、器高1.0cm、底径5.6cm。296は体部が直線的に開き、器高がやや高い。口径7.2cm、器高1.6cm、底径4.6cm。297も296と同形。口径7.6cm、器高1.6cm、底径4.8cm。298は底径4.4cm。299は底部がわずかに上げ底となり、底端部の稜が明瞭である。口径7.4cm、器高1.5cm、底径5.4cm。300は口径7.5cm、器高1.7cm、底径5.0cm。301は口径7.4cm、器高1.4cm、底径5.0cm。302は器高がやや高い。口径7.4cm、器高1.9cm、底径5.6cm。303～309は口径が8cmを超える。303は口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.2cm。304は器高が低い。口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.8cm。305は底端部の稜が明瞭である。口径8.4cm、器高1.3cm、底径7.2cm。306～308は底端部が丸い。口径8.4cm、器高1.6cm、底径6.2cm。307は口径8.4cm、器高1.3cm、底径7.0cm。308は口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.2cm。309は口縁端部の器壁が薄くなる。口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.8cm。310～313は口径が9cmを超える。310は口径9.4cm、器高1.2cm、底径8.0cm。311は口径9.2cm、器高1.4cm、底径7.6cm。312は口径9.8cm、器高1.1cm、底径8.4cm。313は口径9.2cm、器高1.2cm、底径7.8cm。

314～358は土師器坏である。314は小片であり口径不明。315～329は体部が外反気味または直線的に開く。315は底端部に明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。口径11.2cm、器高2.8cm、底径6.5cm。316は口径12.0cm、器高2.5cm、底径7.4cm。317は口径11.8cm、器高2.7cm、底径6.8cm。318は口径11.2cm、器高2.8cm、底径6.2cm。319は口径11.2cm、器高2.9cm、底径7.4cm。320は口径12.3cm、器高3.1cm、底径7.4cm。321は口径12.0cm、器高2.9cm、底径6.4cm。322は器高が高い。口径12.0cm、器高3.2cm、底径6.6cm。323は口径11.8cm、器高2.8cm、底径7.0cm。324は口径12.2cm、器高2.5cm、底径7.4cm。325は口径12.0cm、器高2.5cm、底径7.2cm。326は口径12.6cm、器高2.7cm、底径7.0cm。327は口径11.8cm、器高2.8cm、底径8.0cm。328は口径12.0cm、器高3.0cm、底径6.2cm。329は口径12.0cm、器高2.9cm、底径7.4cm。330は体部が丸味を帯び、口縁部は薄く尖る。口径11.2cm、器高2.4cm、底径7.8cm。331は底端部の稜が明瞭で、体部は高く伸び、口縁端部は小さな平坦面をなす。口径11.6cm、器高3.4cm、底径8.2cm。332もやはり口縁端部が小さな平坦面をなす。口径11.8cm、器高3.1cm、底径7.4cm。333は内面に油煙が付着する。口径12.2cm、器高2.5cm、底径8.0cm。334は器高が低い。口径12.0cm、器高2.1cm、底径7.0cm。335は体部があまり開かずに立ち上がる。口径11.4cm、器高2.5cm、底径9.4cm。336は口径11.8cm、器高2.5cm、底径10.0cm。337は口径11.8cm、器高2.5cm、底径9.0cm。338は底端部の稜が不明瞭である。口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.4cm。339は口径12.6cm、器高3.0cm、底径9.0cm。340は口径12.4cm、器高2.4cm、底径9.6cm。341は口縁端部が若干外反し、端部の器壁が薄くなる。口径12.4cm、器高3.0cm、底径8.4cm。342は口縁端部の器壁が若干厚くなる。口径12.8cm、器高3.4cm、底径8.8cm。343は口径13.0cm、器高2.7cm、底径9.8cm。344は口径13.0cm、器高3.0cm、底径8.8cm。345は口径

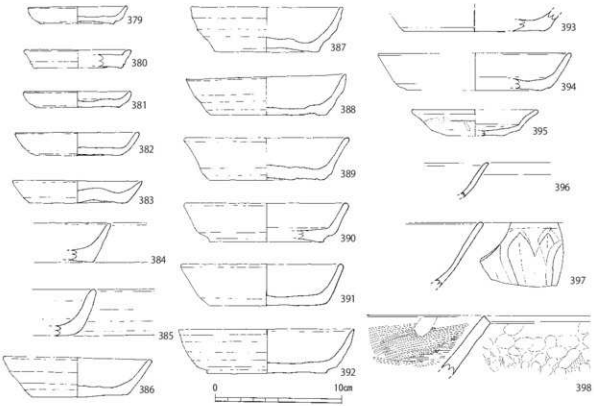


第 99 図　SD－34 出土遺物実測図①（1/3）



第100図　SD－34出土遺物実測図②（1/3）

13.6cm、器高3.5cm、底径9.0cm。346は体部があまり開かずに立ち上がり、口縁端部の器壁が薄く尖る。口径14.6cm、器高3.3cm、底径11.6cm。347～349は底径が小さく、端部は明瞭な稜を有し、体部は直線的に開いて長く伸びるようである。347は底径6.4cm、348は底径7.2cm、349は底径7.4cm。350は体部が丸味を帯びて長く伸びるようである。底径6.8cm。351は底径8.6cm、352は底径8.0cm。353は底端部が明瞭な稜を有す。底径9.4cm。354は底端部の稜が不明瞭である。底径7.2cm。355は底端部が外側に張り出している。体部はあまり開かないようである。底径9.0cm。



第 101 図　SD－37 出土遺物実測図（1/3）

356 は底端部の稜が明瞭である。底径 8.2cm。357 は底径 9.6cm。358 は底径 10.0cm。

359～363 は青磁である。359 は口縁部がわずかに外反する皿である。口径 12.6cm、器高 3.1cm、高台径 6.2cm。360・361 は外面に蓮弁を配した碗である。360 は口径 12.8cm、器高 5.8cm、高台径 5.0cm。361 は口径 15.0cm。362 は口径 14.0cm。363 は底部の器壁が厚い。高台径 6.4cm。364 は白磁小皿である。口径 10.0cm、器高 2.6cm、高台径 3.8cm。

365・366 は須恵質の鉢である。365 は器壁が薄く、口縁端部は立ち上がって上方に尖る。366 は口縁端部を断面三角形に肥厚させる。367 は陶器擂鉢である。口縁端部は断面三角形をなし、上方に尖る。368～371 は土師質焼成の鍋である。368 は口縁端部を肥厚させ、上端部に縄の押圧による施文を行う。内面横ハケ目、外面横ナデ。369 は口縁部を小さな玉縁状に肥厚させる。370 は口縁端部を玉縁状に肥厚させ、上端部は面をなす。体部は直線的に開く。内面横ハケ目、外面ナデ調整で外面には炭化物が付着する。371 は口縁部付近がわずかに外反し、端部は玉縁状に肥厚させる。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。372～374 は瓦質焼成の釜である。372 は口縁部が短く直立し、端部は水平面をなす。肩部には三個の菊花文を印刻する。373 もやはり口縁部が短く直立する。374 は口縁部がわずかに内傾する。肩部には三個の菊花文の印刻が見られる。375 は褐釉を施釉する陶器甕である。肩部には 2 条の沈線を巡らせる。

376 は土師器高坏である。恐らく古墳時代後期のものであろう。混入品。377 は管状土錘である。長さ 3.3cm、径 1.0cm、孔径 3.5mm。378 は恐らく脚状を呈すと思われる土製品である。調整は全面ナデ調整を行う。現状で長さ 12.2cm、幅 6.3cm、厚さ 1.7cm。

SD-37（第92図）

調査区北東側に位置する不整形の溝である。北側をSD－18に切られ、南側はSD－24、34と接続する箇所で切れている。またSK－29とも重複し、これに切られる。長さ8m、幅6m、深さは130cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。土層断面の箇所では垂直に打ち込まれた丸太杭を確認した。

出土遺物（図版64、第101図）

379～383は土師器小皿である。379は口径7.8cm、器高1.3cm、底径6.0cm。380は器壁が厚く、体部が直線的に短く伸びる。口径8.4cm、器高1.4cm、底径7.2cm。381は口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.6cm。382は口径9.8cm、器高1.8cm、底径6.6cm。383は口縁部の器壁が薄く、端部が尖っている。口径10.2cm、器高1.7cm、底径7.6cm。384～394は土師器坏である。384は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に開く。385は底端部が丸く稜をなさない。386は体部が直線的に伸びる。口径11.8cm、器高3.2cm、底径7.0cm。387は体部が長く伸び、深い器形となる。外面には轆轤整形時の稜線が明瞭に残る。口径12.0cm、器高3.6cm、底径8.0cm。388は口径12.8cm、器高3.2cm、底径8.8cm。389は体部が外反する。口径13.0cm、器高3.3cm、底径9.0cm。390は底端部の稜が明瞭である。口径12.8cm、器高3.1cm、底径8.8cm。391は口径13.4cm、器高3.3cm、底径9.0cm。392は底端部の稜が明瞭である。口径13.8cm、器高3.5cm、底径9.4cm。393は底径11.0cm。394は口径15.2cm、器高2.9cm、底径10.8cm。

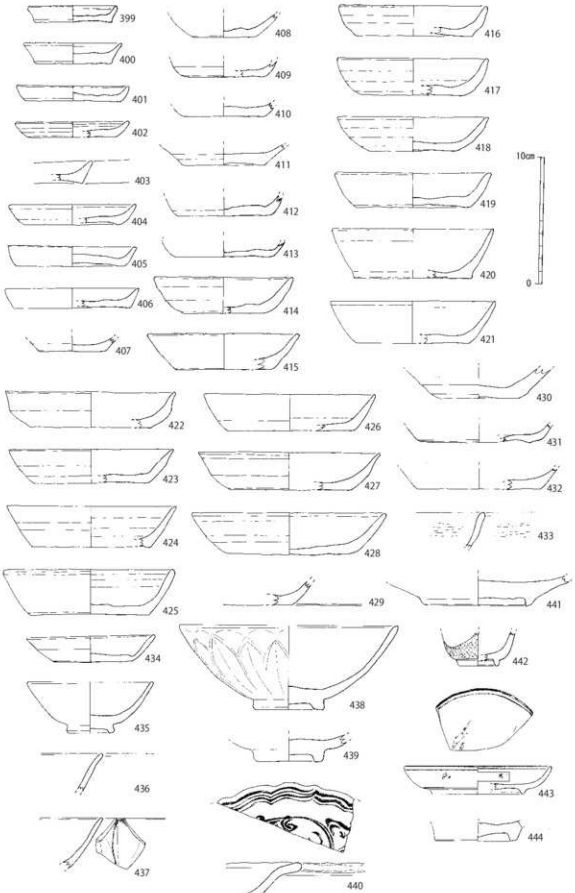
395は青白磁小皿である。体部下半に明瞭な屈曲部を有し、その稜から口縁部にかけて外反しながら大きく開く。口径10.0cm、器高2.0cm、底径4.4cm。396は白磁皿の口縁部である。397は鎬蓮弁の青磁碗である。398は瓦質焼成の鍋である。口縁端部は明瞭な面を有す。内面は横ハケ目、外面には指圧痕が多く残る。

3）その他の出土遺物（図版64・65、第102・103図）

ここで取り上げる遺物については、図示できる物について説明をする。遺構については、性格等が不明である。

399～412は土師器小皿である。399は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に立ち上がる。口径7.0cm、器高1.3cm、底径6.2cm。400も底端部が明瞭な稜を有し、体部が直線的に伸びる。口径6.8cm、器高1.6cm、底径6.2cm。401は体部があまり開かない。口径8.8cm、器高1.2cm、底径7.4cm。402は口径9.0cm、器高1.2cm、底径7.0cm。403は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に伸びる。404は口径10.0cm、器高1.6cm、底径7.6cm。遺構検出時に出土。405は口径10.2cm、器高1.6cm、底径8.6cm。406は体部が直線的に伸び、口縁部は器壁が薄く、尖り気味に仕上げる。口径10.6cm、器高1.5cm、底径9.2cm。407は底径5.2cm。408は底径4.8cm。409は底径6.0cm。410は底径6.4cm。411は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。底径6.4cm。412は体部があまり開かない器形となる。底径7.0cm。413は瓦器小皿である。底径7.0cm。

414～432は土師器坏である。414は口径11.0cm、器高2.8cm、底径6.4cm。415は体部が直線的に開く。口径12.0cm、器高2.8cm、底径7.6cm。416は口径11.8cm、器高2.4cm、底径9.2cm。417は底端部が丸く、体部はあまり開かない。口径12.0cm、器高2.9cm、底径8.0cm。



第 102 図　その他の出土遺物実測図①（1/3）

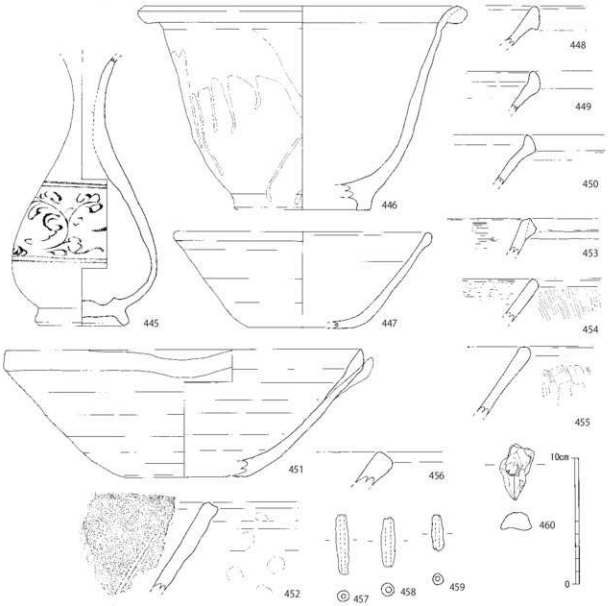
418は口径12.0cm、器高2.7cm、底径6.8cm。419は口径12.4cm、器高2.7cm、底径9.0cm。420は底端部の稜が明瞭で、体部は直線的に長く伸びる。口径12.8cm、器高3.9cm、底径9.4cm。421は口径13.0cm、器高3.3cm、底径8.8cm。遺構検出時出土。422は口縁部が外反する。口径13.4cm、器高2.8cm、底径9.4cm。423は口径13.0cm、器高2.7cm、底径8.8cm。424は体部が直線的に開く。口径13.4cm、器高3.2cm、底径9.4cm。425は口径13.8cm、器高3.6cm、底径9.6cm。遺構検出時出土。426は口縁部の器壁が薄く、端部が尖る。口径13.4cm、器高3.1cm、底径9.6cm。427は口縁部の器壁が薄く、外反する。口径14.4cm、器高2.9cm、底径9.4cm。428は口径15.4cm、器高3.3cm、底径9.6cm。429・430は底径6.2cm。431は器壁が薄い。底径8.0cm。432は底径9.6cm。

433は瓦器埦の口縁部片である。口縁部は若干器壁が厚くなる。内外面に横ヘラ磨きが見える。

434～441は青磁である。434は青磁小皿である。体部は直線的に開く。口径10.2cm、器高2.2cm、底径5.8cm。435は青磁碗である。口径10.0cm、器高4.0cm、高台径3.8cm。南側トレンチ出土。436は口縁部付近がわずかに外反する。437・438は鎬蓮弁の青磁碗である。437・438は口径17.4cm、器高6.6cm、高台径5.6cm。439は碗の高台部片である。440は青磁皿である。口縁部は屈折して大きく開き、端部は輪花にする。内面には草花文を半肉彫りで行う。遺構検出時出土。441は青磁皿の底部片である。高台径8.8cm。442～445は染付磁器である。442は外面に網目を描く猪口。高台径3.4cm。443は内外面に小さな花文を描き、口縁端部下に圏線を巡らせる皿である。口径11.6cm、器高2.2cm、高台径7.2cm。444は高台径9.0cm。

445は青磁瓶である。外面肩部の二重の圏線で仕切られた中に花文を描く。口縁部を欠失するが、現状で器高21.0cm、胴部径11.0cm、高台径7.4cm。遺構検出時、調査区東端から出土。446は陶器鉢である。体部はあまり開かずに立ち上がり、口縁部は玉縁を形成する。外面には鉄釉地に灰色釉を流し掛けする。口径26.0cm、器高19.0cm、高台径10.8cm。447～450は須恵質の鉢である。447は体部が直線的に開き、口縁端部はわずかに肥厚する。口径20.4cm、器高7.5cm、底径8.0cm。448はやや垂下した玉縁状の口縁となる。449は口縁端部が断面三角形を呈し、端部内面に強い横ナデを加える。450も449と同じような口縁部の形状となる。451は瓦質焼成の片口鉢である。体部は直線的に開き、端部は断面三角形状にわずかに肥厚する。口径28.4cm、器高10.0cm、底径9.6cm。452は瓦質焼成の擂鉢である。口縁端部は面を形成する。内面には粗い擂目が施される。外面には指圧痕が残る。453は土師質焼成の鍋である。口縁部は三角形に肥厚し、上端部は強い横ナデを加えて面を形成する。内面には横ハケ目が見られる。454・455は瓦質焼成の鍋である。どちらも口縁部は素口縁で端部を丸く仕上げる。454は内面横ハケ目、外面縦ハケ目を行う。455は内面横ナデ、外面縦ハケ目を行う。456は瓦質焼成で、器壁がかなり厚く、鉢か。調整は横ナデを行う。

457～459は土師質焼成管状土錘である。457は長さ4.7cm、径1.0cm、孔径0.3cm。458は長さ3.8cm、径1.1cm、孔径0.4cm。459は長さ2.8cm、径0.9cm、孔径0.3cm。460は熔石である。長さ4.4cm、幅2.5cm。



第103図　その他の出土遺物実測図②（1/3）

4）小結

蒲船津西ノ内遺跡第6次調査では、遺構密度はそれほど高くはないが、調査区全体に遺構の分布が確認された。検出した遺構のうち、SD－3は敷地を区画するための大溝、それ以外の東西、南北方向に直線的に伸びる小溝は、区画内をさらに細かく区画する小区画溝であろう。小ピットや土坑は、鈍角に曲がるSD－34の区画内にあり、SD－34で仕切られた区画内が敷地として利用されたものと思われる。

土坑は比較的浅いものが多く、他の調査区で見られたような井戸と思われる深い形状のものは無いようである。整った円形や長方形のものは少なく、楕円形や不整形のものが目立つ。使用目的を明確にするのは難しいが、少なくとも廃絶段階には廃棄土坑として使用されたようである。

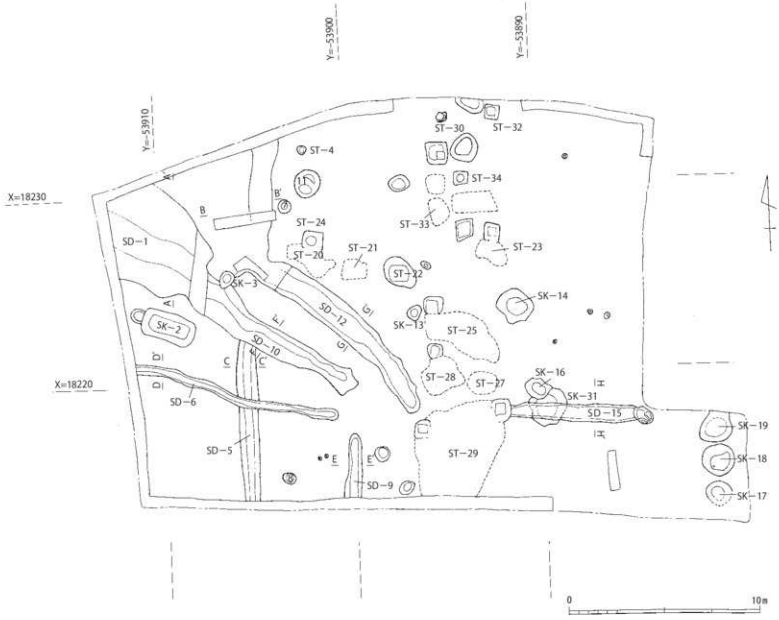
出土遺物を見ると、SK−5から出土した土師器小皿は口径9.6cm～10cm、土師器坏は口径12.4cm～13.4cmで比較的均一な大きさである。SK−6から出土した土師器小皿は口径8.0cm～9.4cm、坏は口径13.0cm～14.0cmを測り、SK−5とほぼ同時期のものと思われる。SK−6には少量の瓦器埦や東播系須恵質鉢を伴っている。どちらも13世紀代のものである。SK−11出土土師器小皿は口径9.4cm～10.6cmで、やはりSK−5やSK−6と同時期であろう。SK−49からは瓦器小皿や鎬蓮弁の青磁埦とともに近世染付皿や陶器皿も出土しており、混入したものと思われる。SK−52からは17世紀中頃の染付磁器に加えて、ほぼ同時期と思われる陶器皿、鍋、桶状の瓦質火鉢が供伴する。

溝では、SD−3から出土した土師器小皿には体部が直線的に開くものと、浅い器形のものがあり、浅い器形のものは口径8.4cm～8.6cmと、口径9.9cm～10.0cmとに二分できるようである。これらに加えて、瓦器埦や鎬蓮弁の青磁碗、東播系須恵質鉢が供伴する一方で、桶状を呈する瓦質火鉢や瓦質擂鉢、近世染付皿も出土しており、出土遺物にはかなり時期幅があるようである。SD−18から出土した土師器小皿は口径8.0cm～9.6cm、坏は11.8cm～14.0cmと大きさに若干幅があるようである。供伴する遺物のうち、瓦器埦、高い高台の白磁碗、鎬蓮弁の青磁碗、内面に分割線を配した青磁碗などは13世紀に見られるものであり、細い蓮弁の青磁碗や器壁の薄い白磁皿、明染付などは16世紀頃のものである。雑器のうち、東播系須恵質鉢や口縁部を玉縁状に肥厚させる土師質鍋などは前者に、素口縁で浅い器形の鍋や瓦質焼成の釜、丸味を帯びた器形の火鉢などは後者の時期に属するものであろう。SD−18出土遺物は大きく13世紀と16世紀に二分されるようである。SD−34からは多くの遺物が出土しており、土師器小皿は体部が直線的に開くものと短く伸びるものに二分される。口径は7.2cm～8.2cmにおさまるものが大半だが、一部口径9.2cm～9.8cmと若干大きめなものも見られた。坏も小皿と同様、体部が直線的に開くものとあまり開かないものに二分され、前者の方が多い。口径は11.2cm～13.0cmの間におさまるものが多く、中には口径14.6cmを測る大きめの坏もあった。青磁碗には鎬のない蓮弁のものや無文のものがあるが、これらは13世紀に見られるものである。東播系須恵質鉢や口縁上端部に縄目押圧を行う鍋はこの時期のものである。口縁部が玉縁状に肥厚する鍋や瓦質焼成の釜も同時期か。SD−37から出土した土師器小皿は口径7.8cm～10.2cmとばらつきがある。坏は11.8cm～13.8cmを測り、中には口径15.2cmと大きめのものも見られる。他に青白磁小皿や鎬蓮弁の青磁碗もある。

出土遺物から遺跡の形成過程をみると、最も遡る13世紀に位置付けられる遺構には、SK−5・6・11などがある。遺物の量からみると13世紀代の遺物が圧倒的に多く、多くの遺構がこの時期に形成されたものと思われる。溝ではSD−34出土遺物は13世紀のものが大半であり、16世紀の遺物は混入品とみてよいだろう。大型溝のSD−3やSD−18からも13世紀の遺物が数多く出土しており、掘削の時期をこの頃に置いても良いように思われる。

その後、14世紀から16世紀の遺物は若干量SD−18から出土している程度である。近世の遺物もそれほど多くはなく、SD−3やSD−37に混入したような状態で出土した程度だが、唯一SK−52からは17世紀中葉の遺物がまとまって出土している。

今回の調査の結果、当調査区は13世紀を中心に遺構が形成され、その後少量の遺物の出土はあるものの主要な遺構は形成されず、大型の区画溝は継続的に機能していたが、17世紀には再び土坑が掘削された、という経緯であることが明らかになった。



第 104 図　蒲船津西ノ内遺跡第 7 次調査区遺構配置図（1/200）

7　蒲船津西ノ内遺跡　第7次調査

蒲船津西ノ内遺跡第7次調査の発掘調査は、平成20年11月17日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い全体の遺構配置図を作成、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、12月10日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西32m、南北22mを測る。遺構面の標高は2.0m～2.2m。遺構は調査区全体に及ぶが、溝は主に西半部に位置し、土坑は北東部以外の全域に分布する。また、中央付近から北側にかけて近世墓、近代墓が分布する。

検出した主な遺構は、土坑10基、溝6条である。出土遺物は中世の土師器、瓦器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、石製品、木製品の他、近世・近代墓に伴う陶磁器類も多く出土している。

1）土坑

SK-2（図版38、第105図）

調査区西側に位置する土坑である。東西に長い隅丸長方形を呈しており、長軸280cm、短軸140cmを測る。底面はほぼ水平で、深さは100cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜である。覆土は上層に白灰色土、中層に灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（第107図）

1は土師器小皿である。底端部の稜は不明瞭で、体部は直線的に開く。口径9.4cm、器高1.9cm、底径6.4cm。2は青磁碗である。内面見込みには一条の圏線を巡らせ、重ね焼きの目跡が残る。高台部径6.0cm。3は須恵質鉢である。底径8.4cm。

SK-3（図版38、第105図）

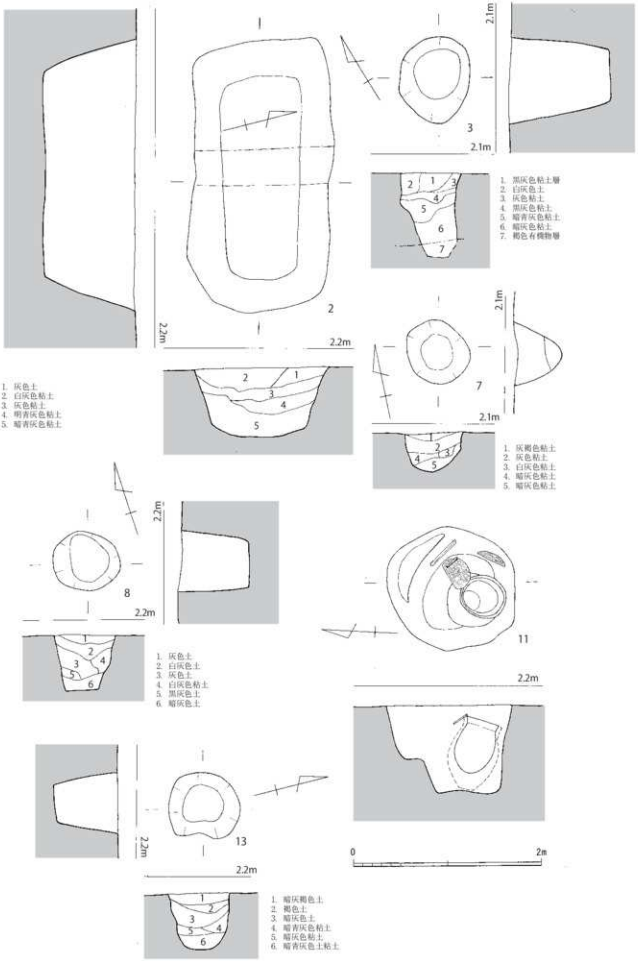
調査区西側に位置する土坑である。SD－10と重複しており、これを切って営まれる。長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈しており、深さは110cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜である。覆土は上層に黒灰色土及び白灰色土、中層に黒灰色土及び暗青灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版65、第107図）

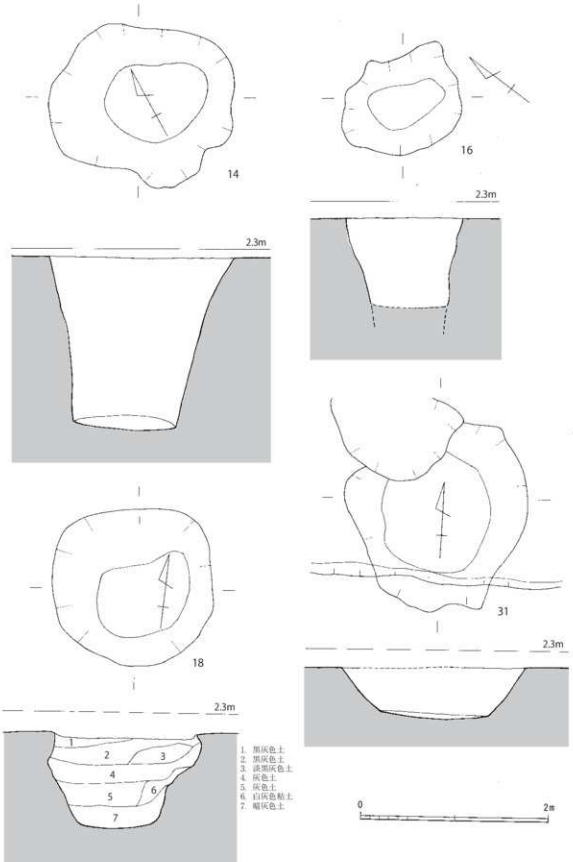
4・5は土師器小皿である。どちらも器壁が薄く、体部は若干内湾しながら長く伸びる。4は口径7.6cm、器高2.0cm、底径2.3cm。5は口径7.8cm、器高2.0cm、底径4.4cm。6～10は土師質焼成の鍋である。6はわずかに肥厚する口縁部で、上端部は横ナデを加えて小さな平坦面をなす。調整は内外面横ナデ。7・8は体部が直線的に開き、口縁部は垂下した玉縁状をなす。上端部は強い横ナデを加えて浅い凹面を形成する。内面は密な横ハケ目、外面は横ナデを行い、7には先行する縦ハケ目が残る。7は口径34.2cm。8は34.4cm。9・10は鍋の底部である。どちらも端部は丸く、稜をなさない。9の内面には炭化物が付着し、10は外面にハケ目調整が残り、外面に炭化物が付着する。

SK-7（図版38、第105図）

調査区中央付近に位置する土坑である。長軸70cm、短軸60cmの楕円形を呈しており、深さ



第 105 図　SK－2・3・7・8・11・13 実測図（1/40）



第 106 図　SK－14・16・18・31 実測図（1/40）

は50cmを測る。底部は丸く、壁は擂り鉢状に底部へと向かっており、比較的急な傾斜となる。覆土は上層に灰褐色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

SK-8（図版39、第105図）

調査区南側に位置する土坑である。長軸70cm、短軸60cmの楕円形を呈しており、深さは70cmを測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜となる。覆土は上層・中層に灰色土及び白灰色土、下層に黒灰色土及び暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第107図）

11は土師器坏である。底端部に明瞭な稜を有す。底径8.4cm。

SK-11（図版39、第105図）

調査区中央付近にあり、SK－7から1m北東に位置する土坑である。長軸120cm、短軸150cmの南北にやや長い楕円形を呈している。土坑内部は北側にテラスがあり、ここまでの深さは60cm、南側が深く、90cmを測る。土坑内部には口縁部を上に向けた陶器甕が南にやや傾いた状態で見つかっており、口縁部の近くには木製の蓋も見つかったことから、甕を使用した土葬墓であることが判る。覆土は暗灰色土が混ざった灰色土で、全く締まりがないことから、近代以降に改装された後に埋め戻されたものと思われる。

SK-13（図版39、第105図）

調査区中央付近にある土坑である。長軸70cm、短軸60cmの不整楕円形を呈し、深さは70cmを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に暗灰色土、下層に暗青灰色土が堆積する。

出土遺物（第107図）

12・13は土師器小皿である。12は底端部が丸く稜をなさず、体部の立ち上がりは短い。端部の器壁は薄く尖る。口径8.8cm、器高1.2cm、底径5.8cm。13は体部が直線的に開く。口径8.8cm、器高1.7cm、底径7.0cm。

SK-14（図版40、第106図）

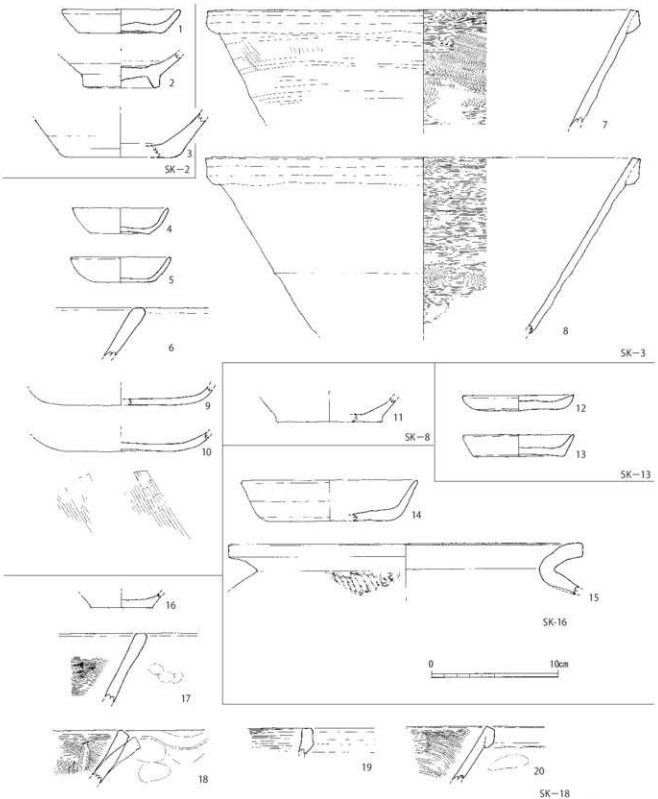
調査区中央付近にある土坑である。長軸200cm、短軸150cmの不整楕円形を呈しており、底面までの深さは180cmを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

SK-16（図版40、第106図）

調査区東側に位置する土坑である。SK－31と重複しており、これを切って営まれる。長軸130cm、短軸100cmの不整楕円形を呈しており、土坑内部は100cmの深さまでしか検出できなかった。壁の立ち上がりは垂直に近い急な傾斜である。

出土遺物（第107図）

14は土師器坏である。底端部は丸く稜をなさず、体部は直線的に開く。口径14.0cm、器高3.2cm、底径9.6cm。15は瓦質焼成の甕である。頸部はあまり締まらず、口縁部は大きく外反する。端部は面をなす。口径28.0cm。



第 107 図　SK－2・3・8・13・16・18 出土遺物実測図（1/3）

SK-18（図版40、第106図）

調査区南東に位置する土坑である。平面形は直径170cmの円形を呈しており、底面までの深さは100cmを測る。壁はいびつな面をなして急傾斜で立ち上がる。覆土は上層に黒灰色土、中層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（第107図）

16は土師器小皿である。底端部には明瞭な稜を有す。底径4.8cm。17は瓦質焼成の擂鉢である。口縁端部は不明瞭な面を有し、内面は横ハケ目後擂目を施す。外面は横ナデを行い、指圧痕が残る。18は片口となる土師質焼成の擂鉢である。内面は横ハケ目後擂目を施す。外面は横ナデ調整で指圧痕が残る。19・20は土師質焼成の鍋である。19は直立気味の口縁部で、端部は小さな玉縁状を呈す。上端部は面をなす。20もやはり玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SK-31（図版41、第106図）

調査区東側に位置する土坑である。SK－16、SD－15と重複しており、これらに切られる。平面形は長軸210cm、短軸180cmの不整楕円形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは60cmを測る。

2）溝

SD-1（図版41、42、第108図）

調査区北西に位置する溝である。幅は約10mを測り、南東側はSD－10、SD－12に続いている。異なる溝の重複とも考えられるが、検出時には確認できなかったため同一遺構として扱った。西側の南北土層を確認すると、壁の立ち上がりは緩やかで底部は平坦面をなさず、覆土は上層には黒灰色土、灰色土、白灰色土が薄い層をなして堆積しており、下層には暗灰色土が厚く堆積する。東側の東西土層を確認すると、壁の立ち上がりはやはり緩やかで底部は平坦面をなさず、覆土は上層に明灰褐色土、中層に灰色土及び白灰色土、下層に暗灰色土及び暗青灰色土が堆積する。

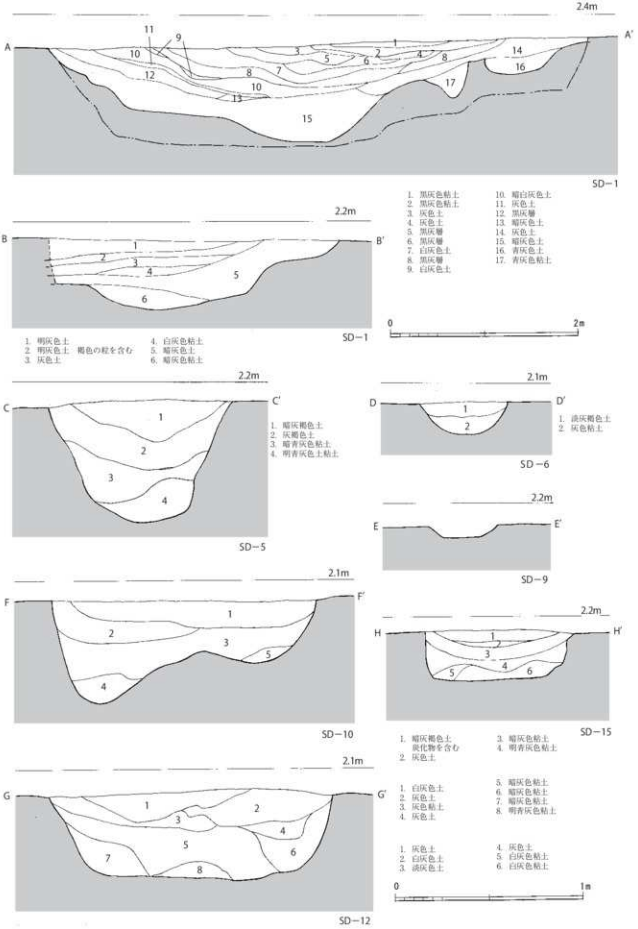
出土遺物（図版65・66、第109～111図）

1～90はAトレンチ黒灰色土層出土である。

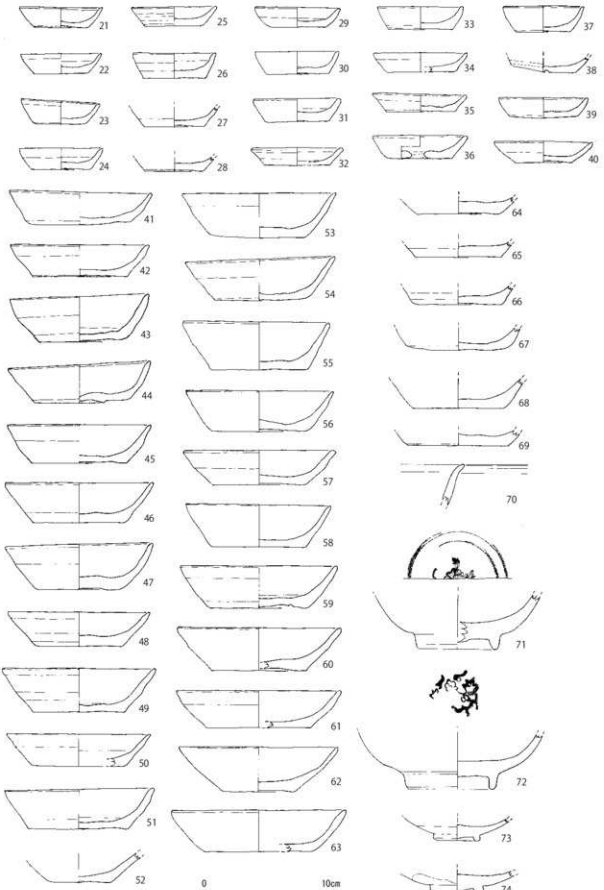
21～40は土師器小皿である。全て底部の稜が比較的明瞭で、体部は直線的あるいは若干内湾しながら伸びており、あまり開かない。口縁端部は丸くおさめるものと器壁が薄く尖り気味に仕上げるものとがある。口径は6.6～7.8cm、器高は1.3～2.0cm、底径は4.0～5.2cm。36は底部に焼成前穿孔を行う。38は底部の形状がかなりいびつである。

41～69は土師器坏である。どれも底端部の稜が比較的明瞭で、体部は直線的または若干内湾しながら、あまり開かずに伸びており、口縁端部は器壁が若干薄くなって尖り気味のものもあるが、多くは口縁端部を丸くおさめる。口径は11.2～13.8cm、器高は2.5～3.3cm、底径は6.2～8.6cm。52は底径が5.0cmと他と比べてかなり小さい。

70～72は青磁碗である。70は口縁端部が外反する。71は内面見込みに圏線と、その内側に花文を施文する。釉は高台にまで施釉されている。高台径6.4cm。72は内面見込みに文様を印刻する。高台径8.0cm。73は白磁碗である。高台は低く、体部は大きく開くようである。高台



第 108 図　SD－1・5・6・9・10・12・15 土層断面実測図（1/20・1/40）



第109図　SD－1出土遺物実測図①（1/3）

径4.0cm。74は陶器碗である。釉色は白色を呈す。高台径4.2cm。

75は瓦質に近い土師質焼成の擂鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部は水平面をなす。器壁は口縁部付近が若干厚くなる。内面の擂目は4条である。口径30.0cm、器高12.7cm。76は須恵質焼成の鉢の片口部である。小片であり傾きに不安が残る。内面には横方向のヘラナデが見られる。77は瓦質焼成の擂鉢である。体部の器壁は薄く、口縁部付近は厚くなる。口縁端部は上方に平坦面を有し、内部にわずかにつまみ出す。内面は細かい横ハケ目後に擂目を施し、外面には指圧痕が多く見られる。78は土師質焼成の擂鉢底部である。内面には強く押しつけた擂目の端部が明瞭に残る。外底面にはハケ目調整が見られる。底径11.4cm。

79～85は土師質焼成の鍋である。79は口縁部を玉縁状にする。80は口縁部を玉縁状にし、外端部に強い横ナデを加えるため明瞭な稜を有す。81は口縁部を薄い玉縁状にする。82、83は垂下した玉縁状にする。82は内外面横ナデ調整を行う。84は薄い玉縁状に仕上げる。85は口縁部を小さな玉縁状に仕上げる。86は土師質に近い焼成の羽釜である。体部は扁球形で、口縁部は短く直立する。口縁端部は丸くおさめる。鍔は短く水平に伸び、肩部には二方向に耳が付く。調整は外面ナデ、内面はハケ目調整を行い、肩部には6個一単位の菊花状の印刻を行う。

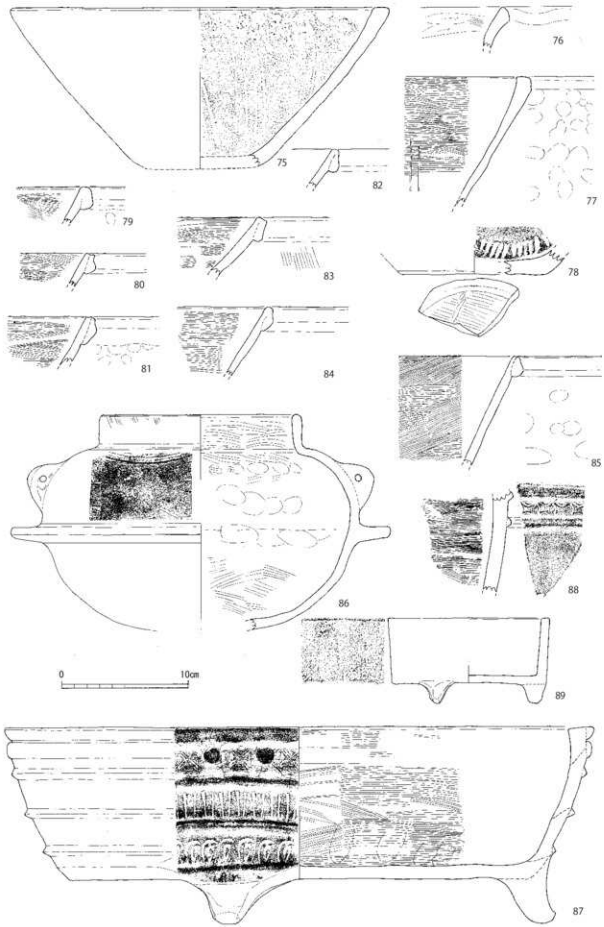
87は瓦質焼成の火鉢である。体部は若干内湾し、あまり開かずに上方に伸びており、口縁端部は平坦面を有す。外面には複数の突帯を巡らせ、その間に印刻や線刻による文様を施文する。底部には三方向の脚部を貼り付ける。調整は内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。口径46.6cm、器高15.5cm。88は瓦質焼成の火鉢体部片である。わずかに開きながら伸びており、外面には二条の突帯を巡らせ、その間に印刻を行う。内面は横ハケ目調整。口径15.8cm、鍔部径30.0cm。89は土師質焼成の火入である。底部と体部の境は明瞭な稜を有し、体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は水平面をなす。器壁の厚さは均一である。底部には三ヶ所に脚を貼り付ける。調整は横ナデ調整を行う。口径12.8cm、器高6.7cm。90は細粒砂岩の砥石である。一面のみ、よく使い込まれている。長さ9.8cm、幅7.1cm、厚さ1.9cm。

91～99はAトレンチの他層から出土した遺物である。91～94は土師器小皿である。91は口径に比して器高が高い。口径6.6cm、器高2.0cm、底径4.0cm。92は口径9.4cm、器高2.1cm、底径6.6cm。93は底径7.0cm。94は体部があまり開かない器形となる。口径10.4cm、器高1.8cm、底径9.2cm。95～97は土師器坏である。95は底径6.8cm。96は底径8.8cm。97は体部が直線的に伸びる。口径12.8cm、器高3.7cm、底径8.6cm。

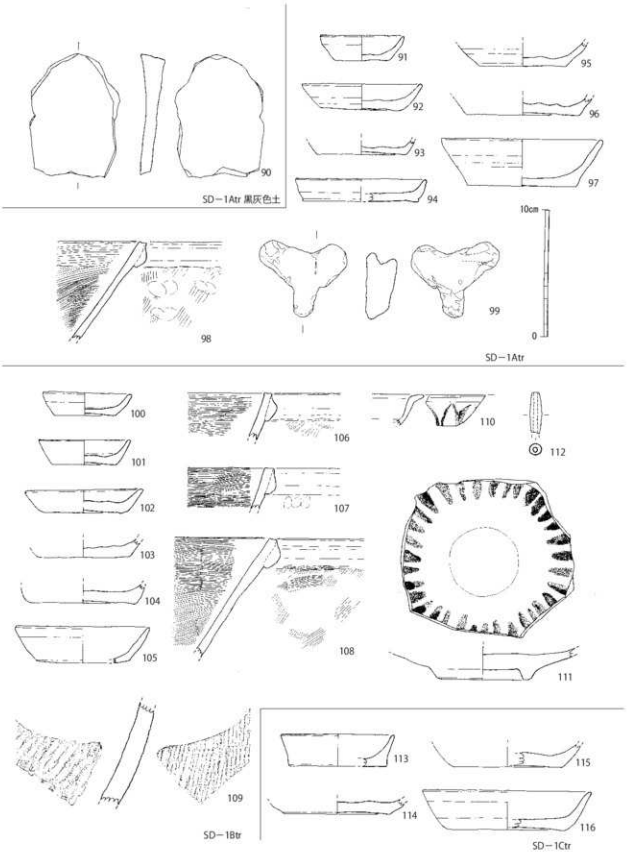
98は土師質焼成の鍋である。口縁部は小さな玉縁状を呈し、外端部を強くつまみ出すために鋭い稜を形成する。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後、雑なナデ調整を行い、指圧痕が残る。99は石製品。表面は平滑だが擦痕や使用痕等は認められない。

100～111はBトレンチ出土遺物である。100・101は口径が小さく体部は直線的に長く伸び、器高が高くなる。100は口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.6cm。101は口径7.2cm、器高1.9cm、底径5.0cm。102は口径9.2cm、器高1.8cm、底径6.2cm。103は底径6.8cm。104は8.4cm。105は体部が直線的に伸び、器高が高い。口径10.6cm、器高2.9cm、底径7.0cm。

106～108は土師質焼成の鍋である。どれも口縁端部は玉縁状に肥厚し、外端部に強い横ナデを加えるため明瞭な稜を有す。内面には細かい横ハケ目を行い、外面は縦ハケ目後に雑なナデ消しを行う。109は須恵質焼成の甕である。内面平行当て具痕、外面平行タタキ。110は青磁皿



第110図　SD－1出土遺物実測図②（1/3）



第 111 図　SD－1 出土遺物実測図③（1/3）

である。口縁部は強く外反する。外面には蓮弁を施文する。111は青磁皿である。内面に蓮華文の除刻を行う。高台径7.2cm。112は土師質焼成の管状土錘である。中膨らみの器形となり、端部が一部欠損する。長さ3.3cm、径1.0cm、孔径0.4cm。

113～116はCトレンチ出土遺物である。113は土師器小皿である。体部は外反気味に長く伸び、器高が高い器形となる。口径9.0cm、器高2.5cm、底径7.8cm。114～116は土師器坏である。114は底径8.4cm、115は底径8.6cm。116は口径13.4cm、器高3.1cm、底径9.2cm。

SD-5（図版42、第108図）

調査区西側に位置する溝である。SD－6、10と重複しており、これらに切られる。南北に直線的に伸びており、長さは8m、幅は100cm、深さは65cmを測る。底部は面をなさず、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に暗灰褐色土、中層に灰褐色土、下層に暗青灰色土及び明青灰色土が堆積する。

SD-6（図版43、第108図）

調査区西側に位置する溝である。SD－5と重複しており、これを切って営まれる。若干湾曲しながら東西方向に伸びており、西側は調査区外へと続いている。長さは11m、幅は45cm、深さは15cmを測る。底部は平坦な面をなさず、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は上層に淡灰褐色土、下層に灰色土が堆積する。

SD-9（第108図）

調査区南側に位置する溝である。南北方向に直線的に伸びており、南側は調査区外へと続いている。長さは3.5m、幅は70cm、深さは20cmを測る。

出土遺物（第112図）

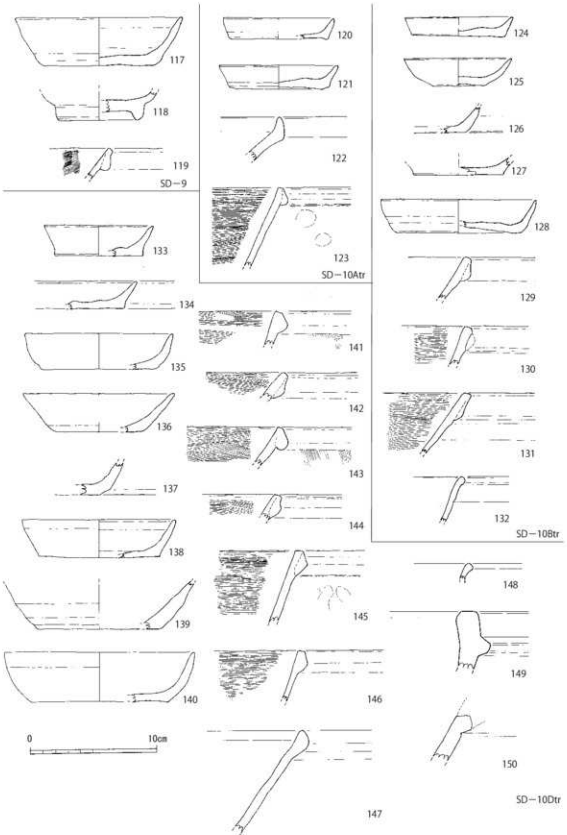
117は土師器坏である。口径123.2cm、器高3.8cm、底径8.6cm。118は陶器椀である。高台端部は丸味を帯び、内面見込みと高台端部より内側は釉剥ぎを行う。高台径6.2cm。119は土師質焼成の鍋である。口縁端部は垂下した玉縁状に肥厚する。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。

SD-10（図版43、第108図）

調査区西側に位置する溝である。SD－5と重複しており、これを切って営まれる。また北西側はSD－1に接続する。北西－南東方向へと直線的に伸びており、長さは9m、幅は140cm、深さは55cmを測る。底部は平坦な面をなさず、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上層に暗灰褐色土及び灰色土、中層に暗灰色土、下層に明青灰色土が堆積する。

出土遺物（第112図）

120～123はAトレンチ出土。120・121は土師器小皿である。120は体部があまり開かない器形となる。口径8.8cm、器高1.6cm、底径7.4cm。121は体部が外反気味に開く。口径9.4cm、器高1.9cm、底径6.8cm。122は須恵質焼成の鉢である。口縁端部は肥厚せず、端部が上方に短く伸びる。123は土師質焼成の鍋である。口縁端部は小さな玉縁状に肥厚する。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。



第112図 SD－9・10出土遺物実測図（1/3）

124～132はBトレンチ出土。124～127は土師器小皿である。124は体部が直線的に短く伸びる。口径8.4cm、器高1.5cm、底径7.2cm。125は体部が内湾しながら長く伸びる。端部は鋭く尖る。口径8.4cm、器高2.1cm、底径4.0cm。126は体部が若干内湾しながら伸びるようである。127は底端部が明瞭な稜を有す。底径7.2cm。128は土師器坏である。口径12.2cm、器高2.6cm、底径9.8cm。129～131は土師質焼成の鍋である。129は口縁端部が小さな玉縁状に肥厚する。端部は丸く稜をなさない。内外面横ナデ調整を行う。130は内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。131は口縁端部が薄く肥厚する。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。132は青磁碗の口縁部である。口縁端部がわずかに外反する。

133～150はDトレンチ出土。133は土師器小皿である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は外反気味に開く。口縁端部は尖る。口径8.6cm、器高2.4cm、底径7.0cm。134～140は土師器坏である。134は底端部が明瞭な稜を有し、体部は直線的に短く開く。135は体部下半が内湾気味に開く。口径11.8cm、器高2.8cm、底径9.0cm。136は底径が小さく、体部は直線的に大きく開く。口径12.0cm、器高3.0cm、底径6.6cm。137は体部下半が丸く内湾する器形となる。138は底端部が明瞭な稜を有し、体部は上半がわずかに内湾する。口径12.2cm、器高3.0cm、底径9.6cm。139は底端部に明瞭な稜を有し、体部は直線的に開く。口縁部付近は器壁が薄くなるようである。底径9.6cm。140は体部下半が丸く内湾する。口径15.0cm、器高3.9cm、底径10.8cm。

141～146は土師質焼成の鍋である。どれも口縁端部を玉縁状に肥厚させ、144や145は外端部に強い横ナデを加えるために明瞭な稜を有す。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。147は須恵質焼成の鉢である。口縁部は若干肥厚して断面三角形を呈し、端部は上方を向く。調整は内外面横ナデを行う。148は青磁碗の口縁部である。若干外反しており、わずかに肥厚するようである。149・150は滑石製石鍋である。149は低い鍔部を有し、口縁部は水平面をなす。表面は平滑で工具痕は見られない。150は鍔部付近の破片である。表面には工具痕は残っていない。

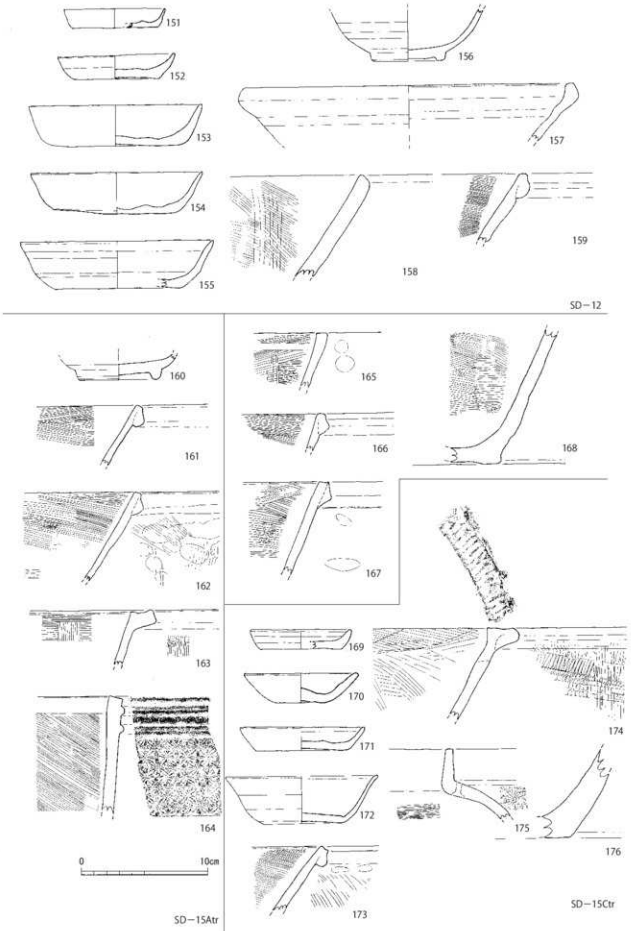
SD-12（図版44、第108図）

調査区中央付近に位置する溝である。北西側がSD－1に接続する。若干弧を描きながら北西－南東方向に伸びており、長さは10m、幅は150cm、底部の幅は100cm、深さは45cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜である。覆土は上層に灰色土、下層に暗灰色土が堆積する。

出土遺物（図版66・67、第113図）

151・152は土師器小皿である。どちらも底端部が明瞭な稜を有し、口縁部は体部と比べて器壁が薄くなる。151は口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.8cm。152は口径9.3cm、器高1.9cm、底径6.6cm。153～155は土師器坏である。153は口径13.6cm、器高3.2cm、底径10.0cm。154は器壁が薄い。口径9.6cm、器高3.3cm、底径10.0cm。155は口径15.4cm、器高3.7cm、底径10.0cm。156は白磁碗である。底部は低く断面台形状をなし、体部は丸味を帯びる。高台径5.6cm。

157は須恵質焼成の鉢である。口縁部は肥厚し、上端部は小さな面をなす。口径27.0cm。158は瓦質焼成の擂鉢である。口縁部は素口縁で端部は面をなす。内面は斜ハケ目後に7本一単位の擂目を施す。159は土師質焼成の鍋である。口縁部は玉縁状を呈し、上端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行い、外面には炭化物が付着する。



第113図　SD－12・15出土遺物実測図（1/3）

SD-15（図版44、第108図）

調査区南東側に位置する溝である。SK－31と重複しており、これを切って営まれる。東西に直線的に伸び、西側は撹乱によって失われており、長さは6mを測る。幅は75cm、底部の幅は60cm、深さは25cmを測り、壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に灰色土、下層に白灰色土が堆積する。

出土遺物（図版67、第113図）

160～164はAトレンチ出土である。160は青磁碗である。高台は低く、施釉されるため端部が稜をなさない。内面見込みは釉剥ぎを行う。高台径6.0cm。161～163は土師質焼成の鍋である。161・162は口縁部が玉縁状に肥厚し、上端部は面をなす。内面はハケ目調整を行い、161は外面ナデ、162は外面縦ハケ目調整を行い指圧痕が多く認められる。163は口縁部が外側に短く伸び、上端部は縄目押圧による施文を行う。内外面ハケ目調整。164は瓦質焼成の火鉢である。口縁部上端は若干外傾する面をなし、外面口縁部下には二条の突帯を巡らせる。突帯間および突帯下には印刻を全面に施文する。内面は斜ハケ目調整を行う。

165～168はBトレンチ出土である。165は瓦質焼成の擂鉢である。上端部は水平面をなし、内面は横ハケ目後に擂目を施す。外面はナデ調整を行う。166・167は土師質焼成の鍋である。どちらも口縁部は断面三角形状に肥厚し、上端部は面を有す。内面横ハケ目、外面ナデ調整。168は須恵質焼成で、甕か。内面はハケ目、外面はタタキ後ハケ目調整を行う。色調は黒色を呈し堅緻に焼成される。

169～176はCトレンチ出土である。169～171は土師器小皿である。169は体部が短く、あまり開かずに立ち上がる。口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.4cm。170は底部が上げ底で底端部は丸味を帯び、体部は直線的に開く。口径9.0cm、器高2.3cm、底径3.8cm。171は口径9.8cm、器高1.9cm、底径7.1cm。172は白磁皿である。底部は上げ底で底端部は丸味を帯び、体部は緩やかに開いて口縁部は外反する。口径12.0cm、器高3.7cm、底径6.0cm。

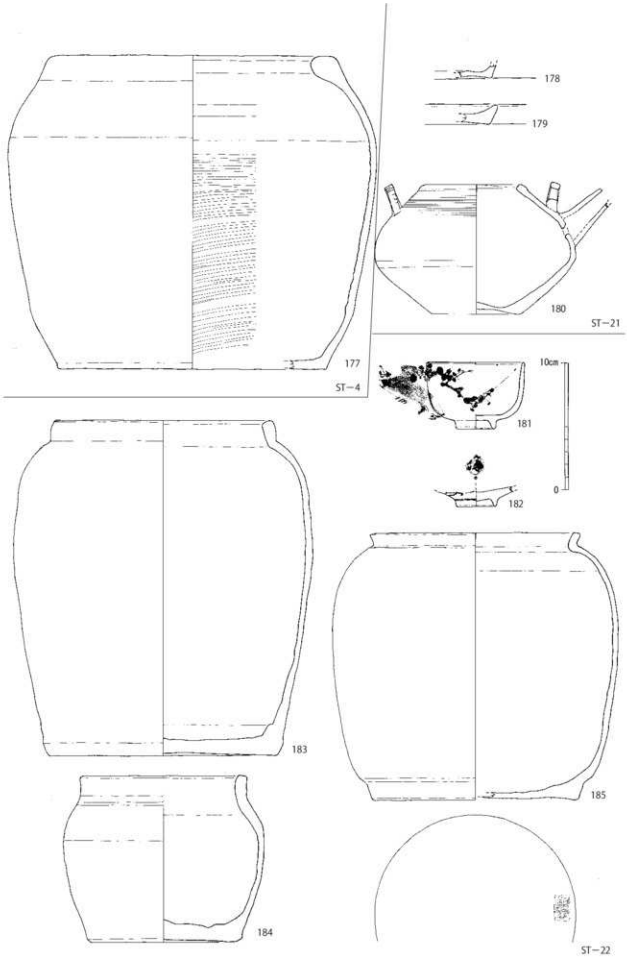
173・174は土師質焼成の鍋である。173は口縁部が小さな玉縁状を呈し、外端部に強い横ナデを加えるため明瞭に尖る。内面は斜ハケ目、外面は粗い斜ハケ目調整を行う。174は口縁外端部が横方向に伸び、上面は縄目押圧による施文を行う。内面は斜ハケ目、外面は縦ハケ目調整を行う。175は瓦質焼成の羽釜である。肩部は丸味を帯び、口縁部は直立する。口縁端部は面をなす。肩部には穿孔が一つあり、また菊花文の印刻を行う。176は備前焼の甕である。器壁は厚く、色調は暗褐色を呈す。

3）近世墓等出土遺物（図版67・68、第114～118図）

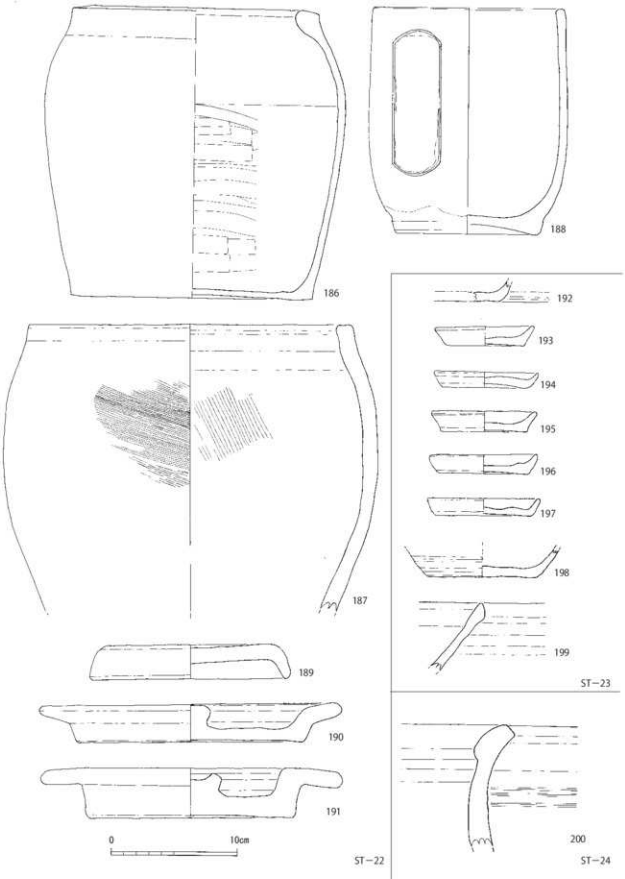
調査区の中央から北側にかけて近世、近代の墓地（ST－4．ST－20～25．ST－28・30・33）を検出した。遺構自体は改葬時に大幅な撹乱を受けて旧態を留めないものも多い。また墓ではなく生活遺構に関連すると思われる遺物も一部出土している。ここでは出土した遺物のみ報告を行う。

177はST－4から出土した土師質無釉の無頸壺である。底部は平坦で、体部下半はあまり開かず上方に伸び、肩部は不明瞭な稜を有して屈曲する。口縁部は内側に丸く肥厚し、上端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面ナデ調整を行う。口径22cm、器高24.7cm、底径21.0cm。

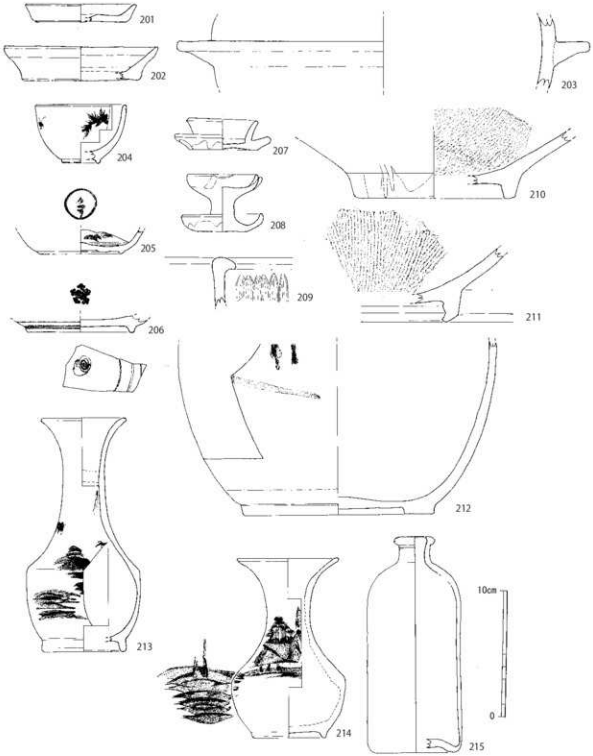
178・179はST－20から出土した土師器小皿である。どちらも底部は若干上げ底となり、179



第 114 図　ST－4・20・21・22 近世墓等出土遺物実測図①（1/3）



第115図　ST－22・23・24近世墓等出土遺物実測図②（1/3）

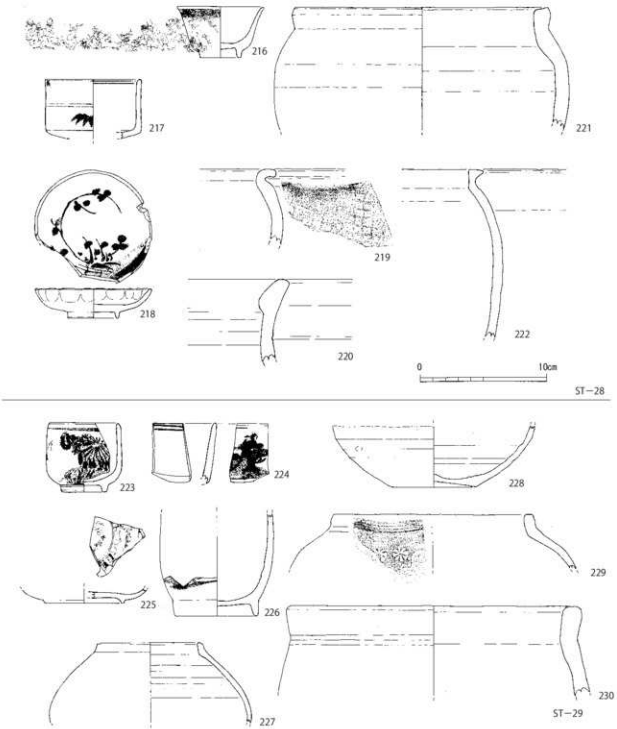


第116図　ST－26近世墓等出土遺物実測図③（1/3）

は体部が短く立ち上がり、器高の低い器形となる。178は179と比べて器壁が薄い。

180はST －21から出土した。陶器土瓶である。底部は若干上げ底となり、体部は算盤玉状に体部中位が張った器形となる。外面体部上方には柳目文を描く。

181～190はST－22から出土した遺物である。181・182は染付碗である。181は体部が直立する器形となる。外面には梅の樹木と枝を描く。口径7.8cm、器高5.2cm、高台径3.0cm。182は底部片である。内面は見込みに花状の文様を、外面には一条の圏線と草文を描く。高台径3.0cm。



第 117 図　近世墓等出土遺物実測図④（1/3）

183～186 は土師質無釉の壺である。183 は体部が長く伸び、肩部は高い位置にあり丸味を帯びる。口縁部は短く内傾気味に立ち上がり、体部と比べて若干器壁が厚くなる。口径 17.0cm、器高 26.3cm、底径 18.0cm。184 は小型品である。肩部はやや低い位置にあり丸味を帯びる。口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部は体部と比べて若干器壁が厚くなり、上端部は面をなす。口径 13.2cm、器高 13.2cm、底径 12.0cm。185 は底部と体部の境目に段を有し、体部はあまり開かず

上方に伸びる。肩部は丸く、口縁部は短く外反する。上端部は水平面をなす。底部には「肥65」の印刻がある。口径16.4cm、器高21.1cm、底径16.4cm。185は無頸壺である。底部が若干上げ底となり、肩部の位置はやや低い。口縁部は内側に丸く肥厚し、上端部はやや外傾する面をなす。内面下半には横方向のヘラナデ調整を行う。口径19.6cm、器高22.0cm、底径19.0cm。186は器壁が厚く、やや大型となる。肩部はあまり張らず、口縁部と体部の境目は不明瞭である。口縁部上端は水平面をなす。内外面ハケ目調整を行う。口径25.4cm、体部最大径29.6cm。

188は透明釉を施釉した小型の無頸壺である。底部は上げ底となり、底部と体部の境目は不明瞭な凹みを有して高台状となる。体部は直立してそのまま口縁部へと至る。外面には一部無釉部分があり、恐らく記名のためのものと思われる。口径15.2cm、器高17.8cm、底径11.0cm。

189から191は土師質無釉の壺蓋である。189は受け部の無い形状となる。器高は低く天井部は平坦で、端部は丸味を帯びる。口径16.0cm、器高2.7cm。190は受け部が上方に上がった後に斜め上方に伸びる。天井部中央には釦状の擬みが付く。口径24.0cm、器高3.0cm。190も189と似た器形だが、受け部は斜め下方に伸びる。口径23.6cm、器高4.0cm。

189～199はS－23出土遺物である。192～197は土師器小皿である。192は体部が内湾気味に立ち上がる。193は底部がわずかに上げ底となり、底端部は明瞭な稜を有す。体部は直線的に開く。口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.0cm。193は底部が上げ底となり、底端部は丸味を有し、体部は短く伸びる。口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.6cm。195も底部が若干上げ底となるが、底端部の稜は明瞭である。体部は外反気味に立ち上がる。口径8.4cm、器高1.6cm、底径6.8cm。196・197は底部がわずかに上げ底となり、体部は内湾気味に短く伸びる。196は口径9.0cm、器高1.6cm、底径7.0cm。197は口径9.0cm、器高1.4cm、底径7.6cm。

198は土師器坏である。底部は平坦で端部は明瞭な稜を有し、体部は内湾気味に開く。底径8.6cm。199は須恵質焼成の鉢である。体部は直線的に伸び、口縁部は断面三角形状に小さく肥厚する。外面には轆轤整形時の稜が見られる。

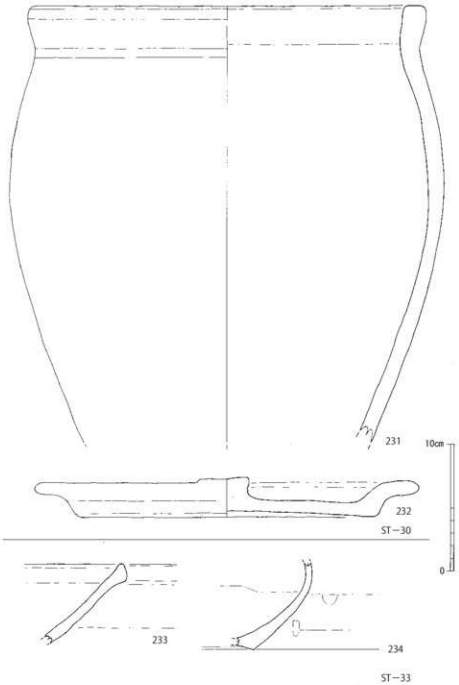
200はST－24から出土した陶器甕の口縁部片である。頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁端部は内側に肥厚する。外面口縁部下には三条の沈線が見られる。釉色は暗褐色。

201～215はST－25から出土した遺物である。201は土師器小皿である。体部は外反気味に短く伸び、口縁部は尖り気味になる。口径8.8cm、器高1.4cm、底径7.2cm。202は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有し、体部は外反気味に伸びる。口縁端部は尖り気味になる。口径12.2cm、器高2.7cm、底径9.4cm。

203は瓦質焼成の羽釜である。鍔部は水平に伸びる。調整は内外面ナデ調整を行う。鍔部径32.6cm。

204は染付小碗である。高台は小さく、体部上半は直立する。外面には草花文を描く。口径7.2cm、器高4.6cm、高台径3.0cm。205・206は染付皿である。204の高台は低く、体部との境目は不明瞭である。内面見込みと外面に文様を描く。高台径6.6cm。206は内外面に圏線を描き、内面見込みには五弁花文を印判し、外面には渦福を描く。高台径8.4cm。

207・208は灯火具である。207は陶製。口径5.8cm、器高2.5cm、受部径7.6cm、底径5.2cm。208は白磁平灰である。口縁部は片口状に一部窪ませる。口径5.8cm、器高4.5cm、受部径6.4cm、底径4.0cm。209は青磁甕である。体部は直立し、口縁部は外側に短く折れる。外面口



第118図　ST－30・33近世墓等出土遺物実測図⑤（1/3）

縁部下には蓮花状の文様を施文する。

210・211は褐色釉を施釉する陶器擂鉢である。210は断面台形の高台で、高台畳付から内側は露胎となる。高台径12.6cm。210は高台端部が内側に折れた様な形状となる。

212は陶器甕である。高台は低平で、体部下半は丸味を帯びた器形となる。外面上方に部分的に灰黄色と青緑色の釉が見える。内面は露胎となる。高台径15.0cm。

213・214は染付の仏花瓶である。どちらも口径が大きく、肩部に稜を有す。外面には家屋のある風景を描く。213は口径6.4cm、器高18.4cm、高台径6.6cm。214は口径8.0cm、器高14.2cm、高台径5.8cm。215は褐色のガラス瓶である。底部は上げ底となり、体部は垂直に長

く伸びる。肩部は丸く、頸部はよく締まって短く直立する。口縁部は外側に丸く肥厚する。口径3.2cm、器高17.1cm、底径7.6cm。

216～222はST－28出土遺物である。216は外面に雷文と唐人を描く染付小坏である。口径6.8cm、器高4.1cm、高台径3.2cm。217は筒型の碗である。外面には笹葉を描く。口径7.4cm。218は型打成形の菊花形皿である。内面には梅文を描く。口径9.2cm、器高2.3cm、高台径4.0cm。

219は瓦質焼成の甕である。肩部は若干内湾し、口縁部は短く強く外反する。端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面格子タタキを行う。220は陶器甕である。口縁部は外反しながら上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。221・222は土師質無釉の壺である。221の肩は丸くあまり張らず、口縁部は短く上方に伸びる。口縁端部はわずかに肥厚し、上端は内傾する面をなす。内外面横ナデ調整。口径20.4cm。222は頸部がわずかに内傾し、口縁部は短く立ち上がる。口縁端部は外側に断面三角形に肥厚する。調整は内外面横ナデ調整を行う。

223～225はST－29出土遺物である。223は外面に花文を描く染付小碗である。体部は筒状をなす。口径5.6cm、器高5.4cm、高台径3.6cm。224は外面に松文を描く染付碗である。体部は筒状をなす。225は内面にプリントを行う染付皿である。高台径6.2cm。226は染付瓶である。体部は丸味を帯びず筒状をなす。高台径6.8cm。

227・228は同一個体となる褐釉の壺である。肩は緩やかに内傾し、口縁部は短く立ち上がる。体部下半は丸味を帯び、底部は上げ底となる。全体的に器壁が薄く、轆轤目が明瞭に残る。口径8.4cm、底径7.0cm。229は瓦質焼成で甕か。肩部は内傾し、口縁部は上方に立ち上がる。端部は水平面をなす。肩部外面には花文を印刻する。口径15.8cm。230は肩が張らず、口縁部がわずかに外傾して立ち上がる土師質無釉の壺である。坑柄端部は水平面をなす。口径23.4cm。

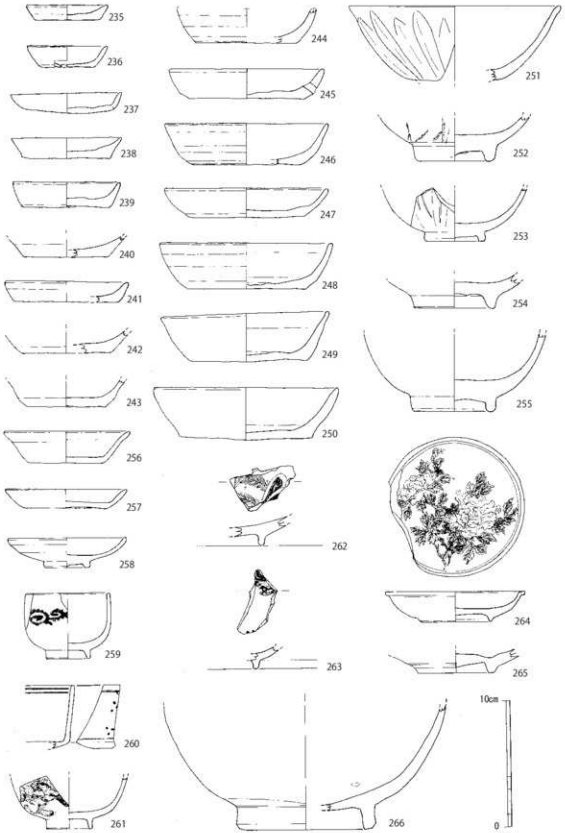
231・232はST－30出土遺物で両者はセット関係にある。231は土師質無釉の壺である。体部は中位に最大径があり、肩部はあまり張らず、口縁部は短く外傾して立ち上がる。口縁端部は水平面をなす。口径31.6cm。232は口縁部付近が斜め上方に立ち上がり、端部が水平に伸びる蓋である。中央には低平な摘みが付く。口径30.2cm、器高3.0cm。

233・234はST－33出土遺物である。233は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、端部は上方を向く。234は緑色地に白色釉を掛け流す陶器壺である。

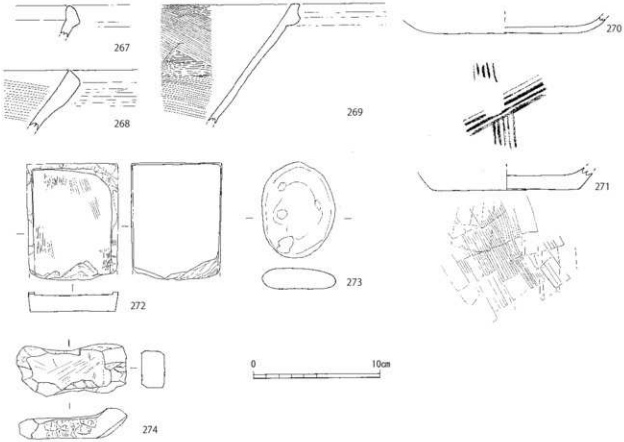
4）その他の出土遺物（図版68、第119・120図）

235～244は土師器小皿である。235は体部が短く直線的に開く。口径6.4cm、器高1.2cm、底径5.0cm。遺構検出時出土。236は体部が内湾しながら長く伸びる。口径6.4cm、器高1.7cm、底径4.0cm。遺構検出時出土。237は底部が丸味を帯びた歪つな器形となる。口径8.7cm、器高1.7cm、底径7.0cm。237は底端部が明瞭な稜をなし、体部は外反気味に伸びる。端部は器壁が薄くなる。口径8.8cm、器高1.7cm、底径7.0cm。南側トレンチ出土。239は体部があまり開かない器形となる。口径8.6cm、器高2.0cm、底径6.8cm。ST－19出土。240は体部が直線的に開く。底径6.6cm。遺構検出時出土。241は口径9.8cm、器高1.6cm、底径8.0cm。242は底端部が明瞭な稜をなす。底径7.0cm。遺構検出時出土。242は体部上半が外反する。底径6.0cm。

244～250土師器坏である。244は底端部が明瞭な稜をなし、体部は内湾しながら伸びる。底



第119図　その他の出土遺物実測図①（1/3）



第120図　その他の出土遺物実測図②（1/3）

径8.0cm。SK－17出土。245は体部が短く、底部と比べて体部の器壁が厚い。体部下半には焼成前穿孔が一つある。口径12.2cm、器高2.4cm、底径9.2cm。SD－5Bトレンチ出土。246は体部がやや長く伸びる。口径13.0cm、器高3.3cm、底径8.0cm。SD－5Cトレンチ出土。247は体部が短く伸びる。口径13.0cm、器高2.3cm、底径9.0cm。ST－19出土。248は体部が内湾しながら長く伸びる。口径13.8cm、器高3.6cm、底径9.4cm。SD－5Bトレンチ出土。249は体部が直線的に伸びる。口径14.6cm、器高3.9cm、底径9.0cm。SD－5Bトレンチ出土。250は体部下半が若干外反し、上半がわずかに内湾する。口径14.6cm、器高4.1cm、底径10.6cm。SD－5Bトレンチ出土。

251～255は青磁である。250～252は鎬蓮弁の青磁碗である。250は口径16.8cm。遺構検出時出土。252は底部の器壁が厚い。高台径6.2cm。遺構検出時出土。253は高台径が小さく、体部はあまり開かない器形となる。高台径4.8cm。遺構検出時出土。254・255は無文の青磁碗である。どちらも高台まで施釉される。254は高台径6.4cm。遺構検出時出土。255も高台径6.4cmで遺構検出時出土。

256～258は白磁皿である。256は体部が外反しながら伸びる。口径10.0cm、器高2.5cm、底径5.8cm。南東部遺構検出時出土。257は体部が短く伸びる。口径9.6cm、器高1.5cm、底径6.2cm。南東部遺構検出時出土。258は高台付の皿である。口径9.2cm、器高2.4cm、高台径3.6cm。遺構検出時出土。

259～265は染付磁器である。259は体部が直立する小坏。外面には蛸唐草文が描かれる。口径6.4cm、器高5.2cm、高台径3.6cm。S－26出土。260は筒状に伸びる小坏である。圏線文と、外面には梅花文を描く。261は高台径が小さく、体部は丸味を帯びる碗である。外面には牡丹を描く。高台径3.6cm。262～265は皿である。262は内面見込みに松葉を描く。262は内面に人物と

思われる文様を描く。北側溝出土。264は口縁部が短く外折し、わずかに肥厚する。内面には牡丹をプリントする。口径11.0cm、器高2.4cm、高台径5.6cm。遺構検出時出土。265は外面の高台と体部の境目に二条の圏線を巡らせる。高台径6.0cm。遺構検出時出土。

266は陶器の大型碗か。体部は丸味を帯びる。高台径11.0cm。267は須恵質焼成の鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、端部は上方を向く。268は瓦質焼成の鍋である。口縁部は若干肥厚し、端部は上方に尖る。内外面横ハケ目調整を行う。SK－17出土。269は口縁端部からやや下がった位置が突帯状に丸く肥厚する。上端部は水平面をなす。内面横ハケ目、外面横ナデ調整を行う。270は土師質の鍋底部である。端部は丸味を帯び、内面には炭化物が付着する。底径12.0cm。遺構検出時出土。271は瓦質焼成の擂鉢である。内面には×字の擂目がある。外面はハケ目調整を行う。底径11.4cm。遺構検出時出土。

272は黒色石製硯である。海部は欠損する。長さ9.2cm、幅7.2cm、厚さ1.5cm。北側の側溝出土。273は玄武岩製の円礫である。表面は平滑で磨石として使用したのかもしれない。274は滑石製石鍋転用石製品である。どのような用途に使用したのか不明だが、全体を長方形に近い形状に整えており、特に両側面の中央付近には削った痕跡が確認できる。長さ8.7cm、幅4.1cm、厚さ1.8cm。

5）小結

蒲船津西ノ内遺跡第7次調査区で検出した溝のうち、SD－5、9はほぼ東西方向に、SD－15は南北方向に直線的に伸びており、区画溝として機能したものと思われる。SD－10やSD－12は方位と関係なく伸びており、用途は不明である。土坑は散漫に分布するが、中央付近には近世墓が集中しており、近世期に墓地として土地利用が行われていたことが判る。

土坑のうち、SK－11は近世墓である。他にも近世墓の可能性のあるものもあるが、既に改葬が行われていたために明らかにできなかった。また、攪乱として図示したものも改葬の跡であり、もとは近世・近代の墓があった場所である。

SK－3から出土した土師器小皿は、口径7.6cm、7.8cmで器形もほぼ同形である。供伴する鍋は口縁部を玉縁状に肥厚させるものである。SD－1から出土した土師器小皿は口径6.6cm～7.8cmで、形状は比較的揃っている。坏は口径11.2cm～13.8cmと差があるが、12cm前後のものが多いようである。青磁碗は外面が無文で内面見込みに施文を行うもの、外側に蓮弁を配した小型の皿や内面に蓮弁を配した盤が出土しており、これらは14世紀前半頃のものである。雑器類では瓦質焼成の擂鉢、口縁部を玉縁状に肥厚させた土師質鍋、外面にスタンプを配した瓦質香炉や火鉢、釜が供伴する。SD－10からはSD－1と同様の玉縁状口縁の鍋が多く見られる一方で、滑石製石鍋や東播系須恵質鉢も出土しており、古い様相のものが含まれる。SD－15では口縁部上面に縄目押圧を行う鍋と口縁部を玉縁状に肥厚させる鍋とが供伴する。陶磁器類が少なく時期比定には不安が残るが、これらの遺構は概ね14世紀前半を中心とする時期のものとみて良いように思われる。

近世・近代墓から出土した遺物は、土師質で無釉の蔵骨器が多く、中には透明釉を施釉するものもある。供伴する染付磁器には18世紀に盛行する五弁花文を施文するものがあり、陶製土瓶も同時期のもである。染付磁器には近代まで下るものもあり、他にガラス瓶も出土している。

今回の調査の結果、当調査区は14世紀前半を中心とした遺構と、近世・近代の墓からなる遺跡であることが判った。中世期は時期幅が短く、あまり継続しなかったようである。近世・近代は墓地として継続的に墓が営まれた場所であることも判った。

8　蒲船津西ノ内遺跡　第8次調査

蒲船津西ノ内遺跡の第8次発掘調査は、平成21年1月26日に重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、2月6日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

調査区は東西に長く、東西22.5 m、南北4.5 mを測る。遺構面の標高は1.8 m～1.9 m。遺構は調査区全体に及ぶが、調査区に沿って大溝であるSD－1が東西に貫通しており、その周辺に土坑や不整形の遺構がいくつか分布するような状況である。

第124図は調査区西壁の土層図である。最上層の第1層から第4層までは客土。第5層は暗灰褐色土で遺物包含層、第6層暗青灰色土は地山層である。遺構はこの第6層上面に切り込まれる。

検出した主な遺構は、土坑3基、溝1条である。出土遺物は中世・戦国期頃の土師器、瓦器、陶磁器、明染付磁器、土師質・瓦質焼成の雑器類、石製品である。

1）土坑

SK-2（第122図）

調査区中央に位置する土坑である。南半部はSD－1に切られるが、本来は径1.5m程の円形を呈していたと思われる。土坑の底面は平坦ではなく、東側が擂鉢状に深くなる。底面までの深さは1.4m。壁の立ち上がりは垂直に近く、場所によっては袋状に下部が抉れている。覆土は上層に灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第123図）

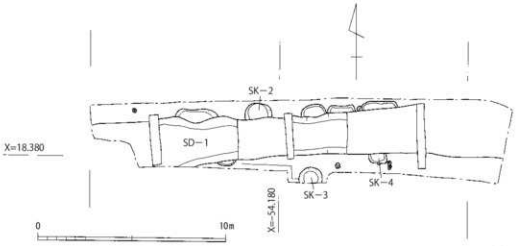
1・2は土師器小皿である。1は底径が小さく、体部はあまり開かずに長く伸びる器形となる。底径4.8cm。2は口径9.0cm、器高1.4cm、底径6.6cm。

3は青磁皿である。底部は平坦で端部に稜を有す。底部外面のみ露胎となる。底径5.4cm。

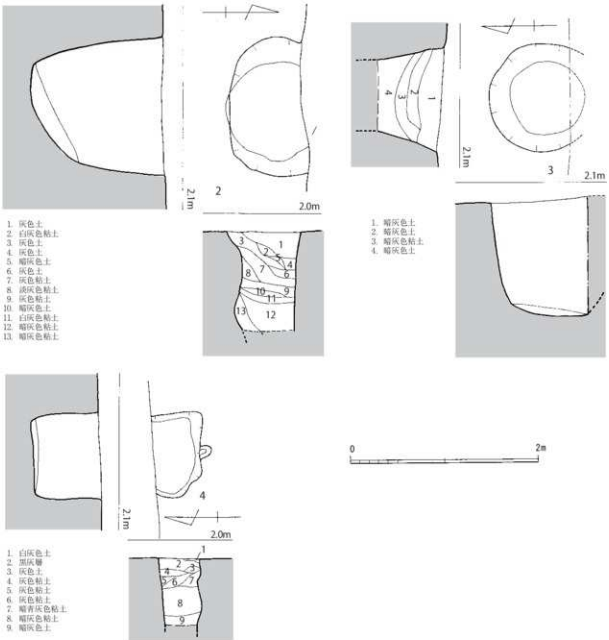
4は須恵質焼成の鉢である。口縁端部は断面三角形に肥厚し、端部は上方を向く。調整は内外面横ナデを行う。

SK-3（図版45、第122図）

調査区中央に位置する土坑である。南側は調査区外へと伸びているが、おおむね径1.2m程の



第121図　蒲船津西ノ内遺跡第8次調査区遺構配置図（1/200）



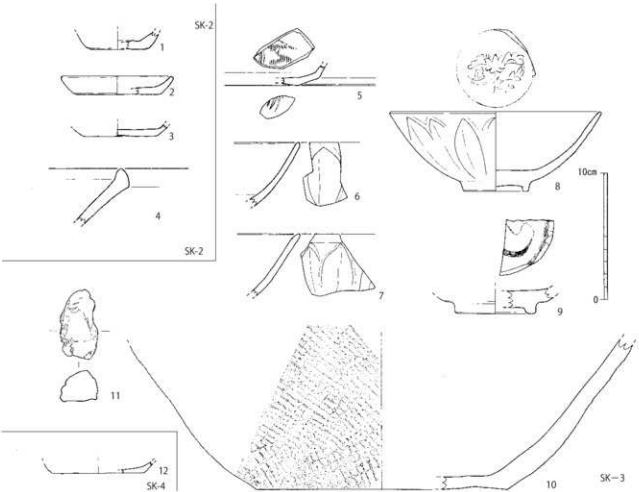
第 122 図　SK－2～4 実測図（1/40）

円形を呈していたと思われる。底面は南側がやや深くなっており、ここまでの深さは 1.25m を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は第 1 層から第 4 層まで暗灰色粘土が堆積し、第 2・第 3 層には白灰色粘土ブロックを含んでいる。

出土遺物（図版 69、第 123 図）

5～9 は青磁である。5 は内面に櫛描きによる文様を施文する皿である。底部は上げ底となり、体部は稜を有して屈曲する。6～8 は外面に鎬蓮弁を描く碗である。8 は内面見込みに細線の花文を描く。高台部は畳付から内側が露胎となる。口径 16.8cm、器高 6.3cm、高台径 5.2cm。9 は内面見込みに太い半肉彫りの文様を描く。外面は高台のやや上方から下が露胎となる。高台径 6.4cm。

10 は陶器甕である。焼成は須恵器に近く、黒灰色を呈す。底径 19.8cm。



第 123 図　SK－2～4 出土遺物実測図（1/3）

11 は軽石である。長さ 5.5cm、幅 3.0cm、厚さ 2.4cm。

SK-4（第 122 図）

調査区中央付近で検出した土坑である。北側がSD－1に切られており、本来の形状は不明である。現状では東西 0.9m、南北 0.5mの不整形を呈す。底面はほぼ水平で、深さは 0.7mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に黒灰色粘土、中層に灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

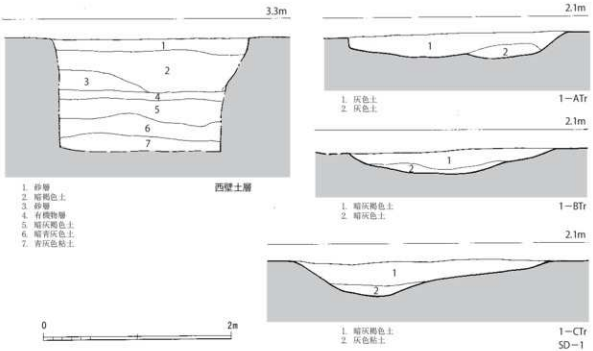
出土遺物（第 123 図）

12 は土師器小皿である。他と比べて器壁が非常に薄い。底径 7.2cm。

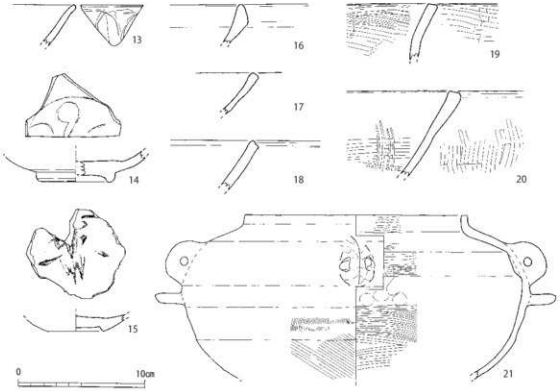
2）溝

SD-1（図版 45、第 124 図）

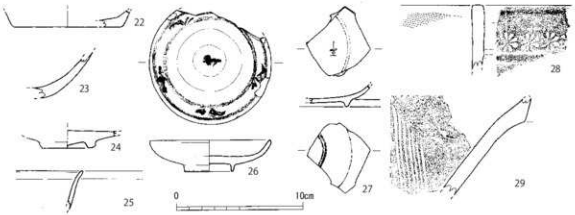
調査区に沿って東西に直線的に伸びる大溝である。両端が調査区外へと続いており、確認した範囲では長さ 22.5m、幅 2.2～2.6mを測る。深さは 20～35cmと浅い。覆土はＡトレンチ付近では灰色粘土によって占められ、Ｂ・Ｃトレンチでは上層に暗灰褐色粘土、下層に灰色粘土や暗灰色粘土が堆積する。



第 124 図　調査区西壁，SD－1 土層断面実測図（1/40）



第 125 図　SD－1 出土遺物実測図（1/3）



第 126 図　その他の出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（図版 69、第 125 図）

13・14 は青磁碗である。13 は外面に鎬連弁を描く。14 は内面見込みに花文を描く。高台は畳付まで施釉される。高台径 6.2cm。15 は内面に文様を描く明染付である。高台は外面に稜をなさず、端部から体部へと直線的に続いている。高台径 4.4cm。

16～18 は鉢であろう。16 は口縁端部が断面三角形に肥厚する東播系の鉢である。17 は瓦質焼成で器壁が非常に薄い。端部は面をなしている。18 は陶器の鉢で、端部は強く横ナデを行い外側に稜をなす。備前系であろう。19 は瓦質焼成で、鍋か。内外面粗い横ハケ目調整を行う。20 は瓦質焼成の擂鉢である。口縁端部はわずかに肥厚し、内端部を尖り気味に仕上げる。内外面にハケ目調整を行い、内面には 4 本の擂目が見られる。21 は瓦質焼成の羽釜である。肩が大きく張った器形で、口縁部は短く直立する。口縁端部は水平面をなす。鍔は最大径の部分よりやや下がった位置に付けられ、短く水平に伸びる。器壁は薄い。内面は横ハケ目、外面は上半が横ナデ、下半がハケ目調整を行う。口径 17.6cm。

3）その他の出土遺物（図版 69、第 126 図）

22 は土師器坏である。底端部は明瞭な稜を有す。底径 8.6cm。表土掘削時出土。23 は青磁碗である。表土掘削時出土。24 は青白磁碗であろう。高台のやや上方から露胎となる。遺構検出時出土。25～27 は染付磁器である。25 は碗の口縁部であろう。緩やかに外反しながら立ち上がる。表土掘削時出土。26 は小皿である。内面に圏線と草文を描き、見込みの釉を輪状に掻き取る。口径 9.4cm、器高 2.5cm、高台径 4.0cm。表土掘削時出土。27 は内面に二重の圏線と文様を、外面見込みにも二重の圏線を描く。表土掘削時出土。28 は瓦質焼成の火鉢である。口縁部は直立し、端部は水平面をなす。外面には花文の印刻を連続して行う。表土掘削時出土。29 は備前焼の擂鉢である。口縁部はほとんど肥厚せず、外面に明瞭な稜を有す。遺構検出時出土。

4）小結

蒲船津西ノ内遺跡第８次調査区は非常に狭い範囲であったが、中央には東西方向にSD－１大溝がとおり、その付近からは土坑を検出することができた。大溝は居住区域の外側を大きく区画し、排水機能を備えた区画溝として良いだろう。

SK－２からは東播系の須恵質鉢が出土しており、13世紀を中心とする時期のものである。SK－３出土遺物は同安窯系の青磁皿や外面に鎬蓮弁を配した青磁碗など13世紀前半頃のものの他、内面見込みに印花文のある14世紀以降のものもあり、時期幅があるようである。SD－１からはやはり鎬蓮弁の青磁碗、東播系須恵質鉢など13･14世紀に位置付けられる遺物の他、碁笥底の明染付も出土しており、時期幅が見られる。瓦質の羽釜は14世紀頃のものであろうか。SK－２は13世紀頃に位置付けられるため、遺構の重複関係は出土遺物の比定時期とは矛盾していない。大溝は長期に亘って使用されたため、出土遺物に時期幅がある、と解釈して良いように思われる。

また、その他出土遺物として掲載した中には近世期の染付皿がある。近世の遺構は見られなかったが、付近には近世の遺構の存在も想定される。

調査の結果、当調査区は13世紀に形成が始まり、中でも調査区の中央に伸びる大型の溝は16世紀まで継続的に機能していた、ということが判った。また、周辺には近世の遺構が存在する可能性も明らかになった。

9　蒲船津西古賀遺跡　第1次調査

蒲船津西古賀遺跡の第1次発掘調査は、平成19年7月18日に調査区重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構検出を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を行い、9月22日に機材を撤収、埋め戻しを完了して現地での作業を終了した。

調査区は東西に長く、東西49m、南北19mを測る。遺構面の標高は2.0m～2.1m。遺構は全体的に散漫だが、西側がやや密度が高い。

検出した主な遺構は、土坑9基、溝2条である。出土遺物は中世の土師器、瓦器、陶磁器、土師質・須恵質・瓦質焼成の雑器類、石製品である。

1）土坑

SK-1（第128図）

調査区中央付近に位置する土坑である。東西に長い不整形を呈し、東西1.1m、南北0.75mを測る。深さは西側で25cm、東側で30cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。

SK-4（図版47・第128図）

調査区北側に位置する土坑である。東西にやや長い不整形を呈し、東西0.95m、南北0.8mを測る。底面はほぼ平坦で、深さは1.0mを測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。

出土遺物（第129図）

1は瓦器椀の口縁部片である。2は土師質焼成の鉢であろう。口縁部は水平面をなす。3は陶器擂鉢である。内面と外面上方に鉄釉を施釉し、外面下半は露胎となる。

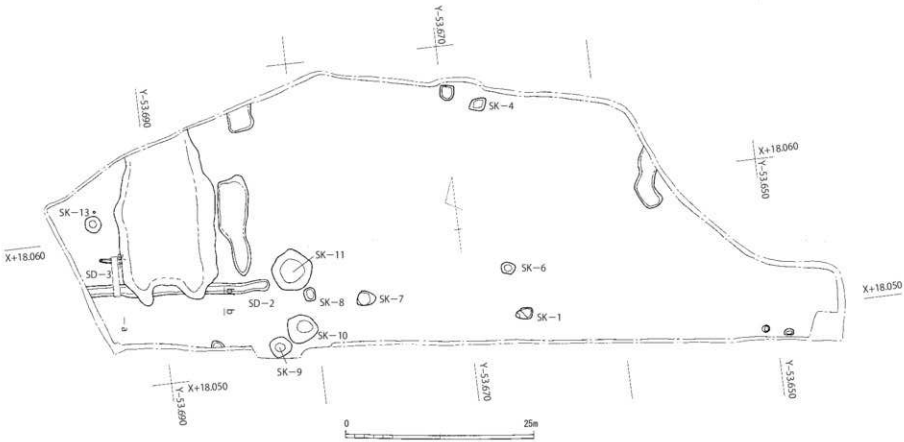
SK-6（図版47・第128図）

調査区中央付近にあり、SK－1から5m北側に位置する土坑である。東西にやや長い楕円形を呈し、東西0.9m、南北0.7mを測る。底面は中央付近がやや深くなっており、深さは0.7mを測る。壁の立ち上がりは急な傾斜となる。

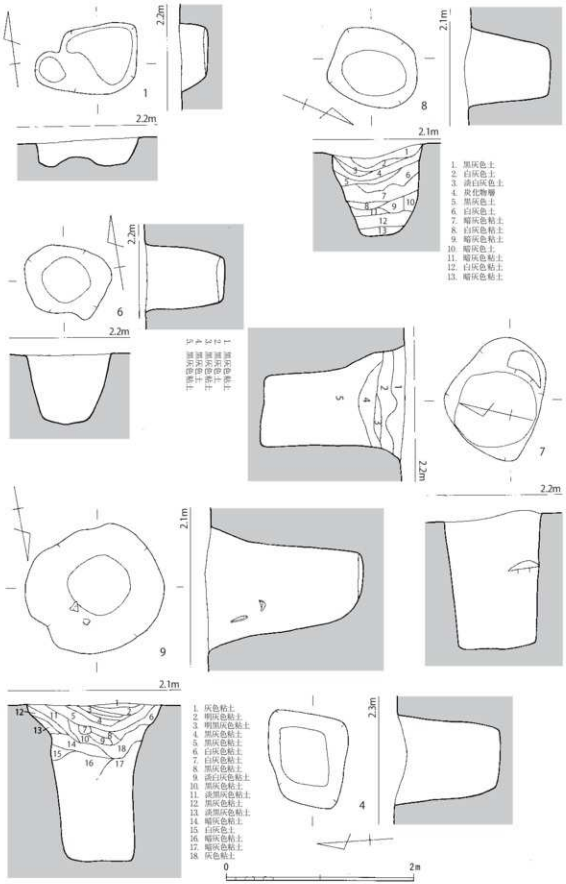
出土遺物（図版69、第129図）

4は土師器坏の口縁部片である。体部下半は内湾しながら立ち上がっており、口縁部付近は直線的に伸びる。内外面横ナデ調整を行う。5～7は瓦器埦である。5は高台が小さくて低く、断面三角形状を呈す。体部は丸味を帯びた器形となる。内面には横方向のヘラ磨きが残っているが、外面は風化が著しくヘラ磨きは認められない。口径15.2cm、器高6.5cm、高台径6.4cm。6もやはり高台は低くて小さく、断面三角形状を呈す。体部はあまり丸味を帯びず、口縁部は器壁が薄くなる。内外面のヘラ磨きは風化しており確認できない。口径16.6cm、器高6.0cm、高台径8.0cm。7は口縁部付近の破片である。風化が進んでおりヘラ磨きは確認できない。

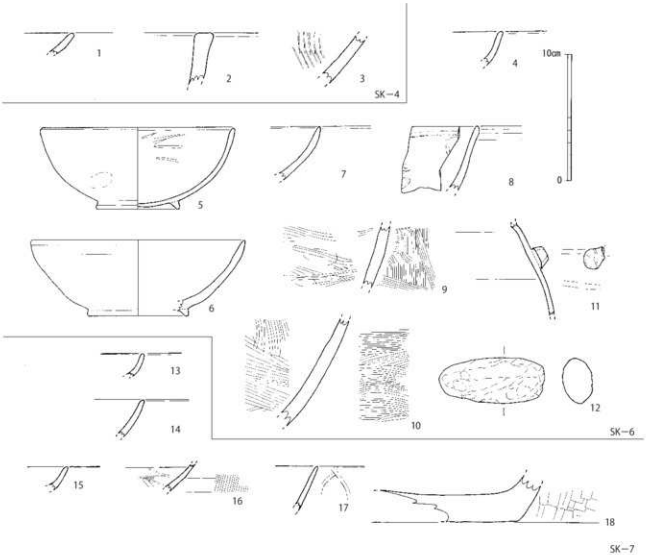
8は青磁碗の口縁部片である。内面には二条の圏線と雲文とが見られる。9は土師質焼成の鍋であろう。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目を行う。外面には被熱の痕跡が明瞭に認められる。10も土師質焼成の鍋である。内面の上方は縦ハケ目、下方は横ハケ目を行う。外面は横ハケ目を行う。11は褐釉陶器壺の肩部片である。半環状の把手は基部のみ遺存する。釉は内外面に施釉される。



第 127 図　蒲船津西古賀遺跡遺構配置図（1/250）



第 128 図　SK－1・4・6～9 実測図（1/40）



第 129 図　SK−4・6・7 出土遺物実測図（1/3）

12 は玄武岩の円礫である。顕著な使用痕等はない。長さ 8.3cm、幅 3.6cm、厚さ 2.3cm。

SK-7（図版 47・第 128 図）

調査区中央付近に位置する土坑である。東側に若干広がった形状となるが、本来は径 1m 程度の円形を呈していたと思われる。現状で東西 1.3m、南北 1.0m を測る。土坑底面ははぼ平坦だが、東側の深さ 0.6m の位置にテラス状の段を有している。底面までの深さは 1.4m を測る。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は上層に粘性の低い黒灰色粘土、中層に明青灰色粘土ブロックを含んだ黒灰色粘土が堆積し、中位から底面までは明青灰色土粘土ブロックを少量含んだ黒灰色粘土が厚く体積する。

出土遺物（図版 69、第 129 図）

15 は白磁小皿である。体部下半は不明瞭に屈曲し、口縁部付近は直線的に開く。16・17 は青磁碗である。16 は内外面に櫛描による文様を施文する。17 は外面に蓮弁を浅く半肉彫りする。18 は滑石製石鍋の底部片である。底部は平坦で端部は稜を有し、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。内面には筋状の工具痕、外面には面状の工具痕が残る。器壁の厚さは 2.2cm を測る。

SK-8（図版46・48、第128図）

調査区西側にあり、SK－7から2m西側に位置する土坑である。南北にやや長い楕円形を呈し、東西0.8m、南北0.9mを測る。深さは0.9mで、壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は細かい層に分かれており、最上層の第1層には黒灰色土、第2・第3層には白灰色土が堆積し、第4層は炭を多量に含んだ黒色土層からなる。第5層から下には暗灰色土と白灰色土が堆積する。

SK-9（図版48、第128図）

調査区南西にあり、SK－8から2m南西側に位置する土坑である。平面形はほぼ円形を呈しており、直径1.4mを測る。底面までの深さは1.7mを測る。壁の立ち上がりは、下層はほぼ垂直、上層付近はなだらかな傾斜となる。覆土は上層に灰色・黒灰色粘土、中層に白灰色・黒灰色粘土がレンズ状に堆積し、下層には暗灰色粘土が厚く堆積する。

出土遺物（図版69、第130図）

19は土師器小皿である。底部は平坦で底端部は明瞭な稜をなさず、体部は短く伸びて大きく開く。口径9.2cm、器高1.5cm、底径6.8cm。20・21は土師器坏である。20は底端部が明瞭な稜を有し、体部は外反気味に立ち上がり、口縁部付近は若干内湾する。口径12.4cm、器高2.7cm、底径7.4cm。21は内湾しながら開く口縁部片である。

22は瓦器小皿である。器壁は薄く、底端部は不明瞭な稜をなす。内外面風化が著しく調整不明。23～29は瓦器塊である。23は高台部が断面台形をなす。24は高台部が断面三角形を呈す。高台径7.0cm。25は断面三角形の小さな高台となる。26は高台部内側に井桁状の線刻がある。内面にはヘラ磨きが残る。27は断面三角形の高台となる。高台径6.2cm。28は断面台形に近い高台となる。体部は丸味を帯びた器形となる。高台径6.0cm。29は内湾して丸味を帯びた器形となる。内外面にヘラ磨き調整が認められる。

30は青磁碗である。内面には二重の並行線と雲文を明瞭に施文する。外面の高台内側には墨書が見られる。高台径6.0cm。

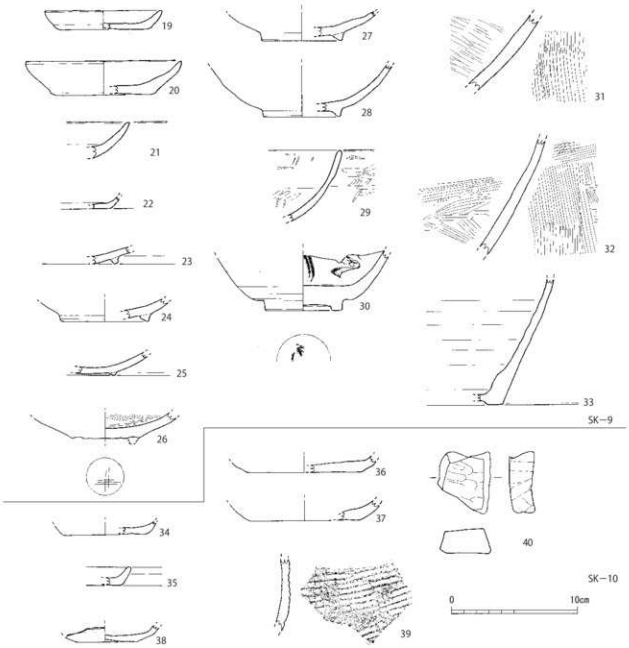
31・32は土師質焼成の鍋であろう。31は内面斜ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。32は31よりも器壁が薄く、また口縁部付近に向かって器壁を薄くしている。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目が観察される。33は褐釉陶器壺である。高台は低い台形状をなし、体部はあまり開かず直線的に伸びている。内面には轆轤目が明瞭に残る。

SK-10（図版46、第131図）

調査区西側に位置し、SK－9の北東に隣接する土坑である。平面形はおおむね円形を呈しており、東西2.0m、南北1.9mを測る。土坑の底面は中央から北東に若干寄った位置にあり、深さは1.05mを測る。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜となる。覆土は上層に黒灰色粘土・白灰色粘土、中層に暗青灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第130図）

34・35は土師器小皿である。34は底端部が丸味を帯びる。底径6.4cm。35は底端部が稜を有し、体部は直線的に短く伸びる。口縁端部は丸くおさめる。36・37は土師器坏である。36は底径9.0cm、37は底径8.6cm。

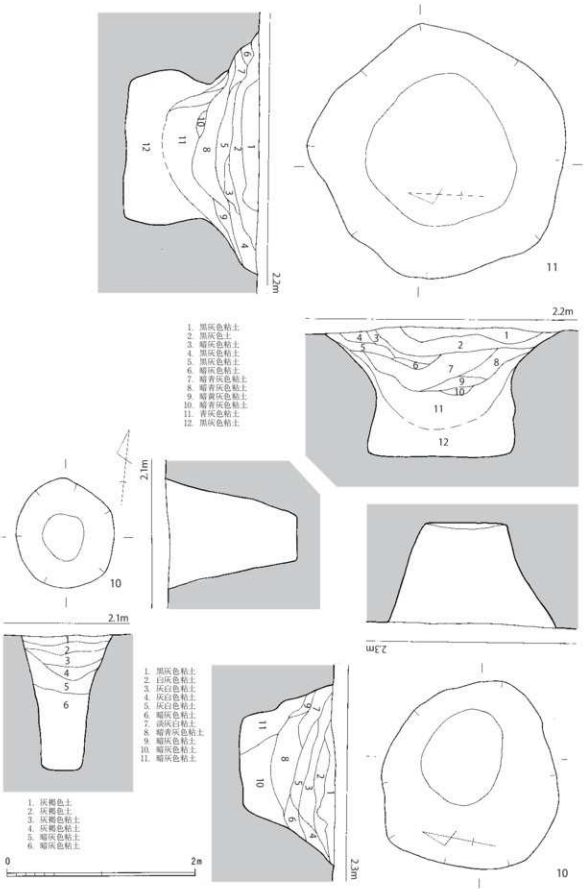


第 130 図　SK－9・10 出土遺物実測図（1/3）

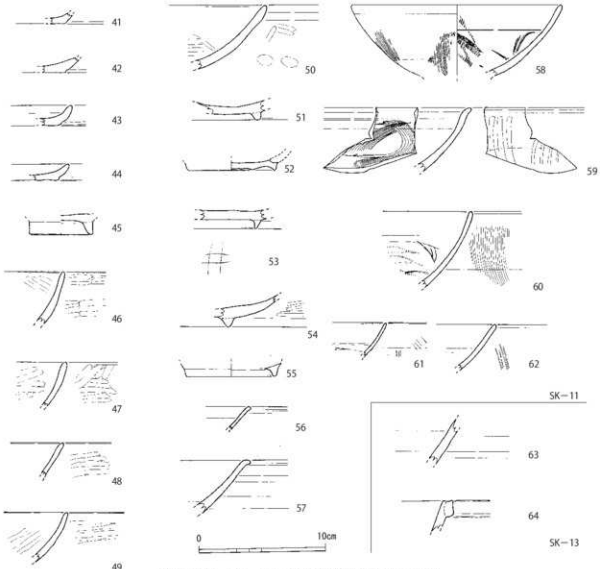
38 は陶器皿である。底部はわずかに上げ底となり、端部の稜は明瞭である。体部は大きく開きながら伸びる。器壁は全体的に薄く、釉は内面と外面の上方に施釉される。釉色は無色に近い。底径 4.6cm。39 は瓦質焼成で、甕の胴部か。外面は格子タタキ、内面は横ナデを行う。器壁はあまり厚くない。40 は滑石製石鍋転用品である。現状で台形状を呈しており、側面には整形の際の擦痕が認められる。長さ 4.9cm、幅 4.0cm、厚さ 2.0cm。

SK-11（図版 46・48、第 131 図）

調査区西側に位置し、SK－8 の北西に隣接する土坑である。平面形はおおむね円形を呈しており、東西 2.7m、南北 2.7m を測る。底面はほぼ平坦で、深さは 1.35m を測る。壁の立ち上が



第 131 図　SK－10・11・13 実測図（1/40）



第 132 図　SK－11・13 出土遺物実測図（1/3）

りは、上方は緩傾斜、下方はオーバーハング気味に立ち上がっており、断面は袋状を呈す。覆土は上層に黒灰色粘土、中層に暗青灰色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物（図版 69、第 132 図）

41～44 は土師器小皿である。41 は底端部の稜が明瞭である。42 は底部と体部の境目が内側に屈曲したような形状となる。43 は体部が若干内湾しながら立ち上がる。44 は底部から体部下半にかけて、一度上方に立ち上がる。45 は土師器埦の底部片である。高台は直線的に伸びており、断面は三角形を呈す。高台径 5.0cm。

46～55 は瓦器埦である。46・47 は内外面に幅の広いヘラ磨きが残る。48 は外面に横方向のヘラ磨きが確認できる。49・50 も内外面にヘラ磨きが確認できる。51 は丸味を帯びた低い高台を貼付する。52 は断面三角形の低い高台となる。高台径 6.8cm。53 は高台内面に井桁状の線刻を行う。高台は器壁が薄く、断面三角形状となる。54・55 は断面台形の低い高台となる。55 は高台径 7.2cm。

56・57 は白磁である。56 は器壁が薄く、小皿であろうか。口縁部は外側に短く折れており、内面口縁部下には一条の圏線が巡る。57 は碗であろう。口縁部は外側に短く折れる。58～62 は青磁椀である。58 は内外面に櫛描きによる文様を施文する。体部は丸味が少ない器形となる。口径 16.8cm。59 は内面に櫛描きによる文様、外面に半肉彫りによる文様を施文する。口縁部付近のみ

緩やかに外反する器形となる。60は内外面に櫛描きの文様を施文する。61は器壁が薄く、内面に一条の圏線が巡り、内外面に櫛描きの文様を施文する。62は外面に櫛描き文様が認められる。

SK-13（第131図）

調査区西端に位置する土坑である。平面形は円形を呈し、東西1.05m、南北1.15mを測る。深さは1.35mを測り、壁の立ち上がりは急な傾斜となる。覆土は上層に灰褐色粘土、下層に暗灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第132図）

63は須恵質焼成の鉢体部片であろう。内外面横ナデ調整を行う。64は土師質焼成の鍋口縁部片である。口縁部は玉縁状に肥厚し、上端を強くナデで稜を有した面を形成する。内外面横ナデ調整を行う。

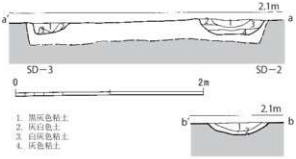
2）溝

SD-2（第133図）

調査区西側に位置する溝である。東西方向に直線的に伸びており、西側は調査区外へと続く。長さ12m、幅75cm、深さ15cmを測る。覆土は上層に黒灰色粘土、下層に白灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第134図）

65は瓦質焼成の甕である。頸部は内側に稜を有して屈曲し、口縁部は外反しながら短く開く。口縁端部は強い横ナデを加えて沈線状に窪ませる。内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を行う。



第133図　SD−2・3実測図（1/40）

SD-3

調査区西側に位置する溝である。SD−2と並行して東西に直線的に伸びているが、撹乱と削平によって大きく失われており、検出した長さは1.5mにすぎない。幅は50cm、深さは10cmを測る。覆土は上層に黒灰色粘土、下層に灰白色粘土が堆積する。

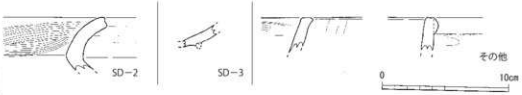
出土遺物（第134図）

66は瓦器椀である。高台部は欠失するが、小さな高台となるようである。内面にはかすかにヘラ磨きが確認される。

3）その他の遺構出土

遺物（第134図）

67は瓦質焼成の鉢である。口縁端部はわずかに外側へとつまみ出しており、また上端部



第134図　SD−2・3その他の出土遺物実測図（1/3）

は水平面をなす。内面は横ハケ目、外面はナデ調整を行う。遺構検出面出土。68は土師質焼成の鍋である。小片であり傾き不明。口縁部は外側に肥厚させて薄い玉縁状を呈し、上端部は強い横ナデを加えて凹面を形成する。

4）小結

蒲船津西古賀遺跡は遺構の分布は稀薄であった。西側に位置するSD－2やSD－3は東西方向に直線的に伸びており、区画溝であろうと思われるが、調査区の制限や周辺の攪乱もあって、その性格は明確ではない。

土坑のうち、SK－7、9、13は形の整った円形で深さもあり、井戸であろうと推測される。SK－10、11も整った円形だが、それほど深くはない。

SK－6は瓦器埦と区画線のある青磁碗が供伴しており、13世紀前半として良いだろう。遺物量は少ないが、同安窯系青磁、蓮弁の青磁碗、滑石製石鍋が出土したSK－7もほぼ同時期として良いものである。同様に、複数の瓦器埦や、内面に区画線のある青磁椀が出土したSK－9もほぼ同時期と思われる。SK－10から出土した陶器皿は混入品だろうか。SK－11出土遺物は、瓦器椀および口縁部が小さく外折する白磁碗、同安窯系青磁碗によって構成されており、12世紀後半まで遡らせても良さそうである。

今回の調査の結果、当調査区は12世紀後半に形成が始まり、出土遺物の中には混入品と思われるものもあるが、概ね13世紀前半まで継続した遺跡である、ということが明らかになった。

Ⅳ　おわりに

今回の報告では、平成18年度から24年度にかけて柳川市教育委員会が発掘調査を実施した、柳川駅東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査のうち、蒲船津西ノ内遺跡第1次～第8次調査と蒲船津西古賀遺跡第1次調査の、合計9調査区の調査成果について掲載した。調査成果の詳細は前述のとおりであるが、ここでは今回の報告の概括を行う。

今回報告した調査区の中で最も時期が遡るのが、蒲船津西古賀遺跡SK－11である。それほどまとまった遺物量があった訳ではないが、12世紀後半に位置付けられるものである。その後13世紀の遺構や遺物は、蒲船津西ノ内遺跡第1次、3次～6次、8次調査区で確認されており、この時期に広い範囲で集落の形成が始まったものと思われる。なお、土地を区画する大小の区画溝の掘削が行われたのもこの時期であり、その後近世まで踏襲される居住空間の形成、集落景観の形成は、この13世紀に開始されたとみて良い。なお、必ずと言って良いほど大型の区画溝を伴うのは、低地である柳川地域で集落を営む場合には、土地の乾地化が必須条件だったからであろう。本来、この区画内に家屋等が営まれていたはずだが、今回は土坑を中心に深い遺構のみ確認することができただけで、建物跡は全く確認することができなかった。恐らく後世の削平等によって、地表面に近い浅い遺構は残らなかったものと思われる。

14世紀のみに限定される遺構は第7次調査区で確認された他、第1次、3次～5次、8次調査区でも遺物が確認されている。巨視的に見れば、この地域には13世紀から継続して集落が営まれたものとみることができる。15世紀も同じく集落が継続していたことを出土遺物が示している。16世紀は第2次調査区で時期的に限定される遺物の出土があった他、やはり1次、3次～5次、8次調査区で16世紀の遺物が出土している。

17世紀の遺構・遺物は、第1次、3次、5次、6次調査区で確認された。集落構造は恐らくこの時期まで基本的に踏襲されていたものと思われる。遺物はそれほど多くはなく、大きな区画溝など継続的に機能していた遺構から出土した場合が多く、近世単独の遺構としては数はあまり多くない。また、生活に関連する遺構は基本的には17世紀までであり、18世紀以降まで続いているものはない。集落形成はほぼ17世紀で終了しており、その後は耕地化もしくは墓地化したようである。なお、第3次、7次調査区では近世から近代にかけて造営された墓地を確認しており、近世に墓地として占地が始まった場所については、その後近代に至るまで土地利用に変化はなかったようである。

今回報告した調査区では、比較的多くの出土遺物に恵まれたものの、継続的に使用された遺構や混入が多く見られる遺構が少なからずあり、良好な一括出土資料はあまり多くない。それでも、例えば蒲船津西古賀遺跡第1次SK－11出土遺物は、蒲船津地区の集落形成の端緒となる遺物群であり、また、それほど良好ではないものの12世紀後半の一括遺物である。蒲船津西ノ内遺跡第3次調査区SK－5とSD－96、第6次SK－5・6・11は一部の混入を除けば13世紀の良好な資料となりうる。第7次調査区出土遺物は14世紀前半の良好な資料であるし、第1次SD－15出土遺物、第2次調査区出土遺物、第5次SK－122出土遺物は、16世紀の供伴関係が理解できる良好な資料である。第6次SK－49出土遺物は17世紀中葉にほぼ限定される遺物群であり、また第7次調査区から出土した蔵骨器は近世・近代墓地の形成と変遷過程を知る上で今後貴重な遺物となるものである。

全体的に見れば、13世紀から17世紀の遺物がほぼ途切れることなく出土しており。従来特に中世後期から戦国期の遺跡に恵まれていなかった福岡県においては、寄与するところは大きい。今回の調査成果は、地域的に見れば蒲船津地区の集落形成過程を知ることができる貴重な成果となり、また近世柳川藩の前段階の遺跡として、あるいは柳川城下町との比較資料として重要な成果となった。大きく見れば、中世後期から戦国期の遺跡が少なかった福岡県にとって、良好な調査事例を加えることとなった貴重な調査成果となった。

【引用・参考文献】

『角川日本地名大辞典　40　福岡県』1988　角川書店
『大川市誌』1977　大川市
『磯島フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書　第1集　2006　柳川市教育委員会
『東蒲池大内曲り遺跡』柳川市文化財調査報告書　第2集　柳川市教育委員会
『德益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書　第6集　2008　柳川市教育委員会
『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書　第7集　2009　柳川市教育委員会
『蓮池遺跡』柳川市文化財調査報告書　第9集　2016　柳川市教育委員会
『上町遺跡Ⅰ』柳川市文化財調査報告書　第10集　2016　柳川市教育委員会
『下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡』福岡県文化財調査報告書　第236集　2012　九州歴史資料館
『西蒲池池淵遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書　第239集　2013　九州歴史資料館
『西蒲池門前遺跡』福岡県文化財調査報告書　第240集　2013　九州歴史資料館
『西蒲池池淵遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書　第243集　2014　九州歴史資料館
『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集　2005　福岡県教育委員会
『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第2集　2007　福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第3集　2007　福岡県教育委員会
『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第5集　2009　福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第6集　2009　福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第8集　2010　福岡県教育委員会
『蒲船津江頭遺跡Ⅳ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集　2011　福岡県教育委員会
『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集　2012　九州歴史資料館